
浅葱色の狼

aromaman

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浅葱色の狼

【Nコード】

N3155V

【作者名】

aromaman

【あらすじ】

雑誌編集者の野村利恵は、次号の特集で取り上げる新撰組を取材途中、熱中症によって意識を失う。気がつくと、見知らぬ男性に囲まれ、手足を縛られ尋問されていた。なぜか壬生浪士組の屯所で倒れており、問者の疑いをかけられたのだ。なんとか命は助かり、屯所での生活にも少しずつ慣れてきた頃、芹沢鴨の暗殺事件が起き……。いつかは帰れると信じて、さまざまな事件を乗り越えながら必死に生きていく利恵。そんなお話です。 史実も参考にしておりませんが、完全なるフィクションですので、時期や事件内容など実際と

異なる部分もご紹介します。念のため。。

闖入者1

なんでこんなことになったんだろう。

手足を縛られ、地面に転がったまま、ひたすら腹のほうへ寄せた自分の膝を見つめていた。

涙で濡れた頬に、土がこびりついている。

きつと悪い夢を見ているんだ。

そう自分に言い聞かせたところで、周囲を囲む男たちの生々しい汗の臭い、竹刀で殴られた背中の中の激しい痛みは、あまりに現実的だった。

「このまま苦しみを長引かせるより、早く吐いたほうが身のためだ。真実を話せば、痛みを感じる間もなく、一思いに切ってやるぞ」
誰かが利恵のほうへかがみこみ、厳しい声で語りかけてきた。

別の声が、重ねて問いかけてくる。

「なんであそこに倒れていたんだよ。屋根で覗きをしていて落ちたとか？ そのおかしな着物で間者をしていたのか？ それにしちゃ、ずいぶん目立ちそうな出で立ちだけだな」

今何が起きているのか自分でもわかっていないのだから、質問にどう答えたらいいのかも分からない。口から出てくるのは、嗚咽だけだった。

さっきまで、利恵は別の場所で取材をしていた。それがなんでいきなりこんなところで、知らない男たちに囲まれ、転がっているんだろう。

「お前は倒幕派の者か？ いい加減、答えろ！ 女だからって容赦しねえぞ」

顔のすぐ前で棒のようなものが強く打ち下ろされ、反射的に身を

すくませた。

なんでこんなことになったんだろう。

その言葉ばかりが混乱した頭の中でぐるぐる回っている。

野村利恵は中堅の出版社に勤務し、女性誌を担当している。歴史が好きな「歴女」と呼ばれる女性が増えていることから、昨年から特に人気の高い武将などを連載していた。先月は織田信長、今月は坂本龍馬。坂本龍馬の流れで、幕末の剣豪として人気のある新撰組を特集することになり、前身である壬生浪士組から取材を始めたのだ。

時間もないため、八月の中旬に差し掛かった真夏、しかも東京より暑さがハンパない京都だというのに、あまり休憩を取らずに歩き回ったのが良くなかったのだろうか。

新撰組が宿としていたという八木家を見学し、芹沢鴨が暗殺されたという奥座敷に入ったとき、強いめまいを感じたのだ。キーンと耳鳴りが始まり、景色が歪んでいく中、トートバックに入れていたポーチを取り出した。ここで倒れるわけにはいかない。ポーチの中に入っているアロマオイルを気付用に嗅いだら少しは……。そう思ったのを最後に、目の前が真っ暗になった。

そして、気がついたら知らない男性に腕をつかまれ、引きずられていたのだ。そのままこの場所に連れてこられ、縛られ、転がされ、いきなり棒のような物で背中を殴られ、質問攻めにあっている。周りに数人いるらしいが、背後なのでどんな人がいるのかも分からないし、薄暗くて蒸し暑い小屋の中で見えるのは、地面だけ。状況が飲み込めず、恐ろしすぎて、何も答えることはできない。

「こっちには時間がねえんだ、早く吐け！」

目の前で竹刀が振り下ろされ、地面を強く打ち据えた。再びびく

りと全身が震えた。

「な、何も、し、知り……」

何も知りませんと答えようとした瞬間、再び激しいめまいに襲われ、唐突に胃のものが喉にこみあげてきた。

頬を膨らませる利恵を見て、慌てたように桶が目の前に差し出される。誰かが利恵の襟首を掴んで顔を中に突っ込こんだ。

「吐けの意味が違うだろうが。ここでぶちまけられたら臭くてかなわねえ。ここに出せ」

盛大に胃の中のをぶちまけると、辺りにすえた臭いが広がった。

「くそつ。総司、これを外に出してこい」

「え、なんで俺が……」

総司と呼ばれた男はブツブツ文句を言いながら、扉の外へ出ていった。

「ほら、これで口をゆすげ。親切で言ってるんじゃないぞ。これ以上臭ったらこっちがかなわねえ」

利恵は素直に水の入った湯のみに口をつけ、うがいをしたあと、なるべく遠くへ水を吐き出した。

「お前、名はなんという？」

3人目の声が訪ねてきた。

「の、野村理恵」

「で、歳はいくつだ」

「24……」

「……斉藤、そんなこと聞いてどうすんだよ」

「簡単な質問から始めたほうが答えやすいのでは。それに、荒っぽい方法だけが功を奏するとは限らない」

「ふん」

二人のやりとりをぼんやり聞いていた利恵に、斉藤と呼ばれた男が再び問いかけた。

「で、野村とやら、お前はどうしてここに来たのだ」

「し、知りません！ 雑誌の取材で八木家と壬生寺を見学している途中、気を失って、それで……。あとのことはよく分かりません」
「ざっし？ しゅざい？ なにを言ってるんだ、こいつは……」
竹刀を持っている男性がつばやいた。

「だから、わたしは出版社の社員で、女性誌の編集を担当しているんです。来月号で新撰組を特集することになったので、その取材に……」

「意味がさっぱり分からねえんだけど、斉藤、お前、わかるか？」
「さあ」

しばしの沈黙のあと、竹刀を持った男が利恵の顔の前にしゃがみこんだ。顔を見ようとしたが、竹刀で頬を押さえつけられ、それも叶わない。

「わからねえといえば、どうやって屯所の中に入ってきたんだ。門は閉まっていたし、見張りも二人立たせていた。あいつらが眠りこけてたとしても、誰にも気づかれずに中に入ってくるのは至難の業だ。やはり屋根から落ちてきたのか」

「屋根だなんて……。気づいたら引きずられていたんですから、自分でもどうやってここに来たのかわからないんですよ。本当なんです……。それで……。それでここはどこなんですか？」

「どこって、お前、俺たちをバカにしてるのか？ 壬生浪士組の屯所だと分かってここに来たんだろう？ いきなり押し入っておいで、ここはどこはねえだろう」

「え？ 壬生浪士組？ 屯所？」

確かにわたしは八木家を見学していたけど……。一般開放されていたところに入っただけで、押し入ったつもりはない……。理恵の頭の中はさらに混乱し、また気が遠くなっていた。

「わからない、本当にわからない……」

ショック状態でもともと下がっていた血圧が、さらに下がったのだろう。もう何をされても気持ちが悪くなるだけで、あのイヤな耳鳴りも始まった。誰かが「土方さん、その人の頭を上げないで。地

面に降ろしてください」と言っているのが聞こえたが、その後はくぐもっていて何を言っているのかわからなかった。わかりたくもない。この状況からひたすら逃げたかった。

次に目が覚めたときは、元の場所に戻っているかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、理恵は嬉々として意識を手放した。

どのくらい気を失っていたのか。濡らした布が何かで顔を拭かれていて、それがなんだかとても気持ちよかった。うつすらと目を開けると、見知らぬ男がこちらの顔を覗き込んでいる。小屋の中はさつきよりさらに暗くなっているから、日が落ちかけているのだろう。か。八木家の見学に訪れたのは15時頃。ここも薄暗かったとはいえ、小窓から日差しは差していたように思う。

わたしはまだ小屋にいるんだ。ああ、元の場所には戻っていないかった……。落胆のあまり、利恵の瞳に涙がこみあげてくる。

「目を覚ましたようです」

顔を覗き込んでいた男性は背後にそう声をかけてから、理恵の頭をそつと持ち上げ、湯のみを口に当ててきた。

「とりあえず水を飲んで。……大丈夫なようです。起き上がれますか」

ものすごく体はだるかったが、理恵は小さく頷いてゆっくり体を起こした。

乱れた髪が汗と涙で濡れた顔に張り付き、気持ちが悪い。頭を振って見たら、側頭部に痛みが走り、思わず顔をしかめた。

「頭を打ったみたいですね。少し切れています。傷は深くありませんが、今はあまり動かさないほうが良いですよ」

この人もさつきからいたのだろうか。水を飲みながら周囲を見回すと、ほかに3人の男性がいた。うち一人が竹刀を携え、こちらを睨んでいる。あの人がわたしの背中を殴ったのか……。理恵は慌てて目をそらし、ほかのふたりに目を向けた。

中肉中背の若い男性は、好奇心で目を輝かせているように見える。

腕を組んでいるもう一人は無表情で、何を考えているのか分からない。4人とも着物を着ていて、まるで時代劇の撮影所に迷い込んだような気分だ。

「よく眠っていたなあ、おい。それで。何か話す気になったか」
竹刀を持った男が近づいてきた。

（また殴られる?!）

恐怖のあまり、声は出ない。

「お前が近づくと、恐ろしくて声が出ないと見える。あまり脅さないほうが良いと思うが」

無表情な男性がボソリとつぶやくと、竹刀を持った男はチツと舌を鳴らした。

「間者のくせに、根性のない奴だな」

「か……間者ってなんですか。わたしは編集者です。ほんとに……ほんとに……、なんでこんなところにいるのか分からないんです。わたしは立ち入り禁止の場所に入ってしまったんですか？ だって普通に声をかけてくれればすぐに出ましたし、なんなら警察でも何でも呼べばよかったじゃないですか。なんで縛られてこんなところに……」

いったん話し始めたら、どんどん言葉が口から勝手に飛び出し始めた。

「こんなのありえない。なんで縛られて殴られなくちゃいけないんですか。あなたたちは暴力団か何かですか？ 何を吐けつていうんですか。逆に聞きたいくらいです。あなたたちは誰ですか。何の目的でわたしを連れてきたんですか。ほんとうに……もう嫌。帰りたい……」

「……何を言ってるんだ、こいつは。さっきから訳が分からねえことばかり言ってるやがる」

「さあ？」

竹刀の男が問いかけると、若い男性は肩をすくめた。

「でも、間者って感じはしないけど」

「ううん。でも怪しいだろ、どう鼻屑目に見たとしても。現れ方が現れ方だしな」

竹刀で肩を叩きながら男は眉間に皺をよせてこちらを睨む。

「それに、なんだその着物は。見たこともない」

と言いながら、カーキのバミューダパンツと白のカフタンを不審気に眺めた。

見たこともないって……。この人たちのほうが珍しい気がするのに。昭和初期ならまだしも、今は着物を着た暴力団ってあまりないし。というより、さつき竹刀の男は「壬生浪士組の屯所」って言うてなかった？

答えを聞くのが怖い気もしたが、淡い期待をまだ捨てきれず、恐る恐る聞いてみることにした。

「つかぬことをお聞きますが……。あなたたちは新撰組愛好会か何かの方なんですか？」

「は？」

「なんかちよつと混乱していて……。えーと、今は平成ですよね？」

「何言ってるんだ、おい」

竹刀の男が険悪な表情で近づいてきた。

「えーと、今の年号を教えてもらえますか？　それが……。そうです、今の総理大臣は誰ですか……。とか……」

利恵の声がだんだん尻すぼみになる。

「今度は記憶を失った振りをしようとしても？」

竹刀の男はあきれたように言った。

「だってわたし……。今は2010年のはず……。ですよ？」

すると、男は人差し指でトントンと自分の頭を突付いた。

「ただのおかしい女なのかな」

この状況でも屈辱感が胸に広がり、言い返したいと思ったのだが、利恵は何も言わず唇をかみ締めた。

4人の男はそれぞれ目配せし、小屋の中に重苦しい空気が流れる。

まさかね……。

小説や映画の世界でよく見かける、タイムスリップというもののだろうか。ありえない。絶対にありえない。やっぱり夢に違いない。そんなはずない。だいたい、物理的にムリに決まってるじゃない？ なにをどう間違えれば、気絶しただけで過去に旅立ってしまふというの？ きつとわたしはまだ気絶していて、すぐリアルな夢を見ているんだ。利恵はなんとかこの状況を整理するため、夢だと結論付ける努力をしたが、なかなかうまくいかなかった。

「局長にも報告しなければならぬ。まだ帰ってこないのか」
竹刀の男が若い男へ問いかけた。

「そろそろだと思っけど……。ちょっと見てくるよ」

若い男が出ていくと、「俺もほかの幹部を探してくる」と言っ
て、無表情の男も出ていった。

「もつと水を飲みますか？」

利恵が頷くと、介抱してくれた男性も外へ出て行った。残るは竹刀の男だけだ。

（こいつと二人きり?! 最悪だ……）

とにかく必要以上に関わることはないよう、うつむいてひたすら薄汚れた膝を見つめる。

「おい」

ふいに声をかけられ、体が勝手にビクツと反応する。

「さっきの質問に答えてないよな。その着物はなんだ」

「こ、これですか？ バミューダパンツとカフタンですけど……。
分からない……ですよね？」

「聞いたこともねえ」

「ですよ……」

そう言つと、利恵は深いため息をついた。

「で？ お前は倒幕派と何か関わりがあるのか？」

さっきと比べると、穏やかと言ってもいいほどの声色で問いかけてくる。

「全くありませんが」

「ふん。親類縁者はどこに住んでいる？」

「どこについて言われても……。」（本当に幕末なら、祖父母だって産まれてないんだから）誰もいません」

「天涯孤独の身か。都合のいい話だな」

「都合がいいわけないじゃないですか。どんなに心細いか」

この時代に知人なんて誰一人いるわけないじゃない。そう思ったとたん、利恵の瞳にまた涙がこみ上げてきた。

そのとき、湯のみを持った男が戻ってきた。

「さ、どうぞ。ここは蒸しますからね」

そう言って、湯のみを口に当ててくる。

利恵は一気に飲み干したが、物足りなさを感じた。大量に汗をかいたのと、緊張状態が続いているせいか、喉の渇きがなかなか収まらない。

「山崎、お前はと思う？ 問者だしたら、同類の匂いみたいなもんを感じたりするのか？」

「そうですね……。相手の力量にもよりますが、なんとなく伝わるものはあるかもしれません」

「で、この女はどうだ？」

山崎と呼ばれた男は、利恵の頭からつま先までを見回して首を振る。

「最初からずっと様子を見ていましたが、いでたちや登場の仕方、言葉以外は、特に不審な点はないかと……」

（その3点だけでも十分怪しいじゃん……）

利恵は胸の中でつぶやき、絶望感を覚えた。しかし疑い深さではメンバー1と思われる竹刀の男の口から出てきた言葉は、意外なものだった。

「かもしれんなあ。話せば話すほど訳が分からんが、倒幕を狙う奴らとはまた別のような……」

わたしは害のない人間だと信じてもらえるかもしれない。そして

解放してもらえるかもしれない。利恵の胸に希望が溢れた。が、次の瞬間、一気に希望が絶望に変わった。

解放してもらえたところで、わたしはどこに行けばいいのだろうか。

闖入者2

利恵の表情を読んだのか、「どうかしましたか？」と山崎が尋ねた。

「今ふと思ったんですが、ここを出れたとしても、どこへ行けばいいのだろうと……」

「そういやお前、身寄りがないと言ってたもんな。もしかして本当なのか」

自分の話をそう簡単に信じてもらえそうにないとわかっていたものの、竹刀の男の言葉に利恵の気持ちはさらに沈んだ。

「本当です（この時代ではという前提付きだけど）。外に出てみたいのですが、構いませんか？」

ダメ元で恐る恐る聞いてみたところ、「ダメだ」とあっさり断られた。

窓から見える小さな空はすでに濃いオレンジ色になっている。ずいぶん時間がたっているようだ。

（わたしがいなくなったことに、誰か気づいてくれたかな……）

しかし利恵が東京に帰る予定は、翌日の夕方だった。一応、社には夜に状況を連絡することになっていたが、連絡しなかったとしても、「取材が押したんだろうな」くらいに考えて、誰も気にしないだろう。だから、利恵が姿を消したことに周囲が気づくのは、早くても明日の夕方以降ということになる。

とはいえ、気づいたところでどうしようもないかもしれない。わたしは今、探しようがない場所にいるのだから。そう思い至ると、利恵は膝に頭を乗せて、深いため息をついた。

「そういえば、お前が持っていたこの袋、どうやって開けるんだ？」

竹刀の男が利恵のポーチを掲げた。

「ああ、それは、つまみを、そう、そのつまみを横に引っ張れば

……つて、ちょっと待つてください。なに勝手に人のものを見ようとしてるんですか」

利恵の声は男に届いていないらしい。ひたすらファスナーを開け閉めしては驚いている。ああ、そうか。ファスナーも初めて見るものだもんね。

「これはなんだ？」

中身をしばらくごそごそいじったあとに取り出したのは、リップスティックだった。

「口紅です」

「じゃ、これは？」

「ファンデ……おしろいです」

「これは？」

竹刀の男は次々と中身を確認していく。

「精油……えーと、植物の油を抽出したものです。それは歯を磨くためのもので、そっちは髪を洗うときに使います」

「妙なのは服装だけじゃないんだな。こんな手触りのもの、初めてだぞ。どこで買ったんだ」

「……とにかく、危険なものは入っていないでしょう？ そこに入っているのは女性が使うものばかりですから、返してください。そういえば、そのポーチ……じゃなくて、その袋以外にわたしのものは落ちていませんでしたか？」

「いや、お前の近くに落ちていたのはこれだけだ」

一眼レフや取材ノート、資料を入れたトートバックはどこに行っただろう。取材ノートと資料はあとでなんとでもできるが、カメラは会社のものだから高額だ。紛失したとなると、弁償しなくちゃいけないんだろうか……。こんな状況でも、そんな考えが頭をよぎる。

そのとき、外ががやがやと騒がしくなり、

「近藤さんと呼んできたよ」

と言いながら、総司が入ってきた。そのあとに4人の男が次々と入

つてくる。

「ほお、これが総司が言うところの奇妙な女か。で、何かわかったのか？」

四角い顔の年長者が、竹刀の男に尋ねた。

「いや、それが、聞けば聞くほど訳がわからん」

さつきまでは恐怖と混乱でパニックを起こしていたし、今もそれは変わらないといえば変わらないのだが、先ほどからあまりに聞きなれた名前ばかりが耳に入ってきて、さすがにピンとくるものがあった。

（近藤、山崎、総司、斉藤……？）

竹刀の男の報告を聞きながらそれぞれの意見を交わしている男たちのほうへ、利恵は思い切って問いかけてみた。

「あの、つかぬことをお伺いしますが、ここってほんとに、壬生浪士組の屯所なんですか」

全員の注目が利恵に集まる。

「何を今さら。さつきもその話が出たはずだが」

竹刀の男が苦虫をつぶしたような顔で言った。

「いえ、なんか信じられなくて……」

歴史上の有名人が揃い踏みしてる。編集者としての好奇心が湧き上がり、利恵はそれぞれの観察を始めた。人物の基本的な情報は新撰組を取り上げることになった際に一応把握していたため、見た目と雰囲気でなんとなく判断できる。

語り口調や周囲の態度からして、四角い顔の男が近藤勇と思われる。

竹刀の男が土方歳三、最初からいた若い男性は沖田総司、斉藤と呼ばれた男は斉藤一、ほかの3人は山南敬助、永倉新八、原田左之助、藤堂平助のいずれかだろう。山崎は監察方の山崎烝か。

山崎烝といえは、近年その日記が発見されて解読も済んでいるようだ、いまだ謎の多い人物としてさまざまな憶測が流れている。改めて見ると、若くは見えるが周囲と比べてかなり落ち着いた雰囲気

気で、思慮深い人物のように見えた。あまり感情を表さない涼しげな顔は浅黒く、細くはあるが引き締まった体格で、なかなかの美男子だ。なにやら相談しているグループには入らず、利恵の側で控えている。見張り役ということか。

観察されていることに気づいたのか、山崎は物問いたげな表情でこちらを見た。利恵はあやふやな笑顔を浮かべて目をそらし、今度は竹刀の男を監察することにした。

話し方は粗野な感じだが、立ち姿は凜としていて、垢抜けた雰囲気だ。女性にもてたという話したが、確かに彫りの深い顔立ちをしている。集まっている6人の中でも背が高く、がっしりとした体型も、剣豪と呼ぶにふさわしい。やはり、あいつが土方なのだろう。

簡単な説明が終わったのか、全員が一斉に利恵に注目した。

「それで、あんたは……野村と言ったかな？　なんでここに来たのかも分からないし、どこの者かを証明する身寄りもないと、そういうことかね？」

四角い顔が利恵に問いかけた。表情は優しげだが、視線は鋭い。

「で、その奇怪な着物と袋はどこで手に入れたのかな」

「普通に買いましたけど……。でも今は店では売っていないと思います」

四角い顔は疑わしげな表情を浮かべて、利恵の隣に目を移した。

「山崎はどう思うかね」

「これまで見たことのないものばかりで、わたしにも判断付きかねます。しかし、間者とは違うかと」

四角い顔は山崎をかなり信頼しているようで、その一言で思案顔になった。

「だがしかし……。怪しいことには変わりないからなあ。間者ではないなら捕縛している理由はないし、だからといって違うという確証もないのにこのまま野放しにするのも不安が残る」

「間者とは、周りに溶け込んで目立たぬように動くもの。このような珍妙な姿で歩き回る間者は見たこともありません」

山崎のこの言葉がとどめとなつたのか、みんな納得したように頷いた。

「確かに。これは目立つよなあ。……さて、どうしたものか」

四角い顔がアゴを撫でながら困つたように利恵を眺める。

「長州や土佐ではまだまだ怪しい動きもありますから、落ち着くまで見張りをつけ、しばらく屯所にて様子を見てはいかがでしょう」
地味な雰囲気の方が提案した。

行くあてはなくても、自由にはなりたいたい。ここで縛られたまま過ごすのは嫌だ。

利恵の視線を辿り、きつく縛られた手首の縄を見て、提案した男性が付け加えた。

「間者ではないのなら、縄は解いても良いでしょうね。どうやら手加減なしの詮議で、傷だらけのようだし」

そういいながらチラリと竹刀の男に目を向け、言葉を続けた。

「それで、この人が現れたときに居合わせたのは？」

竹刀の男がふてくされたように答える。

「山崎が見つけて俺に報告に来た。お前以外に誰かいたか？」

山崎は頭を振った。

「ちょうど皆さん稽古に出かけてましたし。見張りも門の外にいましたから、この人が現れたことにはまったく気づいていませんでした。あとは体調が優れない者が奥で寝ていただけですから、わたしのほかは誰も見ていないはずですよ」

「そうか。ではどうするか……。しかし、ここは蒸すなあ。いったん自室へ戻って、そこで相談するのでしょうか。とりあえずその縄は解いてやれ。誰か一人残って見張れば良いだろう」

「では、わたしが」

山崎が立候補して、利恵の手首の縄を解き始めた。

「ほかの者はわたしの部屋へ。対応が決まったら、誰か代わりのものをよこすから、それまで山崎、よろしく頼むよ」

そう言いながら、四角い顔を先頭に、男たちは小屋を出ていった。
「気分はどうですか」

解いた縄をまとめながら、山崎が訪ねた。

「さつきよりはずいぶん良くなりましたが、暑いせいか、なんだかまだ気持ちが悪いです」

「頭を強く打っているようですから、それもあるかもしれませんね。横になりますか？」

「いえ、このままで……」

利恵は赤く縄の跡がついた手首をさすった。

「痛みますか？」

山崎がそつと手首を持ち上げて、確認した。

「すりむけてはいないようですね」

利恵は不思議に思つて山崎に尋ねた。

「怪しい人物だと今も思っているんでしょう？ どうしてこんなに優しくしてくれるんですか？」

山崎は小さく微笑んだ。

「間者でないのなら、痛めつける理由はありませんし。あんな現れ方をすれば自業自得の部分も大きいですが、つらい思いをさせましたからね。壬生浪士組は荒くれ者の集まりだとあまり評判はよくありませんが、罪のない人に対しては別段そうでもないんですよ」

「なるほど……」

そこで会話が途切れ、利恵は山崎が周囲を片付ける様子をただ見ていた。

それにしてもここは本当に暑い。小窓しか換気する場所はなく、締め切っているので日が高かったときの熱気が残ったままなかなか消えない。せめて扇風機があればいいのに。汗と土で全身がべとついていて気持ち悪い。シャワーが浴びたい。そう考えて、利恵はなんだかおかしくなってきた。この時代にあるわけないじゃない。

しかしその後、急に涙がこみあげてきた。ヒステリー状態に陥りかけているのか、感情が唐突に切り変わる。

「大丈夫ですか」

山崎は本当に感情を読むのがうまい。利恵の感情の変化にすぐ気づき、その声をかけてきた。

「もう、なにがなんだか分からないんです。自分がどうしてここにいるのか、これからどうすればいいのか、どこに行けばいいのか」
言いながら、涙が溢れて頬を流れた。

「まあ、近藤さん達の話がどうまとまるかによりますね」

哀れみのような表情を浮かべて、山崎は言葉を続けた。

「みんなが問者と確信すれば、その場で斬られていたかもしれないかもしれません。それでも運は良かったと思いますよ」

「殺されていたかもしれないと？」

「はい」

再び恐怖が胸に湧き上がり、背筋が冷たくなった。

「もう秋になるというのに、本当に今夜は蒸す」

利恵の気持ちを知ってか知らずか、そういいながら、山崎は懷を広げてパタパタと仰いだ。よく見ると、顔には玉のような汗が浮かび、首筋向かって流れている。

まだ縛られ、しびれている足首をさする利恵を見て、「念のため足の縄はまだしばらくつけたまままでお願いします」と申し訳なさそうに言葉を続けた。

「いえ……（斬られるよりはましだし）」

そのとき、総司と呼ばれた男が小屋に入ってきた。

「山崎、その人を近藤さんの部屋まで連れてきてくれないかな。

……とはいえ、ちょっと汚いな」

そう言って、袖元から手ぬぐいを取り出した。

「あ、ダメだ。これ、昨日から洗ってなかった。新しいのあるかな」

山崎は頷いたあと、懷刀を取り出して利恵の足首の縄を切った。

「とりあえず、井戸で土を流しましょう」

と言いながら、立ち上がるうとする利恵の腕を掴んで支える。

「あれ、女の割りにはけっこう大きいんだね。俺と同じくらいかな」

総司が利恵の隣に立った。

利恵の身長は158センチ。現代の日本ではどちらかというと小さい方だ。

総司のほうが6センチくらい大きいだろうか。山崎はそれより少し高いくらい。

「まあいいか。じゃ、行こう」

総司が先に立ち、その後ろから山崎に支えられた利恵が続いた。外に出ると空にはちらほら星が瞬いており、夕日はほとんど山の向こうへ消えかかっている。自分が閉じ込められていた建物を振り返ると、小屋というより蔵といったほうが近いような気がした。中に比べると風がある分、ずいぶん涼しく感じられる。流れ続けている汗は止まったが、べとつきは残っていて、気持ち悪いことには変わりない。

（あれ？）

自分が裸足だということに、利恵はそのとき初めて気づいた。

「あの……。わたしが履いていたものは？」

問うと、山崎は小首を傾げて答えた。

「最初から裸足でしたよ」

「そうですか……」

仕方ないので、小石を踏まないよう、気をつけて歩く。

井戸に着くと、総司が汲み桶を落として水を汲んでくれた。少し大きめの桶に水を移すと、山崎がてぬぐいを浸して絞り、利恵に渡す。

「ありがとうございます」

てぬぐいで顔と首筋、それから腕と足を拭いていくと、ずいぶんすっきりできた。

「ありがとうございます。これ、後で洗って返しますね」

「いえ、気になさらず」

そう言つて、山崎は利恵の手から手ぬぐいを取つた。

「じゃ、行こうか」

再び若い男性に従い、屋敷へと歩いていく。

「他の隊士に遭わないよう裏手から行くね」

裏も表も良く分らないが、利恵はとりあえず頷いて見せた。

闖入者3

渡り廊下を進んで奥の部屋の障子を総司が開くと、先ほど小屋でみかけた面々が座っていた。

「おお、来たか。なるほど、先ほどはわからなかったが、こうしてみるとそれなりの顔立ちをしている」

近藤が笑顔で声を掛けてくる。なんと返答したら良いのかわからないので、利恵は無言で軽く会釈し、中に入った。促されるまま、近藤の正面に背中の中の痛みをこらえて正座する。

「でだな、みんなで頭を寄せ合って考えたのだが、今回のような奇妙な件は誰も経験がなくてな。荷物も検めさせてもらったのだが、見たこともないものばかり。危険なものではないようだが……。まさか黒船でやってきたのか？ お前は異国の者なのか？」

（今度はそうくるか……）

利恵はがつくりとうなだれた。

「黒船に乗ったことなんてありませんよ。わたしは日本人ですし、そもそも、こんなに流暢な日本語を話す異国の人って（この時代には）いませんよね」

「まあ、そうだろうな」

近藤はそこで天を仰いでため息をついた。

「まあ、しばらくここで様子を見るとしよう。ということで、今後は土方の義姉の遠縁が入隊したということにして、こいつの小姓を務めてもらおうかと思う」

アゴで差された先には、竹刀の男がいた。

「さらに、男として過ごしてもらおう」

予想外の展開に驚いて、利恵は背中の中の痛みも忘れて腰を浮かせた。

「男としてって……どうやって……」

「うちは独身者が多いから、ここで女が過ごすとなると、浮き足立つものも出てくるだろう。見たところ上背もあるようだし、着る

ものさえ変えれば、なに、大丈夫だろう」

そんな楽観的な……。利恵は呆然として、へなへなと床に腰を下ろす。

壁際に並んで座っていた他の面々を見渡すと、必ずしも全員がこの案に賛成という訳ではないようだ。発案者はおそらく、あの地味な男性だろう。につこり笑って頷いている。若い男は面白がっているような表情をしていて、竹刀の男は思い切り眉間に皺を寄せていた。山崎と斉藤は無表情を保っており、残る二人は面倒なことに巻き込まれたといった雰囲気だ。

「とりあえず、その珍妙な着物は着替えてもらおう。隊士とザコ寝はムリだろうから、寝室は俺と土方の間に置くことにする。俺たちの間なら、めったなことでは平隊士は来ないからな」

確かに、この状況でそのまま外に放り出されるのは心元ない。とりあえずこの時代に慣れるまでだけでも、置いてもらえるのはありがたいことなのかも。ぼんやりそんなことを考えていたら、竹刀の男と目が合った。あからさまに睨んでくる。

慌てて目をそらすと、近藤は面白そうに笑った。

「鬼の土方と呼ばれているが、なに、根はいい奴なんだ」

（やっぱりこいつが土方か）

根がどうかは知らないが、あからさまに嫌な顔をされては働きにくい、と利恵の気持ちはさらに重くなった。

ふと真顔に戻った近藤は、「ところで、一番気をつけてほしい相手が芹沢だ」と続ける。

芹沢……。芹沢鴨か。確か、近藤たちが暗殺したという、新撰組当初の2トップの1人だ。では、利恵がやってきたのは芹沢暗殺前ということか。

「今はおそらく酒に酔って寝ているだろうし、あいつは八木家で寝泊りしているから、それほど顔を合わすことはないと思うが……。もし知られたら、どんな騒ぎになるか分かったものではない」

苦虫を潰したような表情を浮かべる近藤を見て、資料で呼んだ芹

沢の蛮行を思い起こす。確か、道を譲る譲らないで言い合いになった相撲取りを切り捨て、長州藩に脅されて献金した商家に放火したんじゃないかったかな。あと、なびいてくれない島原の太夫か誰かを斬ろうとしたとか何とか……。はつきりとは覚えていないが、とりあえず瞬間湯沸かし器のような性格であることには違いない。ちょっとでも気に障るようなことを言うなりしてしまったなら、土方以上に恐ろしい存在になりそうだ。利恵は（出来れば一度も顔をあわせることはありませんように）と心の中で祈った。

「ところで近藤さん」

面倒そうな表情を浮かべていたうちの一人が言った。

「どうせここで暮らすんなら、自己紹介でもしておこうか」

「おお、そうだな。俺は新撰組局長、近藤勇。この仏頂面がお前が小姓を勤める土方歳三だ」

利恵は土方に向つて「よろしくお願いします……」と小さくつぶやき、会釈した。が、土方はそっぽを向いて鼻を鳴らす。そんな土方を見てクスクス笑っていた総司が、利恵に向き直った。

「俺は沖田総司」

これが、あの薄命の剣豪、沖田総司か。見た感じ、健康そうな肌色で、病の色はまったく見えない。映画やドラマでは美少年として描かれているが、美少年というより、笑うとえくぼのできるかわいらしい顔をしている。利恵はいつの間にか、食い入るように見つめていたらしい。

「何？ 俺の顔に何かついてる？」

とげんそうな表情で問われて、我に返った。

「いえ……。笑うとえくぼができるんだなあと思って」

「なんだ、沖田みたいな餓鬼っぽい奴が好みなのか」

自己紹介を提案した男が笑いながら続ける。

「俺は原田左之助。で、隣にいるのが永倉新八。我武者羅な新八だから、がむしんってあだ名されてんだ」
すると隣の男は肘で原田を小突いた。

「野村利恵と言ったな。では今後、野村利三郎と呼ぶことにしよう」

「そりゃまたひねりのない」

沖田が笑う。

「変にひねると覚えられないだろうが。特に総司、お前がな」

近藤の言葉に、「はいはい、そうですね」と片手をヒラヒラさせながら沖田は出ていった。

その後姿を眺めながら、今度は山崎に声をかけた。

「この人に、部屋を案内してやってくれ。まあ、案内といってもこの隣だな」

「はい」

山崎が促すように頷いたので、利恵は立ち上がった。部屋を出ようとしたとき、近藤が呼び止めた。

「小姓としての務めは、怪我が治ってからということにしよう。それまでは、ゆっくり過ぎすといいい。しかし外出は禁じる。明日は稽古場へ行つて隊士に紹介するつもりだが、それ以外は自室で過ごしてもらおう」

親切にしてくれているように見えても、実際は監視付きの軟禁状態なのだと改めて実感しながら、利恵は会釈して部屋を後にした。

隣の部屋の前に来ると、山崎は振り返って説明を始めた。

「ここは部屋といつても、近藤さんと土方さんの道具部屋として使っていました。少し狭いですが、辛抱してください」

障子を開けて中を覗くと、確かに物が溢れており、空気も埃っぽい。

山崎は多少物を脇に寄せてから、押入れから布団を出して真ん中に敷いた。

「傷の手当をしますから、ここに横になってください。上だけ脱いでうつ伏せになってもらいたいのですが。用意ができたら呼んでください」

そう言つて、山崎はいったん部屋の外に出た。

利恵はカフタンを脱ごうとしたが、腕を上げると背中に痛みが走ってひるんだ。

四苦八苦してなんとかカフタンを脱いだはいいが、下着はどうしようかと思い悩む。

（これも外したほうがいいのかな……。こんなもの見たことないだろうし、いちいち聞かれるのも面倒だしなあ……。）

思い切って外すことにしたのだが、ホックが後ろにあるので、これも背中 of 痛みに耐えながらの苦行となった。

「用意できました」

障子の向こうにその声をかけると、静かに扉を開けて山崎が入ってくる。布団の傍らに膝をつき、背中を確認した。

「けっこう腫れていますね。おそらく、今日より明日のほうが痛みはひどくなるでしょうから、念のため塗り薬を塗っておきましょう。3日もすれば、ずいぶん楽になるはずです。……少し冷たいですよ」

触れられると痛むが、薬は冷たくてなんだか気持ちいい。冷湿布のようなものだろうか。

「終わりました。では、こちらに背を向けて座ってください」

「えっ」

このまま座りなおすと、胸が見えてしまう。カフタンで隠そうと思ったが、いつの間にか山崎の後ろに移動していたので、手は届かない。利恵はうつ伏せのまま硬直した。

「見ないようにしますから。このままでは塗り薬が着物についてしまいますので、布を巻きます」

「……わかりました」

意を決して山崎のほうに背を向け、起き上がるうとしたのだが、背中が痛くて思うように動けない。

するとそつと肩に手が置かれ、起き上がるまで支えてくれた。

「一応明日からは男性として過ごしてもらうので、胸のふくらみが分からないように少しきつめに巻きますよ。息が苦しいようだった

たと言ってください」

その後は二人とも沈黙し、包帯のこすれる音だけが部屋に響く。胸から腰までほとんどが包帯に隠れた状態になり、（これってホラーのミイラ男みたい）など、とどうでもいいことを考え始めたとき、再び山崎の声が聞こえた。

「これで終わりです。このまま頭のほうも確認しましょう」

そう言って、今度は利恵の髪をより分け、傷の具合を確かめた。

「傷は浅いですね。瘤のほうはさきほどより大きくなっています
が……この薬は傷口にかなり染みるので、塗らずにおきますね」

そういつて、折りたたまれた着物と帯を二組差し出してきた。

「こちらは寝巻きです。普段はこちらをどうぞ。わたしは今夜は部屋の外におりますので、何か不便がありましたら呼んでください」

「寝ないんですか？」

「野村さんが寝ればわたしも眠りますから。そういえば夕飯時はどうに過ぎてしまいましたね。食事を用意しましょう。とはいえ、握り飯くらいしか用意できませんが」

「いえ、おなかはすいていないので……」

「食べたほうがいいですよ。夜中におなか为空いても用意できないかもしれませんから」

山崎が出ていったあと、隣の部屋で何やら話しているのが聞こえ、

「わかった」

と土方がぶっきらぼうに答える声が続く。見張りの代わりを頼んだのだろう。

別に逃げたりしないのに……と利恵はまたため息をつく。

しばらくすると、白いおにぎりが3個載った皿と、お茶をお盆に乗せて山崎が戻ってきた。おにぎりの横には、たくあんが二切れ添えられている。

「明日の朝はもう少しましなものとありますが、今夜はこれで我慢してください」

「あの、ここには風呂とかはないんですか？」

今日はムリでも、明日は体全体を洗い流したい。この時代にお風呂がなんと呼ばれているのかわからなかったので、言いながら体を洗うしぐさをして見せた。

「あいにく屯所内にはないですね。局長に町の湯屋に行ってもいいかどうか聞いてみますが、おそらくムリでしょう。あなたは男とということになっているのですから」

「ああ、そうですね……。言われてみればそうですね……」

ということは、ずっと湯船にはつかれないということになる。利恵はがつくりうなだれた。

「では、わたしはこれで失礼します」

障子越しに、縁側に腰掛ける山崎のシルエツトが月明かりに照らされて浮かび上がる。部屋の中の照明は油が入った皿に灯心を入れた小さなものだけ。しかも、あまり明るくない。障子越しに入る月明かりのほうが明るいくらいだ。

苦勞して布団に横になり、薄暗い部屋の中を見回した。物置といつても特に重要なものは置いていないらしく（あったとしても、すでに移動してあるに違いない）、興味を引かれるものはない。ふと大きな木箱が目に残った。これは土方が薬の行商をしていたときに使っていたものだろうか。実際そうだとしたら、これは文化的価値があるかもしれない。現代に持っていけば、相当な値がつくんじやないだろうか。

そんなことを考えながら見回すうち、山崎が持ってきてくれたおにぎりに目が留まった。そういえば……。

「あの、山崎さん」

「どうかしましたか？」

即座に山崎の声が答えた。

「いえ、山崎さんは食べないのかと思って」

「大丈夫です。食事を終えたら誰かがしばらく代わってくれるそうなので」

「そうですか」

おなかは空いていなかったが、このまま置いておくとひからびてしまっだろう。せっかく用意してくれたのだから……と、とりあえずおにぎりを口にする。

ほんのり塩味がついているだけだったが、たまらなくおいしかった。

自覚していなかったが、かなり空腹だったようで、たくあんを時々かじりつつ、一気に食べ終えてしまった。

「ごちそうさまでした。とてもおいしかったです」と外へ声をかける。

「あの……、これって山崎さんが握ったんですか？」

「そうです」

「上手ですね」

「ありがとうございます」

そこで会話は終わり、また静寂が部屋を満たした。

（テレビとかパソコンがあれば、何かしら情報収集できたのに）
ないものねだりをして仕方がないし、寝るまで他に何もすることがないので、とりあえず自分が倒れたところから思い返してみることにした。

闖入者 4

（わたしは取材で訪れた八木家の奥の間でめまいを起こし、倒れた。気づくと男に引きずられていた（あの荒っぱさはおそらく土方さん）。

手足を縛られ、殴られて……。

靴とカメラが入ったトートバックは消えていて、ポーチだけが手元に残っていた。

倒れる直前、気付にアロマオイルを出そうとしてたような……。

ポーチといえば……（）

「あつ、そういえば」

利恵は思わず声を上げた。

「あの、山崎さん、わたしのポーチ……袋はどこにあるか知ってますか？」

「ああ、あれなら土方さんが持ってますよ」

「えっ……」

（ど、どうしよう……）

あの中には、携帯用シャンプー・コンディショナー、スキンケアセット、歯磨きセット、アロマオイル、簡単な化粧道具など、今まさに喉から手が出るほど欲しいものが入っている。

部屋から出て、障子ごしに恐る恐る声を掛けてみた。

「あの、土方さん。わたしの荷物、返してもらえると嬉しいのですが」

すると、

「うるさい、黙って寝ろ」

と一喝された。

「でもそれ、男の人が使うようなものは入っていませんか？ それがないと困るんです……けど……」

ボタンと障子を開いて、土方が威嚇するように仁王立ちした。

「おい、お前、自分の立場わかってないのか？　少しは静かにしてろ。俺は今大事な読み物をしようとしてるのに、うるさくて読めやしねえ」

驚いてのけぞったとき、背中に強烈な痛みが走り、なんだか無償に腹が立ってきた。

「こんなに暗いのに、読み物なんてできるんですか。それはともかく、危ないものはないと分かったんでしよう？　だったらもう必要ないはずです。返してください」

「なんだと。小姓のくせに、生意気な口を聞くとぶった斬るぞ」その勢いに一瞬ひるんだものの、利恵の怒りは収まらなかった。

「自分のものを返してほしいっていうことのどこが生意気だっていうんですか？　それになんですか？　わたしが何したっていうんですか。ただ入り口に転がって気を失ってただけじゃないですか。まあ確かに、怪しいって思われても仕方ないかもしれません。でもそれだって、わたしにはどうしようもなかったし、なんでこんなことになったのかだってわからないんですよ。来たくて来たわけじゃないのに！」

またヒステリーを起こしかけている。火に油をそそぐだけだと分かっているながら、利恵は自分の口を閉じることができなかった。

「わからないまま殴られて、そこが痛くて寝起きどころか寝返りを打つのだって一苦労なんですよ？　知らない時代、知らない場所、知らない人ばかりでわたしがどんなに心細いか。だからせめて自分のものを近くに置いておきたいってだけなのに」

騒ぎを聞きつけて近藤が部屋から出てきた。土方と利恵の間に入るように立ち、惘然とした表情で腕を組む。

「おい、野村くん。あまり大きな声を出さないでくれないか。騒動が広まって、明日隊士に紹介する以前によけいな噂が流れると困るからね。特に、芹沢に知られると余計に事が面倒になる」

「……すみません」

近藤には謝ったが、依然二人のにらみ合いは続く。

「いやでも、どうしようかね。どうもこの二人は相性が悪いらしい。土方の義姉の遠縁にするのが一番安全だと思ったんだが、これは難しいかもしれない」

「わたしは、自分の荷物を返してほしかったただけなんです。なのに、いきなり怒鳴られたから……」

「なんだ、あの珍妙な袋の中身か。あれならもう検分したし、武器になるようなものはなかったから、返してもよからう」

近藤が言くと、土方はいきなり利恵の足元にポーチを投げつけた。

「ひどい！ 中の物が割れたらどうするんですか」

利恵の言葉には答えず、土方はドシドシと足音を響かせて隣の部屋へ戻っていった。

近藤は首を振って疲れたようにため息をつく。

「なんだろうね。普段はもう少し落ち着いた男なんだが。まあ、野村くんも悪いよ。喧嘩を売っているようなあんな言い方をしちゃあ、返そうと思っていても素直に返せんだろう」

（最初はちゃんとお願ひしたもの。それをあっちが……）

おいに不服を感じたが、なんだか子供同士の喧嘩のようにも思われて、利恵は文句を飲み込んだ。

「まあなんだ。ここどころ、いろいろ面倒なことが起きているのだ。その対処で、土方は緊張続きの毎日を送っている。そこへ自分ではどうにも理解できない奇妙な状況が加わって、とうとう爆発してしまっただろうよ。気にしないことだ」

気にするなといわれても、あからさまに敵意をむき出しにされていては、そもいかない。利恵が複雑な表情を浮かべると、近藤は宙を睨んで低くうなった。

「小姓の件はどうするかな。平隊士の前で喧嘩をおっぱじめられたら、ちよつとまずいよなあ。……まあ、もうしばらく考えてみるか。おお、沖田、どうした？」

近藤の視線を追うと、ニコニコ笑いながらこちらへ向ってくる沖田が見えた。

「山崎と見張りを変わろうかと思ひましてね。なんだか面白そうな騒ぎが聞こえてきたから、急いで食べたんだけど、残念。終わっちゃったか」

言いながら利恵の横に立ち、関心したように付け加えた。

「君はすごいね。土方さんにあんな物言いをする女なんて、初めてかもしれないよ」

気持ちが悪く、取り乱したことが急に恥ずかしくなってきた、利恵は「はあ……。なんだかお騒がせしちゃって……」ともごもごつぶやきながらポーチのフアスナーを意味なくいじった。

「まあ、これからは小姓なんだし？ 言い返すときはほかの隊士がいないところのほうがいいよね。一応、土方さんの面目を立てなくちゃ」

沖田が言うと、近藤は「いやいや、その件だが……」とため息をついた。

「どうも、土方の小姓には不向きじゃないかと思うんだよ。別の方法を考えようと思うんだが、どうしようかね」

「小姓を付けられるとなると、あとは近藤さんか山南さんしかないよね」

沖田の言葉に、近藤は苦虫を潰したような表情をする。

「そうなんだよなあ。俺は会津藩との折衝が多いからあまり連れて歩きたくないのだ。山南はお人良しなところがあるし、遠方への外出も多いからなあ。やはり適任は土方ということになる」

沖田はニコニコしながら

「じゃあ、いいじゃないですか。面白そうだし。最近の土方さんは難しい顔ばかりしてるから、たまには発散するのもいいんじゃないですか」

と言う。

（余計なことを……）

できればこのまま変更してほしかったのに……と利恵は唇をかみ締めた。

「まあ、今日明日に働いてもらうということでもなし。もうしばらく考えよう。じゃ、失礼するよ」

そう言って、近藤は自室に下がった。

「山崎、飯を食ってくるといいよ」

沖田に促されると、山崎は「ありがとうございます」とつぶやくようにいってその場を去る。

「さて。ここでこうしてただ座っているのも退屈だし、話相手にでもなってもらおうかな」

縁側に腰掛けた沖田は、そう言って振り向いた。月明かりに照らされた顔には無邪気な表情が浮かんでいるが、資料によると、新撰組で人を斬った数は一番だったという話だ。斬り合いになるとまた別の顔になるのだろうか。

「ここに座るといいよ。夜風が気持ちいい」

沖田は自分の隣を手でポンポンと叩いた。ここに来いということらしい。

背中が痛むのであまり動きたくなかったが、まだ眠る時間でもないだろうし、この状況に対応するための情報収集も必要だと思い、沖田の隣へ移動した。

「今夜は月がキレイだね。もう満月は過ぎただけで、ほとんど丸くてキレイだ」

利恵が夜空を見上げると、ありえないくらい月が近くに見えた。同じく星も近くに見えて、しかも零れ落ちそうなほど瞬いている。

（東京では見れない空だなあ）

夜空の美しさに圧倒され、利恵はしばし言葉を失った。

「ところで君は江戸から来たと言っていたけど、どの辺かな。天涯孤独ってことらしいけど、顔見知りくらいはあるんじゃない？」なるほど。相手もわたしと同じように、情報収集に励むつもりらしい。利恵は苦笑いを浮かべた。

「正直、顔見知りかどこにいるのかさえわかりません」

沖田は相変わらずにこやかな笑顔を浮かべているが、目は笑って

いなかった。

「ふうーん。記憶をなくしたのかな」

「それとも違うと思うんですが……。とりあえず、以前住んでいたのは板橋です」

「板橋……。ううーん、俺にはなじみがないなあ。今度誰かに聞いてみよつと」

そういいながら沖田は探るような視線を向けたが、別に後ろめたいことはないの、「そうですね」とだけ言っただけで利息は再び空を見上げた。

「信じてくださいと言っても、難しいだろうなっていうのは分かっています。わたしが逆の立場だったら、同じように信じられないって思いますもん」

「まあねえ。そうだよねえ。本当だったらまだ蔵で縛られているか、会津藩に突き出しているところだよね。……近藤さんって時々お人よしなんだよなあ。言いだしつぺはさっき話に出た山南さんだけど。山南さんは特に女に優しいからさ。今回はそのお人よしに救われたって感じだよね」

沖田は下を向いてククツと笑った。

「ほかのみんなも小姓の件ではあまり良い顔はしてなかったなあ。まあ俺はどっちでも良かったんだ。野村の持ち物とか着物が面白かったから、なんとなくもうしばらく様子を見てもいいかなって思ったし」

「へえ……」

「最後まで抵抗してたのが土方さん。自分の意見が通らなかったもんだから、へそ曲げちゃってあんなに機嫌が悪かったのかも」

そのときの様子を思い出したのか、沖田はまたククツと笑った。すると「総司、うるせえぞ。余計なこと話してるんじゃないよ」と隣室から怒鳴り声が聞こえてきた。

「やべつ。聞こえちゃったみたいだね」

そう言う割りには、土方を怒らせて楽しんでいる様子だ。

沖田の笑顔を見ながら、利恵はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「あの、体の具合はどうですか？ 何か気になることとかありますか？」

「なんで？ すこぶる元気だけど。顔色悪い？」

「いえ。なんとなく……」

沖田は怪訝そうな表情を浮かべ、利恵の顔を覗き込んだ。

「医学の心得があるのかな。俺を見て何か感じるところがあったのかな」

「そんなことないですよ。ただ単に、なんていうか、剣をやっている割りには細かいかなあ……と、それだけです」

利恵は慌てて取り繕ったが、沖田は納得していない様子だ。

「細かいなあ」

そう言つて袖をまくり上げ、力瘤を作つてみせた。

「けっこうたくましいんだけど」

「そ、そうですね。着やせするタイプなんですネ」

「たいぷ？ たいぷって何？」

時代が違つと分かつてから、なるべくカタカナ言葉は使わないように気をつけていたのだが、慌てたせいでつい出てしまった。

「着やせして見える方なんですネってことです」

「ふうーん。君はたまに変な言葉を使うよね。方言かなにか？」

「いえ、自分の言葉です。言葉遊びが好きなので」

情報収集どころか、なんだかどんどん追い詰められてるような気分になっていく。

沖田がさらに何かを問い詰めようとしたとき、山崎が現れた。

「沖田さん、ありがとうございます。あとは私が」

すると沖田はすねたように唇を突き出した。

「俺なら大丈夫だよ。今夜は暇だし。ちょうど面白い話を聞いてたところなんだ。もっとゆっくりしてきてもよかったのに」

「しかし……」

「じゃあ、3人で月でも眺めながら話そうよ。……あ、そうだ。おいしい練り菓子があつたんだった。持ってくるから待ってて」

「私がお持ちします」

と山崎が動こうとしたところ、沖田はそれを手で制して笑った。

「いいの、いいの。他の人に見つからないよう、秘密の場所に隠してるんだから。俺が持つてくるよ」

そして楽しそうに軽い足取りで廊下を渡っていく。

沖田の背中を見送っていた山崎が利恵を振り返り、問いかけてきた。

「背中の具合はいかがですか。痛むのなら、ムリして起きていなくてもいいんですよ」

「いえ、ここのほうが夜風が気持ち良いので。中にいると、なんだか落ち着かないし」

利恵が答えると、山崎は申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「明日、日が昇ったらもう少し片付けますから」

「いえいえ、そういうわけじゃないんです」

利恵は慌てて手を振った。

「中に入って障子も閉めていると、なんていうか、実際そうなんですけど、囚われの身だと感じるというか……」

「なるほど。そういうことなら」

そのとき、沖田が戻ってくるパタパタという足音が聞こえてきた。

「さ、食べようか」

そう言つて沖田が元の場所に腰を下ろし、膝の上で紙箱を開けると、中には花をかたどった和菓子が並んでいた。

「食べるのがもったいないくらいキレイですね」

「でも食べないで腐らせるほうがもったいないから、お1つどうぞ」

そう言つて、椿の花に似た和菓子をつまんで利恵に渡し、山崎には桜と思われるものを差し出した。

それからしばらくは会話もなく、和菓子をつまみながら空を見上

げたり、虫の音に耳を澄ましたりしながら過ごした。

（いつもならまだ働いている時間だよなあ）

ふとまた自分がいた場所を思い浮かべる。

（私が突然消えたら、あの企画は誰が引き継ぐんだろう。というか、どうすれば戻れるんだろう。また気を失えばいいのかな。……あ、でもさっき小屋で気を失ったのに、戻ってなかったし。ムリなのかな。このままここでずーっと一生過ごすのかな）

そう考えると、たとえようのない不安が胸に押し寄せてきて、苦しくなった。喉元にまたパニックがこみあげてくる。

（落ち着かないと。ここでまたヒステリーを起こしたら、あきれられてまた蔵に入れられちゃったりして……）

目を閉じて、深呼吸をする。

「お疲れのようですね。そろそろ部屋に戻ったらどうですか」

山崎に促されたが、利恵は首を横に振った。すると、瘤ができているあたりに鈍い痛みが走り、顔がゆがむ。

「いえ、もうしばらくこのままです。まだ眠くないので……」

「今はだいたい六ツ半なので、寝ても良い頃かと」

「む……六ツ半……？」

時間の数え方が分からない。これ以上会話していても混乱して行くだけなのではないかと思い、利恵は深い疲労感を覚えた。

「なんだ、時も知らないのか？」

沖田が驚いたように言う。

「い、いえ、そんなことは……。もうそんな時間なのかと驚いただけです。ではそろそろ部屋に戻ろうかな」

これ以上突っ込まれてはたまらないと、利恵は立ち上がった。

「じゃ、俺も。面白い話を聞けてよかったよ」

そう言っ歩き出した沖田の背に、「ごちそうさまでした」と声を掛けると、振り返らずに手を振った。

山崎にも軽く会釈し、部屋に入って障子を閉める。

布団の上に落ち着くと、ポーチから歯ブラシを取り出し、歯磨き

粉はつけないまま磨き始めた。吐き出す場所がないのもそうだが、歯磨き粉の匂いも泡立ちも見たことがないだろうから、必要のない詮索は避けようと思ったのだ。歯磨き粉はもう少し自由に動けるようになって、誰も見ていないときに使うことにしよう。

湯のみに残っていたお茶で口をゆずぎ、しばし躊躇したがそこへ吐き出した。明日、自分で捨てて洗えばいいや。

闖入者 5

布団にうつぶせになり、現代とつながる唯一の所持品、ポーチをあけて中身を確認した。

先ほど土方が投げたので心配だったのだが、ファンデーションは奇跡的に無事だった。でも、これから男性として過ごしていくのなら、ファンデーションも口紅も無用の長物になるんだろうなと思い、利恵は寂しくなった。

彼らは新撰組ではなく、「壬生浪士組」と言っていた。芹沢鴨も暗殺されていないのなら、これからどんな大きな事件が起こっていくのだろう。そんなのに巻き込まれたくはない。ここからさっさと出ていきたい。というより、現代に帰りたい。

わたしはなんて平和で便利な世界に住んでいたんだろうと改めて思う。

確かに怖い事件や戦争もあったけれど、あくまで自分には関わりのないところで起こっていた。

そして、好きな温度に設定できる湯船とシャワー、ほとんど昼間と同じ明るさを保つ電球、欲しい情報を検索できるパソコンを始め、時間を気にせず生活を豊かにするものがたくさんある。

ああ、そして今は、冷たいビールが飲みたくてたまらない。アイスクリームも食べたいな。

本も読みたい。途中まで読んだ推理小説、ホテルの部屋に置いたままだ……。犯人は誰なんだろうな。

そうやって今欲しいもの、やりたいことを挙げていくうち、いつの間にかまぶたが重くなり、利恵は眠りに落ちていった。

目覚めると、日が昇り始めたのか、辺りがうつすらと明るくなっている。一瞬、自分がどこにいるのかわからなかった。この天井は……。ああ、昨日の出来事はやっぱり現実だったんだ。今もまだ幕

末にいるんだ……。目の端に涙が滲んだが、悲しみはいきなり襲ってきた生理的欲求にかき消された。

（トイレはどこだろう）

起き上がろうとしたら、寝ている間にこわばっていた背中に鈍い痛みが走る。

（確かに昨日より痛いかも）

小さくうめき声を上げながらもなんとか起き上がり、普段着にと渡された着物に着替えた。適当に襟を合わせて帯を巻く。これでいいのかどうか分からないが、山崎に確認して直すほどの余裕はもう残っていない。頭の中はトイレでいっぱいだ。

急いで障子を開けると、昨日と同じ場所に山崎が座っており、少し充血したまなざしを利恵に向けた。

「あの、お手洗い……じゃなくて、厠はどこでしょう」
聞くと、少し困った顔をした。

「どうでしょうね、大丈夫かな」

何が心配なのか分からないが、なんでもいいからトイレに行きたい。とりあえず行かせてくれ。利恵の膀胱は限界に近づいている。よほど切ない表情をしていたのだろう。山崎は苦笑しながら立ち上がった。

「ではこちらへ」

促されるまま廊下を進み、着いた先の扉を開いたとき、強烈な悪臭が鼻を突いて利恵はおののいた。

（掃除されてない公衆トイレみたいだな……）

息を止めて中を覗き込むと、なんだかべとついた雰囲気だ。

トイレには入りたい。しかしはだしで中に入る勇気が出ない。

すると山崎は縁側の下からぞうりを拾い上げ、「これを」と差し出してきた。

ありがたく受け取り、意を決して入ろうとした利恵は、ふと山崎を振り向いた。

「えーと、もう少し離れた場所にいてくれませんか？ やっぱり

恥ずかしいので。逃げませんし」

すると山崎は素直に数メートル先まで移動した。

（さあ、入るぞ）

決意を固めて息を止めると、利恵は一気に厠の中へ駆け込んだ。用を足して再びダッシュで外へ出た利恵は、そのまま山崎よりさらに向こうまで走るように移動し、そこでやっと荒い息をついた。

「一応交代で掃除はしているのですが、夜間は狙いが外れたり、酒に酔った者が適当にやってしまったりするので……」

背後で山崎が説明してくれた。

「な、なるほど……」

ぼつとんトイレ（なんと呼ばいいのだろう）も初体験だった利恵は、水洗トイレのありがたさを痛切に感じた。

激しく動いたせい、背中がさらにずきずき痛む。

井戸で山崎が水を汲んでくれたので、ありがたく手を洗い、ついでに顔も洗った。部屋に着いたとき、原田がやってきた。

「山崎、代わるぜ。少し休め」

「ありがとうございます。では、わたしはこれで」

軽く頭を下げて、山崎は去っていった。

「おはようございます」

挨拶しながら、利恵は原田の顔をこっそり観察した。ゆうべは薄暗くてよく見えなかったのだが、こうして明るいところで見てみると、改めてイケメンだなあと思う。

「なにか言いたいことでもあるのか？」

こっそり観察していたつもりだったのに、なぜかばれてしまった。

「いえ、別に。ゆうべはあまりお顔が見えなかったなので、なんとなく……。原田さんですよな？」

「おう。で、どこに行ってたんだ？」

「厠です」

「朝の厠はすげーだろ」

「ええ、かなり」

原田は豪快に笑った。

「ゆうべはおどおどしていたが、なかなか率直な物言いをする女だな。そういえば、土方さんとやりあったとか。総司が関心していたというか、面白がっていたというか」

そのあと、何かに気づいたようにハッと驚いたような表情になった。

「いけねえ。男ってことになってたんだよな。……というからお前、すそが合ってねえし、帯もなんだか……。だらしねえな、中で直してこいよ」

そんなこと言っただけ……。利恵は自分の着物を見下ろした。
(着物なんて普段着ないし。浴衣のときは母さんに手伝ってもらってたし)

途方に暮れる利恵を見て、

「なんだお前、自分で着れねえのか？ あんなおかしな格好してたんだしなあ。仕方ねえ、手伝ってやるよ」

と言いながら、先に部屋へ入っていく。

見てくれや乱暴な口調とは裏腹に、丁寧な説明をしながら着付を手伝ってくれた。

「……これで完成だ。分かったか？ 今度から一人で着れるか？」

「まあ、なんとかいけそうです。ありがとうございました」

腰に手を置き、あきれたような表情を浮かべて原田が言った。

「なんかなあ。お前って変な奴だなあ」

「はあ……。まあ、そうでしょうね……」

いい加減いちいち反応するのも疲れてきたので、利恵は受け流すことにした。

「こんな感じじゃ、見張りはいらんような気もするが……。まあ、まだ早いか。それに土方さんが絶対に納得しないからな。じゃ、俺は外にいるから」

そう言っただけ、障子の向こうへ姿を消した。

不審人物だと思っている割には、意外とみんな親切だ。土方以外

はということだが……。もしかして、良い刑事・悪い刑事役を分担してやっているだけだろうか。

それにしたって……。利恵は土方の部屋の方角を睨んだ。むかつくけど、ああいうタイプは相手にするほどムキになる。そう思い、利恵は小さくため息をついた。編集の仕事に就いて2年間、それはもう、個性的な面々とたくさん接してきた。その中で学んだのが、「すぐムキになる相手をムリに説得しようとする、ことが余計に複雑になる」ということ。相手に同調しながら、とにかく冷静に対応するのだ。

ポーチからブラシを取り出して髪をとかしながら、髪を伸ばしていてよかった、と理恵は思った。これでシヨートだったら、よけいに浮いた存在になっていたところだ。黒いゴムを使って低い位置でポニーテールにまとめる。ゴムもこの時代にはないだろうなあ……。黒だから目立たないだろうけど、また不思議がられるだろうか。

しばらくすると、障子の向こうから原田に声をかけられた。

「飯の準備ができたそうさ。ゆうべいなかった奴にも紹介したいから、今回は奥座敷で一緒に食おうってさ」

原田に案内されて向かった先には、初めて見る顔が二つあった。

「おお、野村くん。こちらに」

近藤に促されるまま、お膳が用意された場所に座る。近藤の斜め前だ。

「源さんと平助はゆうべいなかったから、一応この二人にも紹介しておこうと思ってな。源さんは巡回だったから仕方ないとして、平助、お前は夜遊びは控えると言ってるじゃないか。他の隊士に示しがつかん」

平助と呼ばれた男は、まだ眠いのか、大あくびをしている。

「門限にはなんとか間に合いましたから。それに、芹沢さんに比べればずいぶんマシなほうだと思いますけどね」

「あんなやつかいな奴を引き合いに出すほうがおかしい」

近藤がしかめつらを見ると、平助は小言を聞きなれているのか、

「はい、はい」

と、意に介した様子はない。色白の肌にくつきりと弧を描く眉、涼しげな眼をしており、どこか品のある顔立ちをしている。平助……。藤堂平助か。この人って確か……。

「とりあえず、食べようよ。おなかが空いた」

沖田が言うと、

「そうだな。とりあえずいただくでしょう」

と、近藤が箸を持つ。すると、他の面々も食事を始めた。

「はじめまして。井上源三郎です」

この中では一番年上と思われる男性が、いったん箸を置いてから挨拶してきた。とても穏やかな雰囲気で、まなざしも暖かい。この人とは緊張せずに話せそうだな、と思いながら利恵も箸を置いて挨拶を返す。

「はじめまして。野村利恵……じゃなくて、利三郎です」

言い直すと、近藤は困ったような顔をした。

「まあ、最初は間違えるのも仕方ないだろうなあ。だがなるべく早く、利三郎という名に慣れてもらわんと」

「申し訳ありません」

周りを見回すと、みんな黙々と食べている。

「俺は藤堂平助です。よろしく」

状況を聞いているのかいないのか、いずれにしても藤堂はあまり興味なさげだ。「今日の干物はなんだか固いね」とつぶやきながら、ひたすら魚を突付いている。

この人って確か、すごく悲しい最後を迎えたような……。そうだが伊藤甲子郎と一緒に出て行って、その後……。

悲しい最後といえば、ここにいる人たちみんながそうだ。いや、違う。永倉さんは長生きしたはず。手記を残したと資料にあった。

いつの間にか食事の手を止めて物思いにふけていたらしく、

「食べんのか？　なんだ、傷が痛んで食欲がないのか？」

と近藤に問いかけられた。

「あ、いえ。いただきます」

慌てて料理に箸を付けた。が、おいしくない。

現代の味とは違うのか、それとも単に、料理が下手な人が作ったのか。

味噌汁は味が薄すぎるし、出汁も効いていない。

魚の干物（たぶん鰯）は身が固すぎる。

人参とインゲンの煮物と思われる料理もひどい。人参は芯が残っているし、適当に煮て醤油をかけただけという感じだ。お米とたくさんだけは普通においしいので、それが救いかも……。

といっても、利恵も料理は上手なほうではなかったたので、人の料理にケチはつけられない。親元で暮らして24年。一度も一人暮らしをしたことがなく、食事の用意は母親任せだった。もちろん後片付けは手伝ったが。

「利恵ちゃん、そろそろ料理を覚えたら？ 味噌汁とカレーしか作れないなんて……。お嫁さんにいけないわよ。そんなんだから、良介君にも愛想つかされたんじゃない？」

そんなとき、いつもこう答えていた。

「だって、仕事が忙しすぎて会う時間がなかったんだもん。それに愛想をつかされたんじゃないやなくて、自然消滅です！ 母さんだって分かってるでしょ？ 帰りは遅いし、締切り前はほとんど泊り込みの日々だし。大丈夫よ、結婚相手ができたらちゃんと覚えるって」

父親が近くにいるときは、
「料理のできない女だと、結婚相手もできないぞ。……まあ、急ぐことはないんだが」

と、どつちつかずの発言をしていたものだ。利恵は一人娘なので、できれば嫁に出したくないというのが父の本音だった。

二人の愛情を一身に受けて、うっとおしいと思ったことも多々あった。しかし今は二人に会いたくてたまらない。

そんなことを思い返しながら、無言で黙々と箸を進めるうち、ま
ずいと思っていた料理をすべて平らげていた。

「で、野村くん、背中と頭の傷の具合はどうだい？」

食後の茶をすすりながら近藤が聞いてきた。

「頭のほうは、触らなければほとんど大丈夫です。背中は立つた
り座ったりといった動作をすると痛みますね」

そういつて、利恵は斜め向かいに座っている土方をチラッと見た。
今朝は一言も口をきいておらず、ずっと不機嫌な表情のままだ。

「そうか」

近藤が頷くと、いきなり土方が口を開いた。

「ったく、こんな身元の分からねえ奴を、なんで屯所内で世話し
なくちゃいけないんだ。ただでさえ、芹沢の尻拭いで大変だってい
うのに。もう少し緊張感を持つたらどうだ」

そう言つて、利恵を思い切り睨んできた。

が、だいたいこういうことを言うだろうなと予想していた利恵は、
頷きながら平然と答えた。

「そうですよね。土方さんのお気持ちは理解できます。もちろん
わたしは間者とかいうものではありませんし、倒幕派ともまったく
関係ありません。でも、皆さんから見れば奇妙で怪しい存在である
ということは十分承知しています」

ゆづべ怒鳴りあつた話は伝わっているのだろう。冷静な反応に、
みんな驚きの表情を浮かべて注目した。

利恵はそんな一同を見回してにっこり微笑み、言葉を続けた。

「行き先も分からず、天涯孤独の身でもあることを考慮して、（
男性として過ごせという無茶な注文をつけられたとしても）ここに
置いてくださることは深く感謝しております」

「いやあ、まあ、こちらとしてもだな、話しも聞かずにいきなり
乱暴したという引け目もあるしな」

と、近藤が照れた笑みを浮かべて頭をかいた。そんな近藤を、そう
じゃないだろう、とでもいうように、土方が呆れた表情で見ている。

「まあ、ずいぶんひどく殴られはしましたが、それについても、状況が状況でしたから、仕方なかったのかもしれないね。山崎さんにはずいぶん親切に手当していただきましたし、沖田さんや原田さんにもとても良くしていただきました。ありがとうございます」

土方はふん、と鼻を鳴らして目をそらした。あとの者はどう反応すれば良いのか分からない様子で、空になった茶碗などを眺めている。

話をしながら利息はふと思い出し、

「良くしていただいたといえば、沖田さん、ゆうべはおいしいお菓子をありがとうございます」

と、改めて礼を言う。

沖田は少し慌てたように手を振った。

「いや、いいんだよ。どうせもらい物だし」

すると、近藤が嬉しそうに手を叩いた。

「菓子といえば、昨日、松平様から練り菓子を賜ったんだよ。みんなで食べようと思って持って帰ったのだ。総司、昨日預けたあの菓子を持ってきてくれないか」

すると沖田は気まずそうな表情を浮かべた。

「あー、すみません。ゆうべ、野村と山崎と一緒に食べちゃいました」

「なんだと？　なんで、勝手に……。楽しみにしていたのに……」

近藤はものすごい勢いで立ち上がったが、そのあと力がぬけたようにあぐらをかいて座った。

「だって、俺にくれたんだと思ったから」

とぼけた表情で沖田が答える。

「これをしまっておいてくれと頼んだだけだ。……もういい。お前に預けた俺が馬鹿だったんだ」

いきなりの展開に驚いて呆然としていた理恵は、慌てて近藤に謝った。

「すみません、知らなかったとはいえ、2つも食べてしまって……」

…」

「いや、いいんだよ、本当に」

近藤は力なく笑い、再び立ち上がった。

「じゃあ俺はこれから書簡などに目を通さなくてはならんから、そろそろ自室に戻るよ」

それを合図に、それぞれが「じゃあ、俺も稽古の準備があるから……」など自分の用事をつぶやきながら立ち上がった。

障子を開けて出ていこうとした近藤が、ふと振り向いて

「片付けは、総司、お前がやっておけよ」
と言いつつ放った。

「なんだよ、食い物の恨みは怖いなあ」

と言いつつ沖田が膳を持ち上げるのを確認し、満足したような笑みを浮かべて近藤は去っていった。

「手伝いますね」

と利恵も膳を持つと、沖田は首を横に振った。

「いや、いいよ。けが人なんだし」

「いえ、重いものでもありませんし。お食事をご馳走になったんですから、片付けくらいはお手伝いします。……それに、近藤さんのお菓子を食べたお詫びも兼ねて」

利恵がそう付け加えると、沖田は共謀者めいた笑みを浮かべた。

「俺一人だったらもつと怒られたと思うんだけどね。山崎と野村も一緒だったから。山崎は近藤さんのお気に入りなんだよ」

……なるほど。親切で持ってきてくれた訳じゃなくて、単にあのお菓子を食べたかったから、共犯者を探していただけだったのかな。利恵はそう思い、近藤さんも大変そうだなあと同情した。

土方をはじめ、沖田も藤堂もずいぶん個性的な面々だから、まとめる苦労は尽きないだろう。思えば編集部も一筋縄ではいかない人ばかりだった。なかなか素直に言うことを聞いてくれない部下に囲まれ、いつも頭を抱えていた編集長を思い出す。利恵は比較的柔軟に対応する方だったので、編集長には気に入られていた。それもあ

って人気の連載ページを任されたのだが、かわいがっていた部下が失踪したと知ったら、編集長はがっかりするだろうか。

迎合 1

朝食の片付けをしたあとは、部屋でぼんやり過ごしていた。

分刻みでスケジュールをこなすような忙しさの中毎日過ごしていた理恵にとつて、何もすることがない一日は喉から手が出るほど贅沢な時間のはずだった。しかし、こうして実際にその状況に身を置くと、どうにも落ち着かない。現代だったらネットを見たり、テレビを見たり、本を読んだり、映画を観たり、ショッピングに行ったりと、時間を潰すものはいくらでもある。しかし、ここには何もない。

布団に横になり、ボーッと天井を見つめる。どうすれば、元いた場所に帰れるんだろう。やることがないと、そんなことばかり考えてしまい、鬱になりそうだ。

意味なくポーチの中身を取り出して並べてみた。ボディーションプーの携帯用ボトルが目に残る。体を洗いたい……。全身がべとついてなんだか痒くなってきたし、汗臭さも気になる。無意識のうちに首筋を掻きながら、ここに水の入った桶を持つてくることはできないだろうかと考える。外で水を浴びることができないのなら、せめて布を濡らして全身を拭きたい。

そんなことを悶々と考えていたら、「野村くん、そろそろ稽古場へ行こうか」と近藤の声がした。

「昼飯の後は出かけなくてはならんから、その前に紹介しておきたい」

「はい」

利恵を従えて廊下を歩き始めた近藤が、ふと立ち止まって振り向いた。

「ちなみにだな、年齢は17ということにしておくから」

「えっ。わたしが17ですか？ そんな無茶な……」

17歳ならまだしも、7歳もサバを読むなんて。利恵は女子高

生に扮した自分の姿を想像した。

（かなりムリがある……）

「大丈夫だろう。お前は肌の色艶もいいし、17で十分通るぞ」
豪快に笑う近藤を見て、利恵は顔をひきつらせながら訪ねた。

「なんで17なんですか」

「小姓つてのは、せいぜい16くらいまでなのだよ。しかしたった1歳の差とはいえ、16というのはさすがにムリがあるように思っ
てな。剣は使えるのか？ そうか、まったくか。では怪我が治つたら、形だけでも鍛錬してもらうことにしよう。まあ、ほかにもいろいろ詰めんとならんところはあるが、その辺はあとで書面にまとめて渡すから、不自然のないようにな。とりあえず今日のところはオレに任せてくれ」

「剣の稽古ですか。剣なんてまったく分からないんですけど……」
「なあに。永倉辺りに稽古をつけてもらえば、それなりに様になるさ」

話しがどんどんややこしくなっていく。土方の身の回りの世話だけしていれば良いのだろうと思っていた理恵は、負のループにはまり込み、ぐるぐる回りながら落ちていくような錯覚を覚えた。

稽古場に着くと、激しい打ち合いの音、掛け声が聞こえてきた。

「では入ろうか」

促されるまま中に入ると、熱く蒸された空気が押し寄せ、強烈な汗の匂いが鼻をつく。

近藤の姿を認めると、隊士たちは稽古を止めて挨拶をした。その中に土方と原田の姿を見つけて、利恵は軽く会釈する。土方は無反応だったが、原田は小さく頷いて挨拶を返してくれた。

「さて、今日は新しい隊士を紹介しようと思っ
てな」

隊士たちは一斉に近藤の前に並んだ。

「野村利三郎くん
だ。土方の義姉の遠縁に当たる人物で、美濃からやってきた。歳は17だが、剣が使えるのでな。しばらく土方の

小姓をしながら稽古することになった。ただ、今は怪我をしているから、稽古をつけるのは治ってからだな」

隊士の注目を一気に浴びて、利恵は緊張で体がこわばる。

（ばれるって。女だって絶対ばれるってば）

冷や汗が背中をつたい、包帯にしみこんでいく。

「では、野村はこれで帰っていいぞ。そうだな、島田、お前が連れて帰ってくれんか。オレはもう少しここに残って稽古を見ていく」
声をかけられた男が、前に進み出てきた。この時代の平均身長は小さいのだと思っていたが、この男はかなり大きく、180センチ近くはありそうだ。

「いや、島田は稽古を続けてもらう。奥沢、お前が行け」

土方が言うと、島田は驚いたような様子でその場に留まった。

「同じ美濃出身だから、話しが合うかと思ったのに」

島田がそうつぶやくと、近藤は慌てた様子で土方を見る。利恵の身元をすっかり作りこんでいないのに、わざわざ同郷で、しかも監察方の島田に預けようとしたことに気づいたのだ。

「そ、そうだな。島田には新人の稽古をつけてもらわんと。これはオレがすっかりしていた。では奥沢、よろしく頼んだぞ」

手ぬぐいで首筋の汗をぬぐいながら、奥沢と呼ばれた男が前に出てくる。

「奥沢栄助です。では、屯所までお送りしましょう」

なんで状況を知らない人に任せると、利恵は不思議に思っ
て近藤をチラリと見た。

近藤は先ほどの動揺が抜けないようで、少しそわそわしている。
土方のほうに目をやると、利恵の表情を読もうとしているかのよう
に、こちらをジッと見ていた。

（まあいいか）

利恵は奥沢のあとについて、稽古場を後にした。

「剣が使えるとは……ただ苦手なのか？ それとも握ったこと
もないのか？」

奥沢が振り返って尋ねてきた。

「まあ……、握ったこともないというか……」

子供の頃、祭りの出店でプラスチックの刀なら買ったことがあるけど。利恵は心の中でつぶやいた。

「珍しいな。そんな奴がここに入るなんて」

「まあ、いろいろありまして……。それにしても、稽古場は暑いですね」

ボロが出るのは困ると思い、話を切り替えてみた。

「ああ、そうだな。たまに、のぼせて倒れる者もいるよ」

「日が落ちると涼しいのに、昼間は暑いですよ」

そう言って、利恵はアゴに滴る汗を手で払った。奥沢は手ぬぐいを首に巻き、手で顔を仰ぐ。

「もうすぐ彼岸だから、それまでの辛抱だ。少しは涼しくなるだろう」

暑さ寒さも彼岸まで。祖母がよく言っていたセリフだ。現代ではあまり当てはまらないが、この時代は彼岸を過ぎるとすでに秋の気配が漂うのだろう。

「ところで、怪我をしているとか。見たところ、背をかばっているように見えるが」

少し考え事をしている間に、また質問された。

「ええ、かなり強く打ってしまったんです。ついでに頭にも瘤ができていますよ」

瘤の辺りを指で指し示すと、奥沢は手を乗せてきた。

「痛！」

「おお、悪い、悪い。そんなに痛いのか。それにしても、でかい瘤だなあ。背中と頭を同時に打つなんて、階段から転げ落ちでもしたのか？」

「ええ、まあ、そんなところでしょうか……」

言いよどむ様子を見て、派手に転んだ自分の間抜けさを恥ずかしがっていると取ったのだろう。奥沢はそれ以上何も言わなかった。

「それにしても、土方さんの小姓か。頑張れよ。遠縁だから、多少は手加減してくれるだろうが」

独り言のようにつぶやく奥沢に、利恵は苦笑いを浮かべて答える。
「それはないと思いますよ。逆に、他の人に対するより厳しいんじゃないかと」

「そうか。それでは野村の健闘を祈るよ」

奥沢が苦笑いを返したとき、二人の前にスツと山崎が現れた。

「あとはわたしが。奥沢さんは稽古に戻ってください」

気配を感じなかったので、二人は驚いて言葉を失ったが、奥沢は慣れているのか、すぐに気を取り直した。

「ではオレは戻るよ。野村、早く怪我が治るといいな。稽古が始まったら、もつとひどい怪我をするかもしれんが」

そう言つて笑顔を向けると、手ぬぐいを首元から外し、顔を拭きながら稽古場へ戻つていった。

言つていいこと、悪いことを取捨選択しなくてはいけない緊張感はあるものの、こちらをまったく疑っていない人と話すのは気楽でいいな、と利恵は思った。質問だつて、世間話の一環として当然聞かれるようなことばかりだ。名残惜しげに奥沢の後姿を見ている利恵に、山崎は部屋に戻るよう促した。

体を拭くための手ぬぐいと水の入った桶が欲しいと理恵が言つと、山崎は二つ返事で井戸まで連れていつてくれた。いそいそと桶を持つて部屋に入る利恵の背中に、山崎が声をかける。

「拭き終わつたら教えてください。ついでに背中の中を塗りなおしますから」

袖を外して帯の部分まで脱ぎ、包帯を外す。それほどきつく巻かれていたわけではなかったが、暑い中コルセットをつけているような雰囲気だったので、心地よい開放感に満たされた。

手ぬぐいを濡らし、顔、首筋、腕、胸と拭いていったが、背中はどうしてもうまく拭けない。一番べとつきが気になるところなのに、

腫れているところに当たると痛いので、全体をゴシゴシこすれないのだ。仕方ないので、一度手ぬぐいを洗い、裾をはだけて太ももからつま先まで拭いていく。

先ほどよりはずいぶんさっぱりしたのだが、締め切った部屋の中はほとんど気温が上昇しており、拭いた傍から汗が流れていく。不毛な作業をしているようにも思えた。

着物を軽く直して山崎に声をかけると、薬箱を持って静かに入ってきた。

どうせまた包帯を巻きなおすのだから、横になる必要はないかと思いい、座ったまま背を向ける。

以前、祖母が好きでよく見ていた「遠山の金さん」のように、腕を襟から出して上半身をさらけ出した。恥ずかしいのは変わらないが、どちらにしても薬を塗るなら脱がなくてはいけないし。現代でも医者の前ではそれほど恥ずかしさは感じなかったのだから、山崎を医者と思えばいいのだ。

山崎が薬を塗ろうと軟膏を取り出したとき、利恵はついでに頼んでみることにした。

「塗る前に、てぬぐいで軽く背中を拭いていただけると助かります。自分ではうまく拭けなくて……」

一瞬躊躇する様子を感じて、（図々しかったかな）と少し後悔する。

しかし山崎は桶にかけてあった手ぬぐいを取り、腫れを避けて丁寧に拭き始めた。

「すみません、どうにも気持ち悪くって」

「いえ」

一言だけ返し、山崎は黙々と背中を拭き続けている。

「背中はどうな感じですか？」

沈黙がなんだかつらくなって、利恵は尋ねてみた。

「背中の色が、ずいぶん濃くなってきました。しばらくは不愉快な感じは残るでしょうが、明日が過ぎれば痛みはずいぶん減ると思

います」

「そうですか。ということは、明後日から稽古を始めるのかなあ」
稽古場の様子を思い出し、利恵はため息をついた。

「剣なんて、どうやって使ったらいいのか分からないのに」
というか、使いたくもない。

「それに、まだ信用されているわけじゃないんだろうし。そんな人に、稽古つけちゃっていいのかな」

少し間をあけて、山崎が答えた。

「上腕はしっかりしているようなので、竹刀を振る程度なら差し支えないかもしれませんが……。稽古をつけてもらったところで、まったくの素人が二日や三日で身に付けることはできません。何より、本人にやる気がないなら、上達はしませんよ」

「そうでしょうね……」

利恵は自分の腕を眺め、そんなにこついかな……。と力瘤を作ってみた。中学から大学までテニスをしていたし、高校時代は全国大会に出場したほどだったので（ただし入賞はしなかった）、確かに腕力はあるはずだ。

でも、テニスと剣は違う。

「女の割りには、体もけっこうしっかりしていますね。体術かなにか身に付けているのですか？」

「体術って……。ああ、空手とかそういうことかしら。いえ、やったことないですよ」

漢字に直して「庭球」と言ったところで通じるはずもないので、何をやっていたかと聞かれても答えようがない。あ、そういえば……。

「でも泳ぎなら得意です」

小・中学ではクロールで学校代表に選ばれた。こちらは都大会止まりだったが。

「泳ぎですか……。海女かなにか？」

「いえ、それともちよつと違うんですが……。まあ、似たような

ものですね。たぶん、それで鍛えられたのかも」

「そうですか。……それではそろそろ薬を塗りますね」

山崎の言葉に小さく頷く。言葉が通じないのはこんなに疲れるものかと思い、利恵は深いため息をついた。

迎合2

稽古場に行った以外は何もやることなく、食事も自室で一人で行うことになり、昼食は山崎が運んできてくれた。相変わらず質素な内容だったが、動いていないし暑いので食欲がないため、別にそれでも構わなかった。

背中が痛んだが、あまりに退屈なので、布団を縁側に運んで日に当てたり、古い手ぬぐいをもらって拭き掃除などをして過ごす。それでも自分の部屋だけだとあつという間に終わってしまい、ぼんやりと外の風景を眺めていた。

山崎は近くにいるものの、特に話しかけてくる様子はない。とにかく何かやるのが欲しいと思い、試しに聞いてみることにした。

「わたしにできることがあれば、お手伝いしたいんですけど。時間を持て余してしまつて……」

「そうですか。では」

山崎に案内されたのは、炊事場だった。

「夕飯の支度を手伝っていただきましょう。今回はわたしが当番だったんですが、見張りもしなくてはいけないので、他の者に代わってもらつつもりでした」

「えーと……。あの、わたし、味噌汁くらいしか作れないかも……」

山崎はひどく驚いたようで、一瞬唖然とした表情を浮かべた。

「それでは味噌汁をお願いします。こちらの鍋を使ってください。差し出された鍋は、とても大きかった。小鍋で3人分までしか作ったことがない利恵は、鍋をつかんだままその場に固まる。」

「この鍋いっぱいにするんですか？」

「そうですね」

その鍋をかまどの上に置いたはいいが、今度はかまどの使い方が

分らない。山崎に質問したところ、また驚いたようだ。ほとんど表情を見せない山崎がこれほど驚きを表すのだから、この時代ではよほど珍しいことなのだろう。

かまどの使い方が分かったところで、床に置かれていた野菜籠を物色する。たまねぎ、人参、いんげん、じゃがいも、ほうれん草、かぼちゃが入っていた。

たまねぎとじゃがいもの味噌汁にしてみるか。そう考えて手を伸ばしかけたが、そこでふと考え直す。あの量を作るとしたら、たまねぎを切り終わる頃にはまぶたが赤く腫れるほど涙が出るだろうし、じゃがいもの皮むきだって大変だ。怪我が治るまで、負担のかからないものを作ろうと思い、ほうれん草に手を伸ばす。

しかし「それはおひたしにしようと思っていたのですが」と山崎に止められた。

仕方ないので、今度はいんげんを取り上げ、洗い桶の中に入れる。「だしは何で取ってますか？」と聞くと、何かこつ木切れのようなものとかンナに似たものを渡された。

匂いから判断するに、鰹節のようだ。すでに削られてパックに入っているものしか使ったことのない利恵は、その二つを握ったまましばし考える。

（この味噌汁にちょうどいい量を削るとなると、けっこう大変そう。今朝の味噌汁がおいしくなかったのは、削るのが面倒でちょっとしか入れなかったからかも）

利恵は近くにあった踏み台に腰掛け、膝の上で削り始めた。

香ばしい匂いが辺りに漂い、CMで良く聞く「削りたての香り」とはこういうものかとぼんやり考える。意外と力が要る作業で、時々休みながら少しずつ削っていった。

湯が沸いたのを見計らって、木箱にたまった削り節を投入した。だしを出す間に、いんげんの下ごしらえをする。菜箸で大雑把に削り節を取り上げ、いんげんを入れて味噌を加えた。

味見をしては味噌の量を調整し、なんとか満足のいく味に整える。いんげんだけではあまりに寂しかったので、調理台に置いてあった豆腐も入れて完成とした。

山崎を見ると、人参を切っている。まだ4、5本は手付かずだったので、手伝おうと近寄ったとき、男が3人、炊事場に降りてきた。その中の一人が、

「すまん、遅くなった。打ち身がつらくてしばらく動けなかった」と腰をさする。

「いえ。ではじゃがいもの皮むきをお願いします」

山崎の指示に従い、3人はそれぞれじゃがいもを数個取り上げながら、ものめずらしそうな視線を利恵に送ってきた。

「お前、副長の小姓だよな。オレは馬越三郎といいます」

一人が声を掛けてくる。挨拶を返そうと向き合った利恵は、その顔を見て（キレイな人……）と見とれてしまった。少しふつくらとした頬をしたその男の肌は抜けるように白く、ぱっちりとした瞳の周りは長いまつげが縁取っている。女装すれば、利恵より女らしく見えるに違いない。

「ええ。よろしくお願いします」

山崎が横目でこちらの様子を伺っているのを感じ、慌ててほかの二人とも軽く挨拶を交わす。そして、手つかずの人参を取って皮むきを始めた。

じゃがいもの皮を器用に剥きながら、濱口と名乗った男が尋ねた。「土方さんの義姉の遠縁と言っていたが、どういういきさつで新撰組に？」

「それは……」

近藤からまだ身の上についての詳細を聞いていないので、どう答えればいいのか分からず、言いよどむ。

すると、

「野村さんには何やら事情があるようで、皆さんには伏せておきたいこともあると伺っています。必要なことがあれば、土方さんがお

話すると思いますが」

と山崎が助け船を出した。利恵は「伏せておきたい」と言うとかえって好奇心をくすぐるのではないかと思っただが、「土方」の名前を聞いただけで3人はそれ以上何も聞かなかった。

米の炊ける匂いが漂い始めたとき、ざわざわと大勢の人がこちらに向かってくる気配がした。

「ではそろそろ取り分けましょう。野村さんは飯をよそつてください」

山崎は言いながら、大量に積まれたご飯茶碗を差した。

今日は白米じゃないのか……。そう思いながら、赤っぱいご飯をよそつていく。現代では米より高い雑穀が大量に入っていた。

隊士たちがそれぞれ自分の食事を運んでいく横で、山崎はお膳に食事を乗せていく。おそらく近藤たちの分だろう。

「もし背中が大丈夫なら、これを運ぶのも手伝ってください」

山崎の言葉に頷いて、利恵は膳を1つ持ち上げた。

近藤の部屋には、すでに一同が揃っていて、膳が運ばれてくるのを待っていた。

「おや、野村くんも手伝ったのか」

近藤に声をかけられ、「はい」と答えた瞬間、敷居につまづいた。

次の膳を取りに行こうとこちらに向かっってきた山崎に、膳を差し出すような形で利恵の体が前のめりになる。

山崎は素早く膳を受け取り、脇にどいた。

利恵は万歳のような姿勢を保ったまま、その場にビタンと倒れる。

鼻を強く打ったうえ、背中に衝撃が走り、苦悶のあまり声も出せ

ずに横たわる利恵を見て、その場にいた全員が啞然としていた。

「だ……大丈夫かね、野村くん……」

鼻を押さえながら身を起こそうとしている利恵に向かって、近藤が声をかける。

「なんていうか……見事な転びっぷりだったね」

沖田が大笑いし始め、すぐ別の誰かの笑い声も続いた。原田が永倉あたりだろうと思いつつ、鼻はじんじん痛むし、涙は勝手にぼろぼろこぼれるし、背中が痛くて思うように立てないしで、利恵は何も答えることはできなかった。

「そんなに笑ってはかわいそうだよ」

そう言って助け起こしてくれたのは、山南だった。

「痛むだろう、部屋に戻って休むといい」

山崎は利恵から受け取った膳を土方の前に置き、小さく頷いた。もう手伝わなくていいということなのだろう。

「ごめんなさい。お食事が無事でよかったです」

鼻声でそれだけ言くと、利恵は山南に支えられたまま自室へ向かった。

山南は布団を敷き、利恵が横たわるのを手伝いながら、優しい笑顔浮かべた。

「怪我が治るまでは、ムリせずともいいんだよ」

「何もやることがなくて退屈だったんです。それで食事の支度を手伝ったのですが……。これを着てるとどうも動きづらくって。お騒がせして申し訳ありませんでした」

鼻の痛みがひいてくると、今度は羞恥心に襲われ、利恵の顔は真っ赤になった。

「そうですか。確かに、昨日着ていたものは動きやすそうだったからね。では袴を用意したほうがいいのかね」

「できれば……」

山南は「じゃあ、用意しよう。あとで渡すよ」と言って食事に戻っていった。

近藤の部屋の方からは、まだ笑い声が聞こえてくる。どうやら沖田の笑いのツボに見事にはまっただらしい。

あんなに激しく笑われると、よけいに恥ずかしさがつのる。いい加減収まってくれないかな、と思ったとき、山崎の声が聞こえた。

「わたしはしばらく食事を運びますから、そこでそのまま休んでいてください」

見張りがいなくなったかといって勝手に動くな、ということなのだろう。利恵は小さくため息をつく、「はい」とだけ返事した。

山崎の作業が終わる頃を見計らって、厠と井戸に行きたいと告げる。一通り自分の用事を済ませ、部屋に戻ると、また薬を塗り直された。

「さきほどはかなり痛んでいたようですが、腫れの色を見る限り、薬は今夜で終わりにしてもいいでしょう」

手ぬぐいで指についた薬をぬぐいながら山崎が説明する。

利恵は着物を直して向き直り、謝罪した。

「先ほどはすみませんでした。手伝うつもりが、あんなことになってしまって……。山崎さんが受け取ってくれたので、中身をぶちまけずに済みました。ありがとうございます」

「いえ」

いつものようにそっけない返事をして、山崎は背を向けた。その肩が、まるで笑いをこらえているかのようにかすかに震えて見えたのは、気のせいだろうか。

迎合3

「で、奥沢と一緒にいるときはどうだったのだ？」

「特に、何かを探っているような様子はなく、主に野村さんの怪我について話していました」

近藤の問いに、山崎が答えた。

巡察に出た原田を除く一同は、利恵が寝たのを確認してから、彼女の1日の行動を振り返ることにしたのだ。山崎はさらに報告を続ける。

「おかしいといえば、味噌汁しか作れないということ、かまどの使い方を知らなかったということくらいでしょうか」

「あの歳で炊事ができねえのか？ どっかの姫が落ち延びてきたのかな」

永倉が言うと、しばし全員が考え込む。

「そういえば、着物を自分で着れないから、教えてやったって原田が言ってたしなあ。今までお付きの人に手伝ってもらっていたのかな」

「いや、それはないな……。あんな姫君がいるわけねえ」

土方がつぶやくと、「だよなあ」と全員が頷く。

「どちらにしても」と土方は膝を叩いた。

「身元が分からない限りは信用ならねえ。しかもうちに女はいらん。芹沢のせいだただでさえややこしいことになってるんだ。面倒をいくつも背負うほど余裕はねえよ。とっとと追い出すに限る」

すると、先ほどやっと笑いの収まった沖田が「えー、もう少しいいじゃないか。面白いもの」とまた思い出し笑いを始めた。

「まだ1日目だし、もう少し置いてあげてもいいかもしれない。」

隊士に紹介した以上、何もさせないまま追い出してはまたあらぬ噂が立つかもしれないしね」と言った山南は、腹を抱えている沖田を見て「そういえば、先ほど躓いたのは歩きにくいからだと言ってい

たので、袴を用意してあげると約束したんだ」と付け加えた。

「お前は本当に女に弱いな。明里のことだって……」

土方が言いかけると、「明里は関係ないだろう」と柔和な山南の顔が急に険しくなった。

気まずい空気が漂い、さすがに沖田の笑いも止まる。

「野村くん自身は本当に何もわかっていないようだが、ここに現れたのには何か意味があるのかもしれない。それに山南が言うように、隊士に紹介した以上、簡単に放り出すわけにはいかないよ。しかもお前の遠縁ということにしたのだ。もうしばらく置いて様子を見ながら、今後彼女をどうするか考えるところでしょう」

近藤の言葉に、土方は舌打ちした。

「女なら、島原の遊郭にでも行けば住む場所も仕事も食うもんもある。あのくらいなら、まだ売れるだろうよ」

すると、片膝を立てて山南が噛み付いた。

「野村くんに身を売れと言っているのか。あそこに一度入ってしまつと、本人の意思では抜けられなくなる。さんざんぶちのめしておいて、さらに島原に売るのか」

「竹刀で殴つたのは一度だけだ。それだって、あの状況じゃ仕方ねえだろ。悪いとは思ってねえよ。それに、島原の何が悪い。明里だって島原でお前に会つたんだ。そうそう悪いことばかりじゃねえだろ。そもそも、屯所のことに私情を挟みすぎだ、山南」

土方が言い返し、二人のにらみ合いが再び始まると、「二人とも、いい加減にしろ」と近藤の一喝が響いた。

「山南、もう少し冷静になれ。土方、お前も極端だぞ」

おっとりしてお人よしな部分もあるが、局長として部下に慕われているのにはそれなりの理由がある。必要ならいくらでも厳しくなれる近藤の言葉に、二人は口を閉じた。

「まあ、ここは近藤さんが言う通り、様子を見るってことでいいんじゃないか。土方さんも、小姓がつけば少しは楽ができるだろうよ」

永倉が言つと、安心したように腰を下ろして山南が頷いた。普段は原田と冗談を言い合ったり、斬り合いになるとあだ名通り我武者羅に戦うが、意見は状況を冷静に把握した上で述べるのが永倉だ。

そのためみんなが彼の意見に一目置いており、通ることも多かった。

「源さん、斉藤、藤堂、お前たちは何も言わないが、何か意見はあるのか」と近藤が尋ねると、斉藤はボソツと「どちらでも構わない。任せるよ」とつぶやくように言った。藤堂も同意するように頷く。井上は「こちらに仇をなすようには見えないが、わたしは挨拶を交わしただけだからね。なんともいえないから、近藤さんに任せるよ」と微笑んだ。

「そうか、では、このまましばらく様子を見るとしよう。土方、明日から野村くんには少しずつ小姓として働いてもらうから、あまり感情的になるな。いがみ合うところをほかの隊士たちに見られたくない」

土方は不満そうに眉間に皺を寄せたが、「仕方ねえな。わかったよ」と返事をした。近藤は満足そうに頷いたあと「では今日はこれでお開きにしよう。みんな、自室に戻れ」と言つて立ち上がる。ぞろぞろと一同が出ていくのを見送りながら、ふと山崎を呼び止めた。「野村くんが小姓として働いているときは、お前は監察方に戻ってくれ。またきな臭い噂が聞こえてきた」

「承知しました」

利恵の部屋の前を通るとき、土方は障子の向こうにいる厄介者を睨んだ。かすかに齒軋りの音が聞こえてくる。

「悪い夢でも見てるのかな。土方さんに怒鳴られてる夢だったりして」

横に並んだ沖田が笑うと、土方は「バカ言つてんじゃねえ」と吐き捨てるように言つて自室に入った。

「やれやれ、もっと気楽に考えられないものかな」と言いながら、沖田は背後の山南を振り返った。

暗い表情を浮かべて何やら考え事をしていた山南は、作り笑顔を浮かべて「そうだね。でも、芹沢さんの後始末に追われているのは事実だから、神経質になるのも仕方ないのかもしれないよ」と答える。そして少し遠い眼差しを空に向け、「本当に、やっかいだからね、あの人は……」とつぶやいた。

自分が現代に戻り、編集長に一眼レフを紛失したと報告し、必死に謝罪している夢を見た利恵は、もしかして現代に戻ってきたのかもしれない、目を開けばホテルの白い天井が見えるかもしれないと期待しながら目を覚ました。が、見たのは年季が入ってところどころにシミの浮いた古い木材だった。

（なんで戻れないんだろう）と思い、両手首を目の上に乗せて深いため息をつく。

夜間に下がった気温はすでに上昇を始めており、顔が汗でべとついていることに気づき、ゆっくりと起き上がった。背中はまだ痛むが、山崎が予告したとおり、よほど大きな動きをしなければそれほど気にならない程度にはなっていた。

着替えて障子を開けると、棒を振り回している山崎の姿が目に入った。

「おはようございます。何してるんですか？」

山崎は棒を地面に突き立てて片手に持ち、手ぬぐいで額をぬぐいながら答えた。

「棒術です。眠くなったので、体を動かしていました」

昨日山崎にもらったマイ手ぬぐいとマイ桶を持ち上げ、「井戸に行きます」と言っただけで利恵は外に出た。

二人で並んで井戸へ向かうと、珍しく先客がいて顔を洗っていた。よく見ると、昨日稽古場で会った奥沢だ。

「奥沢さん、おはようございます」

利恵の言葉に、アゴから水をしたたらせながら奥沢が顔を上げた。「野村じゃないか。……どうしたんだ、その鼻。また転んだのか」

「え？」

指先で鼻の頭に触れると、ひりひりと痛む。そのまま山崎を見上げると、「すりむけて赤くなっています」と微妙に表情を歪ませて教えてくれた。

「お前、大丈夫か？ そんなんで土方さんの小姓なんて務まるのかなあ」

奥沢は心配そうに利恵の顔を覗き込んだ。

「普段はそんなに転んではかりいるわけじゃないんですよ。昨日はたまたま……」

「背中に打ち身を作って、頭にはでかい瘤、鼻も擦りむいてるときたら、言い訳しても無駄、無駄」

そう言って笑う奥沢を見て、ゆうべのことをありありと思い出す。再び赤面したが、（わたしを男だと信じて疑ってないんだな）と不思議に思う気持ちもあった。馬越の顔を思い起こすと、それも納得できるような気もしたが。

「それにしても、今日は早いんですね。昨日は井戸に誰もいなかったのに」

「ああ、今朝はなんだかいつもより暑かったからなあ。寝苦しくて、目が覚めてしまったよ」

「ほんと、暑いですよ。朝からこんなだと、昼はものすごいことになりそう」

奥沢と他愛のない世間話を交わしていたら、また数人こちらにやってくる気配がした。少し離れた場所に桶の水を巻き、「人が増えそうだから、そろそろ戻るよ」と言っ、奥沢は利恵の肩に手を置いた。

「あまりへまするんじゃないぞ」

そう言っにつこりすると、山崎にも頷いて挨拶し、去っていった。

井戸にやってきたのは5人。まだ数の少ない顔見知りは一人もいなかった。利恵も桶に水を汲んですぐ戻ることにした。なんと

なく好奇の視線を背に感じ、落ち着かないので早足に部屋へと戻る。障子を閉めようとしたとき、自分が急いだせいで山崎がまだ顔を洗っていないことに気づき、桶を差し出して手ぬぐいを濡らすように促した。

濡らした手ぬぐいで首筋を拭く山崎に、「今日から小姓の仕事を少しずつ始めるということでしたが、どうすればいいのでしょうか？」と尋ねる。

「必要があれば、土方さんが声をかけると思います。それまでは自室で待機しててください」

「わかりました」

部屋の中は、日が当たっていないぶん、少しひんやりとする。しかし障子を閉めればまた気温が上昇するだろう。分かっていたが、開けたままで体を拭くことはできない。利恵は仕方なく障子を閉め、桶に手ぬぐいを浸した。

朝食の支度ができたから、取りにいくようにと山崎に声をかけられた利恵は、眠くなったからと運動していた姿を思い出した。

「見張るなら一緒に食事を取っても構わないですよ。ここで一緒に食べませんか。そうすれば、交代が来たらすぐ布団に入れますよ」

山崎は少し考える様子を見せたが、「そうですね。では食事を取りに行きましょう」と揃って炊事場へ向かう。

そこにはすでに人だかりができており、落ち着くまで利恵は隅で目立たないように立って待っていた。

目立たないようにといてもムリな話で、通り過ぎる隊士たちは一様にジロジロと眺めていく。が、昨日調理場で会った3人は笑顔を向けてきた。手を上げて軽く挨拶してから、人が少なくなつた炊事場へ降りていく。渡されたご飯茶碗を見ると、米のなかに今度は一口大の大根が入っていた。

あとは白身魚を煮て醤油をかけたもの、じゃがいもと人参の煮物、

そして豆腐と葱の味噌汁だった。今日の担当は料理が得意なのか、とても良い香りがする。

二人で向き合って無言で食事を始めたとき、「あ、そういえば」と利恵が切り出した。

「近藤さんたちに食事を運ばなくていいんですか？」

「ゆうべは遅くまでお話していたので、皆さんまだ起きていないようです」

「近藤さんの部屋で？　へえー、知りませんでした」

「よくお休みになっていたようでしたから」

山崎の言葉に、ゆうべは部屋に戻ってすぐに睡魔に襲われたことを思い出した。体内時計がこの時代の生活習慣に合ってきたのだろうか。

「それで、ゆうべ近藤さんが言っていた芹沢さんですが……。いつかは顔を合わせることになりますよね」

利恵が恐る恐る尋ねると、山崎は少し首をかしげた。

「そうですね……。いずれは会うこともあるでしょうが、最近は稽古場にもお顔を見せませんからね。こちらを訪ねることもめつたにありませんし、しばらくはないかもしれません。気になりますか？」

「ええ、まあ……。なんだかすごい人のようですし」

「そうですね。関わらずに済めばいいのですが。ただ、こちらにはあまり興味がないようですので、目立たないようにしておけば大丈夫かと」

そのとき、開けた障子の間から、沖田が顔を覗かせた。

「あ、いいなあ。二人で食事してたんだ。俺も混ぜてよ」

「お持ちします」と山崎が立ち上がると、「いいから、いいから。そのまま続けて」と言って、さっさと立ち去る。

「そろそろ皆さん、起きる頃合かもしれませんね。急ぎましょう」と山崎が掻きこむように食べ始めたので、「でも、沖田さんが一緒に食べようって……。どうしましょう」と困り顔で利恵が訪ねる。

「野村さんはゆっくりしててください。近藤さんたちの様子を見ながら、わたしが運びますから」

利恵は「お手伝いしなくていいですか？」と言いながらゆづべの失敗を思い出し、「あ、やっぱりわたしは沖田さんの話し相手でも……」と言い直す。すると山崎の顔にまた奇妙な表情が浮かんだが、すぐに消えた。笑いをこらえているのかも……。そう思った利恵は、いつも冷静を保っている山崎の素直な表情を見てみたいような気がした。

そんなことを考えながらぼんやり見るうちに、山崎は食事を終え、茶を飲み干して立ち上がった。

迎合4

山崎と入れ違つようにやってきた沖田は、利恵の向かいに座つて食事に手を伸ばした。

「ゆうべは面白かつたよ。鼻はまだ痛む？」と利恵の顔をまともに見た瞬間、すすっていた味噌汁を噴いた。

「うわっ。何するんですか。……わたしのご飯にかかつちゃったじゃないですか。まだ半分も食べてないのに」

利恵は顔面にも飛んできた味噌汁を手ぬぐいで拭きながら、沖田を睨む。

「いや、だって。鼻の頭が……」

沖田は返事をしようとするが、笑いすぎて、それ以上話せない。そのまま腹を抱えて畳の上に倒れこみ、悶えながら笑い続けた。

「……もういいです。食欲が失せました。これは下げてください」
利恵が立ち上がると、「ごめん、ごめん」と言いながら目元の涙をぬぐい、起き上がった。

「もったいないよ、食べなよ」

「沖田さんが噴いた味噌汁がかかつちやいましたし」

「じゃあ、野村が食べた分そちに移すから、こっちの残った分を野村が食べればいいじゃないか」

「はあ……」

沖田は利恵の茶碗にご飯や煮物を少し移して交換した。

「はい、どうぞ」

「……ありがとうございます」

改めて食事をしようと箸を手にとると、「なんだ、楽しそうだな」と今度は近藤が中を覗き込んだ。

「俺の部屋に移動して、一緒に食べないか。こっちは狭いからな」
利恵は（どうせ近藤さんにも笑われる……）と内心うんざりしながら、膳を持ち上げた。

その日は誰かに会ったびに笑われた。唯一、何の反応も見せなかったのが斉藤だ。まだ3日目とはいえ、斉藤の感情らしきものは一片たりとも見ていない。こちらを見ていても、そこに利恵がいなかった。のような眼差しで、まるで自分が透明人間になっただかのように感じた。

昼過ぎの炎天下、土方の小姓初仕事として庭掃除を命じられ、暑さにぼんやりしながら竹箒で地面を撫でていたときもそうだった。屋敷から向かってくる斉藤に「お疲れ様です」と声をかけたら、ちらりと利恵の顔を見て、小さく頷いただけでスツと通り過ぎていった。沖田のように大笑いされるのはいやだが、露骨に無関心を示されるのもいやなもんだなと思いながら後姿を眺めていると、「野村くん」と呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると、山南が笑顔でこちらに向かってくる。

「これ、ゆうべ約束した袴だよ。上はこちらを着るといい。これで少しは動きやすいのではないかな」

「ありがとうございます。助かります」

「自分で着れるかい？」

「あー……。どうでしょうね……」

自信なさげな利恵の表情を見て、山南は「じゃあ教えてあげるから、自室に戻りなさい」と笑顔を浮かべた。が、利恵の背後に目をやった瞬間、その笑顔が消え、こわばる。

なんだろう……。と振り返ると、巨体が利恵の体に影を落としていた。見上げると、ごつい顔がこちらを見下ろしている。鉄でできた扇で顔に風を送っていたが、目が合うとバンと手のひらに打ち付けて閉じた。

「なんだ、このまぬけ面は。新しい隊士か」

「土方の遠縁に当たり、小姓を務めることになった野村くんです」
押し寄せる威圧感に圧倒され、相手の顔を見上げたまま固まっている利恵の代わりに、山南が紹介してくれた。

大男はふん、と鼻を鳴らすと、そのまま通り過ぎていく。その後ろに、隻眼の強面とどこか卑屈な雰囲気のある男、さらに襟をはだけた色っぽい女性が続いた。

女は利恵の横を通り過ぎるとき、後れ毛を直す振りをして身をひねり、流し目をしてきた。

（うわぁ……。キレイだけど、こういう人苦手。絶対仲良くなれないタイプ）

利恵の気持ちちがそのまま表情に出たのだろう。女は目をそらしてツンとアゴを上げ、足早に通り過ぎた。

「おお、土方。ちよつと暇ができたので、寄ってみたのだ」

「これは芹沢さん。こちらにいらつしやるとは珍しい」

いつの間にか庭に出てきた土方が、作り笑いを浮かべている。あれが芹沢……。こんな早く会うことになるとは思わなかった。利恵は無意識のうちに山南の背後に移動していた。

「あの間抜け面がお前の小姓になったと聞いたが」

土方はチラリと利恵を見たあと、すぐ笑顔を芹沢に向ける。

「まあ、遠縁のよしみで預かっただけです。確かにそそっかしいところがあつて、難儀しております」

すると芹沢は「少しは使い物になればいいな」と笑った。その後で、さっきの女が再びくねくね身をくねらせて、何やら土方にアピールしている。土方はまったく気づいていない振りをして、そちらには視線を向けなかった。

「ところで、近藤はいるか」

「今は出かけております。戻ってきましたら伝えますので、何か用事があれば俺が承ります」

「そうか……。ちよつと資金繰りのことでな。急ぎではないから、会ったら自分で話すさ」

「分かりました。ではこちらにいらしたことだけ伝えますので」
その場に居合わせた隊士たちは、芹沢の不興を買わないようにと小さくなっていたが、その後で色香を振り撒きながら歩く女にこっ

そり見とれていた。

一行が門を出ていくと、奥沢が小走りで利恵のもとにやってきた。
「いつ見てもいい女だなあ。お前、流し目されてただろう？ いいなあ」

「わたしは、これ見よがしな人は好きじゃないので……」

「贅沢な」

奥沢はお仕置きのもりか、利恵の瘤に触ろうとした。利恵は手をかざしてなんとか逃れようとがきながら、「わたしより、土方さんにくねくねしていたように思えたんですが」と矛先を変えようとする。

すると、山南が苦笑いしながら「土方くんも、あの女は嫌いみたいだよ」と言った。

「ああ、なんかそんな感じかなとは思いました。ひたすら気づいていない振りをしてましたよね」

「たぶん、芹沢さんはお梅さんを見せびらかしに來ただけじゃないかな。ゆうべは一緒だったようだね。お梅さんを見ると、隊士たちはみんな鼻の下を伸ばすから。奥沢みたいだね」

そう言つて山南は笑つたが、利恵はその表情がどこか引きつっているように感じた。なんか、ムリして笑っているような……。

「おい、野村。無駄口叩いてねえで、庭掃除を続ける」

いきなり土方の声が間近で聞こえ、驚いてそちらに向き直る。さつきまでの愛想の良さが嘘のようになり、潜め、いつも通りの不機嫌な表情に戻っていた。が、次の瞬間、微妙に口の端がヒクヒクと動き始める。

「なんだお前、その顔は。たしかに間抜けだな」

土方は意思の力でなんとか口をへの字に戻し、苦々しげに言う。
ああ、そうか。さつき呼びつけられて用事を言い渡されたとき、何かを書いていてわたしをチラリとも見なかったんだ……。土方がまともに利恵の顔を見たのは今が初めてだと気づき、利恵は舌打ちしそうになったがこらえた。擦りむいたのが鼻のてっぺんじゃなかつ

たらよかったのに……。

そのとき、山南が間に入って風呂敷包みを掲げて見せた。

「ああ、その前に、野村くんに着替えてもらってもいいかな。また転ぶ前に、袴姿になったほうがいいと思ってね」

奥沢は利恵の耳元で「頑張れよ、野村」と小さく囁き、励ますように肩をグツと掴んだあと、堪え切れないかのようにクツクツと笑いながら去っていった。

「仕方ねえな。着替えたらずくに戻れよ。と、その前に、茶も淹れてくれ」

「……分かりました」

くそがつくほど暑い日に、かまどで湯を沸かして茶を淹れるかなんて……。ほんと、あだ名通り鬼だな、と利恵は思った。

芹沢鴨の影 1

その芹沢鴨が、とんでもないことをしでかしたと連絡が入ったのは、翌日の朝だった。

「芹沢局長が、大和屋に火を放った！」

今朝も朝から気温が高く、利恵は縁側に座って水を張った桶に足を浸し、涼を取っていたところだった。その傍で濡らした手ぬぐいを使い、顔や首筋を拭いていた山崎は、その声を聞いたとたん動きを止める。張り詰めた空気が漂った瞬間、ものすごい勢いで障子が開き、土方が飛び出した。二人には目もくれず、大股で歩いていく。山崎に促されて土方の後を追うと、玄関付近にはすでに人だかりができており、その中心に土方と息を切らした隊士が立っていた。

「どうやら資金の調達を断られて激怒し、火を放ったようです。

止めようと思ったのですが、抜刀しておりまして……。局長相手では、俺にはどうすることも……」

「……くそ。昨日言ってた話つてのは、大和屋に関することだったのかもしれない。近藤さんにはお前が報告しろ。とりあえず、俺は大和屋へ向かう。山南、お前も一緒に来てくれ」

「ああ……」

山南は明らかに嫌がっていたが、土方は他の者に指示を出すのに忙しく、気づいていないようだった。

「ほかの者は屯所で待機していてくれ。大勢で押し寄せると、かえって混乱を招くことになる」

そう言っただけで土方は歩き始めたが、山南は何やら考え込んでいて、その場を動かない。

「おい、山南」

「え？ あ……。すまん、では行こうか」

慌てたように山南が土方の後を追いつき、二人で門をくぐっていった。（芹沢暗殺って、この事件がきっかけだったような……）

利恵は現代の八木家に残っていた刀傷を思い出し、小さく身震いました。

その様子に気づいた山崎が、「どうかしましたか？」と尋ねる。本当のことを言うわけにはいかないので、適当に答えた。

「昨日初めて芹沢さんにお会いしたんですけど……。想像以上に怖い人なんだなあと思って」

「なんだ、お前、芹沢さんに会ったのか？」

人ごみを掻き分けてこちらにやってきた原田が、利恵の前に立つ。

「はい。存在感がすごいというか……。圧倒されました。向こうは虫を見るような目でわたしを見てましたけどね」

「あいつは俺たち全員をそう思ってるさ。武士の出じゃねえからな」

「そうですか……」

ふと険しい表情を浮かべて原田が山崎に向き直る。

「こいつは俺が見とくから、山崎、お前はちよつと様子を見てきてくれ。土方さんたちがまずい状況になりそうだったら、すぐ加勢に駆けつけたい」

「承知しました」

門へ向かい始めた山崎の背に、「気をつけてくださいね」と声をかける。振り返った山崎は少し驚いたように目を見開いていたが、すぐに表情を戻して小さく頷いた。

「土方さんにも『気をつけて』って言ってやったか？」

二人並んで部屋へ向かう途中、原田はからかうような口調で利恵に尋ねる。

「言ってますんよ。人だからできていて近くに寄れなかったし、声をかけられるような雰囲気じゃなかったし。言ったら言ったで怒鳴られたでしょうしね」と、利恵は無然とした表情で答えた。

「だろうなあ。お、山南さんからもらったのか、その袴。似合ってるじゃねえか。男つぷりが上がったな」

「そうですか？ そりゃよかった」

「なんだよ、褒めたんだからもっと喜べよ」

「だって……」

わたしは女ですから、と言いかけたが、周囲に平隊士がいるので言葉を飲み込んだ。

「そうですね、ありがとうございます」

まったく嬉しくなさそうな口調で利恵が言うつと、原田は笑った。

「まあいいや。ところで、山崎が帰ってくるまでちょっと稽古をつけてやろうか」

利恵は驚いて原田の顔を見上げた。

「え？ 稽古？」

「芹沢さんが暴れると、よけいな恨みを買うこともあるからな。とりあえず、自分の身くらいは守れるようにしとかねえとな」

「身を守るって……。剣で？」

「他に何があるよ？」

「だから、ここで止めるって」

「止めてるつもりなんですけど……」

「腕だけ使ってるからだ。こう、腹に力を入れてだなあ……。こんな感じだ。分かったか？ ほら、もう一回やってみる」

「はあ……」

握り方から基本的な型まで習ったのだが、いくら原田が手本を見せてくれても、基本のきの字も分からないところから始めたのだからなかなか飲み込めない。

言われた通りに構えてみたのだが、やはりうまくいかなかったらしい。原田は腰に手をあて、やれやれ、と頭を振った。

「……お前、まったく才能ないのかもな……」

「自分でもそう思います……」

二人は揃って大きなため息をつく。

「これじゃ、稽古場に行っても見学しかできねえぞ」

「まあでも、わたしは身元不明で怪しいからここに置かれている

わけで、他の隊士たちの手前、『とりあえず』稽古させるって話でしたよねえ。小姓なんだし、剣を使う機会なんてそんなにないんじゃないですか？」

「そうは言ってもなあ。この間うちの副長助勤が殺されたんだけどな、素っ裸で首を打ち落とされてたんだぜ。お前だって、飯とはいえうちの所属ってことになってんだ。しかも副長の小姓だし、何があるかわからないぞ。ちよつとは腕を磨いても損はねえよ」

「首を打ち落とされ……。副長助勤っていったら、けっこう強いんじゃないですか？ だったらわたしが多量型を覚えたところで意味ないんじゃない……」

時代劇で見た首切りのシーンはいかにも人形の頭で現実味はなかったし、現代でも残忍な猟奇事件をたまにニュースで見聞きしたことはあるが、自分の身に振るかかるとはならない、別世界の話だと思っていた。しかし、この時代では「天誅」と称して頻繁にそのような事件があつたことを思い出し、しかも利恵はその近くに身を置いているのだとあらためて実感した。

「まあ、やらねえよりはましだろ。……おい、そんなに怯えんなよ。今にも卒倒しそうな顔してるじゃねえか」

呆れ顔で原田が言ったとき、スツと山崎が現れた。

「芹沢さんは30名余りの隊士を連れ、火を消そうとする奴は誰であっても迷わず斬ると言っています。副長お二人が何を言っても耳を貸しません。近藤さんもあとからお二人に合流しましたが、状況はまったく変わらず。といってもほとんど燃やし尽くされたあとで火は消えかかっており、こちらにできることは何もないため、とりあえず皆さんは戻られるそうです」

山崎の報告を聞いた原田は舌打ちし、苦々しげにつぶやいた。

「ったく。これでまた壬生浪士組の評判はがた落ちだな。俺らの評判が悪いのは、ほとんどあいつのせいだぜ。あの酒乱野郎、訳の分からんことばかりしやがって」

「名目は、大和屋が輸出用の糸を買い占め、不要に物価を高騰さ

せて民の生活を脅かしたから、退治するということのようです」

「ふうーん。まあ、あそこはあまり評判はよくなかったからなあ。だからといって、燃やし尽くしてどうするってんだ。余計に生系が少なくなるだろう」

「それは取っておいたんじゃないですか？」

利恵が口を挟むと、山崎は首を振った。

「何一つ残っていません」

「名目と行動が矛盾してますね」

「名目は名目であって、結局はあれだろ？金をくれなかったから頭に来て燃やしただけだろ？どちらにしても、あいつの行動は理解できん」

廊下に足音が響いたので、そちらを見ると、難しい顔をした井上がこちらにやってくる場所だった。

「ああ、ここにいたのか。原田、ちょっと来てくれ。近藤さんたちが戻ってきた」

「わかった。じゃ、またあとでな。山崎、なんか用事ができるまで、こいつに基本的な型を教えてやってくれ」

「はい」

二人が去ると、山崎は原田から受け取った木刀を軽く振ってから構えた。

「では、わたしが手本をお見せしますので、同じように構えてくださいね」

それから一通り型を教えた山崎は、原田のように文句は言わなかったものの、あまりに飲み込みの悪い利恵に疲れた表情を見せた。

芹沢鴨の影 2

「それで、どうするよ？」

近藤の報告を受けたあと、原田が発した言葉に、そこにいる全員が黙り込んだ。奥座敷に集まったのは、近藤、土方、永倉、井上、原田、藤堂、山南の7名。いつもは何かと声を上げる沖田と、よほどのことがない限り沈黙を保つ斉藤の両極端な二人は今、巡察に出ている。

「まあ、大和屋も京の人々には嫌われていたからな。思っていたより、こちらの評判には影響しないかもしれんが……。それでもやはり……」

近藤が言葉を切ったとき、どたと誰かがこちらに駆けてくる音が響く。

「お話中、失礼します。会津藩の使いの方が今、到着いたしました」

「ここに通せ」

再びどたと足音が去る音を聞きながら、井上が疲れた表情を見せた。

「もう松平様のお耳に入ったようですな。これからどうなることやら……」

「今回はいくらなんでも見逃してもらえないかもしれないぜ」

永倉が言うと、再び沈黙が訪れた。

今度は静かな足音が二つ障子の向こうで止まり、使者が中に通された。近藤の前にあぐらを組んで座ると、「用件は分かっていると思うが……。今回の焼き討ちの件で、松平様がお話があるとのこと。すぐ私とともに参られたし」と重々しい口調で告げた。

近藤はため息をついて立ち上がる。

「承知しました。ではすぐ支度をいたしますので、しばしお待ちを」

近藤、土方、山南、原田がそれぞれ支度をしていると、斉藤と沖田が巡察から戻ってきた。沖田も一緒に合図藩主のもとへ向かうことになり、井上と永倉は巡察、山崎は近藤に所用を言い渡されて出かけていった。

必然的に利恵は斉藤に預けられた。再び桶に足を突っ込んでぼんやり庭を眺めている利恵と、自分の世界に浸って刀に粉を打つ斉藤の間に重苦しい沈黙だけが漂っている。

「あの……」

このイヤな雰囲気を打破すべく、思い切って利恵は声をかけた。

「なんだ」

視線は刀に置いたまま、そっけなく斉藤が答える。

「斉藤さんで、おいくつなんですか？」

「20になった」

「ええええ」

この時代はまだ数え歳だったろうから、現代でいくとまだ19ということになる。まるで世捨て人のような雰囲気を持つ斉藤は、自分より年上だと勝手に勘違いしていた。利恵が驚愕のあまり叫ぶと、斉藤はうるさそうに少し眉をひそめたが、無言のままだ。

「じゃあ、沖田さんは？」

「この間22になったはずだ」

「ええええ？ 沖田さんのほうが歳上なんですか」

すると斉藤が初めて利恵と目を合わせた。

「そんなに不思議か」

「いえ、なんとなく、沖田さんが一番年下なのかと……。勘違いしてました。すみません」

「別に謝るようなことではない」

つぶやくように答えると、斉藤は再び刀に目を向けて粉を打ち始める。

沖田はえくぼが浮かぶ童顔と天真爛漫な性格もあって、まだ18

かそこらだと思っていた。斉藤は少なくとも25以上だと……。資料を見たとき、それぞれの特徴は読んだものの、誕生日までは把握していなかった。というより、その段階では誕生日は必要なかった。目に入っても覚えようとしなかったかもしれない。ほかの人の歳も聞いてみたかったが、利恵と斉藤の間には再び分厚い壁ができあがっていた。

しばらくして刀の手入れを終えると、斉藤はおもむろに立ち上がって鞆に収めた。

「ちよつと出かけてくる。お前はここにいといるといい」

「え、ちよつと待つてください。わたしを置いて出かけちゃって平気なんですか？」

利恵を見張るのが今の斉藤の仕事ではないのだろうか。その仕事を簡単に放ってしまったていいのだろうか。斉藤と過ごす時間は耐え難く、一人になれるのは嬉しい。しかし仕事人間と言われたこともある一社会人として、簡単に仕事を放り出そうとすることへの驚きが大きく、つい聞いてしまった。

「行くあてがないのだから、お前は逃げない。それなら一人にしておいても平気だろう」

「いや、でも……。怒られるんじゃないですか？」

「構わない。お前がここに残っていれば何の問題もないわけだから」

それ以上何も言わず、斉藤はスタスタと去っていく。利恵は縁側に座ったまま、ただ呆然と斉藤の後ろ姿を眺めていた。

斉藤がいなくなると、（一人きりになったのはここに来て初めてかも……）と気づいた。

部屋で一人で過ごしていても、障子の向こうには山崎がいたし、山崎がいなくても代わりの誰か、または近藤か土方が隣の部屋にいた。

そんなことを考えながらぼんやりしていたら、蚊に刺されていたすねを無意識に掻いてしまった。おかげでどんどん耐え難い痒みに変わっていく。

（今は誰もいないから大丈夫だよね……）

部屋に戻ってポーチを開くと、ラベンダーの精油が入った小瓶を取り出す。一滴指に取って擦りこんだあと、その小瓶を宙にかざして中身を確かめた。まだ3分の2は残っている。

（これとペパーミントを入れて体を拭けば、多少は汗臭さが消えるかな）

今はやることもないので、桶を持って井戸に向かった。玄関のほうはもう静かになっている。隊士たちはみんな稽古場にいるのだろう。この機会に屯所の外を見てみたい気もしたが、門には誰か立っているだろうし、みんな芹沢のことでカリカリしているから、下手に動かないほうがいい。

部屋に戻って水にラベンダーとペパーミントの精油を落とすと、すっきりとした香りが部屋に広がる。胸や手足を一通り拭くと、手ぬぐいを縦に持ち、勢い良く上下に動かして背中をゴシゴシこすった。この部屋には鏡がないので背中を確認することはできないが、指で押さなければ痛みを感じない程度にはなっている。

最後に、一番気になっていた頭を洗うことにした。頭皮はべとついているし、猛烈に痒い。あせももできているようで、早く洗い流さないと悪化しそうだ。

畳が濡れないようにと縁側に移動し、てぬぐいを首に巻くと、正座して頭を桶に突っ込んだ。

（気持ちいい……）

指で頭皮を軽くマッサージする。心なしか体の熱も下がっていくようで心地よく、頭を突っ込んだまま、今度は仰向けに寝転んだ。

セミの鳴く声が辺りに響いている。空をゆっくり流れる雲を眺めるうち、なんだかまぶたが重くなってきた、（少しだけ……）と利恵は目を閉じた。

「何してるんですか？」

急に頭上で声がした。目を開けると、井上が覗き込んでいる。驚いて顔を上げようとしたが、硬い縁側で寝ていたせいで節々が痛くなっていたし、水を含んだ髪も重くて動けなかった。

「頭が痒くて洗っていたんですけど、心地よすぎて寝てしまいました」

体を反転してうつぶせになると、膝立ちになり、髪を絞っててぬぐいを巻く。

「良い香りがするね。お香のような……。あとは薄荷かな」

「そうですね。頭の臭いが気になったので、使ってみました。あ、もともと持ってた袋に入ってたんですよ」

「ああ、あの不思議なものが入ってる袋か」

「はい……」

説明するのが面倒だから人がいないときに使ったのに……と後悔したが、意外にも井上はそれ以上聞いてこなかった。

「斉藤はどこにいるのかな」

「どこかへでかけてしまいました」

「野村くんを置いて？」

「ええ……」

頷く利恵を見て、井上は苦笑した。

「大方、刀でも見にいったんだろう。一人にするなんて、ずいぶん早く信用されたもんだね」

それは絶対にはずかしいと思ひ、利恵はあやふやな笑みを浮かべる。

「あ、そういうえば、斉藤さんって若いんですね。沖田さんより年下だと聞いて驚きました。なんていうか……落ち着いているから」とすると井上は驚いたようだ。

「斉藤くんと世間話をしたのかい？ これまた珍しいことだ」

あれが世間話といえるのかと利恵は首をひねったが、一瞬とはいえ初めて目を合わせてくれたのは確かだ。「そうなんですか？」と

言いながら、斉藤の無表情な顔を思い浮かべる。

「年齢といえば、井上さんはおいくつなんですか？」

「35だよ」

その後も年齢についての会話が続き、近藤が29、土方28、山南33、原田23、永倉24、藤堂19ということがわかった。そして斉藤の年齢を聞いたときと同じくらい驚いたのが、山崎が近藤と同じ29歳だったこと。原田と同じくらいだと思っていた。

「山崎さんて、かなり若く見えますね」

「そうかい？ あの落ち着きは年齢相応だと思うがね」

「近藤さんは局長っていうのもあって、落ち着いている印象はあります……。土方さんもほとんど一緒なんですよねぇ……」

利恵は疑わしげな口調で言う。

「野村くんは今の土方しか知らないだろうが……。もともとぶっきらぼうなところはあったが、歳も以前は子供の相手も良くする優しい奴だったんだよ。あんなにすぐ怒らなかったしね」

「そうなんですか」

手ぬぐいを外し、指で髪をときほぐしながら、昔の話しをするときは名前で呼ぶんだなとぼんやり考えた。そういえば、資料を集めていたときは新撰組全盛期を中心に調べていたから、人に関する情報もその頃のものしか読んでいなかった。以前は優しかったと言われても想像はできないが、壬生浪士組に参加したことで何かが変わっていったのだろう。

「そうだ、きみにお土産を買ってきたんだよ。団子は好きかい？」

井上はそういつて傍らにあった包みを取り上げた。

「わたしにお土産？ 本当に？」

わざわざ自分のために買ってきてくれるなんて、と利恵は感激しながら包みの中を覗く。

「あ、餡子だ。おいしそう。じゃ、お茶を淹れてきますので、少し待っててくださいね」

「水でいいよ。暑いしね」

「はい」

利恵はいそいそと湯のみを取りに炊事場へ向かった。

芹沢鴨の影3

難しい顔をした近藤たちが戻ってきたのは、その日の夕刻だった。会津藩での話しを報告したいと近藤に呼び出され、井上は奥座敷に向かった。

その少し前に帰ってきていた山崎が井上と交代し、利恵と共に夕飯を取りに行く。昨日の朝食と一緒に取ってから、向かい合って食べるのが恒例のようになっていた。

「明日の朝飯はわたしが当番ですから、また手伝っていただきましょうか。かなり早くに起きなくてはいいかもしれませんが、そのときになったら声をかけます」

利恵は「はい」と答えたが、山崎の少し疲れたような顔を見て、言葉を続ける。

「そういえば、今朝は寝てないんじゃないですか？ 芹沢さんのこともあつたし、その後は用事でどこかへ行っていたし。大丈夫ですか？ 少し顔色悪いですよ」

「慣れていきますから、ご心配なく」

それでも心配そうに顔色を伺う利恵に気づくと、「大丈夫ですよ、本当に」と小さく微笑む。そういわれてもあまり納得はできなかったが、しつこく聞くのもどうかと思い、利恵は口を閉じることにした。

しばらく二人は黙々と箸を口に運んでいたが、ふと山崎が尋ねた。

「それで、わたしがいない間、何かありましたか？」

「ああ、そういえば、いきなり斉藤さんが一人でどこかに行っちゃって……」

利恵は午後起きた出来事を話し、山崎は時折頷きながら静かに耳を傾けていた。

奥座敷には、相変わらず重苦しい空気が漂っていた。出かけてま

だ帰ってこない斉藤と、巡察のあと私用で出かけた永倉を除く面々が一様に腕を組み、宙を睨んでいる。

「朝廷にも話しは及んでいるようだし、いずれ捕縛の沙汰が下されるやもしれん」

近藤が唸るように言うと、土方が口を開いた。

「捕縛ということになれば、俺たちにとつてかなりの痛手になる。芹沢はあれでも局長だ。自分たちの局長を捕縛して朝廷に差し出すなんざ、自分の顔にわざわざ泥を塗りつけるようなもんだぜ」

「松平様のお考えはどのような？」

井上が聞くと、「それがだな、要領を得んだ。なんだか遠まわしな言葉ばかり使っていてな、何が言いたいのか……」と近藤が困り顔で答えた。

すると、ずっと黙り込んでいた山南が大きなため息をついた。

「もし朝廷より捕縛の命が下されたら、肅清せよということでしょう」

驚いた近藤は、目をむいて山南を凝視した。

「これまでのところ、局長に腹を切らせるのにふさわしい理由は思い当たらない。だから、捕縛という形になると思われるが……。壬生浪士組は、仮にも会津藩お預かり。その局長が捕縛されては、俺たちだけでなく、会津藩にも落ち度があつたということになる。また、これ以上揉め事を起こされてその処理に手一杯になつていては、不貞浪士の取締りどころではなくなるしね。それで、内々に処理するようにと考えられたのだろう」

「といつてもなあ、俺たちが肅清したと知れば、水戸藩出身の奴らは黙つちやいねえだろうよ」

原田が言うと、再び土方が口を挟む。

「俺に考えがある。すぐにはいかねえが、時期を見て決行に移そう。話を知る者が多いといくら口が堅くてもどこかで綻びが出るだろうから、今ここにいる者だけの話とする。原田、永倉にも絶対と言ふなよ」

「永倉も外すのか？ …… わかったよ」

原田は釈然としないものを感じたが、反論を許さない厳しい土方の目を見て、渋々頷いた。

「近藤さん、それでいいか」

土方が言つと、「松平様のご意向が肅清ならば、仕方ないな」と近藤は頷いた。

話しはこれで終わりだと近藤が立ち上がりかけたとき、「あ、そういえば」と井上が声を上げた。

「斉藤が、野村くんを一人にして出かけてしまったんだ」

「なんだと！ そんな大事なことはもっと早く言ってくれよ、井上さん。で、野村は？」

土方が勢い込んで尋ねると、井上は苦笑しながら答えた。

「桶に頭を突っ込んで寝ていたよ。だからまあ、急いで言う必要もないと思つてね」

「……」

さすがの土方も拍子抜けしたらしく、ぽかんと口を開けたまま井上を見つめている。

「なんだよ、それ。やっぱり面白いよね、野村は。なんで桶に頭を突っ込んでたんだろう」

沖田が声を上げて笑つと、「頭を洗ううち、気持ちが悪くて寝てしまったそうだよ」と井上が説明した。

山南と近藤も「いやあ、それは見てみたかったなあ」と破顔し、利恵の姿を想像した原田も笑い始める。しかし、利恵とあまり接したことのない藤堂は、何がおかしいのかと不思議そうな表情を浮かべて沖田を見ていた。

「つたく、これだから斉藤は……」

気を取り直した土方は、苦々しげにつぶやいた。

大和屋焼き討ち事件の事後処理のほか、何やらまた別件の事件も起きているようで、近藤や土方たちは毎日慌しく動き回っている。

忙しさのあまり利恵に関わる暇はないらしく、それから4日の間は小姓としての用事はあまりなかった。そのため、山崎が調理を担当するときは手伝い、時折剣の稽古をつけてもらうほかはのんびり過ごしていた。それでもやはり、両親や仕事のことを思い出すたび、なんとか戻れないものかと焦燥感に狩られる。しかし良い案など思い浮かぶはずもなく、もどかしい思いに胸が苦しくなることも多々あった。

食事の支度を手伝うたび、顔見知りの隊士が増えていく。彼らに「早く稽古場に顔を出せよ」といわれるが、依然基本さえ身に付いていないため、「まだまだ皆さんと手合わせできるほどの腕ではないので」と苦笑いを返していた。

芹沢が放火したあの日、斉藤に置き去りにされても逃げずにいたせいか、見張りも少し緩くなったようだ。利恵が眠れば山崎も布団に入って良いことになったらしい。寝不足で目を充血させることもなくなったので、利恵はホッとしていた。自分を見張るのが彼の仕事だから後ろめたさを感じる必要はないのだと思いつつ、どこか申し訳ないような気持ちも感じていたからだ。

もう1つ、この数日で変わったことといえば、井上が何かと利恵のもとを訪れては、世間話をするようになったことだろうか。利恵も井上は好きだったし、親戚の叔父さんと話しているような気安さを覚え、安心できる存在になっていた。

その日の昼過ぎも、井上が巡察の帰りに買ってくれたみたらし団子を頬張りながら、最近生意気な口を利くようになったという5歳の甥のいたずらについて話を聞いていた。

「それで正座をさせて兄は説教していたんだが、泰助は泣き疲れて途中で寝てしまったんだよ」

「かわいらしいですね。まだまだ小さな子供ですもん、仕方ないですよ。いつか泰助くん会ってみたいな」

「成長したら壬生浪士組に入ると言っていたから、いずれ会えると思うよ」

「……それまでわたしがここにいたらの話ですよ」

うつむきながらそうつぶやく利恵を見て、まずいことを言ってしまったかなと井上が慌てたときだった。

永倉がなにやら考え込むような表情でこちらにやってきて、「井上さん、奥座敷にきてくれ」と声をかけた。

「じゃ、また後で」と励ますような表情を浮かべて利恵の肩を叩き、井上が立ち上がる。

永倉がなにか耳打ちし、井上が真剣な表情で頷く様子を見て、また面倒なことが起きたのかなと利恵は不安を覚えた。

芹沢鴨の影 4

幕末で生活することになるとは想像もできなかったし、今となつてはどうしようもないことだが、利恵はもう少し歴史を覚えておけばよかったと後悔した。あらかじめ分かつていれば、事前に心の準備をしておける。というより、新撰組が最終的に辿る道がなんとなく分かつているからこそかもしれない。ひとつ事が起きるたび、今度は誰が死ぬのかとか、それが顔見知りの誰かだったらどうしようとか、通常の生活では考えられないような不安に囚われるのだ。そして、ここで過ごす時間が長くなればなるほど、どんどんこの時代に巻き込まれ、逃れられなくなっているような、決してもといった場所へは帰れないような、そんな漠然とした恐怖にさいなまれた。

1 本だけ残つた団子を見つめながら物思いに耽つてみると、ふと隣に人の気配を感じて顔を上げた。

「あ、山崎さん」

井上から聞いた話だが、山崎が入隊したのはつい最近のことらしい。何をやらせても器用にこなしていく山崎は、すぐに近藤のお気に入りになった。異例の早さで上役を任され、いずれは監察方の要員になるべく、そのときどきで兼務している。剣もそれなりの腕だが、どちらかというと棒術を得意としているとも聞いた。

「団子、食べますか？」

山崎が隣に座ると、利恵は包みを差し出した。

「わたしも井上さんも、2本食べたんですよ。もうおなかいっぱいだし、よかつたらどうぞ」

「わたしがいただいてもいいのですか？」

「いつもお世話になつているお礼です。といつても、これを持ってきたくれたのは井上さんですけど」

「ではありがたく」

団子を食べ始めた山崎の横顔を見ながら（才色兼備つてやつかし

ら」とふと考えた。それでも決して奢ることはなく、近藤や土方の命令に感情を挟まず忠実に従っている。これほど優秀な人材なら、活躍の場はいくらでもあっただろうと思う。

「山崎さんは、どうして壬生浪士組に入ったんですか？」

山崎が少し眉を上げると、利恵は苦笑した。

「ほかの人となんだか雰囲気が違うので、少し気になっただけです。別に話したくないならそれでいいんですけど……。以前の仕事柄、なんでもすぐ質問しちゃうんですよね。気にしないでください」
食べ終えた団子の串を包みに戻し、両肘を膝に置いて前かがみになると、山崎は自分の足元を見つめたまま話し始めた。

「父は医者ですが、長兄が跡を継ぐことになっていたので、わたしは家を出なくてはいけませんでした。兄には及びませんが、ある程度医学の知識は持っていましたし、武術もそれなりに鍛錬していたので、ここで力を活かしてみたらどうかと、すでに入隊していた従兄弟に誘われたんです」

「えっ、従兄弟の方も入隊してるんですか？」

「はい」

「なのに、わたしの見張り役なんて……。つまらないでしょうね」とすると、山崎は体を起こし、小さく笑った。

「そうでもありませんよ。むしろ、退屈しなくなりました」

「それはどういう……」

言葉の真意を量りかねて利恵が眉を寄せると、何も答えずに山崎は笑顔を浮かべた。

最近、山崎は笑顔を見せてくれるようになった。丁寧な口調は相変わらずで、井上や沖田と比べると距離は感じるが、表情を隠そうとしなくなっただけでも利恵にとって大きな進歩だった。

「まあ、いいです。見張り役が山崎さんでよかったって思ってますから」

利恵の言葉に、山崎の眉が再び上がった。

「沖田さんはふざけてばかりで疲れるし、原田さんは暇さえあれ

ばすぐ稽古つけようとするし。井上さんも優しいけど、薬のことはぜんぜん分らないって言ってたから、背中の手当もしてもらえなかっただろうし」

話の途中、「誰がふざけてばかりだって？」と男の声が割り込んだ。

見ると、沖田がこちらにやってくる。

「沖田さんに決まってるじゃないですか」

「なんだよ、それでも野村が楽しめるようにって気を使ってるのに」

「自分が楽しんでるだけじゃないですか」と言いながら、利恵はしかめ面をして見せた。

沖田も暇さえあればここにやってきて、ちょっかいを出しては利恵の反応を見て笑い転げていた。井上が「遊んではかりいなくて、たまには野村くんに稽古をつけてやったらどうかね」とたしなめると、「だって、俺は人に教えるのが苦手なんだ。野村に怪我させちゃうよ」と、やはり笑っていた。

「失敗は多いかもしれないけど……。それは屯所での生活に慣れていないせいであって、本当は沖田さんが思っているほど間抜けではないんですからね」

「ふうーん。まあ、そういうことにしておいてあげるよ。……ああ、こんな話をしている暇はないんだった。近藤さんが庭に隊士を集めている。お前たちも来てほしいってさ」

近藤の話によると、現在、長州藩が長州系の公卿とともに、天皇から攘夷親征の詔を得て幕府を潰そうと画策しているらしい。彼らが朝廷内ででっ上げた大和行幸（ ）が天皇の意向は伴っていないことを直接確認すると（かなり強引に謁見に持ち込み、確認を取ったようだ）、長州藩を天皇の詔を騙る不屈き者と見なし、京から追い出すために会津、薩摩、淀藩が協力して御所の全ての門を固めることになった。

「そこでだ」

近藤が重々しい口調で言葉を継ぐ。

「壬生浪士組も会津藩所属として参戦することになり、明日の正午、御所へ向かうことになった。各自、ぬかりなく用意しておくように」すると、一気に隊士の間に活気が満ちた。どうやら久しぶりの公務らしい。

この事件が現代でなんと呼ばれていて、どのような結果になるのか、そして死者は出るのか、利恵はまったく分らない。ただ、生まれて初めて戦という状況に身を置くことになったのだと思うと、怖くて仕方がなかった。今すぐここから立ち去りたいと思う。意気揚々と語り合う隊士の中で、利恵はひとり心細げな表情を浮かべて立ち尽くしていた。

翌日、所属するほとんどの隊士が隊服である浅黄色のだんだら羽織を身にまとい、庭に集まった。利恵はまるで時代劇の撮影所に迷い込んだような錯覚に陥り、彼らはこれから出陣していくのだという現実味がなかなか沸かない。屯所で待機することになった山崎は、利恵と並んで、興奮を押さえきれずにそわそわしている面々を眺めている。

「野村、お前も早く出陣できるよう、腕を磨けよ」

誇らしげな表情を浮かべた奥沢が、二人の目の前に立った。利恵はあやふやな笑みを浮かべて頷いたが、「怪我しないように気をつけてくださいね」と言って表情を曇らせた。

「何言ってるんだ。刀傷は武士の誇りだぞ」

そう言っただけで奥沢の背後から現れたのは、原田だった。

「見ろ、俺の腹を」

隊服を開いた原田の腹には、横一文字の傷跡が残っていた。

「何言ってるんだよ、酒の席で短気起こして腹切っただけのくせに。しかも死に損ねただろ？」

原田の横で、永倉が笑う。

冗談を言い合っている二人をぼんやり見ながら、どうしてみんなそんなに嬉しそうなんだろう、と利恵は思った。刀傷が誇りだなんて、理解できない。まして、人を斬るかもしれないというのに、緊張するどころか誰もが嬉々としている。何事に対しても無関心に見えるあの斉藤でさえ、期待に目を輝かせていた。

「まあ、心配すんな。その辺の武士と名乗ってる柔な連中より、俺たちのほうがずいぶん腕は立つんだぜ」と、隊服を直しながら原田が笑う。「しかも、俺の腹は金物の味を知ってるんだからな」

「そうでしょうけど……」

利恵が言いかけたときだった。

「揃ったか」

大きな声が響き、隊士たちが慌てたように二手に分かれた。その間から巨体が現れる。芹沢とその側近たちだった。自分のために開かれた道を悠々と歩き、近藤のもとへと進んでいく。あれほど大きな騒ぎを起こしたのに、一片たりとも気にしていない様子だ。

局長二人が並ぶと、隊士たちは一斉に整列した。その様子を満足げに見渡した芹沢は、近藤に確認を取ることもなく、いきなり「では、出陣だ」と声を張り上げた。近藤はチラリと芹沢を見たものの、何も言わず、同意を示すかのように頷いた。

芹沢の言葉を合図に、赤地に白い文字で「誠」と染め抜かれた旗が上がる。再び隊士が二手に別れて近藤と芹沢を通すと、土方、山南、芹沢の側近が後に続いて門に向かう。さらに原田、井上、沖田たち組長がそれぞれの部隊を率い、総勢約50名の壬生浪士組は門を出ていった。

芹沢鴨の影4（後書き）

（ ） 大和国の神武天皇陵および春日大社で攘夷を祈願。さらに攘夷親征（天皇みずからが攘夷のための戦に参加すること）の軍議を行い、伊勢神宮まで参宮すること。そうすれば、攘夷を決行に移さない幕府を倒す口実になるため。

芹沢鴨の影5

一行が警備から帰ってきたのは、翌日の夕方だった。長州がやってきたときはすでに御所は鉄壁のごとく固められ、突破は不可能だと諦めた彼らは七公卿を警護しながら帰郷した。今回は刀を交えることもなく、みんな無事に帰ってきたので、利恵はホッと胸を撫で下ろした。

警護事態は無事に終わったものの、壬生浪士組に関わる騒ぎはあった。蛤御門に到着し、御所内の警備を行おうと門をくぐろうとしたとき、壬生浪士組を知らない会津藩士が、彼らを不審者と見なし「ここは通せない」と拒否したのだ。近藤が説明してもまったく耳を貸さず、困り果てていたところへ登場したのが芹沢鴨。あの鉄扇で藩士が持つ槍先をはじき、恫喝したというのだ。あまりの勢いに慌てて一人が中に戻り、奉行や公家を呼んだ。彼らが藩士に壬生浪士組について説明し、「大変申し訳なかった」と芹沢たちに謝罪したことで、その場は収拾できたらしい。

そこまで利恵に話して聞かせた原田は、「たまにはあの短気も役に立つんだな」と言って笑っていた。

戦は回避されたので、隊士たちが期待していたような武功を挙げることができなかったが、役目を無事に終えた達成感があったようだ。彼らなりの打ち上げなのか、時間がある者は島原へ行くと行って出かけ、屯所はいつもより人が少なかった。

「土方さんの許しが出たら、野村もいくか？」と奥沢に声を掛けられたが、許しが出ても女のわたくしが島原で楽しめるはずはないと思い、「用事がまだ残っているから。奥沢さんは存分に楽しんでね」と手を振る。その横を原田、永倉、土方、藤堂、山南が順に通り過ぎ、少し遅れて斉藤も続いた。

「俺らも存分に楽しんでくるぜ」と、原田が豪快に笑う。
「今日は門限ないって聞きましたし、どうぞごゆっくり」

原田に追いついた斉藤は、こちらをちらりとも見ずに門へ向かった。

「なんなら、野村くんも来るかい？ 島原は別に芸伎遊びだけじゃないんだよ。料理と酒だけでも楽しめばいい」と、今度は山南が誘ってきた。

「今日は遠慮します。なんか体がだるくって……」と利恵が苦笑いすると、「なんだ？ 夏風邪か？」と永倉が尋ねる。

「いえ、ちよっと暑さに当てられただけだと思います。休めば大丈夫ですよ」

「そうか。じゃあ、俺たちは行ってくるわ」

原田は早く行きたくて仕方がないようだ。永倉の肩に腕を回すと、さっさと門をくぐっていった。

土方はチラリと利恵の顔を見ただけで、何も言わずに二人の後を追う。

残る二人も歩き始めたが、山南がふと立ち止まり、利恵の顔を覗き込んだ。

「風呂に入りたがっていたと山崎から聞いたよ。俺の馴染みの芸伎に頼めば入れるかもしれないから、今度行くときは土方に頼んで外出の許しをもらってあげよう。……しかし、本当に大丈夫かい？

顔が赤いようだか……」

そついいながら利恵の額に手を当てた。

「ひどく熱いじゃないか。早く中に入って横になりなさい」

「はい。では、山南さんと藤堂さんも、楽しんできてくださいね」

熱があるといわれたとたん、少し前から感じていた悪寒がひどくなってきた。関節も痛い。

（39度は行ってるかな……。この時代には体温計だってないんだもんなあ）

足を一步前に出すのもつらくて、立ち止まって息をつく。

「おい、どうしたんだよ。顔が赤いじゃないか」

視線を上げると、沖田が目の前に立ち、利恵の顔を覗き込んでい

た。

「ちよつと熱があるだけです。せつかくの機会なんですから、早く島原に行ってください。もう皆さん行っちゃいましたよ」

「少し遅れたって、あそこなら頼めばすぐ料理は出てくるからさ。とりあえず、部屋まで連れてってやるよ」

利恵は断ろうとしたが、体が思うように動かないので、沖田の言葉に甘えることにした。肩を貸してもらい、引きずられるように部屋へ向かう。玄関を通ったところで、沖田の肩にぶら下がる利恵に気づいた山崎がやってきた。

「どうしたのですか？」

「熱があるみたいです。一人で歩けないみたいだから、連れてきたんだよ」

山崎は利恵の腕と膝の下に腕を回し、抱き上げた。

「ではわたしが引き受けますので、お出かけください」

「じゃあ、頼むよ」

沖田を少し見送ったあと、山崎は利恵の部屋へ向かう。利恵の顔をよく見ると、確かに真っ赤だし、呼吸も早くて苦しそうだ。布団に横にすると、うつすら目を開けたが、視点が定まっていな。まぶたを上げているのもつらいとばかりに、すぐ目を閉じた。

熱がこもらないようにと利恵を肌襦袢姿にしたあと、山崎は井戸で水を汲んだ。数枚用意した手ぬぐいをひたし、軽く絞って利恵の額に乗せるが、すぐ熱くなる。額の手ぬぐいをまめに交換する一方、頬と首筋に滲む汗を拭いては時折頭を持ち上げてやり、水を飲ませた。

単調な作業を何度も繰り返すうち、次第に利恵の呼吸は落ち着き、深い眠りに落ちていった。

食事のあと、目に付いた芸伎を抱いて床についた土方だったが、このところ頭を悩ます諸問題が気になって落ち着かず、屯所に戻ることにした。山南は馴染みの天神（）、明里と朝まで過ごすよう

だし、ほかの面々もはめを外してまだ飲んでいようだ。すでに眠っている芸伎を起こさないようにそつと部屋を出ると、廊下に沖田が座っていた。

「なんだ、遊ばないのか」と土方が声をかけると、沖田は「だつて、つまらないんだよ。飽きちゃった。土方さんが帰るなら、俺も一緒に帰る」と答えて立ち上がった。

「お前、女はいいのか」

土方の問いに、沖田は腕を組んで宙を睨んだ。

「うーん。肌を重ねたいと思えるような人がいればよかったんだけど。……今日はいなかった」

沖田の答えを聞いて、その夜限りなんだから、相手は誰でもいいじゃないかと土方は思った。が、当の沖田はすでにスタスタと歩き始めている。

（まったく、こいつはいつまで餓鬼なんだ）と思い、土方はため息をついた。

もう22になっているというのに、女遊びより、子供と遊んでいるほうが楽しいようだ。八木家の子供が顔を出すと、「子供の相手をしてあげる」というより、同等に楽しみながら遊んでいる。最近、は野村にちよつかいを出しているのをよく見かけるが、女だからではなく、真新しい遊び相手ができて喜んでいるだけだった。

「ねえ、帰らないの？」

階段の手前で立ち止まり、沖田が尋ねる。

「おう」と答えて、土方は歩き始めた。

セミの騒々しい声に眠りを乱され、利恵は目を開いた。枕元に山崎が座っているのに気づき、驚いて身を起こす。

「あ……あれ？ わたし、あれからずっと寝てたんですか？」

「はい。ずいぶん熱が高かったのですが、落ち着いたようですね。喉が痛いとか、何か気になることは？」

山崎の言葉に、利恵は自分の額に手を当てる。

「いえ、なにも。もうぜんぜん平気です」

「……風邪ではなかったようですね」と言いながら、桶を持ち上げて山崎が立ち上がった。外に出ると、辺りに水を撒く。

「あの……。ゆうべずっと看病してくれたんですか？」

「いえ、野村さんが眠ってからは、布団に入りましたよ。様子を見にきたら、ちょうど目が覚めたところでした」

その割には、目が少し充血しているし、うつすら隈もできている。きつと一睡もしていないに違いない。縁側に移動し、「ありがとうございました。ご迷惑かけてすみません」と声をかけると、山崎は振り返り、「いえ。元気になられて良かった」と笑顔を浮かべた。

芹沢鴨の影5（後書き）

（ ） 天神・・・芸伎の位を現し、天神は太夫の次の位

芹沢鴨の影 6

そのとき、隣の部屋の障子が開いて、土方が出てきた。

「あ、おはようございます」

利恵が挨拶すると、土方は「早くねえ。もう朝飯はとづくに終わったぞ」とぶつきらばうに答えた。

「沖田からお前が熱を出したと聞いたが、起きてるところを見ると、調子は戻ったようだな」

「はい、おかげさまで。お騒がせしました」

「まったく。昼飯までは休んでいてもいいが、食ったら働けよ」

「……はい」

利恵の顔を見た土方は、噴き出しそうになったが、なんとか渋面を保った。本人はまったく気づいていないが、利恵は不満があると唇を突き出す癖があるらしい。沖田が面白がるのも分かるような気がした。

部屋に戻ろうとした土方は、ふと足を止めて「そうだ。山崎、ちよつと来てくれないか」と声をかけた。

山崎が目の前に座ると、「あいつの病気はなんだったんだ？」と尋ねる。

「病気というか……。慣れない環境でさまざまな出来事がありましたから、おそらく身心ともに限界を迎えていたのでしょう。皆さんが御所の警備に向かわれたときも、かなり心配していました。無事に帰られた姿を見て安心したとき、箍が外れたように疲れが一気に噴出したのかもしれない。このような場合は、ゆっくり休めば回復します。今朝の様子を見る限り、もう心配はないかと」

「そうか……。わかった。お前も少し休め。寝てないんじゃないか？」

「いえ、多少は寝ましたから。ご心配ありがとうございます」

「そうか？　ならいいんだが……。じゃ、もういいぞ」

部屋を出る山崎の後ろ姿を見送りながら、（さて、これから野村をどうするか……）と土方は考え込んだ。

それからしばらくは、平穏な日々が続いた。気温もかなり落ち着き、絶え間なく汗が流れ落ちるようなこともない。夜はずいぶん涼しくなり、障子を閉めていないと寒いと感じることもある。

小姓務めと剣の稽古を交互に行いながら過ごしていたある日、なかなか剣の腕が上達しない利恵に業を煮やした原田は、永倉を引っ張ってきた。

「俺は槍が得意だし、山崎は棒術だ。沖田は稽古といっても手加減できねえから頼めないし、井上さんは野村の茶飲み友達で甘いかな。ここはひとつ、お前に頼む」

「なんでだよ。稽古場から帰ってきたばかりだぜ？　疲れたよ」

「まあ、そう言っなよ。なんたって、神道無念流の免許皆伝、師範代だろ」

原田が拝んでみせると、永倉は観念したように天を仰いだ。

「仕方ねえなあ。……で、礼は何だ？」

「礼？　なんでだよ。稽古をつけてもらうのは俺じゃねえ。野村だ」

利恵は縁側に座って足をぶらぶら振りながら考え事をしていたが、二人の視線に気づいて顔を上げた。

「金を持ってないもんなあ、野村は」

「何の話ですか？」

利恵が尋ねると、原田が近寄ってきた。

「いや、永倉に稽古を付けてもらえるように頼んだら、礼はなんだと聞かれたからさ」

「お礼？　たとえば何がいいんですか？」

「そうだなあ……」

利恵が尋ねると、永倉は腕を組んで宙を睨んだが、ニヤリと笑う

と「花代！　そろそろまた島原に行こうかと思ってるんだ」と答えた。

「花代っていくらなんですか。永倉さんて、本当に島原大好きなんですね。どちらにしても、わたしは一文も持ってないです」

そのとき、土方が障子を開けて怒鳴った。

「なんだ、永倉。稽古で金を取るのか」

すると永倉は苦笑しながら手を振った。

「冗談だよ、冗談。それより、土方さんが稽古つけなければいいじゃないか。自分の小姓だろ」

永倉の言葉に、土方はふんと鼻を鳴らすと「なんで俺に小姓がついてるか知ってるか？　忙しいからだ！」と言って障子を閉めた。

利恵は腰を上げると永倉のもとへ行き、「そうでしたっけ？　わたしを小姓にするなら土方さんが一番自然だからって理由だったと思うんですけど」と小声で言つと、永倉はうんうんと首を縦に振る。

「まあ、そういうことだから、あとは頼んだ。俺は巡察に行ってくる」

原田が手を振りながら玄関へ向かうと、永倉は持っていた竹刀を利恵に渡した。

「じゃ、さつそく始めるか。え？　まだ型を習ってるのか？　先が思いやられるなあ……」

そんな弱音を吐いた永倉だが、教え方はかなりうまかった。これまでと違って、利恵の飲み込みは格段に早くなり、型も綺麗に決まっていく。原田や山崎の教え方が悪いというのではなく、やはり師範代として多くの門弟に教えてきた経験の違いだろう。

多少涼しくなったとはいえ、動けば汗が流れる。体力を奪われて利恵が息切れし始めると、永倉は竹刀を返すよう促した。

「まあ、最初はこんなもんだろ。じゃ、そろそろ今日は終わりにするか。夕飯ができる頃だ」

「はい、ありがとうございました」

「じゃあな」

永倉が去ると、利恵は縁側に腰掛けて汗をぬぐった。

（なんだ、わたしだってやればできるじゃない）と少し得意になる。

しかし、すぐ気持ちが沈んだ。

竹刀や木刀を使って技術を覚えるのは楽しいが、真剣はやはり使いたくない。

この間、御所の警護にみんなが出かけていったときも、誰かが斬られるのではないかと思うと、とても怖かった。

わたしが持つ刃物は、包丁までいい。料理はまだ苦手だけど。

肅清の開始 1

その翌日、市内の巡察を行ってほしいと大阪奉行所から依頼を受け、芹沢、土方、永倉、斉藤、芹沢派副長助勤の平山五郎、そしてそれぞれが率いる部隊が出かけていった。公務となればどちらかの局長が同行するべきだという話になったのだが、近藤は今回津藩の用事を申し付かっていたので、自動的に芹沢が大阪へ向かうことになったのだ。

一行を見送った井上の「何事もなければいいのだが……」という言葉は杞憂に終わらず、数日後に大阪から帰ってきた面々は、芹沢と土方以外一様に疲れきった顔をしていた。

旅の汚れを落とした永倉は、原田が利恵に稽古をつけているところへやってきて、縁側に腰かけると事の次第を話し始めた。

「で、その小寅って太夫が、『芸は売っても体は売らぬ』って突っぱねたんだ。そしたら芹沢さん、すげえ勢いで怒り始めて、その場で斬り捨てようとしたんだぜ。女子供を斬るなんて、武士のやることじゃねえよな。しかも、小寅には別に否はねえし。どうしようかと思つてたところへ、刀の錆にするほどの者でもないから、女の命でもある髪を切つて辱めを与えたらどうかって土方さんが持ちかけたんだ」

土方の提案に納得した芹沢は、小寅および付き添いの芸伎・お鹿の髪をそれぞれ土方と平山に切らせ、溜飲を下げたらしい。

「芹沢さんも俺と同じ神道無念流の免許皆伝・師範代だろ。その点ではけっこう話が合うし、酒さえ飲まなきゃ良いところもあるんだが……。いい加減、うんざりしたよ」

永倉の話を聞きながら、肅清の日も近いのではないかと利恵は思った。芹沢は、事件を起こすたびに自らの命を縮めていることに気づいていない。言葉は交わしたことはないし、その姿を見たのは二度だけだが、芹沢が凄惨な最後を迎えることになると思うと、怖く

て仕方がなかった。

それがきつかけになったのかどうかは分からないが、大阪から帰ってきた翌日の朝、突然玄関に張り紙が出現した。それを見た隊士たちは、言葉もなくその場に立ちつくしている。なんだろうと人ごみを掻き分けて覗いた利恵が目にしたものは、5項目の禁令だった。

一・土道に背きまじきこと

二・局を脱するを許さず

三・勝手に金策いたしべからず

四・勝手に訴訟取り扱うべからず

五・私の闘争を許さず

右の条々に背候者は切腹申付べく候也

ああ、あの有名な局中法度か……と思いながら、利恵は禁令を読んでいく。二から五は分かりやすいのだが、土道ってなんだろう。あとで誰かに聞いてみようと思ったとき、（ちよつと待て）と利恵も隊士たち同様固まった。

「局を脱するを許さず」ということは、わたしはずっとここから出られないということなのか。

いつ現代に戻るか分からないし、他に行くあてはないといっても、ここですつと男として生きていくのは嫌だ。

利恵は土方の部屋へ向かうと、「失礼します」と声をかけて中へ入った。

「なんだ、まだ返事してねえぞ。勝手に入ってくるな」と怒鳴られたが、利恵は気にせず机に向かう土方の横に座る。

「今、張り紙を見たんですが……。局を脱するを許さずって、わたしもなんですか？」

「当たり前だろ」

「そんな……。だって、前は追い出したがっていたのに」

すると、書き物をしていた土方は筆を置き、利恵と向き合って腕を組んだ。

「お前は俺たちと一緒にいすぎた。中を見すぎたんだ。今さら外へ出すわけにはいかねえ」

「でも、小姓の仕事しかしてないから、外に漏れて困るような重要なことは何も知りませんよ」

「じゃあ、行くあてでもあるのか」

「ないですけど……。でも、ずっと男として生活していくのは嫌なんです」

そして、誰かが死ぬんじゃないかと恐れるのも、自分が刀を持つことになるのも嫌だ。利恵が唇をかみ締め、硬く握ったこぶしを膝の上で震わせているのを見て、土方はまた大きなため息をついた。

「まあ、いざとなれば死んだことにして出してやる。お前を完全に信用してる訳じゃねえが、女をいつまでもここに置いて隠し通せるとは思っていないからな」

「ほんとに？」

表情が一変し、顔を輝かせる利恵を見て、土方は頷いた。

「そういうことだから、早く出ていけ」

「はい」

「なんだ、その間の抜けた返事は」と土方は唸るように言う。

「はい！」

利恵が軽い足取りで部屋を出ていき、一人になると、土方は筆を取り上げた。が、集中できずに硯へ戻す。

最近、利恵は多少怒鳴られたところでビクともしなくなった。沖田そっくりだ。あの二人を同時に相手するのだけは勘弁だ……と、畳の上に仰向けに寝転んで考える。

しかも、どんどん周りに溶け込んでいく。沖田はまだしも、源さんまで、まるで姪をかわいがるがごとくだ。山南は最初から甘かったし、近藤さんも「面白い子だ」と言っただけで目を細めている。歳の近い原田や永倉とも仲がいいみたいだし……。

「ったく。どいつもこいつも、面倒くせえ」

ボソツとつぶやくと、土方は身を起こし、もう一度筆を手にとった。

御所の警備を行ったあの出来事が、「八月十八日の政変」と呼ばれるようになったことで、利恵はやつとその日が何日なのか分かるようになった。以来、やたら日付を気にするようになっていく。

その日も「明後日は十五夜かあ。ここでも団子は作るのかな」など呑気なことを考えながら庭掃除をしていたが、周りの隊士たちが急にざわめき始めたので、何事かと顔を上げた。

近くを通った奥沢をつかまえて尋ねると、「新見さんが切腹したんだよ」という答えが返ってきた。

「新見さんって？」

奥沢の説明によると、初期は芹沢、新見、近藤の3人が局長を務めていたらしい。しかしあの芹沢さえ眉をひそめるほどの乱暴者で、民家に乗り込んで脅して金を巻き上げ、自分の懐に入れていた。

私利私欲のみで行動する新見を芹沢、近藤がともに何度も諭したが、改善しようとしないう。それでどんどん降格させられたのだが、自らを戒めるどころか、逆に自暴自棄になっていった。そしてとうとう、隊務を怠り、隊費と称してまた民家から巻き上げ、その金を使って料亭で遊んでいるところを土方たちに捕まったのだ。

新見の行動は局中法度に触れていたため、弁解の余地なくその場で切腹に至った。同じ水戸藩出身ということもあって、芹沢はなんとか助けようとしたらしいが、さすがに幹部の総意には逆らえず、引き下がったそうだ。

「最近ほとんど屯所にいなかったし、外では乱暴者でも、ここでは存在感が薄かったんだよ。薄すぎて、声を掛けられない限り誰も気づかないくらいだったんだ。だから、野村が知らないのも無理ないな」

奥沢の言葉に相槌を打ちながら、隊士たちへの見せしめとして新

見が選ばれたような気がしたし、（これも静肅の一環なのかも……）と利恵は思った。

もともと問題があつた人物とはいえ、禁令を出したタイミングがあまりに絶妙だ。土方が芹沢包囲網をどんどん狭めているような、そんな気もする。

思えば土方はつねに冷徹に物事を考え、目的を達成するためには手段を選ばなかつたと資料にあつた。柄にもなく芹沢に愛想が良かったのは、その一環だったのだろう。目的のためなら、いくらかも言葉を変え、態度を変える。

そこまで考えたとき、利恵はふと思った。

局中法度を見て利恵が押しかけたときの「いざとなったら死んだことにして出してやる」は、そのまま信じていいのだろうか。

肅清の開始2

竹箒を持ったまま利恵が鬱々と考え込んでいると、「どうしたんだよ、暗い顔して」と沖田がやってきた。

「新見さんて方が切腹したって聞いたから……」

「なんで野村が落ち込むんだよ。会ったことないだろ？」

「まあそうですね……。沖田さんは何も感じないんですか？」

同志だったんですね」

利恵が言つと、沖田は首をひねった。

「うーん。あいつ、最低なことばかりしてたしなあ。ほとんど話もしたことないし、同志って言われてもしっくりこないよ」

沖田の感覚があまりに自分とずれていて、利恵はそれ以上何も言えなくなった。話をしていなかったとしても、顔は合わせていただろうし、仮にも元局長だったのだから、何か感じてもいいのではないかと思う。

そのとき、「総司！」と5、6歳の子供が二人、こちらに駆けてきて、沖田の手を引っ張った。

「ああ、ごめんごめん。この人がボーっとしてたから、気になつてさ。さ、遊ぼうか」

沖田は二人の手をひき、ほかの隊士の邪魔にならないよう庭の隅に向かおうとしたが、子供たちは利恵の顔を興味深そうにまじまじと見たまま動かない。

「ああそうか。お前たちは野村と初めて会ったのか」

沖田が言つと、利恵はかがんで子供と顔の高さを合わせ、にっこり笑った。

「こんにちは。野村利三郎です。よろしくね」

「俺は為三郎。こっちは友達の嘉平だよ。ねえ、利三郎も一緒に遊ぼうよ。鬼ごっこは人数が多いほうが楽しいよ」

「うーん、どうしようかな。わたしはまだやらなくちゃいけない

ことがあるから」

利恵の困った顔を見て、為三郎はシュンとした。

「そつか。じゃあ仕方ないね」と子供達が立ち去ろうとすると、
「いいじゃないか。庭掃除は遊んでからでもできるよ」と沖田が利恵の袖を引っ張った。

「さぼったりしたら、土方さんに怒られちゃうし……」

「大丈夫だよ。新見さんのことで、しばらく帰ってこないから。それに為三郎は八木家の子でさ。新見さんは八木家によく行っていたから、その関係でバタバタしてて誰も相手してくれないんだってだから、この子と遊んであげても怒られないんじゃないかな」

「そうかなあ……。じゃ、ちよつとだけ」

沖田の言葉より、子供たちの懇願するような視線に根負けした利恵は、竹箒を近くにあった木に立てかけた。

「じゃあ、誰が鬼になる？」

利恵が言つと、子供たちは声を揃えて「利三郎！」と言い、歓声を上げながら駆け出した。そのあとを追いかけるように沖田も走る。

「五つ数えたら追いかけるからねー。ひとつ、ふたーつ……」

子供たちはある程度離れると、利恵が数え終わるのをウキウキしながら待っている。

「……いつーつ。いくぞー」

走り出した利恵を見て、子供たちは「きゃー」と叫びながら逃げていく。すると目の前に、沖田が現れて構えた。おそらく、利恵が触る直前でかわしてからかってやろうという魂胆なのだろう。わざと無視して横を通り過ぎると、「あつ、なんだよ！」とムキになって追いかけてきた。作戦通りだとほくそえみながら、利恵は急に振り向いて沖田の肩に手を置く。

「はい、沖田さんが鬼！」

「くそっ」

本気で悔しがる沖田を見て、利恵と子供たちは声を上げて笑った。
「すぐにつかまえるからね」

そう言って沖田が数え始めると、利恵は子供たちの手を引いて走っていく。

無邪気な子供の笑顔を見ると、心が癒されていくような気がした。

鬼から逃げながら、利恵は思う。

元いた場所に戻れないのなら、このまま時間が止まればいいのに……。

時が進むごとに、この時代はどんどん過酷なものになっていく。

それから8日後、9月18日の深夜に、とうとうその事件は起きた。

その日、島原の遊郭角屋で壬生浪士の会合が行われることになり、昼過ぎになると近藤たち幹部は出かけていった。彼らを見送った利恵は、洗濯や庭掃除など、いつもと変わらない仕事をして過ごす。日が落ち、床に着こうと部屋へ向かうと、シトシトと冷たい雨が降り始めた。

気温が急に冷たく感じられ、裸足の指先が少し凍える。

（9月ってこんなに寒かったかな）と思いながら急いで布団に入ると、足先をこすり合わせ、首元まですっぽり布団に包まって眠りについた。

その眠りを妨げたのは、「芹沢局長が殺された！」という叫び声だった。

隊士たちが慌しく動き回る音が響いている。利恵が恐る恐る縁側に出ると、隣の部屋から出てきた土方に「お前は部屋で寝てろ」と怒鳴られた。

芹沢鴨が、殺された……。

今見た土方の着衣に乱れはなく、人を殺した後のようには見えない。でも……。

大股に歩き去っていく土方の後姿を見ながら、どうして着物に皺ひとつないんだろうと利恵は思った。たった今着替えたばかりのように見える。やはり、土方が……。

そのとき、雨に冷やされた外の気温がさらに冷たく感じられ、利恵の体がブルツと震えた。腕をこすりながら、障子を閉め、布団に入る。

暗殺が、とうとう決行されたんだ……。

資料で見た暗殺決行メンバーは、土方、沖田、山南、井上、原田のうち誰かだったと思う。しかしそれも諸説あり、定かではなかったはずだ。

確かなのは、取材で八木家を見学したときに見た、鴨居の刀傷。あれは、今夜付けられたものだ。

いくら足先をこすり合わせても、ぬくもりは戻ってこない。利恵は小さく震えながら、布団の中で膝を抱えて丸くなった。

肅清の開始3

屯所の騒ぎは夜通し続いていた。芹沢を殺した犯人を捜すために屯所を出る隊士、八木家の検分から帰ってきた隊士、土方の指示を出す怒鳴り声……。

結局利恵は眠れないまま、日が昇り、部屋が明るくなっていく様子をぼんやり見ていた。いつの間にか雨は止み、簾から水滴が落ちる音が時々聞こえてくる。

（そろそろ朝食を運ぶ手伝いをしなくちゃ……）と起き上がるが、近藤たちを見ていつも通りに振舞えるだろうかと不安になり、立ち上がる気力が失せる。大きくため息をつく、もう一度布団に横になつた。

そのとき、「起きていますか？ そろそろ朝飯の支度が終わります」と山崎の声が聞こえた。

「はい。今すぐ出ます」

返事をする、利恵は急いで着替え、部屋を出た。

利恵の顔を見た山崎が、「眠れなかったのですか？」と尋ねる。

「ええ。まあ……」

「ゆうべは騒がしかったですね。……大丈夫ですか？ 今日体調が優れないから休むと土方さんに伝えましょうか」

山崎の言葉に、利恵は首を横に振った。

「いえ。大丈夫です。ゆうべは誰も寝ていないと思いますし、わたしだけ休むわけには……」

「そうですか。では参りましょう」

山崎の後ろを歩きながら、利恵は（いつも通りに、いつも通りに）と自分に言い聞かせていた。

膳を持ち、土方の部屋へ向かった利恵は、声をかけるのを一瞬ためらった。しかし、なんとか気力を振り絞ると、「朝飯をお持ちし

ました」と声をかける。土方の返事を待つて中に入ると、文机の横に置いた。

自然に振舞おうと思っても、やはり目を合わせることができない。「ゆうべは大変でしたね」と言いながら、土方の手に目を吸い寄せられた。

この手で、芹沢を……。

そのままボーっとしていると、「おい」と土方に声をかけられ、慌てて顔を上げる。

「はい？」

「茶は？」

見ると、膳に湯のみが載っていない。

「今すぐお持ちします」

そう言つて立ち上がった利恵の顔に、土方は探るような眼差しを向けた。

「お前、今日はなんか変だぞ」

「ゆうべ眠れなかったの……。では、お茶を取りにいけますね」
そそくさと部屋を出ていく利恵を見ながら、土方はいぶかった。

（なんだ、あいつ。俺と一度も目を合わせなかったぞ）

寝不足と言つていたが、だからといって俺を避ける意味が分からない、と首をひねる。

思えば、ここ数日あいつの様子はおかしかった。

いつもなら不満があると例の唇を突き出す表情をしてみせるのに、何を言つても素直だった気がする。何かあったのか。

考え込んでいると、「お茶をお持ちしました」と利恵が戻ってきた。

やはり、目を合わせない。ひたすら視線をそらそうとしている。

「なんで目をそらす」

土方が言つと、利恵は「そんなことはありませんよ」と、やっと目を合わせた。

その表情を見て、土方は思い出した。この目は、初めて会ったと

き、納屋で俺に向けたときのものと同じだ。

怯えている。……怯え？ 何に怯える？

そこまで考えたとき、土方はハツとした。暗殺の件か？ 何か知っているのか？

まさか……。俺が帰ってきたとき、こいつは熟睡していたはずだし、その証拠に齒軋りも聞こえてきた。

それならなぜ……。

「山南の様子を見てきてくれ。ゆうべから具合が悪いようだ」

一人で考えをまとめたかった土方は、そう言って利恵を部屋から追い出した。

利恵が出ていくと、土方は食事には手をつけず、宙を睨んで腕を組んだ。

知っているはずはない。ひと月かけて、慎重に事を進めてきた。

それなら何に怯えている？

御所の警備に行ったとき、あいつは誰かが傷つくのではないかと心配していたと聞いた。死を恐れているのか。それで芹沢の死、しかも殺されたという事実には怯えているのだろうか。

ではなぜ、自分と目を合わせないのか。

聞いたところで、先ほどの様子を見れば、野村が話すはずはない。

「分からねえ……」

利恵の怯えの理由はなんなのか、確かめる術をなんとか見つけなくてはいけない。

疑念は噂話と同じで、時が過ぎるほど尾ひれがつき、胸の中に大きくわだかまっていくな。最終的には、相手の一挙手一投足すべてが怪しく見えてくるのだ。そうになると、正しい判断などできなくなってしまう。

監察方の島田からは、間者が数人潜んでいると聞いている。今は、怪しい動きをしている奴が本当に間者かどうか、確認を取っているところだ。島田の口からは、利恵の名前は出ていない。

ここにきてひと月あまり。不器用なところはあるし、言い応えすることもあるが、仕事はきっちりこなす。観察眼の鋭さには土方も全面的に信用を置く山崎も、怪しいところは一切ないと断言していた。正直なところ、土方も自分たちに害をなすような奴ではないと思っていた。ただ、周囲が野村に対して必要以上に気を許しているのなら、手綱を引き締めるのは自分の役目だと思い、これまで厳しく接してきたのだ。

しかし、こうなるともう確信は持てない。

（だからここに置かねえほうがいいって言ったんだ。面倒くせえ……）

土方は食事をしようと箸を手を取ったが、宙に浮かせたまままた考え込む。

利恵への疑念が大きくなる前に、なんとかしなければ。

そのときふと思いついたことがあったが、実行に移すべきかどうか逡巡した。近藤たちに知られれば、猛反対に遭うだろう。

壬生浪士組が結成されてからの自分が鬼のようだと噂され、禁令を出したあとは「鬼の副長」とあだ名されたのも知っている。しかしそれは、近藤を盛り上げ、壬生浪士組を表舞台に立たせるためにしてきたことだ。小さな綻びが、そのすべてを崩しかねない。

土方は、その作戦を実行に移すための方法を考え始めた。

肅清の開始 4

土方の傍から離れることができたどとホツとしながら、利恵は山南の部屋へ向かう。

山南も暗殺のメンバーに入っていたと思うが、土方に感じたような恐怖はない。彼のおかげで利恵は今こうして無事に過ごせているわけだし、これまでも何かと氣を使い、優しく接してしてくれた。そんな山南を怖がることはできなかった。

「野村です」と声をかけ、返事を待つ。しかし、反応がない。いないのか……と思い、立ち去ろうとしたとき、「どうぞ。入りましたまゑ」と山南の声がした。

中に入ると、山南は布団から起き上がり、無理に微笑んでみせた。憔悴しきつた顔をしており、山崎が運んだ食事にも手をつけていない。

「野村くんも眠っていないのかい？ 疲れた顔をしているね」

山南の言葉に、利恵は頷いた。

「そうか。ゆうべは大変だったからね……」

あれだけ大騒ぎになったのだから、避けるのはかえって不自然だと思い、利恵はあえて尋ねた。

「芹沢さんがお亡くなりになったそうですね。殺されたとか」

膳から湯のみを持ち上げた山南の指がピクリと動き、ふちから茶がこぼれそうになる。

「ああ……。どうやら長州藩士の仕業のようだね。平山さんとお梅さんも亡くなっていた。あと、君は彼を良く知らないだろうが、平間さんの行方も分からなくなっている」

身をくねらせ、流し目をしてきたお梅の姿を思い出し、もう少し優しく接すればよかったと利恵は後悔した。彼女は何も罪を犯していないのだから。

「どうしてお梅さんまで……」

「芹沢さんと一緒に布団に入っていたから、巻き添えを食ったんだろ。それに、芹沢さんが倒れていたところは、八木家の子供が寝ていた部屋でね。芹沢さんの下敷きになった為八郎が、足に切り傷を負った」

「為八郎が？ 大丈夫なんですか？」

利恵は驚いて腰を浮かせた。

「ああ。しばらくは足を引きずるだろうが、命に別状はないよ」

「よかった……」

安堵して利恵が腰を下ろすと、山南は口をつけないまま湯飲みを膳に戻し、ぼんやりと壁を眺めた。

「芹沢さんは……。俺は、芹沢さんと一緒にいると、気詰まりだった。どうしてもあの人の力に飲み込まれてしまうんだ。……以前、力士と喧嘩になったことがあってね。素手なら敵わないが、斬り合いとなればやはり刀を使い慣れているこちらに分があつた。それで、俺の前にいた力士が、逃げようとしたんだよ。本当なら、斬る必要はなかったんだ」

そこまで言うと、山南は片手で両目を覆って俯いた。

「だが俺は芹沢さんの斬り捨てろという言葉聞いて、反射的に力士の背中を斬ってしまった。幸い一命は取り留めたが、二度と相撲は取れなくなつたらしい。俺は一体何をしているんだろうと思つたよ。逃げようとしている力士の背を斬るために京に来たんじゃない。それじゃ、ただの人斬りだ。……己の弱さを実感したよ。あのときだけじゃない。あの人の関わると、いつもそうだった……」

どうして今、そんな話をわたしにするんだろ……と利恵は不思議に思つた。心なしか震えている山南の体が一回り縮んだようにも見え、座つたまま膝を進めて近づいた。

「山南さん？」

声をかけると、山南は手を下ろして布団の上で強く握る。

「……だからといって、あんな死に方をしていいはずはないんだよ。平山さん、それにお梅さんも……」

そして二度、軽く咳をした。冷たい雨に濡れて、風邪をひいたのだろうか。そう思い、利恵は近くにあった羽織を山南の肩にかけてやった。

「遺体をご覧になったんですか？」

「ああ。それはひどい光景だったよ。辺りは血だらけで……」

利恵が体をこわばらせると、それを感じ取ったのか、山南は顔を上げて苦笑を浮かべた。

「……変な話を聞かせてすまなかったね。力士の件も、今まで誰にも話したことはなかったんだが……。関係のないきみに愚痴を言うなんて、やはり俺は情けない男だよ」

いつも笑顔で接してくれた山南の悲痛な面持ちを見て、利恵の胸は痛んだ。

「そんなことないですよ。わたしを助けてくれたじゃないですか。山南さんがいなかったら、今頃どうなっていたか……。わたしにとつては、とても頼もしいお方です」

山南は寂しそうな笑みを浮かべ、「そうかい？　ありがとう」と答えた。

「風邪を引いてしまったようですね。お食事が召し上がれないようでしたら、おかゆを作ってきます」

「ああ、頼むよ。……しかし、君は、味噌汁しか作れないのではありませんかったかな？」

「ここで過ごしたひと月の間に、ずいぶん上達したんですよ。おかゆくらい作れます」

利恵の言葉に、山南は小さく笑った。

「では、こちらは下げますね」と膳を持ち上げると、利恵は山南の部屋をあとにした。

「山南はどうだった？」

利恵が膳を下げて部屋へ入るとすぐ、土方が尋ねた。

「風邪をひいたようです。咳をしていましたし、食欲もありませ

んでした」

「そうか。じゃあ、芹沢さんの件が落ち着くまで、山南に付いてる。俺はやることが山ほどあって、お前の用事を考える暇はねえかな」

「はい」

相変わらず目を合わせない利恵を見ながら、（葬儀が終わったら……）と土方は考えた。

罨を仕掛けて、敵か味方が見定めてやる。たとえ周りが鬼と呼ぼうとも、それが俺の役目だ。

肅清の開始 5

9月20日に屯所で行われた芹沢の葬儀は、局長の地位に付いたものにふさわしい、盛大なものだった。

まだ体調が回復しない山南に付き添って利恵も参加したのだが、周囲では

「長州の間者による暗殺のようだ。泥酔して寝ていたとはいえ、あの芹沢さんを殺るとはなあ」

「屯所内に数人間者が潜んでいるらしいし、俺たちも気をつけないと」

など、ひそひそと噂話を交わしている。

八木家の人々も参列しており、そのなかにふくらはぎに包帯を巻いた為三郎の姿もあった。利恵と目があうと、小さく手を振ってくる。葬儀の席で笑顔を返すわけにもいけないので、利恵は片手を上げて挨拶を返した。

「為三郎、元氣そうでよかった」

そう囁くと山南も為三郎に目を向け、「本当に……」とつぶやく。あとから知った話だが、あの傲慢な芹沢も、八木家の子供には優しくかったらしい。大人が忙しくて相手にされず、寂しそうにしていると、話しかけたり、一緒に絵を描いてあげたりしていたそうだ。そんな芹沢の姿はまったく想像できなかったが、永倉の「酒さえ飲まなきゃ良いところもある」という言葉もあるし、根っからの悪人ではなかったんだろうと思う。

そして、まだ屯所の庭に置き去りにされているお梅。あんなに美しく、隊士たちの憧れのもとだったのに、死んだあとは引き取り先もなく、屯所の庭でむしろを被せられたまま放置されている。

肅清が行われたあの日、「ずっとついていなくていいよ」と山南に言われ、庭掃除をしようと外に出たときのことだった。

見慣れないむしろが庭の隅に置いてあったので、なんだろう……と深く考えもせずにくぐったところ、生気がまったく感じられない顔が利恵を見つめ返してきた。青が混じる白い肌に、乾いて赤黒く変化した血がこびりつき、半分ほどけた髪も張り付いている。

目にしたものが何なのか、脳が理解するまで時間がかかった。

お梅だと気づいた瞬間、「ひっ」と小さく叫んでその場で尻餅をつく。腰が抜け、その場から逃げようと思っても動けない。

「なにやってんだよ」と言っただけで利恵を助け起こしたのは、沖田だった。「お梅さんを見ちゃったんだ？　誰か教えてくれれば良かったのにね」

利恵の頭から血が引き、目の前の景色がちらつく。吐き気もこみ上げてきたので、沖田の手を振り解き、なんとか植木の陰まで移動すると、少し前に食べた昼飯をぜんぶ戻した。

「斬られた人を見るのは初めてなんだ？　大丈夫？」

背後に沖田が近寄ってくる。

沖田さんが斬ったんだろうか……。そう思った瞬間また吐き気を感じ、片手を上げて近づかないように制した。

「今は一人にしておいてください。……お願いします」

沖田は驚いたように目を見開いたが、尋常ではない利恵の様子を見て、素直に一步後ろへ下がる。

「為三郎を見舞いに行こうと思うんだ。一緒に行こうよ」

いつもの無邪気な笑みを浮かべて沖田が言っていると、利恵は口に手を当てて首を横に振った。

「為三郎はすごく心配なんですが……。今は気分が悪すぎて行けそうにもありません。よろしく伝えてください」

利恵の他人行儀な口調に沖田はまた驚いたようだったが、「わかった。伝えておくよ」と言い、一人で八木家へ向かった。その日から、利恵は以前のように接することができずにいる。話しかけられなくても、適当な言い訳をしてはその場をすぐ去った。

近藤が弔辞を読み上げている途中、斜め前に座る沖田が、一度こちらを振り向いた。寂しそうな表情を浮かべていたが、利恵は別の何かに気を取られた振りをして目をそらす。しかし前を向いてため息をつく沖田の姿を目の端に捉えると、急に罪悪感に囚われた。

今回の事件は利恵の心に大きな痛手を与えたが、肅清が行われるのは歴史上決まっていたことだ。会津藩主の命令に従ったと資料にあったし、それは沖田のせいではない。

思えば沖田だって、山南と同じように利恵を支えてくれた。土方に怒鳴られるとさりげなく助け舟を出してくれたし、ふざけてばかりで煩わしいと思ったこともあるが、それで気がまぎれたことが多かったのも事実だ。お梅の遺体を見て激しく動揺したからとはいえ、ひどい態度を取ってしまったと反省し、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。もう一度振り返ったら、今度は手を振ろう。そう思ったが、その後沖田は二度と振り返らなかった。

葬儀が終わって屯所へ戻る途中、なかなか体調の戻らない山南を心配し、藤堂がやってきた。二人が何やら話しこんでいるので、利恵は少し離れた場所に立ち、沖田の姿を探す。すると、八木邸の入り口付近で足を引きずる為三郎を支えながら、ニコニコ話している姿があった。

「為三郎と話してきます」と山南に声をかけ、そちらのほうへ駆けていく。沖田はすぐ利恵の姿に気づいたが、もう無視されるのは嫌だと思ったのか、自分から目を伏せた。

利恵が近づくと、為三郎の顔が輝いた。

「利三郎！ 会いたかったのに、なんで来てくれなかったの？」

「ごめんね、わたしも具合悪かったんだ。足は大丈夫？」

「すごく痛い。でも、芹沢のおじさんは死んじゃって、もう遊ぶことだってできないんだから、俺はましなんだよ」

大人の誰かに言われて、自分にそう言い聞かせているだけだろう。精一杯強がっているが、目の端に涙が滲んでいる。

「怖かったね、為三郎。傷も痛くてたまらないだろうに、泣き言も言わずよく頑張ってると思うよ。すごいね」

利恵が言くと、為三郎はぼろぼろと涙をこぼした。しゃがんで為三郎を抱きしめ、頭を撫でながら耳元で囁く。

「鬼ごっこはしばらく無理だろうけど、また遊びにおいで。土方さんがいなければ、ちよっぴりさぼっちゃうから、一緒に遊ぼう」
為三郎は袖で涙を拭き、「うん」と答えて泣き笑いを見せた。

利恵は立ち上がったもう一度為三郎の頭を撫で、沖田を振り返った。目が合うと、沖田は何も言わずに屯所へ向かって歩き出す。その背に「沖田さん」と声をかけると、探るような目をして顔半分だけ振り返った。

「今までごめんなさい。わたし、もう大丈夫だから」

そう言つて利恵が微笑むと、沖田は少し目を見開き、完全に振り返った。そのまましばらく利恵の顔を眺め回していたが、急に安心したようにクスクス笑い始める。

「なんだ、嫌われたのかと思ったよ」

「あまりふざけてばかりいると、嫌いになるかもしれませんけどね」

「じつは楽しんでるくせに」

「だから、楽しんでるのは沖田さんだけですって」

為三郎に手を振り、いつものようにふざけあいながら歩き始めた二人を見て、井上が微笑んだ。

「良かった、仲直りしたみたいだね。為三郎は怪我をするし、野村くんはこの間から口をきいてくれないしで、ひどく落ち込んでいたんだよ」

すると井上の横に立っていた土方が舌打ちし、つぶやいた。

「仲直りなんてする必要はなかったんだ……。またうるさくなるだけだしな」

新隊名・新撰組 1

お梅の遺体はもといいた茶屋に運ぼうといったん前川家へ移したが、拒否されてしまったので、八木家の庭に戻された。なかなか引き取り手が決まらないまま3日ほど放置されたのだが、少しずつ臭いも気になり始めたため、見かねた八木家が無縁仏として葬るよう手配したらしい。以来、隊士たちのお梅の名を聞くことはなくなった。それでも利恵は、お梅が置かれていた場所を目にするたび、芹沢と一緒に姿を現したときの様子を思い出している。島原の茶屋で芹沢に見初められ、愛人になったお梅。その寂しすぎる最後を思い、胸が痛んだ。

葬儀後は大きな事件もなく、平穏な日々が流れていく。葬儀までは井上や原田ともあまり接しないようにしていたのだが、二人とも利恵がお梅の遺体を目にして動揺しているせいだと思っていたらしい。沖田へのわだかまりが消えたことで、その二人に対しても少しずつ自然に振舞えるようになってきた。以前と変わらぬ生活に戻りつつあったが、土方だけは今も怖い。表向きはいつもと変わらないが、時々こちらを見透かすような目で見ており、何を考えているのかと不安を覚える。

いつもと変わらぬ仕事をこなしながら、時々空を見上げては、その先にある自分がいた時代に思いを馳せる。これ以上何かが起きる前に、なんとか帰れないものかと切に願っていた。父さんと母さんも、一人娘が消えたことでどれだけ苦しんでいることか……。毎朝、眠りから覚めるたびにホテルの天井が目に入りますようにと願いながらまぶたを開くが、叶うことはない。落胆を繰り返すうち、最近では希望より諦念が心を大きく占めている。

葬儀から数日後、藤堂は江戸にいた。表向きは芹沢暗殺に伴う新撰組への重要な言伝を任されたということになっていたが、実は「

板橋出身だ」と言った利恵の言葉を裏付けるものを捜してこいと土方に頼まれたのだ。

（捜すったって……。板橋しか分からないのに、どう捜せってんだよ）

疲れた足を引きずるように、宿場町の人ごみを掻き分けて歩く。新徴組には沖田の義兄がいるのだから、沖田に頼めばいいのに……と言ったのだが、土方は聞き入れてくれなかった。

「あいつは野村と仲がいいからな。本人に直接聞いちまうかもしれん。伏せとけといっても素直に聞き入れないだろうし、野村にもこちらが探っていることは悟られたくない。お前はあまり野村と親しくないようだから、適任なんだ」

土方の言葉を思い出し、ため息をつく。朝からウロウロし通していい加減歩くのにも飽きてきた。目についた宿に部屋を取り、旅の埃を落とす。寝る前に酒でも飲もうと宿を出て、少し歩いたときだった。酒屋の前で道に水を撒いている女を見た瞬間、その場に固まる。

（野村？）

よく似ている。しかし近づいてみると、別人だった。

（いや、でも……。似すぎだよな……）

利恵は色白だが、この女は日焼けしている。優雅に弧を描く眉は一緒だが、この女の眉尻にはほくろがある。身長は、野村のほうが高い。一番違うのは、利恵は男装しているせいもあって男っぽいが、この女には女性らしい柔らかさがあり、艶もあるということだった。

「つかぬことをお伺いしますが……」

藤堂は女に近づき、質問を始めた。

屯所に戻った藤堂は、すぐ土方のもとへ向かった。ねぎらいの言葉もなく、土方はいきなり尋ねる。

「で、どうだった？」

「野村にそっくりな女がいたんで、声をかけてみたんですよ。そ

したら姓が一緒だったんで、家族かと聞いてみたんですが、利恵なんて名前は知らないって言っていました。双子でもおかしくないくらいだったんですが、そうじゃないなら、あれは酒屋のおやじがどこかで作った庶子なんじゃないかなあ……てくらいでしたね」

「そんなに似てたのか」

「そりやもう、瓜二つ。まあ若干違いはありましたが、あんなに似てる人間がいるもんなのかと驚きましたよ」

「そうか。じゃあ、探っていることに気づかれないよう、さりげなく野村に話してみてくれないか」

「さりげなく？　どんな風に？」

「そんなの自分で考える。そのあとは、野村の反応を教えてください」
藤堂は大きなため息をつき、「はいはい、分かりました。さりげなくですね」と言って立ち上がる。

「頼んだぞ」

「分かりましたよ、副長」

面倒そうに答えながら、藤堂は井戸で洗濯をしている利恵のもとへ向かった。

こちらに向かってくる藤堂に気づき、利恵は手を止めて立ち上がった。

「お帰りなさい、藤堂さん。江戸はどうでした？」

「まあ、いつもと変わらなかったよ。芹沢さんのことは驚いてたけど。……でさ、別の用事があつて板橋のほうに行っただけど、お前そつくりの女がいたんだ。一瞬、なんでお前が江戸にいるんだって思っただくらいだったよ」

利恵は洗濯を再開しながら「そうなんですか？　へえ、それは見てみたかったなあ」と少し興味を引かれた様子で藤堂を見上げた。

「でさ、その人も野村って言っただぜ。すごい偶然だよなあ」
「え？」

もしかして、わたしのご先祖様だろうか、と利恵は思った。家系

図は気にしたことはなかったで、名前を聞いても分からないのだが、もしかすると父方の3〜4代くらい前のご先祖なのかもしれない。父と祖父は会社員だが、曾曾祖父が酒屋を営んでいたと聞いたことがある。

「女の人はいさんっていつてね。……そうか、やっぱりお前も知らないのか」

「ええ……」

父と母はここにいないし、先祖たちも利恵を知るはずもないのだが、自分の血縁がこの時代に確かに存在していることが分かり、なんとなく嬉しくなった。

「いつか江戸に行くようなことがあったら、わたしも会ってみたいなあ……」

いわし雲が広がる空を見上げ、同じ時代に生きている親戚に会えますように……と願う。会ってなにをするというわけではないが、自分の血筋を見ればこの不安も少しはまぎれるような気がした。

「最初は特に反応なかったんですけど、名前を言ったとたんに思いつめた様子で、遠い目になってましたよ」

「そうか。わかった」

土方はおもむろに立ち上がり、縁側に出る。

「じゃあ、俺はもういいですか。山南さんが心配なので」

藤堂の不服そうな表情に気づき、土方は苦笑した。

「遠くまでご苦労だったな」

やっとねぎらいの言葉をもらえたと、藤堂は少し機嫌を直す。

「ほんと、疲れましたよ。監察方の誰かに頼めばよかったのに」

「そうもいかねえんだよ。奴らには屯所内の間者を洗い出してもらつてるところだからな。それに、野村は俺の遠縁だつてことになつて。監察方で頼めるとしたら山崎しかいねえし、あいつは今、島田と一緒に動いてもらつてるしな」

「……で、目星はついたんですか？」

藤堂の問いに頷くと、土方は空を見上げながら答えた。

「ああ。だいたいのところはな。確証を得たら、すぐに動く。…
…それにしても、見事ないわし雲だな。いわし雲……秋の空……」
急にブツブツつぶやき出した土方を見て、いつもの句か……と半ば呆れながら、藤堂はその場を去った。

新隊名・新撰組1（後書き）

罨はまだ仕掛けてませんよー

新隊名・新撰組2

洗濯を終えた利恵は、山南のもとへ行き、身の回りの世話をした。葬儀の頃から咳は収まっていたが、だるいといってなかなか起き上がろうとしない。鬱ではないかと思ったが、専門知識はないので、判断しかねた。

山南を慕う沖田、藤堂は頻繁に顔を覗かせたが、ほかの面々は忙しいらしく、1日に1度顔を覗かせる程度で、その日あった出来事を簡単に報告するとすぐ去っていった。山南としてはそのほうが気が楽なようで、人が去るたびにほっとため息をついている。本当は利恵にもいてほしくないのかもしれないが、だからといって放っておくわけにはいかない。自分がやらなければ、部屋はどんどん汚れていく一方だろう。部屋の空気を入れ替え、埃を外に出し、簡単に拭き掃除を行う間、山南の発した言葉は「すまないね。ありがとう」だけだった。

その日の稽古が終わる頃、山崎が山南の部屋を訪れ、近藤が稽古場に人を集めていると伝えた。山南と利恵が屯所を出ると後ろから藤堂も追いかけてきて、疲れた様子の山南に歩調を合わせてゆっくりと歩く。

「山南さん、そろそろ明里さんに会いに行ってみたらどうですかね？　ずっと屯所で寝てるより、気分も变つて体調が良くなるんじゃないかなあ」

藤堂が言つと、山南は「そうだね。あそこまで歩いていければね」と答える。

どうやら藤堂も、山南の体調不良は精神的なものだと思っているらしい。しきりに外出を促している。そこで、利恵も加勢することにした。

「駕籠を使つたらどうでしょう？　藤堂さんと一緒に行つたらど

うですか？ 熱もないようですし、咳も収まっています。出かけても問題ないと思いますよ」

利恵が提案すると、山南は「寝てばかりいる俺が遊びに行くなんて、そんなことはできないよ」と苦笑する。

「何言ってるんですか。早く山南さんに元気になってほしいって、みんな心配してますよ。元気になるなら、明里さんに会いに行くくらい、誰も文句なんて言いません。むしろ会いに行つてほしいと思つてるはずですよ」

「野村の言う通り！ 俺もお供しますから。江戸から帰ってきたばかりだけど、明日は非番だし、駕籠を使わせてくれるなら今夜でも平気ですよ」

すると山南は下を向いてくっくつと笑い始めた。

「なんだね、君たちは。事前に申し合わせたのかい？」

明里のことを考えて、少し気分が明るくなつたのだろう。久しぶりに山南の笑顔を見たような気がして、利恵も嬉しくなる。

「だから、みんな考えてることは同じなんですって。楽しんでくださいだね、山南さん。近藤さんにはわたしからお伝えしておきます。近藤さんのお話が終わったら、すぐに向かつてくださいね」

「君たちがそれほど言うなら、その言葉に甘えるのでしょうか」

そう言つて歩き始めた山南の背筋が、少し伸びたように見えた。心持ち足取りもしっかりしている。

そんな姿を見て、利恵は（愛の力つてすごいんだなあ）と驚いた。病は気からというが、気の持ちようで治る病もある。その実例が目の前にいた。

「あ、そつだ。山南さん」

「なんだい？」

「今日は無理ですが、そのうちわたしも連れて行つてくださいね。以前おっしゃっていた湯に浸かりたいんです。最近ぐつと寒くなつてきたので、てぬぐいで体を拭くたびに鳥肌が……」

利恵がぶるつと震えて見せると、山南は「分かった。一緒に行け

るよう、土方に頼んでみるよ」と微笑んだ。

「よろしく願います」

稽古場に着くと、すでに隊士が近藤の前に整列していた。利恵たちが中に入ったのを確認すると、近藤は「さて、これで全員揃ったな」と声を張り上げる。

「政変での働きを認められ、朝廷より新撰組という隊名を賜った。よってこれより、我ら壬生浪士組は、新撰組と名を改める」

あたりで「新撰組：」とつぶやく声が広がると、新隊名が浸透するのを待つかのように、近藤は少し間を置いてから話しを続けた。

「新撰組は、かつて会津藩で特に武芸に秀でた者だけを集めた部隊に付けられた名だ。各々、名に恥じぬ働きをするように」と近藤が言葉を締めると、全員身をただし、礼をする。

「では、解散」と近藤が言っていると、「新撰組かあ。いい名だな」「壬生浪士組よりか、幕府に仕えてるって感じがするよな」など、隊士たちが一斉に会話を交わし始める。近藤は満足げに頷くと、屯所へ帰ろうと歩き始めた。

「近藤さん！」

利恵が駆け寄ると、近藤は表情を崩した。

「野村じゃないか。最近話していなかったから、ずいぶん久しぶりに会ったような気がするよ」

「近藤さんはいつもお忙しくて、ほとんど屯所にいらっしやなかったから。それより、山南さんのことなんですけど……」

利恵は山南の病状と、島原へ出かけるよう促したことをかいつまんで説明した。

「なるほどなあ。では、一日も早く回復して隊務に復帰できるよう、手を貸してやってくれ。これからは、新撰組総長にふさわしい活躍を見せてくれないとな」

「え？ 総長ですか？」

「ああ、野村は知らなかったか。山南は総長に格上げし、副長は

土方がこれまで通り務めることになったんだよ」

「それって出世したってことですよね？」

「まあ、そうだな」

「お出かけになる前にお祝いの言葉をお伝えしないと。では、失礼します」

近藤に頭を下げて挨拶し、すでに稽古場を出て駕籠を待つ山南と藤堂のもとへ駆けていく。

「山南さん、総長になられたんですね。おめでとうございます。たった今近藤さんから聞いて、驚きました」

息を切らしながら笑顔で言う利恵に向かって、山南は寂しそうな表情を浮かべ、「いや。いいんだよ。ありがとう」と返した。

（あれ？ 嬉しくないのかな……）と利恵が不思議に思ったとき、隊士が呼びに行った駕籠がちょうどやってきた。

「じゃ、行ってくるよ」と山南が乗り込み、駕籠が進み始めると、

「馬鹿」と言つて藤堂が利恵の肩を小突いた。

「痛つ。なんですか？」

「総長といえば聞こえはいいが、ほとんど事務方なんだよ。表舞台から外れるんだ、嬉しいわけねえだろ」

そう言つて、藤堂は少し遅れて到着した駕籠に乗り込む。

「え、だって……」

駕籠は動き出し、利恵はその場に一人残された。そして、誰に言うともなくつぶやく。

「知らなかったもの、そんなこと……」

せつかく元気になりかけていた山南を、わざわざ落ち込ませてしまった……。知らなかったとはいえ、申し訳ないことをしてしまつたと、悶々とした気持ちを抱えながら駕籠を見送る。

「どうしたんだい？」

声の主を振り向くと、井上が微笑みながら近づいてくるところだった。

「山南さんを見送ってたんですけど……。わたし、悪いこと言っちゃったみたいで……」

すると、井上の眉が心配そうにひそめられた。

「なにを？」

「総長に格上げされたと聞いたので、おめでとうございますって言ったんですけど……。藤堂さんに怒られちゃいました」

「ああ……」

井上は小さくなっていく駕籠を見つめた。

「まあ、仕方ないよ。それに、格上げには違いないんだ。報酬だつて上がるんだしね。事務方の仕事が大半とはいえ、今の体調ではそれより他はないだろう？ 調子が良くなれば隊務も変わってくるだろうし、野村くんが気に病むことはないよ」

利恵の脳裏にふと、「山南敬助・切腹」の文字が浮かび、胸に鋭い痛みが走った。普段は意識しないようにしているが、山南がどんな落ち込んでいく様子を見ると、どうしても思い出してしまふ。

隊名も、新撰組に変わった。幕末の嵐がどんどん近づいているような気がする。

これ以上、誰かの死を意識しながら生活していくことに、わたしの精神は耐えていけるのだろうか……。

利恵はひたすら、道の向こうに消えていく駕籠を見つめていた。

間者1

9月25日、近藤をはじめとする幹部と、監察方の島田、山崎が奥座敷に集まった。

「それで、御倉伊勢武、荒木田左馬之介、楠小十郎、松永主計、松井竜次郎、越後三郎の6名が、長州に送り込まれた間者だというのは確かなんだな」

「はい。長州藩の浪士と思われる者と、何度か接触しているところを確認いたしました」

島田が答えると、近藤は難しい顔をして宙を睨む。

「では、肅清を決行するか」

そのとき、「そういえば」と永倉が声をあげた。

「今日、荒木田たちに祇園の一力に誘われてるんだよ。どうするかな」

「お前を襲うつもりなんじゃないか？」と原田が言うと、「ううん。どうか。一力は敷居が高いから、そうそう行ける茶屋じゃねえしなあ。奢りだって言うし、行く気ではいたんだけどな」と悩んでいる様子だ。

「なら、適当な理由を作って中村も連れていけ。あいつは酒に強いし、腕もそれなりだからな。荒木田たちが何を企んでいるのか知らねえが、妙な動きをすれば間者だったのは確実になる。とりあえず、何が起きてもいいように、見張りを付けよう」

土方が言うと、永倉は頷いた。

「あそこの料理はうめえからなあ。せっかくだから、楽しませてもらおうとするか」

呑気につぶやく永倉に、「おい、油断するなよ。酒はほどほどにな」と土方は顔をしかめてみせる。

「見張りは総司、藤堂、島田、井上さんに頼む。残る者はここで待機だ。それでいいか、近藤さん？」

「ああ、異存はないよ」

相変わらず、俺より頭の回転が早いなあと内心感心しながら、近藤は深く頷いた。

明里と会って元気になったかと思われた山南だったが、屯所に戻ってくるとすぐに「体がつらいよ」といつて床についてしまった。博識な山南を近藤は今も頼りにしているが、屯所内のことはほとんど土方が仕切っているの、最近では相談する機会が減っている。今回も山南は奥座敷に呼ばれなかったため、永倉が暗殺の標的になっていることも知らずにいた。

もちろん理恵も知るはずはなく、玄関付近を掃除しているところへ永倉と中村がやってきたときには「そんなに格式高い茶屋なんですか？ 羨ましいなあ」と能天気には笑っていた。そんな理恵に永倉は「まあ、楽しんでくるさ。じゃ、行ってくるよ」と手を振ったが、その傍らで中村は硬い表情を保っている。

「中村さん、何か心配ごとでも？」と理恵が尋ねると、「いや、そんなことはないよ。ただちょっと腹の具合が良くないから、そんなにたくさん食べられないかもしれない」と苦笑を返す。

「お大事に。料理が出るまでに、調子が戻るといいですね」と言っ二人を送り出したのだが、しばらくすると今度は藤堂、島田、井上が少し緊張した面持ちで、沖田はいつも通りのにやかな表情で出かけようとしている。

「どうしたんですか？　なんか珍しい面子でお出かけなんですかね。さっきは永倉さんと中村さんが一緒だったし」と声をかけると、「みんな非番だったから、たまには一緒に外で飯でも食おうと思ってね。ただ俺たちは一力に誘われなかったから、永倉とは別行動なんだ」と井上が答えた。それならこの緊張感は何だろう……。釈然としないものを感じたが、理恵は頷いて「いつてらっしゃい」と手を振り、門をくぐって姿が見えなくなるまで井上たちの姿を見送った。

掃除を終えた理恵が山南のもとへ向かうと、斉藤が縁側に座り、刀を検分している。そんな姿を見たのは理恵の見張りをしたとき以来だったので、不思議に思い、思い切って尋ねてみた。

「珍しいですね、ここで刀の手入れをするなんて」

斉藤はうるさいとばかりに眉をひそめたが、「風が心地良いから」とぼそりとつぶやく。

返事が返ってきたことに驚愕すると同時に、先ほどの井上たちの様子を思い起こし、今日のみんなはなんだか変だと理恵はいぶかしんだ。

「先ほど井上さんたちがお出かけになったんですけど、なんだか皆さん、緊張している様子でした。今日、何かあるんですか？」

「別に」

「そうですか……」

相変わらず会話は続かないなと思いつながら去ろうとしたとき、「おい」と声をかけられてまた驚く。斉藤から声をかけてくるなんて、尋問を受けたとき以来だ。

「なんでしょう？」

「永倉に稽古をつけてもらっているのだろう？ 上達したのか？」「うーん、どうでしょうねえ。そろそろ稽古場に来ていていわれているんですけど、皆さんと対等に打ち合える自信がなくて……」

なんでそんなことを聞くんだろうと思いつながら答えると、斉藤は刀を鞘に収めて立ち上がった。

「自信がなくなるとも、やらねば身につかぬだろう。部屋から竹刀を持ってこい」

「は？ ……はい……」

斉藤の有無を言わさぬ口調に、訳もわからないまま慌てて部屋から竹刀を持ってくると、縁側から降りて差し出した。

「どうぞ」

「それで俺に打ち込んでみる」

「へ？」

口をあけたまま固まっている理恵をよそに、斉藤は鞘ごと腰から刀を抜いて構えた。

「さつさと来い。暇つぶしに相手してやる」

来いっていわれても……。理恵は竹刀を胸に抱いたまま、動けずにいた。斉藤にしては珍しくよくしゃべると思っただら、とんでもないことになっている。声をかけなきゃよかった……。と後悔し始めたとき、「早く」といらいだち混じりの口調で斉藤が促した。

「じ……じゃあ、お願いします……」

とりあえず構えてみたものの、斉藤の鋭い視線にひるんでしまい、足がすくむ。

そのとき、「珍しいな、斉藤が相手してるなんて」と声がしたので振り返ると、今度は土方が縁側に腕を組んで立っていた。

「早く打ち込め。永倉の稽古の成果を見てやる」

（うわ、最悪……。なにこのシチュエーション……）

よりによって自分もつとも苦手とする二人が、揃いも揃ってプレッシャーをかけてくる。

（ここはさつさと終わらせて、解放してもらうしかないか……）意を決し、下段から打ち込んでみると、簡単に払われた。竹刀を持つ手に衝撃が走り、顔をしかめた瞬間、鞘が突き出される。

「うわっ……え？　ちょ……痛っ」

3回連続で突き出された鞘を横に逃れたり、のけぞったりしてなんとかかわしたものの、4度目は肩にヒットした。

「なんで思い切り打つんですか」

じんじん痛む肩をさすりながら理恵が文句を言つと、「本気でやらなければ意味はないだろう」と斉藤はまったく意に介していない様子だ。

「痣になりますよ、これ。痛いな、ほんとに……」

「もう一度構えろ。避けるだけでは勝てない。当てるつもりでこい」

「ええ？　斉藤さんとわたしじゃ腕が違いすぎますよ。ぜんぜん

隙がないし……」

理恵の訴えには耳を貸さず、斉藤は無言で構える。

結局、斉藤に一度も竹刀を当てることはできず、痣が6箇所を増えた頃になってやっと、「もついい。今度は当てる練習でもしろ」と土方が声をかけた。

「ありがとうございます……。じゃ、わたしは山南さんのところへ行くので……」

斉藤に稽古をつけてもらうのは二度とごめんだ。そう思いながら、理恵はふらふらと縁側へ上がり、土方に頭を下げてその場を去った。

理恵の姿が消えると、斉藤と土方が目を合わせる。

「手を抜いているとはいえ、お前の剣を避けるとはな」

斉藤は鞘を腰に戻し、縁側に座った。

「逃げるのだけはうまい。しかし剣を持つ手がまったく動いていなかった」

「だな」

「だがもし問者の件で何か事が起こったとしても、あれだけかわすことができるのなら、放っておいても大丈夫だろう」

「まあな」

すると、傍らに立つ土方を見上げ、斉藤が尋ねた。

「何を考えている？」

「……永倉のことが気がかりなだけだ。お前こそ、珍しく饒舌だな。しかも自ら野村の稽古を買って出るとは……。問者の肅清と聞いて、血がはやっているのか」

土方の言葉に斉藤は「ふん」と鼻を鳴らして立ち上がった。

「なぜ俺を一力の見張りに送らなかった？」

今度は土方が鼻を鳴らす。

「勝手に持ち場を離れられては困るからだ」

斉藤は縁側に上ると土方の横に並んで「今回の件は、野村の見張りとはまったく違う」とつぶやくと、自室へと向かった。

間者 2

夜になっても井上たちが帰ってこないで、心配になった理恵は近藤の部屋へ向かった。

「あの、井上さんたち、今日は帰られないんですか？」

「ああ。最近はまだ大きな出来事もないからな。今のうちに羽を伸ばしてきたらいいと言ったんだ。まだ帰ってこないのなら、今日は泊まりなのかな」

近藤の言葉にも、なにかすつきりしないものを感じる。

（なんだろう、このモヤモヤ感……）

しかし理恵はそれ以上尋ねるのはやめておいた。理恵には興味があったり疑問を感じたりすると、徹底的に調べたくなる傾向がある。取材でもその性格は大いに役立っていたわけだが、ここではそうもいかない。下手に掘り下げようとすれば、なぜ情報を集めようとするのかと怪しまれるに違いないからだ。

そのため、この日は床につくまでずっと、頭の中に疑問符を浮かべたまま過ごしていた。

翌日の朝、食事の片付けが終わった頃に、永倉と中村、そして一力で合流したと思われる隊士4人が帰ってきた。

「お帰りなさ……。うわ、酒くさっ」

炊事場から永倉の姿が見えたので、出迎えに出た理恵は、思わずその場でのけぞった。

「そうか？ ゆうべは遅くまでしこたま飲んでいたからな。まだ抜けてねえんだろう」

「お水をお持ちしましょうか？」

理恵が尋ねると一同頷いたので、「少し待っていてくださいね」と言って炊事場へ戻った。

お盆に水を入れた湯のみを載せて戻ると、土方も玄関口まで来て

おり、「酒くせえ」とつぶやいている。土方の姿を見たら、腕と肩に転々と残っている青黒い痣の痛みを意識してしまった。こっそり土方の背中を睨んだところ、振り向くそぶりを見せたので、慌てて目を伏せて永倉たちに湯のみを渡す。酒の飲みすぎで喉が渴いているのか、みんな一気に飲み干した。

それぞれから湯のみを受け取る時、中村だけが酒臭くないことに気づき、「お腹の具合どうですか？ お食事取れました？」と聞くと、「いや、ほとんど食べれなかったよ」とまた苦笑が返ってきた。

「それは残念でしたね。じゃ、わたしはまだ後片付けが残っていますので」とその場を去ろうとしたとき、背後から「永倉、奥座敷に来てくれ」と土方の声がした。

（永倉さん、怒られちゃうのかな）と少し同情したものの、ちらりと振り返ってみると、永倉は特に気にする様子もなく、土方と肩を並べて奥座敷へ向かう。

（まあいいか。土方さんの口調もそんなに怖くなかったし）

まずい雰囲気だったら緩衝役として近藤を呼んでこようと思ったのだが、その必要はなさそうだ。とりあえず湯のみを片付けてしまおうと、利恵は炊事場へ戻った。

永倉が戻ってしばらくすると、昨日と同じように、井上たちが連れ立って帰ってきた。が、こちらはまったく酒の匂いがしない。しかも一睡もしていないかのように、目の下にくっきりと隈を浮き上がらせている。

「お帰りなさい」と声をかけると、いつも元気な沖田がぼんやりとした表情で「永倉さんは？」と尋ねてきた。

「土方さんに呼ばれて奥座敷に行きましたけど……」

「じゃあ、俺たちも行こうか」と井上が言くと、どんよりとした空気を漂わせながら、4人揃って奥座敷へ向かった。

（やっぱり変だよなあ……）と思いつつ、「お茶をお持ちします

か？」と声をかけると、「いや、いいよ。おそらく大事な話をして
いると思うから」と井上が答える。

（大事な話？ みんなが変なのは、その話のせいなのかな……）
気になったものの、山南に水と薬を持っていかなくてはいけない
ことを思い出した。

先日医者に来てもらったのだが、「特に気になるような症状はな
いなあ。おそらく精神的なものだろうが、とりあえずこれを飲ませ
ておけ」と粉薬を渡されたのだ。以来、朝と晩に利恵が用意してい
る。

なんだか最近は土方の小姓というより、新撰組の雑用係のように
なっているな……、と利恵は思った。しかしそのことについては、
まったく不満はない。今もまだ土方と普通に接することができない
ので、顔を合わせる機会が少ないほうが嬉しいからだった。

奥座敷には昨日と同じ顔が揃っていた。

「ずいぶん酒臭いな。どれだけ飲んだんだ？」

近藤が思い切り顔をしかめると、下戸の土方も「この匂いだけで
酔いそうだ」とぶつぶつ文句を言う。

「まあ、仕方ねえよ。あいつらを油断させようと思ったんだから
さ。そういえば、廁へ行くといって途中で抜けて、なかなか戻って
こないことがあったな。本当に廁に行つてたのかな？」

見張り役の面々に永倉が目を向けると、「ああ、松永と荒木田が
出てきて、浪士二人と話していたな」と井上が答える。

「寝込みを襲おうとしたのか、それとも出てきたところを殺ろう
としたのかはわからねえが、どちらにしてもあいつらも最後は相当
酔ってたからなあ。で、見張り役には悪いと思ったんだが、帰るの
が面倒になって泊まっちゃった。……そういえば、酒を交わしなが
らいろいろ話を聞いてみたんだが、どうも久留米藩の人間がかかわ
っているようだぜ。ほら、あの勤王派の……真木だったかな」

「ほお」

土方が感心したようにつぶやく。

「無駄に酒の匂いを撒き散らしてるわけじゃねえみたいだな」

「まあ、中村はまったく飲んでなかったし。緊張しすぎたんだろ
うな。酒も料理も手をつけないから、腹痛ってことにして隣室で休
んでもらったよ」

すると中村は「申し訳ございません」と深ぶかと頭を下げた。

「いや、いいよ。中村が素面でいてくれたから、こっちも安心して飲めたんだ。しかもお前、何か起きたらすぐ動けるようになって、ずっと刀を胸に抱いて起きてただろ？」と永倉が笑うと、中村は顔を真っ赤にして俯いた。

「まあ、そういうことだ。で、どうするんだ？」

永倉の視線を受けて、近藤が唸る。

「そうだな……。肅清は今日決行するとして、どのようにするか

……」

言いよどむと、横から土方が指示を出し始めた。

「じゃあ、斉藤は觀察方の林と組んで御倉と荒木田を頼む。越後と松井は総司、藤堂が行け。残るふたりは原田と井上さんに頼む。永倉はまだ酒が抜けてねえみたいだから、待機してる。島田と山崎はほかに怪しい動きをしていないか、真木の身边を洗ってくれ。それでいいか、近藤さん？」

「ああ、そうだな。では、抜かりなく頼んだぞ」

寝ぼけ眼だった井上たちの間に急に緊張感が走り、みんな力強く頷くと、奥座敷を出ていく。

その姿を見送りながら、近藤は心の中で小さくため息をついた。壬生浪士組になったあたりから、局長である自分を盛り立てるため、土方はあえて悪役を買って出てくれていた。鬼と呼ばれようが意に介さず、必要と思われるなら非情な指示も出す。これまで大事な局面を無事乗り越えてこれたのも、彼のおかげだといえよう。しかしそのたびに土方のほうが判断力、行動力ともに優れていることを実感し、自分が情けなく思えることも多々あった。学問や政治的

なことになると会津藩主と対等に話せるほどの知識はなく、その面では山南に頼ってばかりいる。まるで自分がただのお飾りのように思えることもあった。

土方と二人きりになると、近藤は「いつもすまん、歳。お前に頼ってばかりいる」とつぶやく。

土方は一瞬驚きの表情を浮かべたが、「何言ってるんだよ。近藤さんは局長としてどんと構えてりゃいいんだ。細かいことは俺が引き受ける」と笑った。が、すぐ表情を引き締めた。

「そんなことより、あいつらが間者を無事始末してくれることを祈ろうぜ」

「ああ、そうだな」

二人はそれきり沈黙し、それぞれの考え事にふけりながら、肅清の報告が来るのを待っていた。

間者3

朝飯の後片付けが終わった頃、荒木田たち4人が呼んだ髪結の女がやってきた。30を過ぎたくらいの少し派手なその女とは、ほぼ毎日顔を合わせている。自分は頼んだことはないが、挨拶を交わす程度には顔見知りになっていた。この日も軽く会釈を交わしてすれ違ったのだが、満のあとを追うように斉藤と林が廊下を歩いていくのを見て、（斉藤さんが誰かと一緒に歩いているなんて、珍しい……）と二人の背を見つめる。昨日から変な場面ばかり見かけているので、また何か事件がおきるのではないかと漠然とした不安に襲われた。

洗濯をしようと井戸の近くへ移動し、桶を落として水を汲んでいたときだった。

「ひいっ」と鋭い叫び声が聞こえ、何事かと立ち上がる。女性の声？　ここにいる女性といえば、自分以外はさきほど会った髪結だけだ。斉藤と林が後をつけるように歩いていくのを思い出し、（まさか……。満さんを襲ったとか？　なんで？）と混乱する。しかし心配な気持ちのほうが先に立ち、様子を見ようと平隊士たちが普段過ごしている大広間へと向かった。

すると前から越後と松井が必死の形相で走ってくる。

「何かあつたんですか？」と尋ねた瞬間、「邪魔だ！」と横へ突き飛ばされ、利恵は勢いよく尻餅をついた。

「痛い……」とつぶやきながら立ち上がるうとしたところへ、今度は抜刀した沖田と藤堂がこちらに向かってくる。二人とも利恵には目もくれず、傍らを走り抜けていった。どうやら越後たちを追っているようだ。

（何なの？　何が起きてるの？）

刀の手入れ以外では、抜刀したところは見たことがなかった。わ

わざわざ抜刀して追いかけているということは、考える間でもなくあの二人を斬るつもりなのだろう。何が起きているのか確認したいのだが、斬り合いの場に遭遇したくはない。その場に佇んだまま、沖田たちが走り去った方角をただただ見つめていた。

しばらくすると、沖田と藤堂が荒い息を吐きながら戻ってきた。刀は鞘に収められている。二人とも硬い表情で、利恵にちらりと視線を向けたものの、何も言わずに立ち去った。

（沖田さんのあんな表情、初めて見た……。越後さんと松井さんはどうなったんだろう？）

もしかすると、あの二人が間者だったのだろうか。それで肅清されたとか？ でもゆうべは永倉さんと楽しく飲んだんじゃないの？ しかも仲良く一緒に帰ってきたじゃない。

ここに突っ立っているだけではなにもわからない。とりあえず玄関にいけば誰かに話を聞けるだろうと歩き始めた。すると今度は門のところに為三郎が立っており、利恵に向かって手を振っている。ぼんやりとそちらに向かうと、「原田のおじちゃんが、追いかけてこしてるよ」と指差した。

指された方向に目をやると、原田が刀を振り回しながら、楠を追いかけていた。何度か背に当たっているようだが、そのたびに少しよろめくものの、楠は走り続けている。

ずいぶん離れているので細かいところはまったく分からず、為三郎が言うとおり、ただの鬼ごっこをしているように見えた。まるでシユールな無声映画を見ているようで、人が斬られているという現実味がない。

しかしとうとう力が尽きたのか、ふいに楠が倒れた。追いついた原田は、刀を振りかざし……。

「見ちゃ駄目」

目をそらしながら為三郎の目を両手でふさぐと、近くに立っていた門番が、「終わったようだ」と話しているのが聞こえた。

為三郎が利恵の手を振り解いて「原田のおじちゃん！」と声を上げたので、利恵も恐るおそるまぶたを開けると、上機嫌な原田が悠々とこちらに向かってくる。門に着くと「おい、あれを片付けておいてくれ」と門番に声をかけ、利恵に近づいてきた。

口の中が、いつの間にかからからに乾いていたらしい。唾を飲み込もうとしても、喉がくっつくような不快感がある。

「……なんで殺したんですか」と利恵がかすれる声で尋ねると、原田は小首をかしげた。

「なんでって、あいつが間者だったからだよ」

「間者……」

ではさつき沖田たちに追いかけていた二人も、やはり間者だったのだろう。

「為三郎、家に帰りなさい」

利恵は、為三郎の背を押す。

「えー、でも総司と遊ぼうと思ってたのに」

頬を膨らませる少年に、利恵は首を横に振った。

「今日は忙しいみたいだから、遊べないと思うよ」

「じゃあ、利三郎は？」

「ごめん。今日は無理。明日ね」

為三郎は利恵の顔を覗き込んだが、固い表情に気づいたのか、小さく頷くと「じゃ、またね」と家に向かって駆けていく。

「楠は片付いたって報告しないと。ほかの奴らはどうなったか知ってるか？」

「ほかの奴ら？ 越後さんと松井さん？」

「ああ、あとは御倉と荒木田だな。松永は井上さんが追っついていたが……」

原田は利恵を見下ろし、こわばった表情を見ると、大きなため息をついた。

「お前さ、まさか楠に同情してるんじゃないやねえよ？ それに、いちいち怯えてんじゃないやねえよ。前にも言っただと思うが、土方さんの小

姓だっただけでお前が狙われる可能性だっただけあるんだぜ？ 間者を放置しておく、俺らを殺そうと枕元に忍んでくるかもしれないし、屯所に火をつけて一気に新撰組を潰そうと画策するかもしれない。殺らなきゃ殺られるんだ」

原田は門番が聞き耳を立てていることに気づき、「片付けろって言っただろ？ 早くしろ」と声をかけ、動こうとしない利恵の肩を抱いて玄關へ向かう。

肩に置かれた原田の手には、血はついていない。追いかけているときは浅手の傷ばかりで、返り血を浴びるほど深手を負わせることがなかったのだろう。止めを刺そうと剣を振り上げた原田の姿がよみがえり、利恵はきつく目を閉じた。たった今人を殺した原田に触れられるのは嫌だと思い、身を振り解こうとしたが、さらに強くつかまれる。昨日斉藤につけられた痣に、指が食い込んで痛くてたまらない。しかし利恵は普段と違う原田の鋭い視線に射すくめられ、何も言えなかった。

「人殺しに触れるのは嫌だっただけ？ お前がどんな環境で、どんな暮らしをしてきたか知らねえが、ここで過ごす限りはそんな甘い考えは捨てることだ。たとえばあいつらの誰かが、お前を襲ったとする。殺したくないからって、お前は黙って斬られてやるのか？ 違うだろう？ 生きたきや、慣れる。分かったな？」

原田の言う通り、この時代、この場所で生きていくには必要なことなのかもしれない。でも、目の前で人が殺されるなんて状況に、慣れることなんてできない。

慣れるはずはない。

慣れたくない。

（帰りたいよ……。父さん、母さんに会いたい……）

ふいに目の奥が熱くなる。涙がこぼれないよう、利恵は空を見上げて深呼吸をした。

間者 4

「まあそういうことだから、あまり難しく考えるな」

原田は利恵から手を離すと、いつもと同じ笑顔に戻り、掴んでいた肩のあたりをポンポンと叩いてから玄関に入っていく。すれ違いうように、真っ青な顔をした満が出てきた。

（満さん、無事だったんだ。……よかった）

軽く挨拶しようとしたら、満にまるで恐ろしいものでも見るかのような視線を投げかけられた。足早に利恵の傍らを通り過ぎると、足をもつれさせながら門へと向かう。どうして自分がそんな目で見られるのか分からない。ぼんやり見送っている、ふいに大広間のほうから数人が慌しく動き回っているような物音が聞こえてきた。

利恵は玄関に上がり、大広間へ向かう。その途中、縁側に隊士が二人、膝をついているのが見えた。二人の前には、御蔵と荒木田が倒れている。大広間から隊士が二人出てきて、「とりあえず庭に運ぶか」と声をかけた。

一人が荒木田の腕の下に手を通し、もう一人が足を持って持ち上げる。その瞬間、荒木田の顔が利恵のほうを向いた。

驚いたような表情を浮かべているが、その瞳はどんよりと濁っており、すでに事切れているのがわかる。彼が横たわっていた場所には、暗い赤の水溜りができていた。荒木田の背から、水溜りに向かって血の雫が落ちる。

その隣に倒れている御蔵も持ち上げられ、その両手がだらりと力なく床へと垂れた。

今朝、わたしはこの人たちに、湯のみを渡した。
ほんの少し前まで、この人たちは生きていた。

利恵の耳の奥に、ブーンと唸るような音が響く。

「おい、野村。大丈夫か？」

大広間から出てきた奥澤が、心配そうに覗き込んでいた。その顔が、奇妙に歪んで見える。

「……だめかも……」

そうつぶやくと、奥澤の胸に倒れこむようにして意識を失った。

原田が奥座敷に入ると、憮然とした顔の近藤が睨むような目を向けた。その前には珍しく落ち込んだ表情の沖田、ふてくされた様子の藤堂、いつもと変わらぬ斉藤と、つねに淡々としている監察方の林がいた。土方は近藤の隣で、何やら考えこんでいる様子だ。

「お前はどうかだったんだ？」

畳に座ったとたんに近藤に不機嫌な口調で尋ねられ、少しむっとしながら「ああ、楠は殺ったよ」と答える。

「いくら背中を斬りつけても走り回るから、けっこう大変だったんだぜ？　ずいぶん遠くまで追いかけたが、やっと転んだところをばっさりとどめをさしてやった。清々したぜ」

そういつて笑うと、近藤は苦労をねぎらうどころか顔を真っ赤にして怒り始めた。

「ばか者！　背後から斬り付けておいて、何を嬉しそうに笑っているのだ。武士たる者……」

近藤の言葉をさえぎり、原田は怒鳴り返す。

「じゃあ何か？　楠を追い越して正面に回ってから斬りつけなくちやいけねえってか？　無理に決まってるんだろ。目的は果たしたってのに、なんで怒鳴られなきゃならねえんだよ」

「ちなみに、俺たちも背後から刺したのだが」
斉藤がぼそりとつぶやいた。

「背後から斬り付けておいて、得意げに笑っているのが良くないと言っておるのだ」

しつこくこだわる近藤に、原田は鬱陶しそうに顔をゆがめた。
その表情を見た近藤のこめかみに、血管が浮き出る。再び怒鳴り

散らそうとした瞬間、井上が奥座敷に入ってきた。倒れこむように座ると、大きく息を吐いて「すまん。逃げられた」とうなだれる。

「三人も取り逃がしたとは……。なんという不手際だ」

近藤が唸るように言うと、沖田と藤堂が悲しげな視線を原田に送ってきた。

「え？　もしかして、お前ら……」

「うん。逃げられた……」と言いながら、沖田がしょんぼりと俯いた。

重苦しい沈黙が漂う中、怒りが収まらない近藤がいつまでも文句を並べ立てている。そんな近藤を冷ややかな視線で眺めていた斉藤が口を開いた。

「ではどうする？　指示を」

近藤は考えがまとまらないようで、腕を組んで黙り込む。するとまた土方が横から口を挟んだ。

「過ぎたことは仕方ねえよ。今から追いかけたところで、あいつらはもう姿を隠してるだろう。内部で工作できねえとなれば、ただの小物だ、特に害はねえ。とりあえず俺はこれから肅清の件を隊士たちに報告し、後始末に取り掛かる。ゆうべ寝てない奴は、休むといい。原田はこれから巡察だろ？　早く行け。他になにかあるか、近藤さん？」

「いや」

近藤は依然、懨然とした表情を浮かべていたが、頷いた。

一同立ち上がり、奥座敷を出ていこうとしたとき、土方が斉藤に声をかけた。

「あとで話がある。山崎が戻ってきたら、一緒に俺の部屋へ来てくれ」

斉藤は何も言わずにしばし土方の顔を見つめたあと、小さく頷いて背を向けた。

（あーあ。近藤さん、すごく怒ってたなあ）

父のように慕う近藤が頭から湯気を出しそうな勢いで怒っているのを見て、沖田はひどく落ち込んでいた。

（あいつら、あんなにすばしっこいとは思わなかったよ……）

垣根を飛び越えて姿を消した二人を思い出す。抜刀していた沖田と藤堂は垣根を飛び越えることができず、門まで回ったのだが、そのときすでに二人の姿は消えていた。

大きなため息をついたとき、後ろから原田が声をかけてきた。

「まあ、仕方ねえよな。近藤さん、何を一人で怒ってるんだか。最近、ちよつと偉そうだと思わねえか？ 前はあんなじゃなかったのによ」

「取り逃がした俺が悪いんだよ。近藤さんが怒るのも無理はない」肩を落とす沖田を見て、今度は原田がため息をつく。

「なんだかなあ。俺なんて、ちゃんと殺つたのに怒られたんだぜ？ 近藤さんは、武士つて形にこだわらずにすぎなんだよ。新撰組に名が変わってから、余計にひどくなったような気がする」

近藤の肩を持つと沖田が口を開きかけたとき、奥澤が利恵を支えながら奥の部屋へ向かっているのが目に入った。

「あれ？ 野村、どうしたんだろう？」

沖田の視線を辿り、原田も奥澤の肩でぐったりしている利恵に気づく。

「なんだ、なんだ？ また熱でも出したのか？」

床についた血をふき取っている隊士の横を通り過ぎ、二人は奥澤の後を追った。

「おい、奥澤。そいつ、どうしたんだ？」

原田が声をかけると、奥澤は利恵の頭越しに振り向いた。

「荒木田と御蔵の死体を見て気持ち悪くなったようで……」

「またかよ」

原田が呆れ顔で利恵を見やると、沖田が奥澤と反対側の利恵の腕を取り、肩に乗せた。

「手伝うよ」

そして原田を振り向き、「巡察だろ？ 急いだほうがいいんじゃないかな」とにつこりする。

「ああ、そうだな。……そいつをあまり甘やかすんじゃないぞ。」

原田は利恵を指差して二人に釘を刺すように言うと、隊服に着替えるため自室へと向かった。

原田が背を向けると、沖田と奥澤は無言のまま利恵を自室まで連れていく。

先に奥澤が部屋に入り、布団を敷くと、再び沖田とともに利恵を支えて布団に横たえた。

利恵は少し身じろぎをして、うつすらとまぶたを上げる。一瞬自分がどこにいるのかわからなかったのだろう。ぼんやりと天井を眺めていたが、傍らに座る二人に気づくと、驚いて起き上がろうとした。が、貧血で下がった血がまだ戻っておらず、再びめまいがして横たわる。

「大丈夫か？」

奥澤が声をかけると、利恵は右手首を目の上に乗せてため息をつく。

「まあ、なんとか……。ああ、わたし、また倒れたんですね。すみません」

「お前って意外と繊細だよな。じゃあ俺は後片付けがあるから、そろそろ戻るよ」

そう言つて奥澤が立ち上がると、利恵は目の上から手をどけて小さく頷いた。

「ありがとうございました」

「いいって、いいって。今度は怪我しなくてよかったな。俺がいなかったら、また鼻を打ってたぞ。感謝しろよ」

奥澤がわざとおどけて見せる。利恵が小さく笑うのを見届けると、沖田に「では、あとはお願いします」と言つて部屋を後にした。

間者5

「沖田さんも、もういいですよ。ただの眩暈ですから……。ありがとうございました」

枕元で膝を立てて座っている沖田に声をかける。すると、沖田は寂しそうな表情を浮かべてため息をついた。

「さつきはごめん。追いかけるのに必死でさ。しかも逃げられちゃったし、お前を気にかける余裕がなかったんだ。……3人も取り逃がしたもんだから、近藤さん、すつごく怒っちゃってさ」

「近藤さんが？」

「うん。あんなに怒ったの初めて見た」

自分は見ていないのでなんとも答えようがなく、利恵は「へえ……」と小さくつぶやいた。が、すぐに「3人？」と目を見開く。肅清されたのは3人、逃げたのも3人？

「間者が6人もいたんですか？」

「ゆうべ永倉と一緒にだった4人と、あとは楠と松永」

「永倉さん、間者って知っててあの人たちと一緒に泊まったんですか？」

「うん。どうやら永倉の首を狙ってたらしいよ。で、何かあったら加勢するために、俺たちは一力を見張ってたんだ」

永倉さんの首を……？　それで昨日からみんな変だったのか……。利恵は呆然として、「楽しんできてくださいね」と能天気な言葉をかけたことを思い出す。しかし永倉はまったく緊張のそぶりを見せず、笑顔で出かけていった。

「殺らなきゃ殺られる……か」

原田の言葉が急に現実味を帯び、利恵の胸に重くのしかかる。

「え？　なに？」

「なんで楠さんを殺したのかって聞いたら、原田さんに説教されたんですよ。そのとき、言われた言葉」

「見たんだ、楠を斬るところ。そのあと荒木田たちを見て限界迎えちゃったとか？」

「まあ……そんな感じかな」

荒木田の背から落ちた血の雫が脳裏に鮮やかに蘇り、利恵は起き上がって膝の間に頭を埋めた。

「慣れろって言われても、無理」

しばらく沈黙が続いたあと、沖田が口を開いた。

「間者が殺されるのは嫌ってことは、あいつらを放っておいて、永倉とか俺たちが殺されてもいいってことなのかな」

驚いて利恵は顔を上げた。

「そんなはずないじゃないですか！　なんでそういう話になるんですか」

「じゃあ、気にすることないんじゃないかな。俺たち、生きてるんだし」

沖田は小首を傾げ、何をそんなに悩んでいるんだというようにさりとて言ったのけた。

「気にするとかしないとかじゃなくて……。ああ、もう。沖田さんと話していると、なんだか訳が分からなくなっちゃう」

頭を抱えた利恵を見て、沖田はくつくつと笑い始めた。

「野村はさ、考えすぎなんだよ。いちいち考え込んで眉間に皺を寄せてさ、まるで土方さんだ」

「はあ？　止めてくださいよ。土方さんと一緒にしないでください」

利恵が顔をしかめると、「ほら、やっぱり」と言って沖田は笑った。

「野村と話していたら、なんだか気が抜けちゃって眠くなってきたよ」

大あくびをして、沖田はいきなりその場でごろんと横になる。

「動くの面倒だから、ここで寝る」

「ちょ……。自分の部屋で休んでくださいよ。わたし、そろそろ

洗濯とかしなくちゃだし」

目を閉じてうとうとし始めた沖田の肩をつかんで強くゆすつたが、「俺のことは別に放っておいていいよ。寝るだけだから……」と言つて、あつという間に寢息を立て始めた。

（嘘でしょ？）

利恵は啞然として沖田の寝顔を見つめた。

（まあいいか。別に見られて困るようなものもないし）と自分にあてがわれた部屋を見回す。飾り気のない、物置部屋が少し広くなつた程度のこの部屋には、女性らしいものは何ひとつ置かれていない。ここに来たときに身に着けていた洋服や下着は風呂敷に包み、ポーチとともに押入れにしまつてある。

もう一度沖田の寝顔を見てため息をつき、上掛けをかけてやると、仕事に取り掛かるため部屋を出た。

大広間のほうにはまだ人の気配がある。沖田と話すうちに気持ちはずいぶん落ち着いていたが、二人が倒れていた場所を通ればまた動揺するだろう。縁側から降りると、大広間が見えない場所を選んで歩いていった。

洗濯を終え、庭掃除をしようと庭へ出た利恵は、お梅のときのように荒木田たちの筵があるのではないかと少し緊張した。しかし屯所内には見当たらない。安心して竹箒を使い始めたとき、原田たち十番組が巡察から戻ってきた。

「お帰りなさい」と声をかけると、「もう大丈夫なのか？」と原田がやってくる。

「ええ。沖田さんとお話するうち、気持ちも落ち着きました」と答えながら、利恵ははつとした。

以前だつたら、人を斬つたばかりの人と平静に会話などできなかった。なのに今、原田と向かい合つて普通に会話をしている。絶対に慣れないと思つていたのに、もしかすると、徐々に慣れてきているのだろうか。暗澹たる気持ちになり、うつむいた利恵の目の前に、

白い包みが差し出された。

見上げると、原田が少し気まずそうな顔をしている。

「いつまでも暗い顔してないで、これでも食って元気出せ」

原田から包みを受け取って開いてみると、白い金平糖がひとつかみほど入っていた。

もう一度原田を見上げると、「沖田には内緒にしとけよ。取られるぞ」と言って笑い、玄関へと向かう。

その背に「ありがとうございます」と声をかけると、振り向かずに片手をあげて中へ入っていった。

利恵は金平糖を数粒口に投げ入れ、舌で転がしながら甘味を楽しむ。

そして（土方さん以外、みんな親切にしてくれるもの。慣れたんじゃないくて、「罪を憎んで人を憎まず」ってわたしの頭が切り替わったんだよ、きつと）と胸の中で自分に言い訳をした。

その日の夕方、久留米藩の真木の息がかかっていると思われる者の周辺を探っていた島田と山崎が戻ってきた。近藤は会津藩との会合で不在だったため、土方が一人で報告を受ける。

「そうか、やはりそれほど動揺はなかったか。捨て駒みたいなものだったんだろうな。ご苦労だった。今日のところはもう休め」

島田と山崎が立ち上がろうとした。話があると斉藤に伝えたのだが、山崎はここに来るまで顔を合わせていなかったようだ。

「山崎、お前に話がある。島田、斉藤をここに呼んでくれ」

しばらくすると、斉藤がのっそりと奥座敷に入ってきた。

山崎の横に座るのを待ち、「これから話すことは、お前たちの胸の中にだけ収めてくれ」と言って話し出す。斉藤は表情を崩さず聞いていたが、山崎の眉が少しだけひそめられた。

「明日、巡察のときよろしく頼む」

斉藤は頷いて立ち上がったが、山崎は顔を伏せたまま動かない。

「腑に落ちねえかもしれないが、これは必要なことなんだ。もし

納得できねえなら、斉藤一人に任せるが」

いえ……とつぶやいて、山崎は顔を上げた。

「承知しました」

その顔は、いつもの涼しげな表情に戻っていた。

試練 1

翌日、利恵が土方のもとへ朝飯を持っていくと、「お前、京の町に出たことなかったな」と突然声をかけられた。

「そうですね。出かけるといつても、一番遠くて八木家までですね」と答える。

「原田と沖田から、お前がまた落ち込んでいると聞いた。今日、斉藤の巡察についていけ。京の町でも見学して、気分を晴らしてこい」

「え？ 巡察にですか？」

外に出たいとはつねに思っていたが、あまりに突然で、言葉を失う。

「まあ、斉藤にとっては邪魔にしか感じないだろうから、途中までだが。山崎に迎えに行かせるから、少し外の空気を吸ってくればいい」

本来なら喜ぶところだが、最近まともに会話を交わしていない土方がいきなり親切めいたことをするなんて、と警戒心が先立つ。無言で俯いている利恵を見て、土方は大きいため息をついた。

「なんだ、嬉しくないのか。別に無理して行く必要もねえんだし、斉藤にはお前はなしにするって伝えるか」

「いえ、行きます！ ありがとうございます！」

利恵は慌てて声を上げた。思えば一ヶ月以上、ここに閉じ込められている。この機会を逃したらいつ外に出られるか分からない。

「飯が終わったら出かけるはずだ。食い終わったらすぐ斉藤のところへ行け。あと、お前は隊服は着なくていいからな」

「はい」

利恵は頭を下げ、部屋を後にした。その遠ざかる足音を聞きながら、（奴らがうまく食いついてくれるといいんだが……）と土方は小さくため息をつき、箸を手取る。

まあいいか。駄目ならまた巡察に行かせればいいだけの話だ。

利恵は朝飯を食べ終わると、土方に言われたとおり、すぐ玄関に向かう。

まだ誰も来ていなかったなので、上がりかまちに腰掛けていると、山崎がやってきた。

「おはようございます」と利恵が挨拶をすると、少し微笑んで頷く。

「今日はお迎えに来てくださるんですね。よろしく願いします」

そう言いながらニコニコ笑っている姿を見て、山崎の胸に小さな痛みが走った。

「最近、お忙しいみたいです。あまりお見かけしなかったから……」

草履を履こうと山崎が隣に座ると、利恵が尋ねた。

「そうですね。間者の件もありましたから」

「……なんか、いろいろ大変だったみたいです。わたし、何も知らなくて……」

そういつて俯く利恵を見ながら、山崎はゆうべの土方の言葉を思い出す。

「芹沢が暗殺された日から、野村の様子がどうもおかしい。何かを警戒しているか、怯えているか……。暗殺には今回肅清した間者が関わっていたのは知つてのとおりだが、まったく疑われていなかった奴が二人混じっていたことだし、野村のあの様子を見る限りまったく白だとは言切れん。本当に長州とつながっていないかどうかを確認したいんだ」

突然の外出に不安があるのか、利恵の瞳に少し翳りが見えるものの、土方が気にするほど怪しいとは思えない……。

山崎が観察するような視線を向けているのに気づき、利恵は笑みを浮かべて尋ねるように首を傾げる。一瞬胸によぎった罪悪感を振り払い、視線を逸らして立ち上がった。

「用事があるので、先に出かけます。遅れないように迎えに参りますので、その時に」と言って山崎は玄関を出る。

「いつてらっしゃい。お氣をつけて」

見送ろうと立ち上がった利恵に軽く頷くと、正門へ向かった。

利恵は山崎の後姿を眺めながら、（帰りにお金貸してくれと言ったら変に思うかなあ。……普通、思うよねえ……）とぼんやり考えた。井上はいつもお土産を買ってくれるし、昨日は原田が金平糖を買ってくれた。おそらくきつく言い過ぎたと後ろめたく感じたからだろうが、それでも自分のためにわざわざ店によってくれたのだから、感謝している。せつかく外へ出るのだし、この二人にお礼としてお土産を購入したいのだが、利恵はまったくお金を持っていなかった。

（貸してくれたとしても、返すあてがないもんなあ）

近藤に言えば給金をもらえるだろうか。でも正式な隊士じゃないし……。

（まあ、仕方ないか。今回はとりあえず諦めようっと）

山崎の姿が見えなくなったので、上がりかまちに再び腰掛ける。見張り役から解放されてからの山崎はいつも忙しそうで、姿もあまり見かけなくなった。食事を一緒にとることもない。せつかく仲良くなってきたと思っていたのに、さっきの様子を見ると、なんだかまた最初の頃に戻ったような気がして寂しく感じた。

「野村！」

急に背後から声をかけられた。

振り返ると、沖田が隊服を羽織ってニコニコしている。

「今日、初めて京の町に行くんだろ？　なんで一番組じゃないん

だろうなあ。いろいろ教えてあげるのにさ」

「だから一緒にしないんじゃないですか？ 巡察そっちのけでいろいろ案内しそうだから」

利恵の言葉に、沖田は頬を膨らませた。

「そんなことないよ。いつも巡察はきっちりやってるし。……ああ、そういえば、昨日は上掛けありがとう。ゆっくり眠らせてもらったよ」

そう言つて、沖田は両手を上げて大きく伸びをした。昨日、利恵の部屋で眠りこんだあと、夕飯の支度をしている間に起きたようだ。夕飯ができたと呼びにいったときはすでに姿がなく、上掛けはただで隅に置いてあった。

「ああ、いいですよ。ゆっくり休めたようで何よりです。でも今度は這つてでも自室に戻って寝てくださいね」

そのとき、二人の横に斉藤が立ち、「行くぞ」とだけ言つて通り過ぎる。

「あ、はい」と、利恵は慌てて後を追った。

三番隊の面々が門に集まつており、その後ろに沖田たち一番隊が並び始める。

「行くぞ」と斉藤が言つと、一番隊が揃つのを待たずに、三番隊は京の町へと出発した。

「沖田さんたちを待たなくて良かったんですか？」

先頭を切つて歩く斉藤の横に立ち、利恵が尋ねると、「どうせ別の道筋に行くことになる」とだけ答えが返ってきた。「そうですか……」とつぶやくように言つて、利恵は列の最後尾に移動する。

門を出てしばらくは、畑の風景が続く。これは普段から見えていたので特に新鮮味はないのだが、八木家より向こうに行くのは初めてだったので、つききよろきよと見回してしまう。

畑には壬生菜が青々と育っており、旬を迎えている。その上を赤や白のトンボが大量に飛び回っており、秋の気配が色濃く漂ってい

た。のどかな景色を眺めながら歩くうち、自由になったような気持ちになり、足取りが軽くなる。

しばらくすると景色が変わり、初めて見る光景が目の前に広がった。

（これが幕末の京の町……）

整然と立ち並ぶ木造家屋は風情があり、屯所では見ることのなかった色とりどりの着物を着た女性が歩いている。商人が店先にのれんをかける横を、飛脚が走っていく。その先には籠が止まっており、裕福そうな中年男性が乗り込もうとしていた。

あたりの景色に見とれるうち、いつの間にか足が止まっていたらしい。最後尾にいた隊士が振り返り、「野村、置いてっちまうぞ」と声をかけた。利恵は慌てて駆け寄ると、再びあたりを見回しながら歩き始める。何もかもが新鮮で、一軒ずつ覗き込むように観察してしまふ。

そのうちふと、こちらを見る人々の視線に気づく。眉間に皺を寄せている人、目が合うと慌ててそらす人、隊士たちをチラチラ見ながらひそひそと言葉を交わしている人。

（ああ、新撰組ってあまり評判良くなかったんだっけ）

現代ではドラマや映画、アニメや雑誌で取り上げられる人気者の新撰組だが、幕末ではどちらかというと嫌われ者だったことを思い出す。隊士たちはその視線には慣れているようで、気にしていないようだ……。

（悪い人たちばかりじゃないのにな）

そう思い、利恵は少し悲しくなった。一ヶ月以上共に過ごすうち、新撰組に対して情のようなものが沸いたらしい。

突然斉藤が列を離れ、店を覗き込んだ。

「斉藤さん？」

声をかけると、利恵の前にいた隊士がまた振り返り、「刀を見ているだけだから、すぐ追いつくだろ。いつものことだよ」と苦笑

した。

「へえ。そうなんですか」

ちらりと斉藤を振り返ると、スツと中に入っていく姿が目に入る。

「入っちゃいましたけど」

「それもいつものことだよ」

「……そうなんですか……」

剣の腕は立つのかもしれないが、利恵の見張りを任されたときといい、斉藤の勤務態度はあまり褒められたものではないと呆れる。

隊士の言葉通り、しばらくすると斉藤が追いついて利恵の横に並んだ。

「もう少し行ったら、お前は終わりだ。そこで山崎を待つといい」
そう言葉をかけて、再び先頭に出る。

（ええ、もう？）

利恵は少し残念に思ったが、草鞋を履いてこんなに歩いたのは初めてで、鼻緒の部分が少し痛くなっていた。これ以上歩けばすりむけてしまうかもしれない。

「この茶屋の前で待っている」

斉藤は店員らしき女性に声をかけ、団子と茶を持ってくるように言って金を渡すと、「巡察に戻る」とさっさと背を向けた。

一人残された利恵は店先に置かれていた台に座ると、疲れを取ろうと、草履を脱いで足をぶらぶらさせる。

そこへ、団子と茶を持った女がやってきた。受け取ったあとも、その場でじろじろと利恵を見ているので、いぶかしく思いながら「何か？」と尋ねた。

どこかお梅に似た雰囲気を持つその女は、「兄さん、ええ男やなあ。決まったおなごはおらん？」と言いながら隣に座る。

「はあ？ 決まったおなご？」

体を引いて離れようとする利恵の肩に手を置いて、女は誘うよう

な笑みを送ってきた。

「兄さんみたいなええ男なら、うち、喜んで相手するんやけど」
利恵は団子と茶を持ったまま、草履も履かずに立ち上がる。

「いえ、けつこうです。すぐ迎えが参りますので」

女はくつくつと笑って立ち上がり、店の奥へと向かう。

「なにを照れてはるの？ まさかその歳でおなごを知らんの？
もったいないなあ。うち、兄さんやったらいつでも歓迎するで？
その気になったら声かけてな」

（声なんてかけませんからー！ なんでこんな……。山崎さん、
早く来てくれないかなあ）

また女が戻ってくるのではないかと思うと恐ろしくて、利恵は腰
も下ろせない。心なしかなみだ目になり、山崎の姿を探してあたり
を見回す。

「兄さん、お迎えの方はまだやの？」

奥からまた女の声がして、利恵は身をすくませる。

「は、はいつ。まだ姿が見えませんっ」

「裏口で声かけられたんやけど、その人が迎えの人と違う？」

女が奥から顔を覗かせた。

（山崎さん、来てくれたんだ）

安堵のあまりため息をつきながら、草履を履いた。何の疑いもな
く店の中へ入ると、薄暗い土間を通り、戸口によりかかって薄笑い
を浮かべている女の元へ向かう。

「ほな、こちらへ」といいながら、女は利恵の背後に回った。扉
を開けると、見知らぬ男が二人立っている。

一人が和紙に書かれた絵と利恵を見比べ、「こいつで間違いない。
土方の小姓だ」とにやりと笑った。

（誰、この人たち？）

振り返ると、女が懐刀を利恵に突きつけた。

「逃がさへんで？」

「で、でもすぐに迎えが……」

背後から男が腕を回し、胸元をがっしりと押さえつける。

「ほな、わたしは店に戻ります。迎えの方が来たら、もうおらんと伝えるから安心しいや」

利恵は男の腕から逃れようともがきながら、「信じるはずない。わたしは京の町は初めてなんだから、一人で勝手に歩き回るなんて思はずない」と震える声で訴えた。

「そうなん？ どないする？」

女は面倒そうに背後の男に尋ねる。

「暇をもてあましてその辺見にいったら、迷ったらしく戻ってこないとも言え」

「そうやね。ほな、あとはよろしく」

助けを求めて叫ぼうとした利恵の口に、布が押し込まれた。男の腕はずそうと手を伸ばしたが、恐怖のあまり力が入らない。

男が脇差を抜き、利恵の喉下に当てた。

「大きな声を出したらすぐ斬るぞ。わかったな？」

利恵は泣きながら何度も頷く。男は脇差の刃を当てたまま利恵の正面に回ると、入れたばかりの布を引きずり出した。

「さて、いろいろ話を聞かせてもらおうか」

試練 2

男たちが茶屋の中に入るのを見届けると、山崎は茶屋の裏手にある小屋の影に移動した。中で交わされている会話と、利恵の泣き声が漏れ聞こえてくる。すぐにも助けに行きたいが、もう少し様子を見なければ土方への報告ができない。勝手に動き出そうとする体を押しとどめようと、齒を食いしばった。

利恵はそのまま裏口から外に押し出され、茶屋の物置とおぼしき小屋に押し込まれた。

屯所で尋問を受けたときも怖かったが、土方が持っていたのは竹刀だった。今回は真剣がすぐ目の前に突き出されている。押し寄せる恐怖の大きさはあのときの比ではない。

「死ぬ前に楠がお前の似顔絵を絵師に書かせていたんだよ。土方たちに相当かわいがられているらしいじゃないか」

「かつ、かわいがられてなんか……」

話そうとしてもうまく声が出てこない。言葉が途中で力なく消えていく。

「寝床も近藤と土方の間にあるんだって？　ずいぶん大切にされてるよな」

利恵は小屋の奥へと向かってじりじりと下がっていったが、狭い空間だったので、すぐ壁に行く手を阻まれた。

「あいつらがこっちの動きをどこまで知っているのか教えてもらおうか。あとはそうだな、弱みになるような愛妾や懇意にしている奴でもいい」

「しっ、しっ……」

知りません、の一言も言えない。

（どうしよう、どうしよう、どうしよう……）

山崎さんが裏手から迎えに来るなんて、変だと気づけばよかった。

なんで簡単に信じてしまったんだろう……。

恐怖で足がすくみ、頭も混乱しているが、なんとか逃げ出す方法を見つけ出そうと、目だけがきよろきよろとせわしなく動く。ふいに「土方さんの小姓っただけで狙われるかもしれないねえ」という原田の言葉が思い出された。

原田さんの言うとおりだ。でも真剣に剣術を身に着けたとしても、二人相手じゃどちらにしても無理だったろうと思う。しかも、自分はまったく武器を持っていない。

逃げる方法を考えるどころか、頭に浮かぶのは後悔ばかりだった。

「おいこら、何か言えよ」

もう一人の男が利恵の胸倉をつかみ、強くゆする。

「わたしはただの居候のようなもので……」

なんとか言葉を搾り出すことができたので、自分は軟禁されているようなものと続いて説明しようとしたとき、男が驚いたような表情を浮かべて利恵の襟を大きく開いた。胸に巻いた晒を指差し、「こいつ、女だ」と後ろで刀を構えている男に告げる。

「へえ。土方もけっこう好き者だな。女を男装させて小姓にするとは。よほど離れがたいと見える」

「そういう訳じゃ……わたし……」

襟を掴んでいる男が嘗め回すように利恵の体を眺める。

「ここじゃなんだから、旅籠に連れていこう。そこで時間をかけて、ゆっくり話をするでしょうぜ」とニヤリと笑った。

「そうするか。土方がご執心の訳を調べてみるのも良さそうだし」といいながら、もう一人の男は脇差を鞘に納め、懐刀を取り出す。「逃げようとしたら刺す」

そう言って利恵の背後に回り、「出る」と戸口へ押しやった。

（ご執心の訳を調べるって……。まさか……）

利恵の全身の肌が泡立った。

こうなったら、刺されてもいい。こいつらに辱めを受けるくらい

なら、死んだほうがましだ。

戸を開けた瞬間、思い切って走り出そうとした。背後から刺される覚悟はしていたのだが、襟首をつかまれ、戸口に叩きつけられる。側頭部が勢い良く戸の角に当たり、目の前が真っ暗になった。

利恵が小屋に連れ込まれたすぐ後、斉藤が裏口から小屋に向かつてやってきた。山崎が裏手から出てくると、足音を忍ばせたままその横に並ぶ。

戸が開く音がした瞬間、斉藤と山崎は刀の鯉口を切る。先に姿を現した利恵がいきなり駆け出そうとしたが、すぐ襟首をつかまれて戸に叩きつけられ、そのまま崩れ落ちた。

その体をまたいで二人の男が出てくると、斉藤と山崎は戸口の前に立ちふさがる。

前に立っていた男は斉藤の突きを胸に食らってすぐ事切れたようだが、残りの一人は刺された仲間を二人のほうへ突き飛ばした。すぐ体制を立て直した山崎が逃げる男の背に斬り付けたが、致命傷にはならなかったようだ。よろめきながらも、さらに逃げようと走っていく。

「俺が行く」といって斉藤が向かったので、山崎は利恵の様子を確認しようと膝をついた。

その瞬間利恵の体が霞み、まるで濃い霧が少しずつ晴れていくかのように薄くなっていく。驚いて手を伸ばすと手ごたえはあり、慌てて肩を強く掴んだ。すると再び霧が濃くなり、利恵の姿が元に戻る。

（今のは何だ？）

手を離すとまた霞むのではないかと不安を覚え、さらに強く肩を掴む。すると痛かったのか、利恵が眉間に皺を寄せて身じろぎをした。

「野村さん？」

声をかけたが、まぶたは閉じたままだ。こめかみの少し上を戸口

に打ち付けたらしく、血が流れている。

逃げた男にとどめを刺した斉藤が、刀を振って血を払う音がした。山崎は利恵のはだけた襟を直し、両腕に抱き上げ立ち上がる。

「頭をひどく打ったようです。この茶屋で休ませますので、誰かに医者を呼びに行かせてもらえますか」

斉藤は頷いて、表で捕縛した女を見張っている隊士たちに声をかけようと裏口から入っていく。

その後ろに続いた山崎は、4畳半ほどの小さな座敷に上がり、利恵を横たえた。

利恵は夢を見ていた。

自宅の台所にあるテレビに、自分の顔が映っている。なんで成人式の写真なんだろう、とぼんやり考えていると、台所の床に蹲って泣いている母親の姿が見えた。その横にあるテーブルでは、父親が頭を抱えている。

（父さん、母さん！ わたし、ここだよ！）
声をかけるが、二人には届いていないようだ。

父親が立ち上がった母親を抱き起こす。二人とも、少し痩せたように見えた。

利恵は二人の近くへ行こうと足を前に出すが、なんだかふわふわとしていて前に進めない。

誰かが肩を掴んで行くのを阻んでいるような、そんな気がして振り返るが、誰もいなかった。

（ここがわたしの居場所なのに。帰りたいのに！）
抗うようにもだえたが、視界がどんどん暗くなる。

（いや！ 帰りたい！）
父と母のほうへ手を伸ばすが、二人の姿はどんどん遠ざかり、利恵の意識は暗闇の中に吸い込まれていった。

利恵が眠ったまま泣いている。

山崎は隊士が呼んできた医師の隣で、濡らした手ぬぐいで涙をぬぐってやった。

流れた血の量にしては傷は浅かったので、医師は薬を塗ってさらに巻いただけで帰っていく。見送ろうと表へ出たとき、遺体の片付けを指示していた斉藤がこちらにやってきて、「野村は？」と尋ねた。

「傷は浅いようです。まだ目を覚ましませんので、先に屯所に帰ってください。土方さんへの報告もお願いします」

斉藤は頷くと、外へ出て「戻るぞ」と隊士たちに声をかけた。

利恵が霞んで消えかかったことを伝えるべきか山崎は逡巡したが、自分の目の迷いかもしいと思い、黙っていることにした。戸口に寄りかかり、奥で横たわる利恵を振り返る。

（かわいそうなことをしたが……。これで、土方さんの疑いも晴れるだろう）

自分が利恵の現代に戻る機会を潰してしまったとは、夢にも思わなかった。

試練 3

「長州とはまったく関係ない」

土方の前に座った斉藤は、それだけ言うと黙り込む。

「事の次第を説明してくれ」

山崎が報告してくれればいいのに……と心の中でため息をつきながら、土方が尋ねた。

「野村が長州の誰かと通じていたとしても、相手が小物なら知らないということも考えられる。しかし身の危険を感じれば、自分の立場を明かして上に話を通せと言うだろう。あいつは怯えるばかりで、体をもてあそばれるかもしれないと気づいたあとは、ただ逃げようとした。どう見ても、関係ないだろう」

「もう少し細かく話してくれないか」

土方が言うと、斉藤は立ち上がる。

「逃げようとしたときに戸に頭を打ち付けて、意識を失い、今は茶屋で休んでいる。俺が見聞きしたのは以上で、あとは知らん。最初から見ていたのは山崎だ。奴が帰ってきたら聞くといい」

「……わかった」

捕縛した女が半年ほど前に茶屋を営み始めた頃から、不逞浪士の出入りを見かけたとちらほら耳にしていたので、ずっと目をつけていた。だから、長州と利恵がつながっているようならまとめて捕縛しようとして、斉藤を送ったのだ。もともと情報収集を頼んだつもりではないため、この程度の報告で我慢するよりほかない。

まぶたを上げた利恵の目に、見慣れない天井が映った。

（……どこ？）

体を起こそうとすると、右のこめかみのあたりに痛みが走る。手を上げて触れてみると、包帯のようなものが巻かれていた。

「目が覚めましたか」

声がしたほうへ視線を送ると、あぐらをかいて壁に寄りかかっている山崎の姿があった。

「わたし、なんでここに……。ここはどこなのでしょう?」

「茶屋です」

「茶屋……?」

そこでやっと、自分の身に何が起きたのか思い出した。

「あの男たちは?」

手でズキズキ脈打つ頭を押さえながら起き上がる。

「斉藤さんが斬りました」

「斬った……。二人とも死んだんですか?」

「はい。遺体はすでに片付けてあります」

あの二人が死んだと聞いても、今は何も感じない。それより気になったのは、自分が気を失ったあと何をされたかということだった。非常に聞きにくかったのだが、思い切って尋ねてみることにした。

「あの……。わたし、何かされてました? 山崎さんが来たとき、どんな状態でしたか?」

「わたしと斉藤さんが着いたのは、野村さんが戸口に当たって倒れたときでした」

じゃあ、わたしが逃げようとした直後だったんだ……。と思い、利恵はホッと安堵の息を吐いた。しかしすぐに、（なんで斉藤さんが?）という疑問が湧き上がる。

その表情を読んだのか、山崎は「あの茶屋の裏手に怪しい男が二人入っていくのが見えたので、先に斉藤さんと呼びに行っただんです。もし何かあれば、わたし一人では対応いたしかねると思ひまして」と言った。

「そうですか……」

なんとなく腑に落ちなかったが、頭が痛くて考えるのが面倒になつてきた。

「歩けそうですか? そろそろ屯所に帰りましょう。昼飯時はどうに過ぎています」

「大丈夫です。早くここから離れたいですし」

山崎は頷くと、先に土間へ降りた。

「途中、どこかで飯を食べていきましよう。蕎麦でいいですか？」

「はい。……あ、でも、わたしは一文無しなんですけど……」

すると山崎は「奢ります」と小さく微笑んだ。

歩き始めてしばらくすると、左足の親指と人差し指の間も痛くなってきた。草鞋を少しずらして確認したら、すりむけて赤くなっている。

（頭は痛いし、足は痛いし……。もう嫌だ）

なんで自分がこんな目に合わなくてはいけないのか。夢で見た両親のこと思い出され、涙が溢れる。父も母も、とてもリアルだった。現代では実際、行方不明者としてわたしの映像が流れているのだろうか。

袖で涙をぬぐい、顔を上げると、道行く人が（男が道端で泣くなんて）とでも言っているかのような目で見ているのに気づいた。気持ち落ち着けようと大きく深呼吸をすると、少し前を歩いていた山崎が振り返る。

利恵の涙が滲む瞳から少し引きずる足元まで視線を下ろすと、ずらして履いた草履に気づいて足を止めた。

「少し休みましようか」と言つて、あたりを見回す。

小さな茶屋に目を留めると、「あそこまで歩けますか？」と尋ねた。

茶屋は嫌だと利恵が躊躇する様子を見て、「色茶屋でもないですし、わたしもたまに寄っている店なので、大丈夫ですよ」と店に向かうよう促した。

地味な中年女性に茶を二つと水を頼んだ山崎は、先に届いた水の入ったひしゃくを利恵に手渡した。

左足の草履を脱いで水で洗い流すと、少し染みだが、歩き疲れた足がひんやりと冷やされて心地良い。懐に入れていた手ぬぐいで軽

く拭くと、隣で山崎が自分の手ぬぐいを細く裂き、包帯代わりにと差し出した。

受け取ったはいいが、うまく巻けなくてイライラする。

「ああ、もう！ 嫌になる」

そういつて、利恵は足を前に投げ出した。

「なんだかもう、すべてが嫌」

空を見上げると、暗い雲が広がっているのが見える。もうすぐ雨が降りそうだ。

また涙がこぼれそうになり、何度も瞬きをして耐えようとした。

山崎は黙って利恵の手から切れ端を取ると、しゃがんで器用に巻き始める。

利恵は「自分でやりますから……」と慌てたが、すぐに「終わりましたよ」と隣に戻った。

投げやりになった自分の態度が恥ずかしくなり、「すみません……」と小さな声でつぶやく。

「いえ、こちらこそ……。迎えが遅くなったばかりに、つらい目に合わせました」

すると利恵は「お忙しかったんでしょうから。仕方ありませんよ」と無理に笑顔を浮かべる。その表情を見て、山崎は罪悪感に胸を焼かれる思いをした。

もう少し早く助けに入りたかった……。しかし土方の命には逆らえない。

重苦しい沈黙が漂う中、茶屋の女が明るい声を上げた。

「なあに二人で暗い顔してはるの？ そんな顔してるから、雨雲が来てしまったやないの。もうすぐ降り始めるから、これを飲んだら早う帰りや」

二人の横に茶を置くと、盆を持ったまま山崎に話しかける。

「兄さん、たまに来てくれてはるよね。傘持ってないなら、貸し

ましょか？ 次来るときに返してくればええよ」

「ほんまか？ おおきに」

いきなり山崎が関西弁で答えたので、利恵は少し驚いた。女が傘を取りに奥へ行くと、小声で「山崎さんて、もともと関西の方でしたっけ？」と尋ねる。

「はい。実家は大阪にあります」

「どうして普段は関西弁じゃないんですか？」

「ああ……。新撰組にはいろんな地方の方がいますし、時々分からない顔をされることがあったので、あまり使わないようにしています」

「へえ……」

関西弁を話す山崎はなんだか自然な感じがして、壁をあまり感じない。

そのとき、湯のみの中にポツリと雨が落ちてきた。

利恵が「降ってきたみたい」と空を見上げると、山崎も同じように上を向いた。

大粒の雨が、少しずつ勢いを増していく。

「1本しかなかったんやけど。二人で仲良く使おてな」

女が差し出した白い和紙でできた傘を受け取ると、山崎は湯のみを傍らに置き、立ち上がった。

「蕎麦はまた今度にしましょう。早く帰ったほうがよさそうです」
利恵は頷くと、山崎が開いた傘の中に入った。

二人は女に礼を言うと、急いで屯所に向かった。しかしどんどん勢いを増す雨は地面に跳ね返り、膝の上まで濡らし始める。擦りむけた足に巻いたてぬぐいは泥水を含み、足を踏み出すたびに頭の痛みもどんどんひどくなっていく。

足をひきずる利恵の様子を見て、山崎は傘を渡すと前にしゃがみこんだ。

「おぶります」

「いえ！ 大丈夫です」

山崎に雨が当たらないよう傘を傾けながら、利恵は頭を横に振った。

「その様子では、早く歩けないでしょう。おぶったほうが早く屯所につきます」

確かに、歩くスピードはどんどん落ちている。おんぶされるのは恥ずかしいが、このままではかえって迷惑をかけるだけなのかもしれないと思い直し、「では……。お願いします」と山崎の背に乗った。

歩き出した山崎の背で、「重くないですか？」と尋ねると、「大丈夫です」とだけ返ってきた。

「すみません」

「いえ」

短い会話を最後に、二人は屯所につくまでずっと口を閉ざしていた。

試練 4

利恵は山崎の背で揺られながら、幕末の9月の雨は、現代より冷たいな……と考えていた。

壬生菜の畑が見えてきた辺りで雨の勢いはずいぶん収まったが、今も傘を打つ音は大きい。気温はぐっと下がり、傘を持ってむき出しになった腕には鳥肌が立っていた。

昨日は永倉の首が狙われていたことを知り、今日は自分が遺体になるところだった、と起きた出来事を振り返る。

茶屋で襲われたときはもう必死で、男たちの人相を観察する余裕なんてなかった。二人の顔を思い出そうとしても、ぼんやりとしか浮かんでこない。一人は細くて背が高く、もう一人は理恵と同じくらいの身長で小太りだったということしか覚えていなかった。山崎と斉藤がああのタイミングで来てくれなかったら、今頃自分はどんなっていたのだろう……。

殺されるかもしれない、強姦されるかもしれないという恐怖は生まれて初めてのもので、他人の生死を気遣う心の余裕は今もない。斬られて良い気味だとは決して思わないが、もうあの二人に会うことはないと思うと正直、嬉しかった。男たちの遺体を見ていないせいもあるだろうが、斬った斉藤を怖いとか、どうして殺したのかという考えはまったく浮かんでこない。

少しずつ、自分が変わっていく。現代の生活に戻れたとしても、心に根ざした影は死ぬまで消えないだろうと思い、利恵は小さくため息をついた。

一方山崎は、いきなり霞んだ理恵の姿を思い出していた。背中に感じる重みは現実のもので、あれ以降は特に不思議な現象は起きていない。怪談でもあるまいし、やはりあれは目の錯覚だったのだろ

うと結論付けた。生身の人間が、あんな風に消えるはずはない。

頭の後ろで利恵がため息をつくのが聞こえ、襲われたときのことを考えているのか、それとも傷が痛むのかと考えを巡らせる。利恵の苦難に自分も加担していたことを思うと、慰めの言葉が浮かばず、黙ったまま歩を進めた。

傘を持つ利恵の腕をふと見ると、鳥肌が立っていた。利恵が乗っている背中だけは温かいものの、濡れた着物が少しずつ体温を奪っているようだ。そういえば、自分も膝から下が冷え切っている。

このままでは二人とも風邪を引いてしまいそうだと思ったが、急ぎたくても足裏に泥が入り込んでいて、草履が時々滑っている。しかも水を吸って重くなっており、踏み出すたびにぐちゃぐちゃと嫌な音を立てていた。気を抜くと転んでしまいそうだ。

山崎は一度足を止めて利恵を背負い直すと、つま先を地面に打ち付けて草履をしっかりと固定し、再び黙々と歩き始めた。

捕縛した女を連れた隊士に事の次第を聞いた沖田は、驚いて奥座敷に駆け込んできた。

「なんでだよ。なんで野村をあの手茶屋に一人で置いたんだよ」
報告を終えて座敷を出ようとした斉藤に詰め寄ると、「俺が指示した」と土方が間に入る。

「あの茶屋は前から怪しいって目を付けていたじゃないか。そんなところになんぞ？」

「芹沢が殺された日から態度が変わったから、怪しいと思った。それで、こつちを狙う奴らと何か関係があるのか確認しようと思っただけだ」

土方が答えると、沖田は首を傾げた。

「あれは、お梅の死体を見たからだよね？」

二人のやり取りが始まると、自分の役目は終わっているとばかりに斉藤はスツと座敷を出ていく。それを横目で見ながら、沖田は言

葉を続けた。

「みんなそう思ってるよ。井上さんだって、原田だってそう思ってる。なのになんで土方さんだけ怪しいとか思っちゃうのかな」

土方は顎を上げ、威嚇するように沖田を見下ろした。

「俺とは今も目を合わせねえぞ」

「それはきつと、いつも怒鳴ってばかりいるからだよ」

こいつは……と、負けじとこちらを見上げて睨んでくる沖田を見て土方はため息をつく。普段は飄々としているくせに、いったん怒るとしつこいな。

「……荒木田たち四人は、ずっと前から目え付けてただろ？ だが楠と松永は、まったく予想外だった。これっぽっちも疑っていなかったが、たまたま長州側と接触しているのを島田が見かけたおかげで尻尾を掴んだんだ。そうじゃなかったら、いつまでこっちの情報を流されてたか知れねえよ。だから多少でも怪しいと思えば、確認しなきゃならねえ。しかし野村は俺の遠縁ってことにしてあるから、ちよつと面倒だよな。あの茶屋が怪しいってのは俺達以外、島田と山崎しか知らねえから、隊士たちに余計な説明をする必要はない。それであの茶屋に置いて、どう反応するか見てみようと思ったんだ。しかし近藤さん達に言えばお前みたいに文句を言うだろうから、自然と斉藤と山崎に頼むことにした。あの二人なら、感情的にならねえし。……まあ、考えていた以上に大事になっちまったけどな」

沖田はしばらく土方を睨んでいたが、ふいにぶいっと顔を背けた。

「それで、野村の疑いは晴れたのかな」

「ああ。斉藤によればな。あとは山崎の報告を待っただけだ」

「……もし」と言っただけで沖田は黙り込んだので、土方はいぶかしげな表情を浮かべた。

「なんだ」

「……もし、野村が本当に間者だったとしたら、俺は斬っていたよ。俺はあいつのことをいい奴だと思ってるし、友達だと思ってい

るんだ。だから余計に、斬る必要があるなら俺が斬る。友達が自分を裏切っていたうえに、知らない間に斬られていたなんてのは嫌だよ。野村に何かあるようなら、これからは隠し事はしないでほしいんだけど」

いつになくまじめな表情を浮かべる沖田を見て（そういえば、これまでこいつが言う友達ってのは、子供ばかりだったな）と思い、苦笑した。壬生浪士組になってから、自分も含めて誰もが余裕をなくしている。子供を交えて同等に遊べる相手は、最近では野村だけかもしれない。

「わかった。何かあったら、これからは言うよ」

すると沖田はいつもの表情に戻り、「よかった」と言っただけで笑った。

屯所に着くと山崎は上がりかまちに利恵を下ろし、入り口に置いてあった桶を持ってきて足を洗い始めた。膝まで泥にまみれている様子を見て、利恵は申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「あの雨のなか、わたしを背負って歩くんてやっぱり大変でしたよね」

包帯代わりの手ぬぐいの切れ端を外しながら、「ありがとうございました」と言葉を続けた。

「いえ。それより早く着替えたほうが良いでしょう。風邪を引きますよ」

足を洗い終えた山崎が、桶を利恵のほうへずらす。

そのとき、「帰ってきたんだ？」と背後で声がした。

振り向いた瞬間に、利恵の頭の傷がズキンと脈打ち、顔をゆがめる。

「そんなに痛む？」と心配そうに沖田が顔を覗き込んだので、利恵は「まあ、それなりに。でも傷は浅いようなので、大丈夫ですよ」と苦笑した。

「そうか。なら良かった」と頷いたあと、山崎に顔を向けて「土

方さんが、着替えたらすぐに来いってさ」と伝える。どこか平坦な口調と、責めるような視線を受け、土方さんから事の次第を聞いたんだな、と山崎は気づいた。

そつと目を伏せ、「わかりました」と答えたあと、利恵の頭に巻かれたさらしに目を留める。

「濡れてしまいましたね。あとで換えにまいります」と言っ、着替えるために自室へ向かった。

利恵が部屋で着替えを終えた頃、「茶を持ってきたよ」と沖田が障子の向こうから声をかけてきた。

「今日はずいぶん優しいんですね。わざわざ淹れてくれたんですか？」と尋ねると、「違うよ。馬越が淹れていたのをもらってきたんだ」と言いながら部屋に入ってきた。

「ええ？ そんな、馬越さんに悪いですよ。返してきてくださいよ」

「大丈夫だよ。また淹れてたから」

そう言いながら、沖田は文机に湯のみを置いた。

「……じゃあ、まあ……ありがたうだったかな」

あとで馬越さんにお礼を言わなくちゃと考えながら茶をすすると、文机に頼杖をついて「思っていたより元気そうで良かったよ」と沖田はニコニコしている。

わたしのどこが元気に見えるんだろうと利恵が不思議に思ったとき、廊下から「入ってもいいかな」と山南の声がした。

沖田が立ち上がって障子を開けると、山南と藤堂が入ってくる。

「さつき総司から聞いたよ。災難だったね。頭の傷は大丈夫かい？」と言いながら、山南は利恵の向かいに座った。その隣に藤堂と沖田が並ぶ。

「ええ、なんとか。……それより、山南さんこそ起きて大丈夫なんですか？」

「ああ。今日はなんだか調子がいいんだ」

言われてみれば、声に張りが戻っているように感じる。

「それは良かった。やっと薬が効いてきたのかもしれない」

「薬もそうだが、野村くんが一生懸命介抱してくれたおかげだと思うよ」

そう言つて、山南は柔らかい笑みを浮かべた。こんな笑顔を見るのは、明里さんの元へ向かった時以来だなと思い、利恵は少し嬉しくなる。

「介抱してくれたお礼もかねて、怪我が治ったら明里の店に連れていこうと思うんだ。土方の了解はさつきもらつたよ」

「ほんとですか？ 土方さんがいいつて言つたんですか？」

土方があつさり了承したことに驚き、利恵は声を上げた。

「本当だよ。今日起きたことに対する慰労の意味もあるんだろう」最低の一日になってしまったとはいえ、初めて町までの外出を許可したうえに、今度は島原まで……。わたしに対してなにか後ろめたいこともあるのかと勘ぐっていると、沖田が「まあ、良かったじゃないか。俺も一緒に行こうかな。山南さん、俺が非番の日にしてよ」と口を挟んだ。

「俺も一緒に行くつもりだったんだけど」と慌てたように藤堂が言う。

「じゃあ、いつだったら二人の予定が合うのかな」

三人が予定を立てている横で、利恵はぼんやりと茶をすすった。

何かが心に引っかかっているのだが、考えようとしてもうまく頭が回らない。

「じゃあ、三日後にしようぜ。野村もそれでいいよな？ 傷は浅いんだもんね？」

藤堂の問いに作り笑いを浮かべて頷きながら、心の中でため息をついた。

まあいいか。考えたって、理解できないことばかりなんだもの。とりあえず、わたしは生きている。今はそれで満足しよう。

試練4（後書き）

この時代と現代では一ヶ月ほど季節がずれているようなので、実際は10月の終わり頃の雨だと思っていただけば。。。

試練5

「廁に行つてきます」と言つて利恵が部屋を出ていくと、三人は口を閉ざした。

沖田は詳細を話していないが、山南も藤堂も、利恵に起きたことについてだいたいのところは予想がついている。

「でもまあ、元気だよ」と沖田が言うと、「そうかな。今は疲れきつていて、何も感じないだけかもしれないよ」と山南が応じた。「いいじゃないか。これであいつの身の潔白は証明されただろうし。……それにしてもさ」

藤堂は途中で言葉を切り、大きくため息をついた。

「最近、これでいいのになつて思うんだよな。昨日の近藤さん、なんだか変だつたし。土方さんは尊皇攘夷どころか、内部の調整ばかりに躍起になつてるし。志を持ってわざわざ京に来たのに、俺、何やつてるんだろうなつて」

すると山南は寂しそうな表情を浮かべて「そうだね」とつぶやく。「そうかなあ。俺はそんな風に思ったことはないなあ」と首を傾げながら沖田が言つと、二人は苦笑した。沖田は世の中の動きとか思想といったものに、まったく興味がない。

廁から出た利恵は馬越に礼を言おうと炊事場を覗いてみたが、すでに姿がなかった。大広間にいるのかなと向かうと、廊下に腰を下ろしてぼんやり茶をすすっている姿が目に入り、「馬越さん」と声をかける。

「ああ、野村。傷は大丈夫なの？」

「はい。先ほどはお茶をありがとうございました」

すると馬越は「沖田さんにいきなり『野村が怪我したから、これ譲つてよ』って言われたときは驚いたな」とくすくすと笑い始めた。顔だけじゃなく、しぐさもかわいらしいなと思ひながら利恵が眺

めていると、「そうだ。野村に相談したいことがあるんだ」と言って立ち上がり、腕をつかんで廊下の隅まで連れていかれる。

「相談って？」

利恵が尋ねると、声が届く場所に人がいないのを確認しようと馬越は辺りを見回した。

「あのさ……。お前、身の危険を感じたことはない？」

「身の危険なら、今日思い切り感じましたが」

分かりきったことを……と利恵は少しむっとした。

「いや、そういうんじゃない……。貞操の危機というか」

利恵が眉間に皺を寄せるのを見て、馬越は慌てて話を続けた。

「ここに来てからさ、なんだかやらしい目で見られてるような気がするんだよ。具体的に何かされたとか、言われたとかじゃないから名前は言えないんだけどさ。……ほら、俺ほどじゃないけど、お前もどちらかというと女っぽい顔してるし、それなりにきれいに見えるだろ？ だから、同じように感じることもあるんじゃないかと思ってる」

（俺ほどじゃないけど？）

利恵は一瞬ひきつった笑みを浮かべたが、馬越の真剣な表情に気づき、自分もまじめな表情を取り繕った。

「うーん……。わたしはないかなあ」

「そうか……。お前は土方さんの小姓だしなあ。しかも個室だし。いいよなあ」

「ええ、まあ……。それはそれで大変ですが……」

確かに、大勢で雑魚寝している隊士たちに比べれば、ずいぶん恵まれた環境にあるのかもしれない。

「まあいいや。……このことは誰にも言わないでくれよ。二人の秘密だからな。なんかあったらまた相談するよ」

そのとき、背後から「野村さん」と声がして、馬越はひっと叫んで飛び上がった。振り返ると、山崎が立っている。

「あ……あの、山崎さん。今の話、聞こえてました？」

馬越が恐る恐る尋ねると、「また相談するつていうところだけです」と山崎が答える。

そのとき大広間のほうから瀬戸物が転がるような音が響き、「あつ。誰だ、こんなところに湯のみを置いたのは！」と怒鳴る声があった。

「あ、まずい。誰かが俺の茶を蹴っちゃったみたい。……じゃ、またな」と慌てて馬越は大広間へと向かう。その後姿を見ながら、「ほんと、かわいらしい人ですね」と利恵がつぶやくと、山崎は「新撰組みつての美男五人衆といわれているうちの一人ですからね。佐々木さんは先月亡くなりましたし、昨日も一人肅清されたので、今は三人衆ですが」と答えた。

（ああ、楠さんか……）

楠は細面で少し垂れ気味の大きな瞳が特徴で、やはり女っぽい顔立ちをしていたことを思い出す。歳は十代半ばだっただろうか。利恵からすれば、まだまだ子供に見える年代だった。その楠が……。「そういえば、楠さんがあの茶屋の人たちにわたしの似顔絵を渡したそうです」

ため息交じりに報告すると、山崎は頷いた。

「斉藤さんたちが遺体を検分したときに、見つけたようですよ」

「そうですか……」

そういつて、利恵はぼんやりと庭を眺めた。あんなに激しかった雨が、今は霧雨程度まで収まっている。

「ずいぶん小降りになりましたね。あの茶屋でもう少し雨宿りさせてもらったほうが良かったのかな」

苦笑しながら山崎を見上げると、「確かに……」と言いながら利恵の頭のさらに目を留めた。

「手当てし直そうと思つて、声をかけたのですが。雨に濡れたものを巻いたままだと、傷が膿んでしまうかもしれません」

利恵は「でももう乾いちゃってるみたいですよ。大丈夫じゃないかな」といつて頭に巻かれているさらに手を当てる。

「すぐに換えれば良かったんですが……。すみません」

「いえいえ。鬼の副長がお待ちだったんですから、仕方ないですよ。……じゃ、山南さんたちが部屋にいたので、そろそろ戻りますね」

利恵は山崎に背を向けたが、すぐ立ち止まって振り返った。

「三日後に、山南さんたちが島原に連れていってくれるそうなんですよ。山崎さんもお都合が合えば一緒にどうですか？」

「いえ、わたしは……。楽しんできてください」

「そうですか」と言って再び背を向けた利恵を眺めて、どこか鬱悶気が変わったなと山崎は思った。

俺たちのせいか……。

「野村さん」

気がつくと、声をかけていた。

「はい？」

「今日食べ損ねてしまったので……。近々あらためて蕎麦を奢ります」

すると利恵は「楽しみにしています」と、嬉しそうににっこり笑った。

利恵が部屋に入ろうと障子に手をかけたとき、「おい」と声をかけられた。隣の部屋から、土方が顔を覗かせている。

人生最大の恐怖を経験したおかげか、土方をそれほど怖いと思わなくなっている自分に利恵は気づいた。

（たった一日で、人の気持ちってずいぶん変わるもんだな）と思しながら、「なんででしょう？」と土方の前に移動する。

「まあ……。今日は大変だったみたいだな。お前の似顔絵も見たぞ」
まともに目を合わせて見上げてくる利恵を見て、土方は少し驚いたような表情を浮かべている。

「そうですねえ。一生分の恐怖を味わったような気がします」

「その割には……」

と言いながら、土方は利恵を眺め回した。

「けっこう平気そうに見えるが」

「疲れてるだけです。頭も痛いですし、考えるのが面倒になっちゃって……。ああ、そうだ。島原を了承してくださってありがとうございます」

「山南が前からしつこく言ってきたしな」

その時ふと、利恵は自分の部屋がさつきより騒がしくなっていることに気づいた。

「なんだろ。また誰か来たのかな」

「ああ、さつきからうるさくてたまらねえんだが。少し静かにしてくれるように言ってくれ」

土方は利恵の部屋を覗くと、いきなり障子を閉めて中に戻った。

（自分で言えはいいのに）と思いながら自分の部屋の障子を開いた利恵は、中の様子を見て啞然とする。

山南たちに井上、原田、永倉も加わって、狭い空間に六人もの男が肩を寄せ合うように座っていた。

「宴会でも始めるつもりですか」

呆れたように言くと、井上は立ち上がって利恵に場所を譲る。

「今日襲われて怪我をしたと聞いてね。見舞いに来たんだが、君はいなかったから待っていたんだ。……とにかく無事でよかった。顔を見たから俺は戻るよ。今日はゆっくり休みなさい」

そう言って利恵の肩をポンポンと叩き、部屋を出ていった。

「ずいぶん長い廁だったな」

藤堂の言葉に、「だって、馬越さんにお茶のお礼を言いに行ったら話が長くなっちゃって、そのあと山崎さんに声をかけられて、部屋に入ろうとしたら土方さんにも呼び止められたから」と苦笑する。「じゃあ、俺も部屋に戻るよ。こんなに大勢いたんじゃ、野村くんも落ち着かないだろうからね」

部屋を出ていこうとする山南に、利恵は「わざわざありがとうございました。島原、楽しみにしています」と声をかけた。

山南が出ていくと、原田は自分を親指で指しながら、「俺も見舞いに来てやっただぜ」とニヤリと笑う。

「で、その日は俺も一緒に行くことにしたから」と言葉を続けると、「俺も。野村と杯を交わすのは初めてだなあ」と永倉が利恵の顔を覗き込む。

「わたしは飲みじゃなくて、湯浴みに行くんですけどね」と利恵は苦笑した。

「まあそう言わずに。酒は飲めるんだろ？」

「たしなみ程度ですけどね」

その時、隣の部屋から咳払いが聞こえてきて、土方の言葉を思い出す。

「……ああ、そうだ。土方さんが騒々しいって文句言ってたんだ。怒鳴られる前に、戻ったほうがいいかもしれないですよ」

「そうか。お前も見たところ元気そうだし、そろそろ戻るとするか」

原田が立ち上がったのを合図に、みんなそろそろと部屋から出ていく。

最後に沖田が出て障子を閉めると、利恵は大の字に寝転がって大きく息を吐いた。

（あー、疲れた……）

やっと一人でゆつくりできると思い、利恵は安堵した。みんなが心配してくれるのは嬉しいのだが、肉体的にも精神的にも疲れきっていて、とてもじゃないけど相手する気力はない。少し放っておいてほしいというのが正直な気持ちだった。なのにみんな大丈夫そうだとか、元気そうだとか、口を揃えたように言ってくる。

ずっと胸に引っかかっているものが何なのか探ろうと、今日起きたできごとをもう一度振り返ろうとしたが、断片的にしか思い出せなかった。そういえば、交通事故に遭った友人は、事故前後のこと

をほとんど覚えていないと言っていた。あまりに恐怖が大きいと、自衛本能が働いて自動的に記憶を削除するのかもしれないあ、とぼんやり考える。

そして今、ものすごく眠くなってきたのも、さらに忘却を促そうとする自衛本能だろうか。

まぶたを閉じると、夢で見た父と母の悲しげな表情がちらりと脳裏をかすめる。

（帰りたいな……）と思ったのを最後に、利恵は深い眠りに落ちた。

いざ島原へ1

それから数日は、平穏な日々が続いた。利恵の頭の傷はかさぶたになって痛みはないが、その下にできた瘤と青黒い痣は触れると痛む。鼻緒で擦れた指の間はすでに桃色に変わっていた。

「おい、早くしろよ。置いてくぞー」

ウキウキした様子の原田と永倉が門の下に立ち、手を振っている。山南と並んで玄関を出た利恵は、「あの二人が一番張り切ってますね」と苦笑した。利恵たちを追い越して原田たちのもとへ向かいながら、藤堂は笑顔で振り返る。

「だって、今日は山南さんの奢りだぜ？ いっぱい食べて飲まなきゃ損だ」

原田たちに追いついて一緒にこちらに手を振り始めたのを見て、「山南さん、大丈夫なんですか？ けっこうな人数ですけど」と尋ねると、背後から「俺も一緒に払うから大丈夫だ」と声がした。振り向くと、仏頂面の土方が立っている。

「え？ 土方さんも行くんですか？」

すると土方の後ろから沖田が顔を覗かせた。

「俺が誘ったんだよ」

「またずいぶん大人数になったもんですね」

（わたしはただお風呂に入りたいだけだったのになあ）と思いがらげんなりした表情を浮かべた利恵を見て、土方の眉間に皺が寄った。

「なんだ。なんか文句あるのか。……ああ、もう一人増えたみてえだ」

めっそももない、と顔の前で手を振っていた利恵が土方の視線を辿って門を振り向くと、ちょうど屯所に帰ってきたらしい近藤が原田たち一行に加わっていた。

「斉藤さんは気にしないだろうけど、井上さんがちょっとかわい

そうかも」

巡察に出る前に利恵の部屋に寄り、楽しんでおいでと声をかけてくれた井上の顔を思い出しながらつぶやくと、「また別の機会に一緒に行けばいいよ。ほら、早く行かないと。原田たちがしびれを切らしてしまうよ」と沖田が利恵の手を引っ張る。

利恵たちが門に到着すると、「いざ島原へ！」と原田がこぶしを挙げ、永倉と肩を組んで歩き始めた。

案内された店に入ると、すぐ座敷に通された。山南は女将や番頭ともずいぶん顔馴染みらしく、和やかに会話を交わしている。

利恵は映画で見た吉原のイメージが強くて、この時代の島原の芸伎も体売るのかと思っていたが、芹沢を激怒させた芸伎のように「芸を売る」のが主体だということを、道すがら山南が教えてくれた。心を通じたり、贔屓にしてくれる客とそのような関係になることはあるし、借金を早く返したいがために体売る人もいるようだが、基本は芸を披露するのが目的であり、女性も楽しめる店が多いようだ。

席に着くと同時に入ってきた三人の芸伎を見て、（うわあ。きらびやか……）と利恵は感嘆した。

綺麗に結われた髷には簪や櫛が飾られ、白塗りが施された顔の中で唇の紅がぼつんと浮かんでいる。藤色や黄緑、桃色など、色とりどりの着物を見て、理恵は少し羨ましく感じた。幕末で過ごすようになってから、女らしい格好など一度もしていない。

しかし目の前の女性たちのような格好はできないな、と思い直す。頭も着物も重そうだし、あんなにしとやかに歩けない。絶対に転ぶ。

ずっと山南の隣に座った女性が、明里なのだろう。最初は白塗りでどの女性も同じように見えたのだが、よく見ると明里は特に繊細な目鼻立ちをしていて、どこか上品な雰囲気漂っている。何より、山南を見上げる彼女の表情がとても幸せそうだ。山南も愛おしくて

仕方がないといった眼差しで見つめている。そんな二人がとても微笑ましくて、利恵の胸の中も温かくなった。

料理が運ばれてくると、女たちが客の杯に酌をして回る。近藤が乾杯の音頭を取り、料理を食べ始めると、芸伎たちはそれぞれの持ち場につき、三味線や舞など芸を披露した。

現代も含めて芸伎をまともに見たのは初めてだった理恵は、物珍しそくに眺めている。

「酒が進んでねえぞ」

向かいに座っていた原田が徳利を持って目の前にやってくると、お猪口を差し出すように促した。

「いえ、湯に入ってからにしようと思って……。悪酔しますからね」と言いながら、大学時代に友人と温泉へ行ったときのことを思い出した。露天風呂で調子に乗った二人は、酒を飲みながら他愛のない話で盛り上がり、そろそろ上がろうかと歩き出したときに目が回ってしまったのだ。二人とも素っ裸でしばらく床の上に伸びていたのだが、貸切だったので誰にも恥ずかしい姿をさらさずに済んだ。思い出しただけで、あのときの気持ち悪さが胸に蘇ってきて顔をしかめる。

「ちよつとくらいならいいじゃねえか。ほら、飲め。俺の酌じゃ飲めねえってのか」

しつこいなあと思いながら、仕方なく利恵はお猪口を差し出した。

「いただきます……うわ、おいしい」

口に含まれた酒はやや辛口で香りが高く、喉越しと後味はすっきりしている。

（やばい、止まらなくなりそう）

すると今度は原田から永倉が徳利を受け取り、注いできた。

「けっこういける口なんじゃねえか？」

「いや、それほどでも……。ではわたしが酌をしますので、お二人とも席に戻ってください」

慌てて猪口を膳に戻し、席に戻った二人に酌をする。

食事を終えたら、すぐ風呂に行こう。山南に言えば、明里さんが風呂場まで案内してくれるかも……と思ったのだが、そちらを見たらすでに二人きりの世界に浸っており、声をかけにくい。

（いや、しかし。夢にまで見たお風呂に入らないまま帰るわけにはいかないよね）

さつさと食事を終えようと、二人に何度か酌をするとそそくさと席に戻り、猛然と箸を口に運び始めた。

「なんだよ、楽しくないの？」

隣に座っていた沖田が覗き込んでいる。

「いえ、これ以上酒を飲まされる前に、湯につかりたいと思いついて」

「ああ、そうか。……山南さん、野村が湯につかりたいって！」「まだ食べ終わってませんから……と止めたがすでに、山南はこちらに目を向けていた。

「ああ、そうか。そうだったね。明里、野村くんを案内してやってくれないか？」

「よろしゅうおす。ほな、こちらへ」

案内された風呂場の湯気を見て、利恵は嬉しさのあまり泣きそうになった。

（ついに……やっと……）

早く入りたいと思い、「明里さん、ありがとうございました。では……」と出るように促すと、下を向いてクスクスと笑っている姿が目に入った。

「おなごが男の振りしてると、何かと不便やないの？ 大変やね」「え？」

山南さんから聞いたのだろうか。利恵が固まっていると、明里は顔を上げて目を合わせ、小首を傾げた。

「大丈夫よ。誰にも言わへんから安心してな？ うちが旦那様を困らせるようなこと、言うわけないやないの。……それにうちが気

づいたと土方はんに知られたら、まずいんとちゃう？　うちも命が惜しいしなあ」

「そうですね……。というより、どうして？　今まで誰も気づいてなかったのに……」

「せやなあ……。山南さんの話し振りとか、野村はんの雰囲気かなあ」

「ぱつと見じゃ分らないですよね？」

利恵の必死な形相を見て、明里はまたクスクスと笑った。

「大丈夫やないの？　今まではばれてへんかったんでしょ？　うちの場合、山南さんの近くにおる人はよく観察するようにしてるから、気づいただけと思うよ？」

それでも不安げな表情を浮かべている利恵に、明里は身を寄せた。「旦那様のこと、これからよろしゅう頼みます。病に倒れたときは、ずいぶんお世話になったそうで。うちはつねにあの方の傍におることはでけへんからなあ。……この間来てくれはったのも、野村はんにえらい勧められたからと言つてはりました。おおきに」

「いえ、わたしも山南さんにはずいぶんお世話になっているので……。少しでも恩を返したいと思っていますだけです」

すると明里はにつこり笑って、「ほな、うちはそろそろ戻ります。ごゆっくり」と出ていった。

女だとはれた衝撃がまだ残っていて、利恵はしばらくその場に佇んでいたが、立ち上る湯気を見て時間がもったいないと思い直し、早速裸になる。

袖に隠して持ってきたボディシャンプーを取り出すと、濡らしたてぬぐいにはんの少しだけ垂らし、全身を丁寧にこすった。本当はたつぷりの泡で洗いたかったが、流れた泡を誰かが見て騒ぎになったら困ると思ったのだ。次に髪を濡らすと、やはり同じように隠し持ってきたシャンプーを手に取り、瘤を避けながら地肌だけを洗う。桶に湯を汲んで洗い流すと、やはり水に浸して洗うよりは爽快感があった。

そしてついに、念願の湯船に身を沈めると、満足の深いため息がこぼれる。

（幸せ……）

風呂桶にゆつたりと頭を預け、目を閉じた。

少ししか話していないが、明里さんはすごく良い人そうに見える。山南さんがベタ惚れするのも分かるような気がするな、と利恵は思った。これまで誰もが自分を男だと信じて疑わなかったのに、すぐ女だと思破った観察眼の鋭さには驚いたけど。友達になれたら、これ以上嬉しいことはないだろう。この時代には、気兼ねなく話せるような女友達はいないのだから。

友達といえば……。現代での自分の交友関係について思いを馳せる。

就職してからはとにかく忙しくて、学生時代の友人の集まりにはなかなか参加できなかった。年に1、2度しか会えなくなれば、自然と連絡も途絶えるものだ。メールのやり取りはあったが、頻度は日に日に下がっていった。最近身近な人といえば、両親と職場の同僚だったな、とそれぞれの顔を思い浮かべる。

（みんな、どうしてるかなあ）

両親は当然、嘆き悲しんでいるだろう。夢で見た通り、憔悴しきっているに違いない。朗らかだった母と、娘にやたら甘くて嫁に行くことなんて考えられないといった父を思うと、胸に鋭い痛みが走った。嫁に行ったとしても、いつでも会いに行くことはできただろう。でも今は、夢でしか会えない。

職場にはそれなりに上下関係はあったが、基本的にみんな気さくで、締め切り後は打ち上げと称して一緒に飲んで楽しむことも多々あった。締め切り前の殺伐とした雰囲気さえ、今は懐かしく思う。

同僚たちは今、戦力が一人欠けたことによって仕事が増え、利恵のことを考える暇などないに違いない。取材と原稿は外注するしかなかったらうな、と申し訳なく思った。最近出版社は不況で、経費

削減のため業務はなるべく社内で完結するよう言い渡されていた。それでよけいに過重労働を強いられ、恋人とも自然消滅するはめに……。

（いや違うな。仕事のせいじゃないな）と利恵は苦笑した。

大学時代から付き合っていた恋人とは情性で付き合っていただけで、すでに気持ちは冷めていた。それは向こうも同じだったようだ。連絡が途絶えてしばらくすると、新しい彼女ができたらしいと共通の知り合いが言っていた。そのとき、なんの感情も浮かばなかったことを思い出す。

そういえば、これまで付き合った恋人は3人いたが、山南と明里のような熱い思いはまったくなかったかもしれない。なんとなく付き合って、なんとなく別れて……。

そんなことをさまざま考えていたら、扉の向こうで明里が声をかけてきた。

「野村はん、大丈夫？ のぼせて倒れたりしてへん？ なかなか戻ってきいへんから、皆さん心配してますよ」

名残惜しかったが利恵は仕方なく湯船から出て、返事をする。

「気持ち良くて、つい長風呂してしまいました。すぐ戻ります」

いざ島原へ2

座敷に戻った利恵は、中の様子を見て啞然とした。

上半身裸になった原田が、腹の周りに絵を描いて腹踊りをしており、芸伎も男たちも大笑いしている。

「あの……。心配しているところか、わたしの存在自体を忘れているように見えるのですが」

明里に耳打ちすると、涙をにじませながら「たまに『野村は?』と言つてはりましたよ」と答えた。

「そうですか……」

周囲を見回すと近藤に手招きされたので、そちらへ酌に向かう。利恵がお猪口に酒を注いでいると、「いや、こんなに笑ったのは久しぶりだよ」と言いながら原田に目を向け、再び噴き出した。

「最近、お忙しそうでしたからね。いろいろ問題も起きていましたし」

利恵の言葉に近藤の笑いが消え、代わりに心配そうな表情が浮かんだ。

「野村くんこそ、この間はつらかっただろう。話を聞いて心配していたのだが、なかなか屯所に帰れなくてね」

「いえ。気にしないでください。今はこうして元気に過ごしていますし、念願の湯につかることもできましたから」

「そうかい? そんなに湯浴みが好きなら、今度俺の知り合いのところ連れていこうか」

「ここより近いんですか?」

すると土方が「ああ、近藤さんが囲つてる金太夫のところか?」と口を挟んだ。

「……囲つてる?」

「愛妾だ」

「ああ……なるほど」

地元で奥さんが待っているというのに、けっこう女好きなんだな
と思いながら、再び酌をする。

「ほかに愛妾はいたかな、近藤さん」

土方が尋ねると、「い、いや……」と近藤はあやふやな笑みを浮かべた。

「まあ、後腐れのねえように遊ぶのが一番だぜ？ 手当たりしだいに手え出していると、あとで痛い目に合っちゃう」

近藤さんに絡むなんて珍しいなあと土方に目をやると、真っ赤な顔をして、目も据わっている。

（うわ、かなり酔ってる……。どんだけ飲んだんだろう）と若干引いたものの、一応小姓の身だし、酌はしておかなくてはいけないだろうと尋ねてみた。

「土方さん、まだいけます？ お酌しましょうか」

「……いや。二杯も飲んだから、今日はもういい」

「二杯って……このお猪口で二杯？」

「土方は下戸なんだよ。もう一杯飲んだら寝てしまつかもしれん」
そう言って近藤が笑うと、土方はちつと舌打ちをした。

「じ、じゃあわたしは食事に戻りますね」

とぼつちりで絡まれるのは嫌だと思い、利恵はさつさと退散することにした。

酔いが回ってきた頃、原田と永倉、近藤は馴染みの女のところへ行くと言い始めたので、宴会はお開きになった。

山南はこのまま店に泊まるらしい。相変わらず明里と熱い視線を交わしている。

お猪口二杯でできあがった土方はさつさと眠りたいらしく、今夜はこのまま屯所に帰ると言い、沖田は酔っているのかいないのか、いつもと変わらない調子で「じゃあ俺たちは帰るとしようか」と立ち上がった。

店を出ると土方と沖田が並んで先に立ち、利恵はその後ろに続い

て夜空を眺めながらのんびり歩く。

「山南さんが元に戻ってくれて、本当に良かったよ」

背後でポツリと藤堂がつぶやくのが聞こえたので、利恵は振り返って相槌を打った。

「今日、とても楽しそうでしたよね」

「ああ」

藤堂は足を早め、利恵の隣に並んだ。

「まあ、お前にも感謝してるよ。……野村は怖い思いをしただろうが、茶屋の件がきっかけで立ち直ったようなところもあったしなほら、山南さんて優しいだろ？ 普段世話してくれてたお前が怪我をしたと聞いて、自分が何とか助けてやらなきゃいけないって思ってたんだろ？ 急に床から起きてさ、あとはお前も知っての通りだ」

「……山南さんは病というより、気持ちの問題だったような気がします」

利恵の言葉に藤堂が眉をひそめたので、差し出がましいことを言ってしまったと後悔したのだが、「確かななあ。俺もそうじゃないかと思ってたんだ」とため息をついた。

「このまま元気に過ごしてくれるといいですね」

「そうだな。まあ、これからもよろしく頼むよ」

明里と同じことを言っている。藤堂さんは、本当に山南さんが好きなんだなと思い、利恵は微笑んだ。

「わたしにとって、山南さんは恩人ですから」

そのとき土方が振り向いて、「お前、明日から稽古場に行けよ」と言い出した。

「え？」

「いい加減、多少でも打ち返せるようにならねえとな。せつかく永倉が稽古つけてるってのに、まったく手が出てなかったじゃねえか」

手が出ていなかった？ ああ、斉藤さんに痣をつけられたときの

ことを言っているのか……. と思い、利恵はため息をついた。

「稽古をつけてもらってると言っても、相手が斉藤さんじゃあ…

…」

「だから、稽古場で隊士たちと打ち合ってみると言ってるんじゃないか。馬鹿か、お前は」

言いながら、土方の口元がわずかに緩んだ。利恵は何も言い返さなかったが、不満を感じたときの例の表情を浮かべている。それに気づいた沖田も、隣でくっくつと声を殺して笑い始めた。

藤堂と利恵はなぜ沖田が笑っているのか分からず、怪訝な表情を浮かべている。

「さあ、帰るぞ。眠くてたまらねえ」

笑いをかみ殺しながら土方は二人に背を向け、屯所へ向かって歩き始めた。

今日は島原に来るつもりはなかったのだが、沖田にしつこく誘われたので仕方なく付いてきた。おかげで原田の腹踊りを久しぶりに見たな……. とうつすらと微笑む。

利恵への疑惑は、山崎の報告でとりあえず払拭された。茶屋の件を直接尋ねてきたのは沖田だけだったが、ほかの面々もうつすらと気づいているようだ。何も言わずとも、あの日はみんな責めるような視線を送ってきた。

自分のやり方に不満を持っていることは分かる。分かっているが、自分が手綱を引き締めなければ新撰組はただの有象無象の集まりになってしまう。禁令のおかげで多少はましになったが、芹沢をはじめとする一部隊士の暴挙のせいで、自分たちが体を張って守っているはずの京の人々に「壬生狼」などと不名誉な呼び名もつけられた。今も、監察方から加納惣三郎という隊士について嫌な報告が上がっていることだし…….

新たな頭痛の種を思い出し、緩んだ土方の口元が再び引き締められた。

屯所に戻ると、利恵は濡れたままとめていた髪をほどき、縁側に座って指で梳きながら風に当てる乾かしをした。しかし夜風に吹かれて冷たくはなるものの、湿気はなかなか消えてくれない。

（明日から稽古場に行くのかあ……）

新米隊士にさえ絶対に敵わないであろうことは分かっているのに、気が重い。しかし、先日襲われたときのことを考えると、多少は剣を操るようになったほうがいいのかとも思った。

（ああ、でも……）

武器を持っていなかったから、茶屋の男たちは油断してそれほど荒っぽいことはしなかったのかもしれない。無傷では済まなかったけれど、もし刀を抜いていたら、今頃わたしの首は体と離れた状態で埋葬されていたかもしれない。

使いこなせない武器を持つと、かえって自分の身を滅ぼす結果を招くと聞いたこともある。

たとえ剣術を身に着けることができたとして、自分が人を斬ることができるとも思わない。きっと躊躇している間に殺られてしまうに違いないと考え、背筋に冷たいものが走った。

それに……と、利恵は唇をかみ締めた。あんなに幸せそうな山南と明里を待つ未来を考えると、陰々滅々たる気分になる。

なんとか切腹は避けられないものかと考えるが、どうしたらいいのかまったく分からない。そのときが近づいたら、「ここで逃げたら切腹することになるので、耐えてください」とでも言えばいいのだろうか。仮に助けることができるとして、歴史を変えてしまってもいいものだろうかという不安もある。

（だめだ。寝よう）

気分がふさいだ状態で考え事しても、碌なこととは思いつかないものだ。髪はまだ半乾きだったが、部屋に戻るとすぐ布団に横になり、目を閉じた。

とりあえず、明日も平和に過ごせますように。そして、誰も死に
ませんように。

新たな日常

翌日、洗濯などの用事を済ませた頃に永倉が迎えにやってきた。

「土方さんから聞いたぜ。今日から稽古場に行くんだろ」

「やつぱり行かなくちゃいけないんですよえ」

「当たり前だろ。ほら、早く竹刀を取ってこいよ」

「はあ……」

竹刀を持った利恵は、意気揚々と先を歩く永倉の後ろを、とぼとぼと歩く。

「斉藤の突きを交わしたっていうじゃないか。けっこうやるな」

永倉が足を止めて振り向いた。

「土方さんによれば、あれでもんのすぐ手を抜いていたそうですよ。それでもわたしには精一杯だったんですから、本気だったら簡単に当たっていたでしょうし、その時点で気を失っていたでしょうね」

「だらうなあ」

何が面白いのか、永倉はニヤニヤ笑っている。

「てか、あれだな。斉藤がお前の相手をしてやったこと自体が奇跡だな」

「それを奇跡と呼ぶなら、二度と起きてほしくないですね。痣だらけになったんですから」

言いながら、自分がなんだか我俣を言っているように感じて、利恵は小さくため息をついた。

「まあ、頑張りますよ。わたしが敵う相手なんて、誰一人いないと思いますけどね」

自分が予告したとおり、鏢競り合いさえできなかった。竹刀はすぐに叩き落され、手のひらはジンジン痺れて握力が消えていく。

あまりに手ごたえがないため稽古相手にはならないと思われたら

しく、終いには隅で体育座りをして、一人でみんなの打ち合いを眺めていた。

（やつぱりすごい人なんだな、永倉さん）

いつものふざけた様子はなりを潜め、厳しい表情を浮かべている。打ち合う隊士を眺めながら歩き回り、一人ひとりに指導を繰り返していた。

（ふうーん。剣道の練習とはまたちょっと違うんだなあ）

体育館で剣道部が練習しているのを見たことがあるが（中学生の頃、好きだった人が剣道部だった）、それよりずいぶん激しい。まあ、剣道はスポーツだし、こっちは実戦に向けて稽古しているのだから、当たり前といえば当たり前なのだが……。

そんなことを考えていたら、入り口から沖田がやってくるのが見えた。

「珍しいな、稽古場に顔を出すなんて」

永倉の言葉に、沖田は笑顔を返す。

「今日から野村がこっちに来ることになってたからさ。様子を見る」といって周囲を見回し、隅に座る利恵に目を留めた。

「あれ？　なんでそんなところで休んでいるの？」

沖田が近づいてくると、利恵は苦笑した。

「だって、わたしは弱すぎて」

「それでもさ、やらないと」

「手が痺れちゃって。竹刀を持ってもすぐ取り落としてしまうんですよ」

利恵が挙げた両手は、細かく震えている。

「なるほどねえ」

沖田がしげしげと眺めていると、「総司、久しぶりに相手しろよ」と永倉が声をかけた。

「いいよ」と言つて沖田が永倉の前に立つと、隊士たちはみんな壁際に移動する。馬越が利恵の隣に腰を下ろすと正座し、「久しぶ

りに良いものを見れそうだ」と耳打ちした。

二人とも、剣先を相手に向けてゆったりと構えたまま、動かない。漂う緊張感に利恵はいつの間にか息を詰めていたらしく、苦しくなつて息を吐く。

そのとき、沖田がスツと前に出た。

パシン、と乾いた音がして、永倉が沖田の竹刀を跳ね上げる。しかしすぐに体勢を立て直すと、沖田は再び打ち込んだ。

そこから先は、動きが早すぎて何が起きているのかさっぱり分からない。隣では「すごいな」と馬越がしきりにつぶやいている。

「で、結局どちらが押しているんですか？」

利恵が小声で尋ねると、「うーん……。微妙に永倉さんかなあ」と首を傾げた。

隊士たちはみんな固唾を呑んで試合の様子を見守り、稽古場には激しく打ち合う音だけが響いている。

沖田の顔をよく見ると表情がまったくなく、能面のような顔のなかで、目だけが異様に輝いていた。

（天才剣士かあ……）

ぜんぜん稽古してはいなくせに、永倉と対等に打ち合っている。まったく決着が付かず、時間がたつほどに二人とも大量の汗をかき始めた。動いたたびに、汗の雫が飛び散っている。

永遠に続くのではないかと思っていると、土方が稽古場に入ってくるのが見えた。そのまま戸口に寄りかかり、試合を眺めている。

ふいに沖田が足を滑らせて体勢を崩し、すかさず永倉が打ち込もうとした。すると「そこまで」と土方が声を上げる。

「えー、まだやれたのに」と沖田が頬を膨らませると、「滑つて膝を突いた時点でお前の負けだ」と言い放つ。

「だつてさ、ここ、汗がたくさん落ちて濡れてるんだよ。だから滑ったんだよ」

むっとした表情の沖田に、土方は「運も実力のうちってな。悔し

かつたらもつと稽古に顔出せ」と嫌味つたらしい笑みを浮かべた。

「もういいよ。屯所に戻る」

むくれて外に出ようとした沖田の肩をつかみ、「たまには稽古をつけていけ」と背を押して中へと戻すと、土方はそのまま利恵のほうへ目を向けた。

利恵は慌てて目を逸らしたのだが、大股にこちらに近づいてくる気配をひしひしと感ずる。

「お前、なに休んでやがる」

唸るような声が頭上から降ってきたので仕方なく見上げると、土方は目の前に仁王立ちして思い切り睨んでいた。

「休んでいるというか……。手が痺れて竹刀を握れないというか

……」

手を掲げて見せると、ちつと舌打ちをして「もういい。屯所に戻って掃除でもしろ。……とりあえず、今日から朝晩、素振りを百回するように」と言つて背を向けた。

土方が来ると同時にいつの間にか傍らから離れていた馬越が戻ってきて、利恵の肩に手を置く。

「確かにお前、あれじゃひどすぎるよ。まともに打ち合いができるようになるまで、まあ頑張れ」

その日の夕方、利恵は部屋の前の庭で顔を引きつらせながら素振りをしていた。

縁側では、土方が監視するように睨んでいる。

（別にずるなんてしないってば。ちゃんとやりますって。……型は崩れているかもしれないけど）

見られていると、落ち着かない。そんなことを考えながら振っていると、「腹より下に下ろすんじゃないやねえ。止める。今のは数に入れるなよ。次も六十四だからな」と怒鳴られた。

やり直しを含めると、すでに百回以上振っているような気がする。午前中の手の痺れは消えていたものの、今度は上腕の疲労が激しく

て、止めろといわれても剣先は下がりがちだった。

テニスを始めたばかりの頃も素振りはそれなりにきつかったが、中途半端な位置で止める必要はなかったので、これよりはずいぶん楽だったと思う。

手のひらも熱を持ち、振るたびに嫌な痛みが走る。まめができたに違いない。

（あと三十六回……。頑張れ、わたし）

痛みを意識しないように、一振り一振り丁寧に行っていく。しかしあと十五回というところで、手のひらに激しい痛みを感じて、竹刀を落としてしまった。右手を見ると、三個できたまめが二つつぶれて、皮が剥けている。

「どうした？」

無然とした表情で土方が尋ねたので、「まめがつぶれました」とため息をついた。

「仕方ねえな。だがあとたった十五回だ。布でも巻いて手当したら、終わらせろ」

「……はい」

そのとき土方が利恵の背後に目を向け、「帰ってきたのか。こっちで話を聞かせろ」と声をかける。

振り向くと、山崎がこちらに向かってやってくる場所だった。

土方は部屋に入ろうと障子を開けたが、振り向いて「……ああ、そうだ。その前にそいつが素振りを続けられるように、手当てをしてやってくれ」と言って再び背を向けた。

眉を寄せて手のひらに息を吹きかけている利恵を見て、「擦りむいたのですか？」と山崎が覗き込む。

「……ああ、まめがつぶれたんですね」

山崎は縁側に座ると、手ぬぐいを半分に裂いた。その隣に利恵も腰を下ろし、促されるまま手を差し出す。

「乾燥させたほうが早く治るので、素振りが終わったら外したほ

うがいいですよ」と言いながら手早く巻いていく様子を、（いつもながら、器用だな）と利恵はぼんやり眺めていた。

「これで少しは楽になると思います」

端を止めて顔を上げた山崎は、利恵の額から顎にかけて流れる汗に目を留めると、無意識のうちに残った手ぬぐいで拭き始めた。

（はい？）

利恵は驚きのあまり、その場で石と化す。

その様子に気づいた山崎は手を止め、「……汗が落ちそうだったので」と言いながら、自分の行為に驚いていた。

新たな日常2

しばし沈黙が流れた後、先に口を開いたのは山崎だった。

「わたしは報告がありますので、これで」

立ち上がると縁側に上がり、土方の部屋へ入っていく。

利恵が（あ、お礼を言っただけ……）と気づいたのは、障子が閉められた後だった。

そのまま障子を眺めていると「手当てが終わったら続きをやれって言っただろ！」と土方の怒鳴り声が聞こえたので、慌てて庭に戻り、再び素振りを始める。痛みは相変わらずだったが、先ほど感じた動揺のおかげであまり意識せずに済んだ。

（びっくりした……）

汗を拭いてくれる程度なら特別な意味はないと思うし、相手が沖田だったらきつとふざけて笑っていたよなあ、と思う。わたしだって、為三郎の汗を拭いてやったことがあったし。

そう思ったとき、（まさか……）と利恵は苦笑した。山崎さんから見ると、わたしは子供みたくに見えるとか？

（まあ、いいか）

ここでもなんやり考えていても仕方がない。とりあえず今は、この素振りを終わらせないと。

山崎は縁側に足を上げながら、どうして汗を拭ってやったりしたのだろう、と自問した。

考えるより先に手が動いていた。利恵の世話をする癖がついてしまったのだろうか。

まるで野村の小姓のようだな、と心の中で苦笑しながら土方の前に座ると、「で、加納はどうだった？」といったものように単刀直入に尋ねられた。

「とりあえず今はまだ、噂されているほどではないようです。少

なくとも、何人もの町娘を孕ませては捨てているという噂は、でまかせでした」と答えたあと、少し間をおいて「ただ、少し気になることが……」とわずかに眉を寄せる。

「なんだ？」

「島原通いが激しくなっております。ゆづべ後をつけたときは、輪違屋に入っていました。店の者に話を聞いてみたところ、ずいぶん前から錦太夫に入れ込んでいるようで、これまで払った花代も相当の額に上っているようです。おかげで懐具合もかなり寂しく、加納さんに金を貸している隊士も多いと聞きました。最近では返してもらえないと言って憤慨する者が後を絶たず、頼まれても断っているようですが……」

土方は「どこかの誰かに似てるな」と言って深いため息をついた。「屯所内で借りている分にはまだいいだろうが、これが外に向くとまずいな。個人間の金の貸し借りは禁令で罰することはできないが、新見のように新撰組の名を使って問題を起こされる前になんとかしたい。とりあえず、隊務に影響が出ているからと言って、加納の島原への出入りを禁止する。……また何か変わったことがあったら、すぐ報告してくれ」

「承知しました」

山崎が立ち上がると、「そういえば、これまで野村に稽古をつけてた奴らは、なんで素振りさせてなかったんだ？ たった五十で腕が上がらなくなっていたぞ」と土方が声をかけた。

「隊士の手前、基本的な型だけ教えればいいと聞いていたもので」

「……ああ、そうだったな」

山崎は少し躊躇する様子を見せたが、もう一度腰を下ろすと「今度は野村さんをどうなさるおつもりですか」と尋ねた。

「まあ、もうしばらく様子見だな。剣術をどこまで身につけられるかにもよる」

土方の言葉に、山崎はほんの少し目を見開いた。

「身につけたら、隊士として剣を持たせるといことですか」

「ここで過ぐす以上、いつまでも小姓というわけにもいかねえだろっ?」

「……確かに」

「なにか気になることでもあるのか?」

「いえ。ただ、野村さんに剣術は難しいように感じたので……」

すると土方は、なぜか得意げな笑みを浮かべた。

「普通に考えるとそうだろうな」

土方の部屋を出ると、利恵はちょうど素振りを終えたところだった。

相当きつかったのだろう。両手をだらりと下ろし、大きなため息をついている。

縁側から降りる山崎に気づくと少し戸惑ったような表情を浮かべたが、すぐ「先ほどは、ありがとうございました」と微笑んだ。

「いえ。手の具合はどうですか?」

山崎の問いに、「それなりに痛みますが、まあ、最初は仕方ないですね。ここを乗り切れば、後は楽になると思いますし」と苦笑する。

その様子を眺めながら、山崎は土方との会話を思い出していた。

(不憫やな。普通の女やというのに)

そう考えるうちに無言で見つめ続けていたらしく、利恵の表情がしだいにこわばっていく。

(わたし、なんか変なこと言ったかな? ……それとも、土方さんが何か言ったのかな)

憐憫のような表情を浮かべた山崎の眼差しに、利恵は戸惑った。そのとき「おい、素振りは終わったのか」と土方の大声が響き、「はい、終わりました!」と慌てて返事をする。

すると山崎はいつもの控えめな笑みを浮かべ、「蕎麦……」とつぶやいた。

「はい？」

「蕎麦を奢ると約束していましたね。明日の昼、行きましようか」
そういえば、馬越の相談に乗っていたときにそんな話が出たな、
と利息は思い出した。しかし今日の山崎はいつもと少し様子が違っ
ているので、なんとなく気まずいというか、落ち着かないというか
……。少し躊躇してしまう。

「ああ、そうでしたね。でもお忙しいようですし……。無理なさ
らなくていいんですよ。それに、土方さんの許可がないと……」

「どちらにしても、明日は用事で町へ行くことになっているので
土方さんの許可は、わたしが取っておきます」

わざわざ許可を取ってくれると言っているのに、これ以上遠慮す
るのはかえって失礼だろうと思い、利息は「それなら……お言葉に
甘えようかな」と頷く。

「では、明日」

そう言って庭を出ていく山崎の背を見ながら、利息は（親切で言
ってくれてるだけなのに、わたしったら何を緊張してるんだか）と
小さなため息をついた。

同情しているのかもしれない、と山崎は思った。

男として生活しなくてはいけなくなつたうえに、本来なら手にす
ることもなかっただろっ剣の稽古をすることになり、いちいち許可
を得なければ気軽に外出もできない。何かと怪我也多いし、先日は
自分たちのせいで襲われた。

時々遠い目をして寂しげな表情を浮かべることもあり、ここでの
出来事以外にも深い悩みを抱えているようだ。それでも病に倒れた
山南を気遣うなど、つねに思いやりを持って周囲と接する姿には常
々感心している。

屯所に現れた状況などまだ謎に感じる部分もあるし、それが気にな
らないといえど嘘になるが、問題がある人物だとは思えない。

（そういえば、俺が見張りに付いた頃は、一緒に飯を食べて

いたな)

見張られて良い気分はしないだろうに、自分の寝不足を氣遣って一緒に食べようと声をかけてきた。

あの頃は屯所内で起きた出来事をいろいろ話してくれたのだが、利恵の視点を通して屯所内を見ると、また違った景色が見えてきて面白かったなと思い返す。

明日はどのような話を聞かせてくれるのだろうか……。そう考えたとき、少し胸が弾んだような気がした。

翌朝、目が覚めて起き上がった利恵は、「うつ」と呻いた。両腕と腹筋が筋肉痛になっており、体を起こそうにも痛くて力が入らない。

(大学を卒業してからは、まともに運動してなかったもんなあ……。ストレッチしてから寝ればよかった)と後悔するが、後の祭りだった。

苦勞してうつぶせになると、ヨガでいうところの猫のポーズを取ってから、ずりずりと上半身を起こす。

(あー、素振りしたくない……。せめて朝の分だけでも休めないかな……)

そう思うが、土方に言ったところで「馬鹿いつてんじゃねえ」と怒鳴られて終わるのだろうと、大きなため息をつく。

(……どうせやらなくてはいけないのなら、さっさとやってしまおう)

今朝は食事当番なので、のんびりしている暇はない。

「よいしょと」

意を決して立ち上がると、顔を洗おうと外へ出た。

新たな日常3

打ち合いはできなくても、とりあえず稽古の様子だけでも見ておけと言われたので、雑用を終えると稽古場に向かう。

「なんだ？ 今度はどこを打ったんだ？」

無意識のうちに腕をさすっている利恵を見て、奥澤が声をかけてきた。

「昨日素振りを百回やらされたんですよ。そしたらお腹と両腕が痛くて痛くて……」

情けない表情を浮かべると「永倉さんが直々に稽古つけてるっていうから、どれだけ上達したかと楽しみにしていたんだが……。いくらなんでもあれはないよ。素振りだって、百回くらいなら軽くできるようにならないとな」と笑われた。

昨日は奥澤が真つ先に相手をしてくれたのだが、あつという間に竹刀を落とした利恵に苦笑し、別の相手と稽古を始めたのだった。

「どなたの相手もできないので、今日は見学です。……いつかは奥澤さんと鰐競り合いできるように、まあ頑張ってみますよ」

「楽しみにしてるよ」と言いながらいたずらっぽい笑みを浮かべ、奥澤は理恵の上腕を軽く小突く。

「痛っ。だからここは痛いんですってば」
顔をしかめると、「情けないなあ」と大笑いされた。

今日は斉藤と原田が稽古を担当していた。

昨日と同じように隅に座って見ていると、原田が隣に立って壁に寄りかかる。

「見てるだけじゃ暇だろう？」

「いえ、参考になりますよ。間合いの取り方とか……」

「ふうーん。実際に動いてみないと身につかねえと思うんだがな」
「そうでしょうけど……。あ、山南さん！」

山南が稽古場に入ってくるのが見えると、利恵は痛む腹筋をかばいながら立ち上がり、挨拶をする。

「やあ。たまには稽古を覗いてみようと思ってね」

隣に立つとそのまましばらく稽古の様子を眺めていたが、ふと満面の笑顔を浮かべて利恵の顔を覗き込んだ。

「そうだ。明里がまた君に会いたいと行っていたよ。いつの間に仲良くなっただい？」

「案内してもらったときに、少しお話ししたんですよ。良い方ですよ。ぜひまたお会いしたいな」

「そうかい？　じゃあ、近々また一緒に行こう」

しかし二人の熱々ぶりを思い出た利恵は、「でもお邪魔なんじゃないかなあ」と苦笑する。

すると「なら、俺も一緒に行くぜ。話し相手になつてやる」と、原田が嬉しそうに身を乗り出した。

「え、いいですよ」

「なんでだよ。親切で言つてやってるのに」

「話し相手になるどころか、すぐ腹踊りを始めそうだから」と言つて、利恵は嘖き出した。

「あれって、お酒の席ではいつもやってるんですか？」

すると原田は「まあ、たまに。場を和ませるためにな」とニヤリと笑う。

その言葉に、山南はくつくつと笑った。

「いやあ、この間は本当に楽しかったね」

そのとき数人の隊士がやってきて、「山南さん、久しぶりに稽古つけてもらえませんか」と声をかけた。

「ああ、いいよ」

山南が去っていくと、「じゃあ俺もそろそろ戻るか」と言つて原田も後を追う。

三人がそれぞれ稽古をつける様子を眺めながら、この光景を写真撮影できれば良かったのに、と考えた。特集記事に添えたら、雑誌

は爆発的に売れるだろう。でもこの時代に動きを捉えた写真なんてあるはずないから、やらせだと騒がれてしまうかな。

（馬鹿みたい）

写真を持ち帰りたいなどと考える以前に、現代に帰れるかどうかも分からないのに……と自嘲する。

このままここでずっと男として過ごし、新撰組とともに人生を終えるのかもしれない。そう考えるとまた気分がふさいできて、膝に頭を乗せると小さくため息をついた。

食事当番の隊士が数人稽古場を出ていくのを見て、そろそろ山崎のもとへ行こうと利恵も立ち上がった。

近くにいた原田に「屯所に戻ります」と声をかけて、稽古場出る。

昨日のことを思い出すとなんとなく緊張したが、（そういえば、山崎さんと一緒にご飯食べるのは久しぶりだなあ）と、ここに来たばかりの頃を思い出した。

山南と同じくらい、山崎にもかなり世話になっている。怪我の手当てはもちろん、熱を出したときも（おそらく）寝ずに介抱してくれたし、先日は雨の中屯所まで背負ってくれた。

（そういえば、背中を拭いてくれと頼んだこともあったな）

顔の汗を拭いてくれるところの話じゃない、と理恵は赤面した。

あれに比べれば、昨日のことなんてまったく普通のことに見える。なのに、礼も言わずにその場に固まっていたなんて……と申し訳なく感じた。

おかげで、ちょうど玄関を出た山崎の姿を見かけたときには、自然な笑顔で挨拶することができたのだった。

挨拶を返した山崎は、「手の具合はどうですか？」と聞いてきた。

「寝ている間に若干薄皮のようなものができてたんですけど、今朝の素振りのときにまた剥がれました」

「なるべくきつく巻くといいかもしれませんね」

そう言つて利恵の手を覗き込む様子に、（ほら、やっぱりいつもと変わらない。わたしが変に意識し過ぎていただけ）とこっそり苦笑した。

蕎麦屋に向かいながら利恵は島原での出来事を話していたのだが、原田の腹踊りに差し掛かったあたりで「山崎さんは、見たことありますか？」と尋ねた。

「いえ。一緒に飲んだことはないのよ」

「そうですか。わたしは腹踊り自体初めて見たんですけど、もうおかしくつて。いつか見れるといいですね」

山崎は微笑んで頷いたが、原田が腹踊りをするほどくだけた席に、自分が参加することはないだろうと思う。

「あと、土方さんが下戸つて知ってました？」

利恵はクスクスと笑いながら話を続けた。

「お猪口二杯でもう酔っ払ったんですよ。あの土方さんにも、弱点があるんですね」

「下戸というのは知っていましたが……。そこまで弱いとは知りませんでした」

その後も原田の腹踊りや酔った土方が近藤に絡んだことなど、利恵は事細かに説明する。以前から感じていたことだが、周囲の状況をよく観察しているらしい。話の内容がとても具体的なので、山崎の脳裏にはいつも、利恵が見た光景が鮮やかに浮かんでくるのだった。

土方に素振りをするよう命令されたところまで説明を終えたとき、目的の店に到着した。山崎は窓際の席を選び、利恵は向かいに腰を下ろす。

初老の女性が運んできた蕎麦を一口すすると、利恵は満足の笑みを浮かべた。

「屯所で食べるのとはやっぱり違いますね。すごくおいしい」

利恵の言葉に山崎は微笑んだが、ふと何かに気を取られたように窓から外を眺めた。

「どうかしました？」

視線を辿ると、見覚えのある隊士の姿があった。

「あれ？ あの人って……加納さん？」

「そのようですね」

山崎は窓から視線を外して食事に戻ったが、全神経はまだ外に向いているような気がする。邪魔しないようにと思い、理恵は黙って蕎麦をすすった。

加納は美男五人衆に入れてもいいのではないかと思えるほど、端正な顔立ちをしている。剣術はかなりの腕前のように、昨日は稽古場で数人の隊士を打ち負かす様子を見た。しかしどこか軽薄な雰囲気があるように見え、屯所でも落ち着きがなく、心ここにあらずといった感じだ。

気になってちらりと外に視線を向けると、若い女性の肩を抱いて出てくるところだった。加納が耳に口を寄せて何やらつぶやくと、女は笑って身をよじる。

（うわ、なんかやらしい。やっぱり遊び人って感じだな）と利恵は呆れた表情を浮かべた。いくら顔が良くても、確実に距離を置いておきたいタイプだ。

山崎を見ると、すでに蕎麦を食べ終え、再び窓から外を見ている。用事があると言っていたのは、加納の見張りだったのだろうかと考えながら横顔を見てみると、視線に気づいた山崎は「どうかしましたか？」と尋ねてきた。

「いえ。加納さんって何か問題あるのかなあと思って」と遠慮がちに説明すると、「今見たとおり、少し女遊びが激しいようですね。気になりますか？」と片方の眉がわずかに上がった。

「気になるというか……女関係で身を持ち崩しそうな人だなと思って。あまり話したことがないので、分からないんですけど」

「そうかもしれませんね」と言って、山崎は安心したように微笑

んだ。

新たな日常4

山崎は蕎麦湯をすすりながら、土方に島原通いを禁止されたものだから、どうやら憂さ晴らしに町娘を引つ掛けにきたようだ……と、相変わらず女の肩から手を離さない加納の後姿を見ていた。

加納を見かけたのは偶然だったのだが、昨日の今日だったので、どうしても気になって目が追ってしまう。利恵も気になるようで、時々窓の向こうに視線を送っていた。

問題があるのかと心配そうに尋ねてきたときは、加納のような男が好きなのかと思ったのだが、その後眉をひそめているところを見るとどうも違うようだ。

（女で身を持ち崩しそうか……）と、山崎は微笑んだ。加納はまさに、その瀬戸際にいる。やはり利恵はなかなか勘が鋭いな、と感心した。

山崎の倍近く時間をかけてやっと食べ終えた利恵は、今度はつゆに蕎麦湯を混ぜてのんびりすすっていた。

「そういえば、用事は大丈夫なんですか？」

「ああ、ただの買い物なので、急ぐ必要はないんです。ゆっくり召し上がっても平気ですよ」

「そうですか。お待たせしちゃってすみません。でも蕎麦湯もとてもおいしくて……」

「わたしが早食いなだけですから、お気になさらず」

それでも申し訳なく感じ、利恵は蕎麦湯を一気に飲み干して「これでもう、お腹一杯です。ご馳走様でした」と満面の笑顔を浮かべる。

すると山崎も釣られたように微笑みながら「喜んでいただけた良かった」と言うと、女将を呼んで代金を払った。

その後呉服屋に寄り、山崎が何やら主人と話している間、利恵は店内に吊るされている女物の美しい着物を眺めていた。着物には詳しくないものの、黄色地に色とりどりの花が繊細に描かれており、なんだか高そうだなと思う。

（歩きにくいけど、たまにはこういうのも着てみたいなあ）

じつと眺めていたら、会話を終えた主人が近寄ってきて「これはええ品物ですよ。客引きのために特別に仕立てたものなので、けっこう値が張りますが……。着せたいおなごでもおるんですか？ 新撰組には日ごろ臍履にしていたいだいとりますから、少しくらいならまけても……」と言いながら、いわゆる営業スマイルを浮かべる。

「え？ いえ……。ただ見ていただけです。お気遣いありがとうございます」

利恵は顔の前で激しく手を振って否定すると、「用事は終わったんですか？」と言いながら逃げるように山崎のもとへ行く。

「はい。ではそろそろ屯所に戻りましょう」

外へ出てしばらくすると、山崎は「やはり、女物を着たいですよね」とぼつりとつぶやいた。

「まあ、男物よりも色が綺麗ですしね。でも、この袴のほうが歩きやすいので……」

苦笑する利恵を見て、確かにそうだろうな、と山崎は思う。本人は意識していないようだが、女の割には大股で歩くので、それが男らしく見える一因になっている。

「そのようですね」と言いながら、以前利恵が敷居に躓いたことを思い出し、つい笑い出しそうになった。ごまかそうと空を見上げたが、利恵は目ざとく山崎の表情の変化に気づき、照れたような笑みを浮かべる。

「皆さん、よく転ぶ奴だという印象をお持ちのようですが、実際に転んで怪我をしたのは一回だけなんですけどね」

利恵の言葉には答えず、山崎は空を見上げたまま「もう十月です

ね」とつぶやいた。

「野村さんが屯所で暮らすようになったのは、八月半ばでしたか」
「時がたつのは早いですね……」と頷いた利恵は、背中を拭いてもらったことを再び思い出し、顔を赤らめた。

「あの頃は本当に、お世話になってばかりで……」

どうして急に恥ずかしがっているのだろうと不思議に思いながら、山崎は「いえ、本当にお気になさらず」と控えめな笑顔を浮かべる。
「今日もご馳走になりましたし、何かお礼できればいいんですが……」

「お礼など必要ありませんよ。今でもずいぶん不自由な思いをしているのでしうし」

茶屋で襲われたとき、すぐ助けに行けなかった罪滅ぼしだとは口が裂けても言えない。

「それでもお世話になつてばかりでは心苦しいので……。お手伝いできるようなことがあつたら、何でも言つてくださいね。監察方に関わる仕事は無理でしょうけど、料理当番を代わるとか、部屋の掃除をするとか、そのくらいならわたしにもできますし。いつでもお気軽にどうぞ」

義理堅い人だな……と微笑ましく思いながら、山崎は「では、いつかお願いするとうましよう」と頷いた。

屯所に戻つた利恵は庭掃除を始めたが、（キリがない……）とため息をつき、辺りを見回す。このところ落ち葉が増え続けており、掃いた傍からハラハラと舞い落ちてくる。ただでさえまめが痛むのに……と手の平にきつく巻いたさらしを恨めしそうに見つめた。竹箒を握るとちようどまめの位置に当たるので、とりあえず巻いてみたのだ。それに……と、竹箒を自分の体に立てかけると、両腕を手のひらでこすつた。竹箒を左右に動かすだけで、腹筋と両腕の筋肉痛が痛む。

それでも朝の素振りに比べれば、ずいぶんましになった。この調

子なら、夕方の素振りは朝より楽かもしれない、と淡い期待を抱く。
……朝は本当につらかった。

筋肉痛が一番つらいのは、寝起きたと思う。寝ている間に筋肉が固くなるのか、それとも寝ている間は感じない痛みが急激に襲い掛かるからなのか……。そのメカニズムはよく分からないが、とにかく腕を上げるだけで精一杯だった。振り下ろす途中で止めるなんて、まさに拷問そのもの。

土方は見学していなかったが、どこかで睨んでいるような気がして、「やり直し！」と言われないうようにとにかく必死に振った。百回終えたときは、達成感より安堵感のほうが大きかったように思う。

ふと顔を上げると、山崎が玄関から出てくるのが見えた。

「またお出かけですか？」

「はい」

「お氣をつけて」

山崎は軽く頭を下げて挨拶し、背を向ける。

（監察方って、隊士と距離を置かなくちゃいけないのかな）と思いながら、門の向こうに姿が消えるまで見送った。

（そんなことないよなあ。島田さんはけっこう気さくだし……。

あ、でも林さんも無口か。というか、あの人はちょっと怖いな）

監察方のメンバーを一人ひとり思い浮かべたが、考えてみると、普段接しているのは山崎だけだ。これまで何度も一緒に食事をして、怪我の手当てもしてくれた。それなのに、今も距離を置かれているように感じる。

斉藤のように突き抜けて誰に対しても無愛想で、まったく興味がないといった風情ならこれほど気にならないのだが、山崎はつねに親切にしてくれるし、もともと優しい人なのだろうと思う。だからこそ、この距離感を寂しく思うのかもしれない。

正門を出た山崎は、利恵の一言を心の中で反芻していた。

初めて聞いたのは、芹沢の放火騒ぎのときだったと思う。そんなことを言ってくれたのは、これまで母だけだったろうか。

壬生浪士組に入隊してほどなく上役を任され、諸士取調役兼監察方の仕事もいずれば本配属すると言われてから、ほかの隊士とはあまり親しくならないようにしていた。従兄弟の山崎林五郎とさえ、ほとんど会話を交わしていない。あまり親しくなりすぎると、性格上、任務に支障をきたす恐れがあるかと思っただけだった。それでも寂しいと思っただけはなかったが……と、俯いて地面を眺めながら歩く。

さまざまな暗殺事件、問者の件など殺伐とした雰囲気広がるなかで、「お気をつけて」の何気ない一言を聞いたたびに、氣遣ってくれているのだと感じて心に温かなものが広がっていく。だからこそ、茶屋で利恵の泣き声が聞こえてきたときは、すぐにでも助けに入りたいと思った。しかしそれはかえって利恵を追い詰める結果になると思っただけこそ、耐えたのだ。

そこまで考えたとき、山崎はふっと口元をゆがめて笑った。

（同情のしすぎは、あかん）

ただの同情なのか、別の感情が芽生え始めているのかは、あえて分析しないことにした。

女同士

あれから一週間、山崎に蕎麦を奢ってもらって以来、出かける機会はなかった。山崎は忙しいようで、ほとんど顔を見ていない。雑用と稽古の合間に井上とお茶を飲んだり、為三郎を交えて沖田と遊ぶ以外は大きな変化もなく、穏やかな日々を過ごしていた。

手のひらのまめと筋肉痛は三日ほどで治まり、素振りにもういぶん慣れてきた。楽になったとはいえないものの、初日よりはずいぶん早く終えられるようになっていいる。

その日もいつものように雑用を終え、稽古場に向かおうとしたとき、土方が部屋から顔だけ出した。

「山南から、今日はお前を藤堂について行かせてくれと頼まれた。奴はもう少しで巡察に出るから、稽古場は帰ってきてからでいいぞ」

「何の用事でしょう？」

「知らねえ。自分で聞け」

「はあ……」

首をひねりながら、利恵は山南の部屋へ向かう。

「山南さん、今お邪魔してもいいですか？」

声をかけると「どうぞ」と返事が返ってきた。中に入ると、山南は筆を持って何やら書き物をしている。

「あの、藤堂さんの巡察に付いていけということでしたが、わたしは何をすればいいのでしょうか？」

顔を上げた山南は「まあ、付いていけば分かるよ」と意味ありげに含み笑いをした。

「ええ？ 何があるんですか？ 気になるじゃないですか」

「いいから、いいから」

そのとき、「ここにいたのか。野村、さっさと出て来いよ。置いていくぞ」と藤堂がやってきた。

山南はにこにこ笑っているが、理由を覚えてくれる気はなさそうだ。仕方なく立ち上がると、「では、行ってきます」といって部屋を出た。

玄関で草履を履いている藤堂の隣に座り、「何があるんですか？」と尋ねたが、山南と同じように「行けば分かる」としか答えてくれない。

巡察に付いていくのは二度目だった。前回の茶屋での一件を思い出し、不安を覚える。今回は山南が発案したようだし、藤堂もそれが何かを知っているようなので、怖い思いをすることにはならないだろうけど……。

悶々とした気持ちを抱えたまま、八番組の最後部をとぼとぼと付いていく。

町の途中で足を止めた藤堂は、先に行くよう隊士たちに指示すると、利恵のもとへやってきた。

そして「あの茶屋に入れ」と指を差す。

（茶屋？ また茶屋に一人置かれるの？）

利恵の不安を感じ取ったのか、藤堂がため息まじりにもう一度茶屋を指した。

「だからさ、よく見てみるよ」

入り口に、清楚な若い女性が立っている。よくよく見ると……。

「明里さん？」

利恵の表情が一気に明るくなり、茶屋へ駆け寄った。

「どうしたんですか？」

「店になかなか来てくれへんからな。山南さんをお願いしたんよ」
明里が手を振ったので振り向くと、「あとで迎えに来るからな！」
と言って藤堂も片手を挙げた。利恵は頭を下げて挨拶すると、すぐ明里に向き直る。

「山南さんも藤堂さんも、何も覚えてくれないから……」

すると明里は「驚かせたかっただけちゃう？ あの一二人はときどき子供みたいになるよね？」とくすくすと笑う。

「さ、中に入る？」

明里に手を引かれて店内に入ると、利恵は物珍しそうに周囲を見回した。今回の茶屋はこれまで見た中では少し小奇麗で広く、菓子だけでなく料理も出すようだ。

仕切りのついた座敷に上がり、横並びに座る。

「女同士の話はおおっぴらにでけへんもんな。こうやって、付き合つとる二人のようにしとけば、誰にも怪しまれへんよ」

明里は共謀者めいた笑みを浮かべて、利恵の腕に寄り添った。

「山南さんと藤堂さんには、うちが知つとるってこと、教えたんだよ」

「え？ なんで？」

「だって、会いたいなあとと言ってもなかなか来てくれへんし、あのお二人なら大丈夫やもん。土方はんにはうちのこと、絶対に言わへん。それに、旦那はん、少おしやきもち焼いてはったから。野村はんが女やと知つとるって言ったら、安心してはったよ」

「わたしも明里さんに会いたいと思つていたので、心から嬉しいです。あそこで過ごすようになってからは、女の人とゆっくり話す機会がまったくなかったの……。ここには友達もいないし……」

すると明里は「つらいよなあ。……旦那はん、心配しとったよ。」

まだ十七なのになあ、大変やね」と眉をひそめた。

「いえ……。本当は、二十四なんですよ。山南さん、歳のことは言わなかったんですね」

「嘘あ。うちと変わらんやん。うちは二十三なんよ。行き遅れ同士、仲良くしよな？」

（行き遅れ……）

利恵の笑顔が少し引きつった。言われてみれば、この時代の適齢期は十代だったような気がする。男として過ごしていたから、あまり気にすることもなかったのだが……。

「まあ、それでも明里さんには山南さんがいますし……」

「想いを寄せる人はおらんの？」

明里の言葉に、利恵は寂しげな笑顔を浮かべる。

「男として暮らしていますし、最近は剣術を本格的に身に着けるとか言われるし、もうそれだけで精一杯なんですよ。恋する余裕なんて……。仮にいたとしても、周囲から見れば男色にしか見えないんだろうし。それはそれでまずいですよねえ」

言いながら、（そうか。わたしが誰かと付き合えたとしても、男色だっと思われちゃうのか）とげんなりする。

「旦那はんは駄目やで？」

明里がふいに真面目な面持ちになり、利恵の顔を覗き込んだ。

「旦那はんは優しいから、つい心が動いてしまつかもしれへんけど」

「なんでそんなこと……。大丈夫ですよ、恩人だとは思っていますが、特別な感情は持っていないから……。もしかして、わたしに釘を刺すために？」

そのために会いに来てくれたのかと思い、利恵は悲しげな表情を浮かべて俯いた。

「違うよ。少ししか言葉交わしとらんけど、うち、野村はんのと好きやと思つたし、だから友達になりたかつたんよ？……ただ、旦那はんはけっこうもてるんよなあ。念のため言つところと思つただけ」

どちらにしても、あんなに想い合っている二人の間に入る隙間なんてないし……と苦笑する。

「山南さんは、明里さん以外の女にはまったく興味がないですよ。もつと自信持つてください」

「そうか？　なら、ええんやけど」

頬を染める明里を見て、羨ましく思つた。男として過ごす限り、自分は恋愛とは程遠い日々を過ごすのだろう。

それからしばらくの間、屯所での山南の様子や利恵の失敗話などで盛り上がり、楽しいひと時を過ごした。

藤堂が迎えに来ると、二人はあからさまにがっかりとした表情を浮かべる。

「なんだよ、そんなに邪魔者扱いするなよ」

「邪魔だなんて思っ
てませんよ。ただ、もう少し話していたかったなあと思っ
て……」

ふくれる藤堂に慌てて取り繕ったあと、利恵は明里を振り返った。
「すごく楽しかったです。またお会いできるといいな」

「うちも楽しかったよ。野村はんの話は面白いなあ。またいつば
い聞かせてな」

山南に預かったと言っ
て、食事代は藤堂が支払っ
てくれた。

「じゃあ、また！」

明里に手を振ると、後ろ髪を引かれながら利恵は茶屋を後にした。

屯所に戻るとすぐ、山南の部屋を訪ねた。

「今日はありがとうございました。女性とあんなにお話するのは
久しぶりで、本当に楽しかったです。明里さん、すごく良い人だし
……。友達になれて、嬉しかった」

利恵の言葉に、山南は破顔する。

「良かったよ。明里も君のことを気に入っていてね。会わせろっ
て何度も言われたんだよ」

「そうですか。……。あと、ご馳走様でした。料理もとてもおいし
かったです」

「いいんだよ。普段よく働いてくれるから、駄賃代わりだと思っ
てくれればいい」

「本当に、いつもお世話になってばかりで……」

「俺も君にはずいぶん世話になったしね。……。みつともないところ
も見せてしまったし」

利恵は首を横に振り、「みつともないなんて思っ
たことありませ

んよ。それを言うなら、わたしの方こそ、みつともないところをたくさんお見せしたような気がしますし」と苦笑した。

すると山南は「じゃあ、お互い様だね」とクスクス笑う。

「また、明里の話し相手になってあげてくれないか。あの子も、ここではあまり友達がいないうだから」

「喜んで」

利恵は心からそう思った。

かつあげ未遂

十月の半ばを過ぎた頃、夕飯の当番が回ってきた利恵が炊事場へ向かうと、辺りに何やら甘ったるい匂いが漂っていた。当番になった日はいつも一番乗りを目指していたので、（もう誰か作り始めちゃったのかな）と落胆しながら覗くと、監察方の島田が小さな鍋の中身を嬉しそうにかき回している。

「島田さん、食事当番なんですか？」

「いや、違うよ。俺は自慢の汁粉を作っているだけだ」

「へえ、汁粉ですか」

あわよくば自分もご馳走になろうと、興味津々に鍋を覗き込んだ利恵の表情が固まった。

「……これ、汁粉なんですか？」

ねつとりとした粘液状の汁を指差し、口元を引きつらせる。

「汁粉以外の何物でもない。お前も味わってみるか？」

島田が鍋から木べらを引き上げると、まるで水あめのように糸を引いた。

「あの……汁粉って、もう少し水っぽかったような気がするんですけど……」

「馬鹿言つな。このくらいのほうがうまいんだ。ほら、舐めてみるよ。病み付きになるぞ」

木べらについた汁粉もどきを小皿に乗せると、利恵に差し出した。なんだか怖いなあと思いつつ、島田の期待の眼差しに負けて、恐る恐る一口すすってみる。

「……！」

「どうだ？ うまいだろ？」

「……うまいというか、脳天に響くほど甘いというか……」

これまでこんなに甘いものは食べたことがない。あえて言うなら、餡子にさらに大量の砂糖を追加して、どろどろになるまで煮詰めた

ような感じだろうか。

（いくら甘党のわたしでも、これは無理）

水を含み、舌に残る強烈な甘味を洗い流そうとしたが、なかなか消えない。

「なんだ、お前にもこの旨さは分からなかったか」

「……どなたか分かってくださる方はいたんですか？」

「今のところ、誰もいない」

島田は少し肩を落としたが、「まあいいさ。これを独り占めできるんだからな」とすぐ笑顔になる。

「えっ、それを全部ひとりで？」

鍋の中には、汁椀五杯分は軽く入っている。一杯飲むと思うだけでも、気持ちが悪くなりそうなのに……。

「当たり前だ。食いたい分だけ作っただけだから。新物の小豆を使ったから、よけいに旨いぞ」

「糖分の取りすぎは良くないですよ」

「馬鹿言っな。これは俺の活力の元だ」

「……なるほど。島田さんのその見事な身体は、この汁粉でできているんですね」

「その通り」

島田は豪快に笑うと、「おっと、焦げちまう」と言って、再び鍋をかき混ぜる。

「じゃあ、わたしは夕飯の支度をするので……」

まだ汁子もどきが残っている小皿をさりげなく流し場に置くと、野菜籠を覗き込み、夕飯のメニューを考え始めた。

土方のもとへ膳を運び、部屋を出ようとしたとき、「お前、道は覚えたか？」と突然尋ねられた。

「巡察についていったのは二回だけですし、あとは山崎さんと蕎麦屋に行っただけなので、まだ覚えていません」

すると土方は少し考え込み、「ちよっとした使いなら頼めるよう、

道を覚えてもらいたい。明日から、午後の巡察についていけ」と言った。

「はあ……。でも、わたしの似顔絵が出回ってるんじゃないですか？ 道を覚えたとしても、一人で出かけるのは少し怖いような……」

「ああ、それに関しては心配ねえ。手引きした女に確認したんだが、木版は使っていないと言っていた。だから、似顔絵はあれ一枚きりだ」

それでも不安は払拭されなかったが、一人で自由に出かけられるようになるのなら、それはそれで少し嬉しくもある。それに、使いを頼みたいということは、鬼の土方にも信用してもらえたということなのだろう。探るような視線も、このところ感じていない。

雑用以外の仕事を任されるようになれば、お給料ももらえるかな……と少し期待しつつ、利恵は頷いた。

「分かりました。明日はどなたに付いていけば良いのでしょうか？」

翌日は、井上たちの巡察に付いていくことになった。

剣も使えないただの小姓だから、隊服は着なくていいと土方に言われたので、利恵は普段着のまま後ろを付いていく。

（覚えると言われても、これはしばらくかかるかも……）

目印になりそうなポイントを探しながら歩いているのだが、町並みがあまりに整然としているので、どこも同じように見えてしまう。しかも、利恵は方向音痴だった。取材の際は必ず地図を携え、かなり時間に余裕を持って出かけていたものだ。

（簡単なものでいいから、地図がほしいなあ）と思いながら見回している、井上が下がってきて「どうだい？ 覚えられそうかな？」と声をかけてきた。

「うーん……。どうでしょう。どの道も同じように見えてしまつて……」と情けない表情を浮かべると、「俺も最初は戸惑ったしなあ。まあ、毎日歩けばそのうち覚えるだろうから、がんばりなさい」

と苦笑する。

「はい」

自信なさげな利恵の肩をぽんぽんと叩き、井上は再び最前列に戻った。すると、利恵の前を歩いていた勘定係の河合が振り返り、励ますような笑みを浮かべる。

河合とはこれまで何度か料理当番で一緒になっていた。共通の話題がないのでそれほど親しくはなかったのだが、今回の巡回では何かと気にかけてくれている。

商家の生まれで算術が得意だという河合は、どちらかというとおとなしい雰囲気で、新撰組の中でもそれほど目立たない方だ。あまりはめを外すこともなく、いつもひっそりと微笑んでいる印象がある。

「みんな最初は迷っていたよ。五、六回も巡察に出れば、自然と覚えるから大丈夫」と言いながら利恵の隣に移動すると、目印になりそうなものや、おいしい料理屋、和菓子屋などを説明してくれた。おかげで屯所に戻る頃には、完璧にとはいかないものの、ただ眺めて歩くよりはずいぶん把握できたように思う。

「ありがとうございます」

大広間に戻ろうとした河合に礼を言うと、「いいんだよ。俺も最初はずいぶん困ったから、放っておけなかった」と笑顔を浮かべる。（いい人だなあ）と利恵も笑顔を返したとき、河合の隣に加納がいきなり登場した。そのまま河合の肩を抱き、奥へ向かう。

河合の引きつった表情が気になった利恵は、少し間を置いて静かに後を追った。

「……少しでいいんだよ」

「だから、以前もお断りしたはずですよ。俺もそれほど余裕があるわけではないので」

「じゃあさ、すぐに返すから、少しだけ用立ててくれないかな」

「……だめですよ。資金に手をついたら、切腹ものですよ」

「固いこと言うなよ。こっそり借りてこっそり返せば、ばれない

つて。……なんだよ、俺が信用できないってのか」

河合はなんとか断ろうとしているが、加納の口調が少しずつ脅すような響きを帯びていく。見かねた利恵は二人に近づくと、会話に割り込んだ。

「隊費の用立てなら、近藤さんか土方さんに直接お願いしてはいかがですか？ 勘定係といつても、河合さんの一存で決められることではありません」

振り向いた加納の殺気を帯びた視線に一瞬ひるんだが、自分は何も悪いことは言っていないと思い、利恵は顎を上げて睨み返す。

「つたく、副長の小姓だからって生意気な。副長に余計なこと言ったらただじゃおかねえぞ」

すれ違いざま利恵の耳元で囁くと、足音荒く去っていった。

加納の姿が見えなくなると、河合は「助かったよ」と息をついた。

「何度も断っているんだが……。加納さんは俺より立場が上だし、あまり強く言えなくてね」

「土方さんに報告しておきましょうか？」

「いや、いいよ。今日は一応引いてくれたからね。野村にも見られたことだし、少しは遠慮するだろう」

でも……と言いかけたが、河合は大広間で加納と一緒に暮らしていることを思い出し、口を閉ざした。自分は個室を与えられているからいいかもしれないが、同じ部屋で過ごす河合はどんな嫌がらせを受けるか分からない。

「分かりました。わたしじゃ頼りないかもしれませんが、何かあったらいつでも相談してくださいね」

利恵の言葉に、河合は嬉しそうに微笑んだ。

河合には黙っていると言ったが、利恵はどうしても加納のことが気になって仕方がなかった。蕎麦屋で見かけた様子から考えると、女に金をつぎ込んで、懐具合が寂しくなっているのかもしれない。

そこまで考えたとき、山崎も加納の様子を気にしていたことを思

い出し、一人頷く。

（土方さんにはまだ言わないとしても、山崎さんには相談してみよう）

利恵は屯所内をあちこち覗きながら、山崎の姿を探し始めた。

かつあげ未遂2

どこを探しても、山崎の姿はなかった。

蕎麦屋で奢ってくれた日からずいぶん経ったが、いつもすれ違っただけで、挨拶以外は言葉も交わしていない。今日も仕事でどこかへ出かけているのだろう。

（どうしようかな……）

とりあえず加納には注意したのだから、今すぐ何か問題を起こすとは思えない。しかしなるべく早く、誰かの耳に入れておいたほうがいいだろうと思う。

（あと相談できるとしたら、山南さんかなあ）と思い、山南の部屋へ向かったが、彼もまた留守だった。

仕方ないので、素振りをしようと庭へ降りた。竹刀を振る間に、何か良い案が浮かぶかもしれない。

「明日の巡察は俺と一緒にだよ」

結局なにも良い案など浮かばないまま素振りを終え、縁側に座って汗を拭いていると、沖田がやってきた。隣に腰を下ろし、「お前、ずいぶんがんばってるなあ」と利恵の汗まみれの顔を見回す。

「沖田さんがやらなすぎなんですよ。また土方さんに嫌味を言われますよ」

「でもさ、俺はほとんど勘で動いてるんだよ。なんていうか、稽古してもしなくても、あまり変わらないからなあ」

「腕力は身に付くじゃないですか。勘だけじゃ鍰競り合いになったとき、負けちゃいますよ」

「その前に斬るから大丈夫」

自分の腕前に絶対的な自信を持ち、ニコニコしている沖田を見て、そんな楽観的な……と苦笑した。だが確かに、稽古をしていなくても沖田の剣捌きと反射神経はすごいなと思う。永倉と稽古していた

ときも、一度も体に竹刀は当てられていない。

「それにさ、実際の斬り合いになると、竹刀や木刀を振ってるのとはぜんぜん違うからさ。稽古は意味ないって」

沖田の言葉に、利恵は眉をひそめた。

「そんなこと言ったら、一生懸命稽古している人たちに悪いですよ」

「少なくとも、お前はそのままじゃまずいだろ。だって、一発打っただけで竹刀落としちゃうんだし」

そう言っつて沖田はくすくす笑うと、「まあがんばって」と利恵の肩に手を置いた。

「とりあえず、明日はいろいろ教えてあげるからさ。楽しみにしておいてよ」

「はい、はい。でも、巡察はまじめにやってくださいよ」

「当たり前だろ。いつも真面目にやってるよ」

頬をふくらませる沖田を見て、「本当かなあ」と利恵は疑いの眼差しを向けた。

土方を訪ねようと部屋に向かった山崎は、仲睦まじい様子の利恵と沖田の姿を見て足を止めた。

お互い気を使うこともなく、言いたいことを言い合っている。そんな関係が少し羨ましいような気がした。ここに来てから、誰かに心を開いて話したことなどないような気がする。

沖田だったら命令を気にせず、すぐ助けに行っただろうか……。

小さくため息をつく、沖田が顔を上げた。一瞬真顔に戻ったが、すぐ「やあ、山崎。土方さんに用？」と笑顔になる。

「はい」

「今はいないよ。もうすぐ戻ってくると思うから、ここで待てばいい」

沖田の頭越しに利恵も顔を覗かせて「お疲れ様です」と微笑むと、
「じゃあわたし、お茶を用意しますね」と立ち上がった。

「いえ。お構いなく」と山崎が答えると、「俺は飲みたいな」と
沖田が言う。

「じゃあ、少し待っていてくださいね」

利恵の姿が消えると、沖田はにっこり笑って隣に座るよう促した。
「茶屋の件。……気づいてると思うけど、俺、土方さんから聞いたんだ。この間は睨んだりして悪かったよ。山崎は土方さんの命令で動いてただけだもんね」

山崎は小さく首を振り、「いえ。気にしていませんから」と微笑んだ。

「そう。ならいいんだけど。……ところでさ、武田ってどう思う？」

唐突に話が切り替わり、山崎は少し戸惑った表情を浮かべる。

「武田さん……武田観柳斎ですか？」

「うん」

山崎は武田の顔を思い浮かべながら「そうですね……。軍学に長けていますよね。野心も大きい方だとは思いますが……」と答える。
「なんかさ、やたら近藤さんに擦り寄っててさ。あいつのせいで最近ちよつと変わったのかなあと思ったんだ。もしあいつのことで何か変わった話とか聞いたら、教えてくれないかな」

「承知しました」

茶を運んできた利恵が腰を下ろしたとたん、土方が姿を現した。

「何をのんびりしてやがる。素振りには？」

「終わりました」

山崎が立ち上がったて挨拶すると、土方は部屋に入るよう促し、沖田に「山南も帰ってきたぞ。話があるんじゃないのか？」と声をかけた。

沖田は頷き、「俺は山南さんのところに行くよ。じゃあ、明日な」

と利恵に手を振りながら廊下を歩いていく。

利恵も縁側に上がり、自分のために用意した茶を盆に載せ、山崎のものと一緒に土方の部屋へ運ぶ。

「それ、お前が飲んでたんじゃねえのか？」

「今淹れたばかりですし、まだ口を付けてません。気になるのでしたら、淹れ直しますか？」

嫌そうな表情を浮かべた土方に、ムツとしながら答える。すると「なら、いい」と言つて、湯のみを手にとった。

山崎の前に茶を置こうと向き直ると、笑いをこらえているような表情を浮かべていた。利恵が尋ねるように眉を上げると、小さく咳払いをして真顔に戻る。

何がおかしかったんだろうと首をひねったが、せっかく会えたのだし、今のうちに話しておかないと。

「山崎さんに相談したいことがあるので、お話が終わったら声をかけてもらえますか？」

山崎が返事をする前に「相談つてなんだ」と土方が尋ねる。

「冬支度の件です」

咄嗟に口を突いて出た言葉だったが、実際このところ寝ていると寒くて目が覚めることも多くなってきたので、ついでに聞いてみてもいいかも……と思う。

「ああ。確かに前、時々盛大なくしゃみをしているもんな。親父くせえ」

（親父つて……）と、利恵は耳まで真っ赤になる。

「……仕方ないじゃないですか。寒いんですから……」

「まあいい。下がれ」

「……失礼します」

（まったく、なんでこの人はいちいち人に難癖をつけるんだろう）
恥ずかしいやらむかつくやらで赤面しつつも、何とか平静を装って部屋を出ると、自分の茶を入れなおすために炊事場へ向かった。

同じく茶を淹れにやってきた奥沢としばらく世間話をしてから戻ると、山崎は縁側に座って待っていた。

「すみません。待たせてしまいましたか？」

慌てて駆け寄ると、「いえ。今出たところです」と山崎は微笑んだ。

隣に座ったのだが、土方は地獄耳だということを出し、井戸のほうへ行こうと促す。山崎は一瞬訝しげな表情を浮かべたが、小さく頷いて歩き始めた。

辺りに人がいないのを確かめてから、河合と加納の件を伝えると、山崎は眉を寄せて考え込む。

「河合さんは同じ部屋に寝泊りしているわけですし、変に事を荒立てるのは良くないかなあと思ひまして」

「どうでしょう。未遂であっても隊費に手をつけようとしたとなると、このままにしておくわけには……。はつきりと隊費から用立てしると言ったんですか？」

「それが、加納さんの口から隊費と聞いたわけではないんです。

河合さんが、資金に手をつけるわけにはいかないって言ったのと、わたしが隊費に関しては局長か副局長に相談すればいいと言っただけで……」

利恵は記憶を辿ろうと、眉をひそめて宙を睨んだ。

「用立ててくれとは言っていましたけど、何からというのははっきり聞いていません。なので、確証を得るまでは、やっぱり近藤さんや土方さんの耳に入れないほうがいいのかと思っただけです。もちろんわたしが判断できることではないので、一度山崎さんに相談しよう……」

「そうですね」

山崎は少し考え込み、「しばらく、わたしも目を光らせておきます。ただ、お二人にいつまでも黙っているわけには……。折を見て、わたしからお話します。そのときは河合さんに被害が及ばないよう、計らっていただきますから」

「やっぱり相談して良かった」と利恵は大きくため息をついた。

「河合さんには言わなくていいよって言われたんですけど、やっぱり気になっちゃって。わたしも、なるべく気をつけて観察しようと思います」

山崎は「お願いします」と小さく頷くと、「それで、寒いということですが……」と話を切り替えた。

「皆さん、まだ夜着一枚で寝てらっしゃるんですか？」

「そうですね」

山崎の返事に、利恵は表情を曇らせる。

「そうすると、わたしだけでもう一枚お願いするのはなんだか……。それって隊費でまかっているんですよね？　だったら、今のままで我慢します」

「わたしが以前使っていたものでよかったら、夜着を一枚お貸ししますよ」

「それじゃ山崎さんが……」

「わたしの分は先日新調したので大丈夫です。風邪を引かれては困りますし、遠慮しなくてもいいですよ。今からお持ちします」と言って、山崎はすぐ背を向けて歩き出す。

「……ありがとうございます」

本当に、山崎には世話になってばかりで、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。いつか絶対恩返ししなくちゃ……と思いながら、利恵は山崎の背を見つめた。

腹いせ

その翌日、稽古場に行った利恵がいつものように見学していると、こちらを睨んでいた加納と目が合った。そのまま近づいてきたので、睨み返しながら身を固くする。

「よお。稽古の相手をしてやるよ」

「……遠慮します」

「座つて見てるだけじゃ意味ないだろう」

加納は右手に持った竹刀を肩に乗せ、挑戦的な視線を送ってくる。その背後から、土方がぬつと姿を現した。

「いいじゃねえか。相手してもらえよ」

（余計なことを……）

加納は、斉藤のように手加減はしないだろう。それどころか、こてんぱんにやつつけてやるうと思っっているに違いない。

しかし土方が言うのならやるしかないんだろうなと思い、のろのろと立ち上がった。竹刀を手に取ると、少し下がって構えた加納の前に立ち、そつとため息をつく。

「お願いします」と言っただけで正眼の構えを取ったとたん、加納は打ち込んできた。上から振り下ろされた一振りめは交わしたものの、加納はすぐに手首を返してなぎ払う。竹刀が勢い良く左肘に当たり、左手が竹刀から離れた。

そこで勝負はついたと思ったのだが、加納は再び構え、土方も止める様子はない。

利恵は仕方なくもう一度構えたが、左の肘から下が痺れていて、うまく竹刀が握れなかった。

また加納が打ち込んでくる。

「打ち返せ！」

いきなり土方の怒声が飛び、利恵は反射的に竹刀を前に突き出した。加納は軽くかわし、今度は袈裟懸けに振り下ろす。左肩にまと

もに受けてしまい、利恵はよろけて膝をつく。

「無理だと思い込んでいるから、萎縮して動けねえんだよ」

土方が呆れたような表情を浮かべている。加納を見ると、得意げにニヤニヤしていた。ほかの隊士たちもいつの間にか手を止めてこちらに注目しているのに気づき、利恵は悔しいやら恥ずかしいやらで、唇をかみ締めながら俯いた。

「もう一度」

土方の声に、加納が不敵な笑みを浮かべてまた構える。

肩と肘を打たれたせいで、利恵の左腕は力が入らなくなっていた。右腕だけで竹刀を支え、なんとか構える。

悔しげに唇をかみ締めている利恵を見て、土方は口の端を上げた。
(たまには本気出してみろってんだ)

やる気がないから、いくら稽古をしたところで身に付かない。平隊士となんとか打ち合える程度の資質はありそうだから、勝ちたいと思う相手ができれば、それなりに伸びていくだろう。

ゆづべ、山崎から加納の件は聞いていた。今回は確証がないということで、もう少し様子を見ることにしたのだが……。自分より明らかに弱い利恵に腹いせとは、想像以上に底の浅い人間だったのだなと思う。最初はこんな奴じゃなかった、と加納に苦々しげな視線を送った。

剣術も優れていたから伍長に据えたというのに、女遊びを覚えてからいきなり人格が変わった。いずれは落ち着くだろうと思っていたのだが……。

むつつりと考え込みながら二人の様子を見ると、利恵が構えたたん、加納はまたすぐ動いた。しかし三度目ともなると容易に予想できたらしく、上段から振り下ろされた竹刀を寸手で交わす。どうやら手首の動きを見ているようで、真正面に突き出された二振りめも交わした。三度目は体がついていかなかったのか、足をもつらせて転んだところへ再び左肩に竹刀が振り下ろされる。

とうとう利恵は竹刀を落とし、右手で左肩を押さえた。

「今日はここまでだ。屯所に帰って冷やしておけ」

「……ありがとうございます」

利恵が稽古の相手をしてくれた礼を搾り出すように言うと、加納は「いつでも相手してやるよ」と相変わらずニヤニヤしながら答えた。

「お前、野村ごときに何度もかわされてんじゃねえぞ。気が散ってるんじゃないのか」

土方の言葉に加納の表情が一気にこわばる。小さな声で、「申し訳ありません」とつぶやいた。

その表情にわずかながらも溜飲を下げ、利恵は「では、失礼します」と言って戸口へ向かう。

途中、奥沢と馬越が同情の視線を送ってきたので、大丈夫だと微笑んでみせた。しかし肩の痛みは、土方に殴られたときと同じくらいひどい。

屯所に戻ると早速水に濡らした手ぬぐいで肩を冷やしたが、痛みはひどくなるばかりだった。以前背中に塗ってもらった薬をもらおうと、屯所内をうろつくと歩き回って山崎の姿を探す。

（いない……。今日も出かけてるのかなあ）

山崎以外の人も薬を持っているかもしれないと思い、大広間へ向かう。稽古場で見かけなかった河合が、文机に向かって何やら考え込んでいた。どうやら会計作業を行っているらしい。

「打ち身に効く薬、持っていないませんか？」

そつと声をかけると、「どこか打ったのか？」と心配そうな表情を浮かべて近づいてきた。

「先ほど加納さんの相手をするになりました……。思い切りやられました」と苦笑する。

加納は眉をひそめ「ひどいな。……巻き込んでしまってますまない」と俯いた。

「なんで河合さんが謝るんですか。巻き込まれたなんて思っ
てませんよ。以前からあの人の行動は少し気になっていましたし」

「そうなのか？ …… ああ、葉だったね。少し待ってくれ」と言
って、河合は奥に戻り、戸棚をごそごとと漁った。

「ほとんど残っていないな」

「そうですか。 …… 山崎さんもいなかったしなあ。仕方ないです
ね。とりあえず冷やしておきます」

「山崎？ 山崎なら先ほど見かけたぞ。奥で局長と話しているは
ずだ」

さつき自分の部屋で肩を冷やしていたときは、隣には近藤しかい
なかったはずなのに……。すれ違いだったのかと苦笑する。

「近藤さんのお部屋で？ じゃあ、後で声かけてみようかな。あ
りがとうございました」

「いや……。早く治るといいな」

河合はまだ自分のせいだと気にしているようで、表情を曇らせた
ままだ。

「もつと強くなって、今度は少しでもやり返してみたいな。わた
しはまだ弱過ぎて河合さんには物足りないでしょうが、今度ぜひ相
手してくださいね」

利恵のまったくめげていない様子に、河合はやっと笑顔を浮かべ
る。

「ああ。野村の怪我が治ったら、ぜひ相手させてもらつよ」

河合と別れてすぐ、利恵の笑顔は消えた。心臓の鼓動に合わせて
打ち身の部分が脈打っているように感じる。

近藤の部屋の前に立って声をかけようとしたところ、二人はまだ
話している様子だったので、自室で肩を冷やしながら待つことにし
た。

時間がたつごとに、肩の赤みはどんどん濃くなり、腫れも大きく
なっていく。

この様子では左腕は上げられそうもないので、しばらく素振りは無理かな……と思う。しかし土方に言えば、きつと「なら、右腕だけでやれ」と言うのだろうな……とため息をつく。

しばらくすると隣の部屋から人が出てくる気配がして、「野村くん、いるのかね？ さつき、声をかけようとしていただろう？ 何か用があるのかな」と近藤が声をかけてきた。

「ええ。山崎さんに薬を貸していただこうと思ひまして……」と答えると、障子が開いた。

肩を冷やす利恵を見た近藤は、「どうしたんだ？」と驚いた様子で中に入ってくる。その後ろにいた山崎も、心配げに眉をひそめた。近藤は利恵の肩からそつと手ぬぐいを外すと、「ひどいな……。これは痛そうだ」と眉間に皺を寄せる。

「ちよつと打ってしまつて……。大広間に常備されている打ち身の薬が切れていたんですよ。山崎さん、持っていないませんか？」

「すぐにお持ちします」

近藤の肩越しに打ち身の状態を見ていた山崎はすぐに踵を返し、薬を取りに出ていった。

「どうして打つたんだね？」

どこまで話すべきか迷つたのだが、今日のことは隠しても仕方がないと思い、「加納さんが稽古の相手をしてくれたんですが、かわしきれず、竹刀をまともに受けてしまいました」と苦笑する。

「野村はまだ剣術が使えないというのに……」と険しい表情を浮かべたのを見て、河合のこともあるし、事を荒立てたくないと思つた利恵は「土方さんが立ち会つてくださつてましたので」と慌てて言い添える。

「あいつ、止めなかったのか」

「……誰かがわたしの相手をしてくれるなんて、珍しいですからね。せつかくだから、素振りの成果を見ようと思つたのでしょう」

近藤はそつと手ぬぐいを戻すと、「俺はまた出かけなくてはならんのだが……。大事にしるよ。稽古場に寄つて、怪我が治るまでは

素振りは休ませるように言うておくよ」と言うて立ち上がった。

利恵は両手を握り合わせ、感謝をこめた視線で近藤を見上げる。

「ありがとうございます！ 助かります！」

その姿がよほどおかしかったのか、近藤は豪快に笑うと、「自分では言えんだろうかなあ」と言いながら部屋を出ていった。

自覚と芽生え

薬とさらしを持って戻った山崎は、利恵の前に跪き、手ぬぐいを外すよう促した。

「肩なので、自分でできますよ」と遠慮するが、「さらしを片手で巻くのは大変でしょう」と言つて、そつと手ぬぐいの端を持ち上げた。改めて腫れ具合を確かめた山崎は、眉をひそめ、できる限り患部に優しく触れるように気をつけながら薬を塗り始める。それでも痛むのか、利恵は眉を寄せ、唇をかみ締めていた。

無言のまま薬を塗り終え、さらしを巻き始めてすぐ、山崎は背を向けてもらえば良かったと後悔する。背に向かつてさらしを回すたび、頬を寄せ合うかのように利恵と近づくからだった。利恵も同じように気恥ずかしく感じているらしく、ほんの少し頬を染め、不自然なほど天井をじつと眺めている。

ぎこちない雰囲気が漂う中、さらしがこすれる音が響く。

早く終えてこの空気から解放されたいと思う反面、巻き終えるのが寂しいような気もする。

結局、ちょうどいいと思えるところからさらに二回も巻き、これ以上は不自然になってしまふと思われたところで端を止めた。同時に、利恵は詰めていた息をホツと吐き出す。緊張したのか、「ありがとうございます」と言いながら、少し引きつった笑顔を浮かべた。ふいにその頬に触れたくなり、伸ばしそうになった手を自分の膝に引き寄せ、拳を握る。

「そろそろ昼飯時ですね。ご自分で持ってくださいか？」
尋ねると、利恵はいつも通りの笑顔を浮かべて頷いた。

「大丈夫ですよ。あ、一緒に食べましょうか？」

「いえ……。わたしはまたすぐに出かけなくてはいけないので」とすると利恵は「大変ですね……。忙しいのに、手当てしてください」と申し訳なさそうに頭を下げた。

「では、そろそろ行きます。お大事になさってください」

そう言って山崎は立ち上がり、部屋を出ようと障子に手をかけた。

「いつてらっしゃい。お気をつけて」

何気ない挨拶の言葉に、また胸が温かくなる。振り返って小さく頷くと、廊下へ出て障子を閉めた。

玄関に向かいながら、（まずいな……）と思い、小さくため息をつく。

頬に触れなくなっただのは、愛おしいと思ったからだ。

いつからだろう、そんな想いを抱くようになったのは。

（これからは距離を置かな、あかん）

感情に流されるわけにはいかない。近藤や土方の信頼を裏切るわけにはいかないし、こんな気持ちを抱いていると彼らに知れたら、利恵の立場が危くなるかもしれない。

それでも、あの打ち身の様子を見る限り、あと数日は手当てをしなくてはならないだろう。

感情を隠すのは得意だ。誰にも悟られぬよう、気持ちは胸の奥にしまいこもう。

ふいに背後から大きなくしゃみが聞こえてきて、思わず笑い出しそうになる。

あれが土方さんの言うところの、親父くさいくしゃみか……。

（敵わんなあ）と思いながら、小さく首を横に振る。

こんな調子で、感情を隠しとおせるだろうかと不安を感じた。同時に、利恵の手当てが楽しみでもある。

相反する気持ちに戸惑いながら、山崎は屯所を出ていった。

（あー、緊張した……）

山崎が出ていくと、利恵はもう一度、今度は大きく息を吐いた。これまで何度も手当てはしてもらったし、上半身をさらけだしたこともある。顔の汗を拭かれたときは動揺もしたが、今日ほど緊張

したことはなかったと思う。

山崎の顔が近づいたたびに、心臓が早鐘を打った。音が聞こえるのではないかと思うくらい激しかったので、つい息を詰めてしまったが……。あんなに緊張するのなら、最初から背を向ければ良かったのかと思う。

途中、何度も背を向けようかと思ったのだが、手当ての途中で急に向きを変えるのはなんだか不自然だし、うまい言い訳も思いつかなかった。ひたすら天井の木の目を見つめていた。歯科で治療を受けていたとき、どこを見たらいいのかわからなくてひたすら天井を眺めていたものだが、それと似た感覚だった。

……いや、ちょっと違うかも……と首を捻る。

利恵と話すときの山崎はいつも丁寧な口調だったし、打ち解けてくれたことはないように思う。それは常々寂しいと思っていたが……。

これまで幕末での生活に慣れるのに必死で、山崎の親切に甘えてばかりいたものの、男性として特別に意識したことはなかった。でもさっきは今にも抱きしめられそうな錯覚を覚え、胸が高鳴ったのだった。

襟をはだけたまま考え事をしていたせいで、首筋から背中にかけて冷えてしまったらしく、ふいにくしゃみが出た。鼻をすすりながら、襟を元に戻す。

正直、昼飯を断られたときは少しホッとした。あんなに緊張していたのだから、向かい合って食事したら、喉を通らなかったかもしれない。

（そういえば、ご飯食べないと）

昼飯を食べたら、沖田の巡察に付いていくことになっている。

（急がないと、食べる時間がなくなっちゃう）と立ち上がると、炊事場へと足早に向かった。

巡察に出ると、沖田は利恵を先頭に引っ張ってきて、観光ガイド

よろしく楽しげに町を案内する。しかしまじめな顔をして歩いている背後の隊士たちに申し訳なくて、利恵は終始困った表情を浮かべていた。

途中、ある旅籠の近くを通りかかったとき、中から若い女性が出てきた。ほんのり頬を染めて、こちらを眺めている。目が合うと慌てたように頭を下げたので、利恵もにつこりしながら挨拶を返した。

「知っている方ですか？」

同じく挨拶を返していた沖田に尋ねると、「うん。あの旅籠の娘で、近^キつていうんだよ。たまに休ませてくれるんだけど、けっこう親切で良い人だよ」と言つて、そのまま歩き続ける。振り返ると、近はまだ入り口に立ったまま見送っていた。うつとりしている視線を辿ると、どうやら見つめられているのは沖田のようだ。

「近さん、まだ見送ってくれてますよ」と声をかけると沖田も振り向き、片手を軽く上げて挨拶した。すると驚いたように身じろぎし、慌てて頭を下げると中へ戻っていく。

（ふうーん）

ニヤニヤしながら沖田を見ると、訝しげな表情を浮かべて首を傾げ、「なに？」と尋ねてきた。

「沖田さんも隅に置けませんねえ」

「なんで？」

「なんでって……。いえ、別に。気にしないでください」

近の好意にまったく気づいていない沖田を見て、（この鈍感男）と少し呆れた。

それから三日の間、夕飯を食べ終わった頃になると山崎がやってきて、薬を塗り直し、さらしを巻いてくれた。二度目からは背後に回って手当てしてくれたので、あのときのような気まずさは感じずに済んだ。しかし、どことなくよそよそしい雰囲気が始漂^{ハルカ}っていて、（どうしたんだろう。なにか怒らせるようなことをしたかな）と不安に思う。

「薬は今夜で終わりにしても大丈夫でしょう。でも、素振りはあると二日ほど休んだほうがいいかもしれません」

そう言って立ち上がった山崎に、「あの……」と声をかけるが、どうしてそんなによそよそしいのかと聞くことはできず、「ありがとうございました」と礼だけ述べる。

「いえ。では、わたしはこれで」

何かを言いたげに見上げてくる利恵の視線から逃れるように、山崎は背を向けた。

「あの……」

遠慮がちに利恵がもう一度声をかけると、振り向いて尋ねるように少し眉を上げる。

「わたし、何か失礼なことをしてしまったのでしょうか？」

思い切ったように尋ねる利恵の言葉に驚き、向かい合って片膝をつくと、目を合わせた。

「どうしてそんなことを？」

「いえ。なんていうか……、怒っているように見えたので。勘違いだったらすみません。でももし不愉快な思いをさせてしまったのなら、きちんと聞いて謝りたいなあ、と」

山崎の目になにかの感情がよぎったように感じ、利恵は顔を覗き込んだが、すぐ目を伏せられた。

「そんなことはありません。怒ってなどいませんよ。こちらこそ、そのように感じさせてしまってますみません。最近少し忙しくて、疲れが顔に出てしまっているのかもしれないね」

すると利恵は悲しげに眉を寄せた。

「お疲れのところ、わざわざ手当てに寄ってくださいって……。すみません、いつも煩わせてしまっていますね。……でも、怒らせたのではなくて良かった。もしわたしが何か不愉快な発言や行動をしたときは、すぐ言ってくださいね。できる限り、直すようにしますから」

山崎は小さく微笑み、「不愉快に思ったことなど、一度もありま

せん」と言つて立ち上がった。

「あなたは、そのまま良いですよ」

そして今度は利恵が何かを言う間を与えず、部屋から出ていった。

障子が閉じて山崎の姿が消えると、（怒ってるんじゃないくて、本当に良かった）と利恵は胸を撫で下ろす。手当てをしてくれていたときもそうだが、廊下や庭ですれ違ふときも自分を避けているように感じていたので、とても悲しかった。

手当ては今夜で最後と聞いて、今確認しておかないと、このままずっと距離が離れる一方なのではないかと感じ、思い切つて聞いてみたのだが……。

（疲れているだけだったのに、わたしつたら変なこと聞いちゃったな）と思い、急に恥ずかしくなる。

それでも、いつもの控えめな微笑みを見せてくれたことが嬉しくて、自然と口元がほころんだ。

冬の気配

利恵が肩の打ち身を作ってから、二週間たった。

あれ以来、加納はちよつかいを出してこない。時々睨まれはするものの、すぐぶいっと目を逸らされた。河合に話を聞くと、同じような状況だという。女遊びは相変わらずのようだが、最近は裕福な家庭の娘と付き合っており、女が貢いでくれるおかげで懐具合は温かいようだと言っていた。

最後の手当ての日から山崎のよそよそしさは消えたものの、相変わらず忙しいようで、顔を合わせる機会は減っていた。たまに見かけてもすぐ近藤や土方の部屋に入って話しこみ、また出かけていく。山崎をなんとなく意識し始めていることには気づいていた。顔を合わせれば嬉しかったし、出かけていくのを見送るときは寂しいと感じる。しかし恋と呼べるほどのものではなく、少し気になる人という程度で留まっていた。

暦は十一月に変わっており、利恵が幕末に来てからすでに二ヶ月半過ぎたことになる。ここでの生活にずいぶん慣れたし、友人と呼べる者も増えてきた。来たばかりの頃と比べれば、自分の居場所はかなり広がっているように思う。しかし現代に戻りたいという気持ちは、つねに胸にあった。可能性は限りなく低いとしても、家族が恋しい気持ちに変わりはない。だからこそ、山崎に対する気持ちにも自然とセーブがかかるのかもしれない。現代に戻れば、ここで知り合った人とは二度と会えないかもしれないからだ。

ここ数日、一気に気温が下がった。つま先や指先が凍えることも多い。一応、寝る前に湯を沸かして足湯をしたりもするのだが、気密性の高い現代の家屋と違って、この時代は外の冷気を遮断する機能は低く、すぐに体が冷えてしまう。火鉢を借りて部屋に入れてみ

だが、部屋を暖めるほどではなかった。

（寒い……）

この日の夜も、こたつを懐かしみながら布団の中でしきりに足をこすり合わせていた。しかしつま先は冷えていく一方で、なかなか眠れない。確か近藤の部屋には掘りごたつがあったはずだ。しかし最近では愛妾を囲っている別宅に泊まることが多いらしく、火が入っていることはほとんどない。今夜も近藤の部屋には人がなく、そちらに泊まるのだろうかと思う。

ふと炊事場に生姜があったことを思い出し、生姜湯でも飲んで温まろうと布団を出る。おそらくかまどの火は消えているだろうから、少し時間がかかりそうだが……。

静かに部屋を出たのだが、障子を閉めたたん、隣の部屋から「どこへ行く？」と土方の声がした。起きていたらしい。

「寒くて眠れないので、生姜湯でも作ろうかと……。土方さんも飲みますか？」

「ああ」

廊下は部屋よりさらに寒くて、袖の中に手を入れて腕を抱え込み、足早に炊事場へと向かう。

「さぶつ、さぶつ」とつぶやきながら、つけ木に火を起こした。スイッチひとつですぐ火が点くガスコンロが懐かしい。こんな風にいちいち火をおこさなくても、沸かした湯は保温ポットに入れておけば何時間でも熱いままだし、飲みたいときはいつでも飲めるのに……。

かまどの前にしゃがみこみ、そんなことをぼんやり考えていたら、「こんな時間に何してるんだ？」と声をかけられた。振り返ると、酒で少し顔を赤くした永倉が、柱に寄りかかって立っている。その横に、同じく顔を赤くした野口もいた。

「体を温めようと思って、しょうが湯を作っています。飲みますか？」

「いらねえ。俺は水を飲みきたんだ」と永倉は炊事場に降り、

ひしゃくを手取る。

野口は「俺は飲もうかな。ここまで歩くうちに体が冷えてしまった」と言った。

「今夜は特に冷えますよね」と言いながら、利恵は摩り下ろした生姜をさらしで巻き、絞り汁を湯のみに落とす。黒糖を加え、やつと沸いた湯を注いだ。

「どうぞ」と野口に渡すと、残り二つを盆に載せる。

「わたしは戻りますね。おやすみなさい」

二人に挨拶して部屋に向かう途中、厠へ行こうとしていた馬越に出会った。

「寒いと小便が近くなっちゃうよな。……あ、いいなあ。しょうが湯かあ」と鼻をひくつかせる。

「飲みたいですか？ ……じゃあ、これ、どうぞ」

かまどの火を消さずにいて良かったと思いながら、自分の分を馬越に渡した。

土方に生姜湯を渡すと、自分の分を作ろうともう一度炊事場へ向かう。入り口に二人の隊士が立っていた。

「俺も生姜湯がほしいな。まだあるか？」

「……作りましょうか」

「おお！ 頼むよ！」

（いい加減、わたしも飲みたい……）

利恵は顔を引きつらせ、「すみませんが、ほかにほしい方がいらつしやるか聞いてきてもらえませんか？ 時間ももう遅いですし、

必要な分は一氣に作ってしまいたいので」と頼むと、二人は大広間へ向かった。

結局は十三杯作ることになり、黙々と生姜を摩り下ろし続けている途中、先ほど会った野口が頭に浮かんだ。

野口健司は、芹沢派だったはずだ。素朴な雰囲気で人柄も良く、それほど親しくはないものの、利恵も好感を持っている。肅清が行われた日、芹沢たちが八木家に帰っても野口だけは遊郭に残り、酒

を飲んで楽しんでた。どうして彼だけ助かったのか、その理由は誰にも聞くことはできない。ただ、永倉と仲が良いようだし、害のある人物にも見えなかったので、見逃してもらえたのかもしれないと思う。

考え事をしている間に作り終えた生姜湯を大広間に運び、もう誰にも声をかけられないようにと利恵は急いで自室へ戻った。

待望の生姜湯を飲むと、体がぽかぽかと温まる。レモン汁を入れていないので辛味がよけいに強く感じられるが、ぬくもりを得るという目的は果たしたので、今のうちにと布団にもぐりこんだ。いつもよりずいぶん遅い時間になっていたせいか、すぐ眠気に襲われる。明日は湯たんぽを探してみよう……。そう考えたのを最後に、あつという間に深い眠りに落ちていった。

「何なんだよ。かちかち、かちかち……うるせえなあ」

巡察の途中、利恵の様子を見に列の後ろに下がった原田が、呆れたようにつぶやいた。

「いや……、だって、さ、寒いんですよ……」

利恵は体を小刻みに震わせ、歯を鳴らし続ける。その日は曇り空で、北風がいつにも増して冷たかった。

「走れば温まるんじゃないか？ 待っててやるから、その辺ぐるりと一周してこいよ」

「いえ、いいです。そんな目立つこと……。あ……歩き続けていれば、そ、そのうち……」

「……まあ、それは少し薄着かもしれねえな。帰ったら何か羽織るものを探すか」

利恵の全身を眺め回しながら、原田がそうつぶやいたときだった。前列のほうで、何やら騒ぎが持ち上がっている。

「……なんだ？」

騒ぎのもとへ向かう原田のあとを、相変わらず歯を鳴らしながら利恵も付いていった。すると、浪人風の男三人と、隊士の濱口が睨

み合っている。

「どうした」

「濱口さんにわざとぶつかっておいて、難癖を付けてきたのです」
中村が答えると、原田は三人を睨みつけながら声を張り上げた。

「俺たちが新撰組と分かっているながら難癖つけてくるとは、どう
いう了見だ」

「ぶつかっておいて謝らないこの男が悪いだろう？ まったく、
壬生狼とはよく言ったものだ。幕府の犬とはいえ、躰は大切だぜ？」

原田のこめかみに血管が浮き上がり、鯉口を切る音が響く。する
と浪士たちは刀を抜いた。

「原田さん、こんな人通りの多いところで刀を抜いては危険です
よ」

町人が怯えた視線で遠巻きにこちらを眺めているのに気づき、利
恵は原田の袖口を掴んで引つ張った。いつの間にか齒の音は鳴り止
み、寒さも感じなくなっている。

そんな利恵を見て、浪士がふてぶてしく笑った。

「へえ。中には牙を持たぬ子犬もいるんだな」

「ああ、確かにこいつは子犬だ。だが仮にも会津藩お預かり、新
撰組の隊士だ。馬鹿にしたとなりや、お前らをこのまま帰す訳には
いかねえなあ」

原田が刀を抜くと、背後で隊士たちが次々に鯉口を切る音が重な
る。

「お前は足手まといだ。下がってろ」

袖口を掴んだままその場に固まっている利恵を、後ろへ押しやつ
た。

言われるまま、後ろに下がろうとしたときのことだった。

原田の少し前に立っていた濱口の肩に浪士の一人がいきなり斬り
付け、そのまま蜘蛛の子を散らすように三人がそれぞれ別の方角へ
走り去る。

「追え！」

原田の怒号に、隊士たちが一斉に走り出した。

利恵は呆けたようにその場に立ち尽くし、蹲る濱口の背を見つめている。

「お前は濱口に付いている！」

そう言つて、原田も走り出した。

慌てて濱口のもとへ駆け寄つたのだが、何をどうしたら良いのか分からない。

オロオロしながら「大丈夫ですか？」と傍らに跪いた。

「ああ、何とかな。……油断してしまった」

濱口は痛みをこらえようと固く目を瞑り、齒を食いしばっている。傷口を押さえている指は、血で赤く染まっている。

「縛るので、少し手を離してもらえますか」

手ぬぐいを取り出して傷口に当てると、脇の下を通してきつく縛る。

かなりの深手なのだろうか。染み出した血は、どんどん手ぬぐい全体に広がっていく。

（どうしよう……）

辺りを見回したが、人々はみんな目を逸らして足早に通り過ぎ、助けてくれそうもない。

そのとき、別の道筋を巡回していたはずの井上たちが、こちらへ駆けてくるのが見えた。

「井上さん！」

利恵が立ち上がつて手を振ると、井上が息を切らしながらやってきた。

「すれ違った町人が不逞浪士の騒ぎがあつたと話していたので、急いでやってきたのだが……」

状況を簡単に説明したあと、「濱口さんを医者に診せたいのですが……。かなりの深手を負つたようなので」と言つてまだ蹲る濱口に目を向ける。

井上が背後に向かって「蟻通！」と呼ぶと、強面の男が駆け寄ってきた。

「濱口を医者のところへ連れていってくれ。野村くん、君も一緒に行ってくれるか」

「分かりました」

蟻通と二人で濱口を支えながら歩き出すと、井上が厳しい声で次々と指示を出す声が聞こえてきた。普段の温厚な雰囲気は微塵もない。

今の理恵は、斬り合いの場に立ち会った恐怖より、苦しげに荒い呼吸を繰り返す濱口を心配する気持ちが先立っている。

「医者は遠いのですか？」と尋ねると、「いや、すぐだ。あの向こうの角を曲がり、三軒ほど先にある」と蟻通が答える。

「もう少しですからね。辛抱してくださいね」

時々濱口に声をかけながら、なるべく負担がかからないようにと必死に支えた。

冬の気配2

医者が濱口の襟を開き、肩を出すと、ざっくりと深く切れた傷口が見えた。あれは脂肪だろうか、それとも骨だろうか……。傷口の奥に、青白いものが見える。本来なら見ることはないであろう肉体の中身を見たことで、頭からすつと血が引いていくのを感じた。

利恵の顔色に気づいた医者が、「外に出とき。ここで倒れられても、二人を同時に診る余裕はあらへん」と言う。

医者の娘らしき女性が治療を手伝い、蟻通は濱口の体を支えている。手伝おうと思つて部屋に残つたのだが、特に必要はなさそうだったので、ありがたく部屋を出て縁側に座つた。

屯所に比べるとこじんまりとした庭を眺めながら、水琴窟の音に耳を傾ける。

気分が落ち着いてきたと思つたとたん、濱口の絶叫が響き、利恵はびくつと身を縮めた。

「もつとしつかり押さえてくれへんと」

「すまん。……濱口、辛抱してくれ」

医者と蟻通の声が漏れ聞こえてくる。

辛抱しろって……。

麻酔もなしにあの大怪我を治療しているというのに、なんて無茶なことを言つんだらうと思ひながら、濱口が斬られたときのことを思い出す。

あれは本当に一瞬の出来事で、恐怖を感じる暇もなかった。

その後は濱口の傷が心配で仕方がなかったし、ずっと呻き声を聞いている今もそれは変わらない。

濱口は、「油断した」と言っていた。人数的に勝っていたので、まさか斬り付けてはこないだらうと思つていたのだらうか。あのと

き鯉口は切っていたが、まだ抜いてはいなかった。斬り付けられたのは、ちょうど鞘から抜こうとしたときだったように思う。

これまで参加した巡察はいたって平穩だったが、小さな小競り合いは普段からよくあると聞いている。倒幕派ではなくとも、新撰組を快く思っていない人々は多い。

いずれにしても、死人が出なくて良かった……と考えながら、どんどん暗い色へと変わっていく雲を見上げた。

見上げた雲から、ポツポツと雨が降りてきた。考えにふけっていた利恵はふと我に返り、体がまた小刻みに震えていることに気づく。縁側から下ろしていた足を引き上げ、胸元に膝を引き寄せた。背後で障子が開く音がしたので振り返ると、血のついた布を持った娘がこちらを見下ろしている。

「寒いん？」

「はい。少し……」

利恵が頷くと、娘は「素直なお人やね」と言って小さく笑った。

「もう少し厚手の羽織を、お貸ししましょうか？ 父様のお古やけど、それでええなら」

一瞬遠慮しようかと思ったのだが、このままでは風邪を引いてしまうと思い、「お願いできますか？」と答える。

娘は持っていた布を掲げて「先にこれを片付けるので、少し待っててな」と言っただけで去っていった。

しばらくして戻ってきた娘は、紺色の羽織を差し出した。とにかく暖を取れば良いと思い、見栄えは気にせず、薄手の羽織の上に重ねて着る。

「暖かい……。助かりました」

「これはもうほとんど着とらんし、返すのはいつでもええよ」

「ありがとうございます」

利恵が礼を言うと、娘は微笑んで頷き、また部屋の中へ入っていた。

閉じた障子を眺めながら、歳の頃は十七くらいだろうか考える。美人ではないが、可憐な雰囲気があり、笑顔がとてもかわいらしい。あの娘の存在に癒される人も多いだろうなと思う。

うめき声が消えてしばらくすると、三人が部屋から出てきた。

「俺は組長たちを探しに行く。野村はここで濱口に付き添っていてくれ」

蟻通はそう告げると、医者と娘に「よろしくお願いします」と頭を下げ、外へ向かう。

「今は眠ってはるから、静かにな」

医者言葉に頷き、利恵はそつと部屋に入った。

相当つらかったのだろう。濱口の閉じたまぶたの下に、濃い隈ができている。発熱もしているのか、顔には大量の汗が滲んでいた。傍らの水桶にかけてあった手ぬぐいでそつと顔を拭いてやりながら、肩が触れた触れない程度の喧嘩でこれほどの怪我をしてしまうなんて……と胸を痛める。原田はこの怪我も、武士の誇りだと言うのだろうか。

雨はすぐに止んだものの、外は薄暗いままだった。曇っているとより、日が傾きかけているのかもしれないなと思ったとき、障子が開いて原田が現れた。

「治療のときにかなり体力を消耗されたようで、まだ眠っています」

利恵の言葉に、原田は小さくため息をついた。

「そうか……」

そのまましばらく濱口の寝顔を眺めていたが、「そろそろ日が落ちる。帰るぞ」と利恵に声をかける。

「付き添いはいいんですか？」

「ああ。命に別状はねえってことだったし」

二人は医者と娘に暇を告げ、揃って外へ出た。

歩き始めてすぐ「あの三人は捕まえました？」と利恵が尋ねると、

原田は笑顔で頷いた。

「まあな。もう少しで取り逃がすところだったが、井上さんたちが

来てくれたおかげで挟み撃ちにできたんだ。簡単に捕縛できたぜ」

「……ほかに斬られた方は？」

「いねえ」

利恵が胸を撫で下ろすと、「濱口は……氣い抜いてたからな。あの怪我のおかげで、今後剣は振れねえだろうって医者が言ってた」と原田は深いため息をついた。

「動けるようになったら、実家に帰ることになるだろうな。かわいそうに」

「そうですか……。寂しくなりますね」

俯いた利恵を、原田は小首を傾げてまじまじと見る。

「てつきり怯えているかと思いいながら迎えに来たんだが、意外と平気そうだな」

「だって、濱口さんが心配でしたし。それにあつという間のできごとで、怯える暇もなかったというか……」

「ふうーん。まあ、いいけどよ。いちいち怯えられると、面倒くせえしな。……で、それは医者さんところで借りたのか？」

「はい。娘さんが貸してくれました」

「お悠さんかあ。いつ見てもかわいいよなあ」

鼻の下を伸ばす原田を見ながら、あの人はお悠さんっていうのか……とぼんやり考える。そういえば、親切にしてくれたのに、娘の名前を尋ねていなかった。

明日の巡察の途中、医師宅に寄ってもらおう。濱口の見舞いをしたいし、羽織も返したい。そして改めて、お悠に礼を言わないと。

屯所に帰ると、原田がいない厚手の羽織はないかとみんなに声

をかけてくれた。藤堂がちょうどいいのがあると一枚譲ってくれたので、早速そちらに着替える。借りた羽織は埃を払い、皺にならないうようにと衣桁にかけた。

寝る前には肌襦袢を重ね着し、さらに上掛けの上に羽織をかけて床に入る。しかしとうとう昼間の冷えて風邪をひいてしまったらしく、咳が出始めた。

翌朝、朝飯を運んできた利恵に、いきなり土方が紙の包みを差し出した。

「飲め」

「なんですか、これ」

「薬だ」

「……もしかして、石田散薬ですか？」

加納に肩を痛めつけられたとき、「打ち身に効くから」と何度か飲まされたことがある。効果があつたかどうかは分からなかったのだが、とにかく苦くてまずかつたことだけは覚えている。

「ただの鼻風邪ですから。これが効くのは打ち身なんですよね？」紙包を文机に置いて土方のほうへ滑らせると、押し返された。

「風邪にも効く薬草を混ぜてある。そろそろ風邪が流行る時期だと思つて、この間用意しておいたんだ。風邪ごときでいちいち医者に診てもらつていては、隊費がもたんからな」

「なら……あとで飲ませていただきます」

利恵は紙包を袖に入れ、立ち上がった。部屋を出ていこうとしたとき、ふと思いついて土方に尋ねる。

「巡察の途中、濱口さんを見舞いに行こうと思います。昨日お悠さんにお借りした羽織も返さなくてはいいけませんし。濱口さんに何か言伝はありますか？」

「……いや。特にない」と言いながら、土方は箸を手を取った。「分かりました。では失礼します」

業務中に怪我をしたのだから、見舞いの言葉くらいかけてあげて

もいいじゃないかと思いつながら、利恵は部屋を出た。外の冷たい空気を吸い込んだ瞬間、軽く咳き込む。熱はないのだが、鼻がつまっているせいで頭がボーっとしているし、喉も少し痛い。

（本当に風邪に効くのかな、これ……）

袖から紙包を取り出し、疑わしげな視線を投げかけた。日本酒で服用するという方法もなんだ怪しいなあと思う。しかし「飲んだか」と聞かれたときに後ろめたい思いをするのは嫌だったので、酒を探しに炊事場へ向かった。

初雪

濱口の回復は思わしくなく、あれから一週間、ずっと発熱が続いている。傷の痛みは相当なものらしく、翌日見舞いに行ったときは体を丸めて唸っており、話をできる状態ではなかった。

斬られてしばらくの間は、アドレナリンのおかげで痛みが緩和されていたのかもしれない。目覚めたあとはずっとあの調子だと、お悠が鎮痛な面持ちで教えてくれた。

一方利恵の鼻風邪は悪化することもなく、二、三日で治った。石田散薬が本当に効いたのかどうかは分からない。今は肌襦袢を重ね着したり、庭掃除などをするときは風呂敷を頭巾のように巻いてみたりと工夫しながら、なんとか寒さをしのいでいる。どうも江戸出身の人たちから見ると着膨れしている利恵は無粋に見えるらしく、何度かからかわれたのだが、やせ我慢をして風邪をひくよりはいいので聞き流していた。

冷水での炊事や洗濯で手は赤くかじかみ、アカギレもできてきた。利恵の手を見たお悠が膏薬と呼ばれるものをくれたので、こまめに塗っている。しかしなかなか良くなかった。

井上は「また風邪を引いたらかわいそうだからね」と、温石をくれた。カイロのようなものもあるらしいのだが、温石のほうが手軽なんだよと笑っていた。

人の親切に触れるたび、感謝の印に何か品を渡したいと思うのだが、土方に自分にも俸給をくれとは言い出せず、もどかしい思いを感じている。

斬りつけられた濱口の左肩の傷はふさがったが、腕がうまく上がらなくなってしまったらしい。そのため、十一月も後半に入った頃、脱退の許可が出た。

許可が出た翌日の早朝、数少ない私物をまとめ、旅支度を整えた濱口が屯所を出ていこうとしていた。利恵は見送ろうと、小走りで門へ向かった。

「いろいろ世話になったな」

「なんのお力にもなれず……」

寂しそうな笑顔を浮かべる濱口に、それ以上何も言えなくなる。

「何度も見舞いに来てくれてありがとう。寝ているだけじゃ退屈で仕方なかったからな。いい気晴らしになった」

濱口は利恵の背後に目をやると、「お世話になりました」と頭を下げた。

「今までご苦労だった。元気でな」

利恵の隣に立ったのは、原田だった。

「そろそろ発たないと、到着前に日が暮れてしまいますので、これで」

そう言って門を出ようとした濱口は、「ああ、そうだ。言い忘れていたことが」と足を止めた。

「野村は刀を持っていなかっただろ？ 俺はもう使えないから、馬越に預けておいた。銘柄はないが、良い刀だ。早く腕を上げて、新撰組のために使ってくれ」と笑顔を向ける。

利恵は目の奥が熱くなるのを感じ、泣かないようにと空を見上げた。大事にしていた刀を手放すなんて、相当つらい決断だったのだろうと思う。

ふと、空から小さなものが数個降ってくるのが見えた。

「……雪？」

その言葉に、濱口と原田も空を見上げる。

「初雪か」

原田がつぶやくと、濱口は荷を背負いなおし、「それならなおさら急いでたたないと。では、お二人ともお達者で」と頭を下げ、門をくぐる。

二人は無言のまましばらく見送っていたが、舞い落ちる雪の量が

増えてきたのに気づいた原田が「お前、鼻が赤くなってるぞ。そろそろ中に入ろうぜ」と踵を返して玄関へ向かう。

「それにしても、お前に剣を譲るとはなあ。宝の持ち腐れにならなきゃいいが。濱口の思いに報いるよう、せいぜい精進しろよ」

「……はい」

返事をしながら、以前茶屋で襲われたときのことを思い出す。あのとき、武器を持っていなかったから相手も油断していたのではなかったか？

そういえば、浪士は利恵を「牙を持たぬ子犬」と言っていた。

濱口は、刀を抜こうとした瞬間に斬られた。

子犬が身の丈に合わない牙を生やしたら、どんな結果を迎えるのだろうか。

「あ、そうだ。原田さん」

声をかけると、「なんだ？」と先を歩いていた原田が振り返る。

「濱口さんの傷も、武士の誇りですか？」

すると原田は大声で笑い、「当たり前だろ。油断した結果とはいえ、刀傷には違いねえ」と答えた。

利恵は苦笑を返しながら、単純な原田を羨ましく思う。

ただ武士として生きることだけを目指し、なんの迷いも感じていない。

じゃあ、わたしの信念はなんだろう……と、考えを巡らせた。

現代に帰りたいということ？ 希望は捨てていないが、帰るための方法がまったく分からないため、半ば諦めも感じている。

ここ幕末でも、何かを成し遂げたいという思いはない。ただ流されるまま雑用をこなし、剣術の稽古をしているだけだ。

加納に痛めつけられたときは悔しいと思ったし、いつかはやり返したいと思ったが……。美男の剣豪ということで、牛若丸にも例えられるほどの加納には、どんなに稽古を積んでも敵わないだろうなと思うている。

（そんな中途半端なわたしに、大事な刀を託すなんて）と、濱口に対して申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「おい、そんなところでぼんやりしていると、また風邪ひいちゃうぜ？ 早く入れよ」

すでに玄関に入り、上がりかまちに足を乗せた原田が振り返り、声をかけてきた。考え事をするうちに、いつの間にか玄関の手前で足が止まっていたようだ。

雪はまだ淡く、羽織に触れたものはどんどん消えて、小さな雫に変わっている。羽織を軽く手で払い、中へ入ると、もう一度外を振り返った。

ここに来たのは路面に塵気楼が見えるほど暑い時期だったというのに…… と思い、小さくため息をつく。

「濱口が行っちゃったのが、そんなに寂しいのか？」

「それもあります、初雪だというのにずいぶん降るんだなあと思って……。原田さんも鼻が赤いですよ。熱いお茶でも淹れましょう。部屋で待っていてください」

気持ちをなんとか切り替えると、利恵は炊事場へ向かった。

昼を過ぎても、雪は止まなかった。少し積もってきたので、正門から玄関まで歩きやすいように竹箒で雪を払い、道を作る。

非番でどこかへ遊びに行っていた隊士が二人、門からやってくるのが見えた。通りやすいようにと脇によけて道を広げていると、「そっぴや、山崎って郷里に嫁がいるんだってな。いいなあ。一人身で入隊しちまうと、上役以上にならないと嫁はもらえないもん。な。ここに入る前にもらうときゃ良かったよ」と話しながら通り過ぎていく。

利恵が持つ竹箒の動きが止まった。

「とはいえ、いたらいたで面倒だろ。ただでさえ少ない俸禄なんだ。家族なんて持つちまうと、島原通いなんてできなくなる」

「そりゃそうだ」

そんな会話を交わしながら玄関に向かう二人は、竹箒を固く握り締めたまま動かなくなった利恵の様子にまったく気づいていなかった。

そういえば、山崎が島原へ遊びに行くなんてことは一度もなかった。真面目だからなのかと思っていたが、奥さんがいたからだったのか……と考え、胸に重い石の塊が落ちてきたような苦しさをを感じる。

家族がいても近藤のように妾を囲う人もいるが、利恵が来たところの山崎は入隊したばかりだったから、そんな余裕はなかっただろう。それに、妻がいれば他の女と遊ぶような性格ではないと思う。

「そつか。……そうだよな」

胸の苦しさを吐き出すように、小さくつぶやいた。

若く見えるといつても、山崎も二十九歳だ。妻がいてもおかしくない。土方たちが独身だから、なんとなく山崎もそうなのだと勝手に思い込んでいただけ。実家の話は聞いたことはあるが、どうしてここに入隊したのかという流れで説明してくれただけで、それ以上は家族について質問したこともなかったし。

なんでこんなにショックを受けているんだろうと、ため息をついた。

少し意識しているだけだと思っていたのだが、気づかないうちに恋愛感情へと変化していったのだろうか。

（今さらそんなこと考えたって、奥さんがいるんだし）

いつの間にか俯いていた顔を上げ、利恵は猛然と竹箒を振るい、道を広げていく。

もともと恋愛には執着しないほうだった。好きになった相手に恋人がいればすぐ諦めたし、これまで付き合った相手にも深く入れ込んだことはない。

きつと山崎のことも、時間がたてば意識しなくなるだろう。

初雪 2

山崎は近藤の用事で大阪の屯所に行っており、数日留守にしていたのだが、ちょうど初雪の降ったこの日帰ってきた。

正門をくぐると、何かに取り付かれたように竹箒で雪を掃いている利恵の姿が目に入った。

「もう十分だと思いますよ」

土方にまた何か言われたのだろうかと思いつつ声をかけると、はっとしたように顔を上げ、その表情が一瞬こわばる。

しかしすぐに笑顔を浮かべて「お帰りなさい。足が冷えているでしょうから、お湯を用意しますね。座って待っていてください」と言つて玄關の中へ入っていく。

なんだか様子がおかしいな、と山崎は思った。自分を見たとき、なぜ表情が変わつたのだろう。しかもその後見せた笑顔も、無理やり作つたような……。

そのとき（ああ、そういえば……）と、濱口のことを思い出した。何度か見舞いに行くうち、ずいぶん仲良くなつていたようだ。その彼が除隊して郷里へ帰ることになったと聞いたが、確か今日だったはず。それで落ち込んでいるのかもしれないと考え、そのときはさほど気にしなかった。

しかし数日たつても、利恵の態度はおかしいままだった。

笑顔は向けてくれるのだが、そそくさとすぐに去ろうとするし、話していても伏目がちだ。

濱口が去つたせいだと思つていたのだが、他の隊士にはいつもと変わらない態度で接しているように見えた。

「どうかしましたか？」と尋ねても、「何もありませんよ。なぜですか？」と笑顔を作る。表向きは普段通りだし、怒っているようにも見えないので、それ以上は聞けなくなる。

（俺、なんかしたんか？）

大阪に発つ前のことを思い起こしてみるのだが、見送ってくれたときの利恵に変化はなかったはずだ。

どうすれば良いのか分からず、山崎は心の中でため息をついた。

時々手に息を吐きかけながら洗濯をしている利恵のもとへ、土方がやってきた。

「いい加減、道は覚えてたろう？ あとで菱屋に隊服を取りに行け」

菱屋は新撰組の隊服を請け負っている呉服屋だった。巡察の途中、何度か寄ったことがある。

「一人でですか？」

「当たり前だ。受け取るだけなのに、なんで付き添いをつける必要がある」

「……はあ」

自信なさげに立ち上がる利恵を見て、土方は眉間に皺を寄せた。

「おい。巡察に付いていくようになって、ひと月はたっているぞ。相当な馬鹿じゃない限り、道は覚えているはずだ」

一人で歩いたことはないから、不安を感じているだけなのに……と利恵はムツとした。それでも何とか笑顔を浮かべると、「そこまですれ違わないですよ。これを終えたら行ってきます」と言いながら、洗い終えた襦袢をぐつと絞った。

（だめだ。わたしはもう、大馬鹿者というレッテルを貼られてしまうに違いない……）

菱屋には無事についたものの、帰り道、目に付いた店を覗きながら歩いたのが良くなかった。いつの間にか、どの方角へ行けば良いのか分からなくなってしまったのだ。すれ違った商人風の男に、屯所へ行く道を尋ねたのもさらに良くなかった。その男は新撰組を良く思っていなかったらしく、教えられた通りに進んでいくと、見た

こともない場所に出てしまったのだ。

以来、道を尋ねるのも怖くて、ウロウロ歩き回っている。

（そのうち知ってる道に出るはず……）

迷ってからどれだけの時間がたったのだろう。つま先は痛いほどに冷えている。

「まったく、あいつはどこをふらついてるんだ！ もう一刻はたっているぞ」

土方が苛立っている。

「道に迷ったのかなあ。俺、迎えに行ってくるよ」

ちょうど「暮を打とうよ」と遊びにやってきた沖田が、立ち上がろうとした。

「いや、いい。お前、もうすぐ巡察だろ。それに、道に一番詳しいのは山崎だ。あいつに頼もう」と言つて、土方は大股に山崎の部屋へ向かった。

「入るぞ」

相手の返事を待たず障子を開けると、何かの書を読んでいた山崎が顔を上げる。

「菱屋に行つてから、野村が帰つてこねえ。一刻はたっている。探してきてくれねえか」

すると山崎はすぐに立ち上がり、羽織を手に取った。

「面倒なことに巻き込まれてなきゃいいがな。あの馬鹿。余計な手間ばかりかけやがつて」

土方はぶつぶつ言いながら部屋を去っていくが、その言葉はほとんど山崎の耳には入らなかった。

以前捕縛した茶屋の女によれば、似顔絵は一枚しかなかったはずだ。しかしそれが嘘だったら？

不安に胸を締め付けられ、ほとんど駆けるように屯所を出て行った。

町が見えてきた頃、風呂敷包を胸に抱えてとぼとぼ歩いている利恵の姿が見えた。安堵のあまり足が萎えそうになりながら、歩調を緩めて近づいていく。

「迎えに参りました」

声をかけると顔を上げ、驚いたような、悲しんでいるような、複雑な表情を浮かべる。

「……迷ってしまいました。途中で道を聞いたんですけど、でたらめを教えられてしまつて……。それでウロウロしてたら、以前傘を貸してくれたおばさんに偶然出会つて、事情を話したら分かる道に出るまで送つてくれたんです」

一度言葉を切ると、疲れたようなため息をついて「ご心配かけずみませんでした」と頭を下げた。

「いえ。ご無事で何よりです」

そのまま並んで歩き始めたのだが、珍しく利恵は無口だ。

今度こそ何があつたのか聞こうと口を開きかけたとき、「大阪では、ご自宅にも寄られたんですか？」と先に利恵が尋ねた。

「はい。向こうにいる間は、自宅に寝泊りしておりましたので」とすると「お子さんはいらっしゃるんですか？」と無理に作つたように見える笑顔を浮かべる。

「三つと二つの子が二人おります」

「そうですか……。一番かわいい盛りですね」と利恵は俯くと、「土方さん、怒っているでしょうね。急がないと」と足を速めた。そのまま振り向きもせず、駆け足になる。

利恵の態度が理解できず、山崎は足を止め、どんどん遠ざかつていく背中を見つめる。

何がいけなかつたんだろう。

実家には兄夫婦がいるし、二人の間には子供が二人いる。ただそれだけの話をしたのに、なぜあんなに悲しげな表情を浮かべるのだろうか。

利恵を探すために早めに巡察に出るぞと隊士たちに声をかけ、玄関を出た沖田だったが、こちらに向かつて駆けてくる利恵の姿を認めると、大きな笑顔を浮かべる。

「ずいぶん遅かったじゃないか。とにかく、無事で良かった。……あれ、山崎は？ 迎えに行ったはずなんだけど。すれ違いだったのかな」

「会いました。土方さんが怒っているだろうなと思って、わたしは先に……」と言って、顔を伏せたまま玄関に駆け込んでいく。

なんだか様子がおかしいなと思いながら利恵の姿を見ていたのだが、山崎が門をくぐってくるのが見えると、近づくまで腕を組んで待つ。

「ねえ。野村の様子がおかしいんだけど、何かあったのかな」

「分かりません。わざと違う道を教えられたせいで、かなり迷ったようです。それで疲れているのではないかと……」

「ふうーん」

沖田は疑わしげに山崎の顔を覗き込んだが、本当に分からないように、戸惑った表情を浮かべている。

「まあいいか。無事に戻ってきたことだし。じゃあ少し早いけど、巡察に行ってくるよ」

山崎は小さく会釈をして挨拶すると、玄関へ入っていく。

（なんか良くわからないけど、落ち込んでたみたいだし、土産に菓子でも買ってやろうかな）

そう考えながら隊士が集まったのを確認し、巡察へと向かった。

「馬鹿野郎！」

土方の怒号が屯所内に響き渡った。

「こんな簡単な用事もこなせないとは、呆れて物も言えん」

仁王立ちしている土方の前で、利恵は正座して頂垂れている。

「申し訳……」

「剣術は身につかねえ、ちよっとした使いもこなせねえ。てめえ

にはうんざりだ」

「まあまあ、野村くんも反省しとるし……」

近藤が間に入ったのだが、土方の怒りはまったく収まる気配を見せない。

「心配だったのは分かるが、野村くんも歩き回って疲れているよ。うだし、今日はこの辺で勘弁してやったらどうかね」

「心配なんかしてねえよ。頭に來ただけだ！ もういい。なんの役にも立たねえ奴はいらねえ。島原の色茶屋にでも行け」

そっぴいながら、土方は腰を下ろしてあぐらをかき、利恵を憤然とした様子で睨みつける。

「いや、野村くんは三味線も舞もできないんだから、そうなる……」

「いいじゃねえか。少なくとも自分の体で稼げるんだ。そうだろう？ 親切でわざわざ置いてやってたんだ。ただの厄介者の癖に、餓鬼でさえできる用事もできねえんだからな。剣術だつててめえのためにやらせてるってのに。多少やる気がでたのは加納にやられたときだけで、あの後まったく進歩してねえじゃねえか。いい加減にしろ。とつとと出てけ」

「……分かりました。出ていきます」

利恵はぼそりとつぶやくと立ち上がり、お辞儀をした。

「ご迷惑ばかりおかけして申し訳ありませんでした。……島原には詳しくありませんので、適当な店を紹介していただけると助かります。お世話になりました」

「いや、しかし……」

近藤はおろおろしながら、涙を滲ませる利恵と険悪な表情を浮かべる土方を交互に見る。

「いいんです。わたしが役立たずというのは確かですから……」
利恵は小さく微笑むと、「近藤さんにも本当にお世話になってばかりで……。ご恩を返せず、申し訳ありません」と言って、部屋を出ていった。

待合茶屋での生活

利恵が部屋に戻ると、近藤が追いかけてきた。

「気にしないことだ。あいつの怒りもそのうち収まるだろう」

「いいんです。いずれは出ていかなくはいけなかったんですから……。剣術を身に着ければ隊士として戦うことになるのでしょし、そうなればわたしは到底生き残ることはできないでしょう。命あるうちに出ていくことができるんですから、逆に良かったのだと思います。ただ……」

利恵が言いよんだので、近藤は励ますように肩に手を置いた。

「なんだね？」

「やはり体を売るというのはさすがに……。できれば下働きとして店に入りたいのです。もし店をご紹介くださる場合は、そのように話を通していただけると非常に助かります。最後までお手間をかけてしまいますが……」

近藤は困ったような表情を浮かべ、「いや、そのくらいなら別にいいんだよ。手間でもなんでもない。しかし、焦って決める必要はないぞ？ 一晩たてば、あいつも少しは落ち着くだろうから……。歳だつて心配していたんだろうよ。奴はその辺が不器用なんだよな。それに、俺はお前が役立たずだとは思っておらん。細かい仕事も手を抜かず、よくやってくれている」と言った。

「ありがとうございます。ただ、やはりずっとここに在るわけには……。そうは言つても禁令がありますし、他の隊士の手前、そう簡単に出られるとは思っていませんでした。だからこれはわたしにとつて、良い機会なのだと思います」

「……わかつた。では、俺の顔見知りの店で下働きとして入れるよう、店に頼んでやろう」

「できれば夕飯の前にここを出たいと思います」

「そんなに急がなくても良いじゃないか」

近藤が慌てたように言ったが、利恵は決然とした表情で「沖田さんたちに知られたあとだと、騒がしくなりそうですし……。できればそつと出ていきたいんです」と答え、もう一度深く頭を下げた。

「我俣ばかり言って申し訳ありません。……今までありがとうございます」

近藤が部屋を出ていくと、利恵は押入れから私物を取り出す。このたった一つの風呂敷包みが、自分の全財産だ。それなのに、この時代では利用できないものばかり……。

風呂敷包を文机に置き、足を伸ばして天井を仰ぐと、ため息をついた。

今回土方が怒ったのは当然のことで、ここ幕末では、特に新撰組では自分は大して役に立たない人間だということも十分理解している。それでもできることは精一杯やろうと思っていたし、受けた恩をまったく返せないまま投げやりになるなんて、自分らしくないと思う。

でも、心底疲れた。

周囲のみんなはとても親切だし、利恵に必要なだと思えば自分の懐を痛めてでもできる限り揃えてくれた。それでも、自分のお金を持ってない、ほしいものを自由に選んで買うことができない、いちいち許可を得なければ屯所を出ることはできない、女だということを隠さなくてはならない。以前は当たり前に行っていたことが何一つできず、毎日少しずつストレスは蓄積されていた。

そして、山崎が既婚者だと知ったあとに、自分の気持ちに気づいたこと、そしてなかなか切り替えられないこと。これが、なんとかこれまで保っていた心の均衡を一気に崩し去ったように思う。

茶屋で働けば、賃金ももらえる。

女として暮らしたほうが、断然楽に決まってる。

そんなことを考えるうちに、身支度を整えた近藤が再び部屋を訪れ、「行こうか」と声をかけた。

門を出るまで誰にも出会うことなく、ひっそりと門をくぐる。

途中古着屋に寄ると、近藤は女物の着物や帯を一式揃えてくれた。「下働きとして入るのだから、あまり良いものは買ってやれんが……」と申し訳なさそうな表情を浮かべている。

「わたしには十分過ぎるほです。ありがとうございます」と微笑むと、近藤は「いや、十分ではないよ」と首を小さく横に振った。人目につかない場所にある空家で着替えると、近藤は「こうしてみると、やはり野村くんは女なのだなあ」と感慨深げな様子を見せる。

「給仕の一人が子を孕んで先日辞めたと聞いていたんだよ」と近藤が案内してくれたのは、清潔感のある待合茶屋だった。

待合茶屋は本来の茶屋とは違い、宴会や会合を行うための広間を貸す業者だと聞いた。

一応寝具は備わっていて、中には宴会後に遊女を呼んで遊ぶ者もいるらしいが、客が下働きの女に手を出すことはあまりないという。それもあって、近藤はここに連れてくることにしたらしい。

玄関でぼんやり待っていると、奥で店主としばらく話し込んでいた近藤が戻ってきた。

「じゃあ、俺は帰るが……。たまに様子を覗きに来るよ。元気でな」

去っていく近藤の後ろ姿を眺めるうちに、急に寂しさがこみ上げてきて、つい声をかけそうになる。しかしなんとか言葉を飲み込むと、店主に促されるまま寝泊りする部屋へと向かった。

近藤が紹介してくれたおかげもあるのだろう。小柄で少し太り気味の店主は、とても優しくった。下働き仲間として紹介された三人の女性も、気さくで良い人ばかりだ。年齢は十九歳が二人と二十歳が一人で、比較的近いといえる。三人とも以前は自宅から通っていたが、物騒な事件が多いので、夜道は危険だからと住み込みに変えたいらしい。そのため、みんなで一つの小さな部屋で寝泊りすることになった。利恵は先日辞めたという女性の布団を使うことになっている。

出自についてはどう話そうかと悩んだのだが、身寄りが一人もないと言った時点で「寂しいね」「かわいそうやね」と言っただけ、三人ともあまり深くは聞いてこなかった。

今夜の会合は一つしか入っていないということで、少し余裕があるらしい。おかげで気持ちを楽に持つて仕事を覚えることができたし、合間に交わす他愛のない会話も楽しめた。

それでもなんとなく、屯所での生活が懐かしく、寂しくも感じる。（まだここは初日ももんね）と思いながら、娘たちの会話に耳を傾けていた。

「だから！ 野村に何かあるときは教えてくれると約束したじゃないか！ 俺が出ていくとき、あいつを追いつ出すなんて一言も言っ
てなかったよね」

巡察から帰ってきた沖田は、土方が予想していた通り部屋に乗り込んできた。

「仕方ねえだろ。そうなっちゃったんだから。しかも今回のことは、命に関わるようなことでもねえ。それに、もともとあいつはずっとここにいちゃいけねえ奴なんだ。別に一生会えないってわけじゃない。たまに茶屋に遊びに行きやいいだけの話じゃねえか」

「そりゃそうだけど……。迷子になつたくらいで急に追いつ出すなんて、ひどいじゃないか」

そう言って、沖田は土産に買ってきた饅頭の包みを握り締めたが、

何かを思いついたようにふと顔を上げた。

「野村が帰ってこなかったとき、心配してたよね？」

「してねえ」

「心配だったから、余計に頭に来たんじゃないかと思うんだけど」
「なに勝手な妄想してやがる。役立たずだから追い出しただけのことだ」

土方は疲れたようにため息をついた。

「早く出ていけ。俺は忙しいんだよ。まだやらなくちゃいけねえことが山ほど残ってる」

「これから野村はどうするんだよ」

「だから、茶屋で働くんだって、さつきから言ってるじゃねえか。同じことを何度も言わせるんじゃないやねえ。本人もそれでいいって言ってるんだし、もう終わったことだ。そんなに気になるなら、非番のときにでも会いに行け。別に止めやしねえよ」

「為三郎たちも寂しがるだろうな。……じゃあ、明日さっそく会いにいつてみるよ」と言いながら一人頷くと、沖田は部屋を出ていった。

これでやつと元の生活に戻れる……と考えながら、土方は沖田が置いていった饅頭を口に放り込んだ。

（面倒の種は少ないにこしたことはないからな）

毎晩隣の部屋で鳴り響いていた耳障りな歯軋りも、もう聞かずに済む。

島原へ利恵を送り届け、屯所に戻ってきた近藤は山崎を呼んだ。

「……という訳だから、時々何かのついでに様子を見にいつてくれんかね。やはり心配だからなあ。俺も毎日行くほど暇じゃなし」

山崎は「承知しました」と答えながら、走り去る利恵の背中を思い起こした。いったい何がどうなっているんだ？

さすがの山崎も、急展開の連続に頭が混乱している。

しかし利恵にとっては良いことなのかもしれない……と自室に戻りながら考えた。これからは男装をせずに済むし、剣術の稽古で打ち身を作ることもないだろう。

島原には間者として潜むこともあるし、その気になればいつでも会いに行ける場所にいる。

それに、利恵の態度の変化がどうしても気になって仕方がなかった。これまでの自分の行動や発言を事細かに思い起こしてみたのだが、なぜあんなに悲しげな表情を浮かべていたのか、思い当たるものは何もなかった。会いに行ったら、今度こそ聞いてみよう。

明日は沖田が行くと言っていたようだから、その後のほうがいだろうなと思う。次から次へと知り合いがやってきていては、利恵も落ち着けないだろうから。

待合茶屋での生活2

翌日、店の前の雪を箒で掃いていると、こちらにやってくる明里の姿が見えた。

「明里さん！」

手を振ると、まじまじと利恵の顔を見たあと、笑顔になって駆けてくる。

「ゆうべ旦那はんが来てな。野村はんがこっちに来とる言つとったから……。見違えたわあ。ぜんぜん分からへんかったよ」

「女らしく見える？」

「当たり前やないの。こうして見ると、やっぱりおなごなんやねえ。綺麗やなあ」

明里はもう一度利恵の顔をじっくり観察し、満面の笑顔を浮かべた。

「旦那はん、うちとこ来る前に中を覗いてみたらしいんやけど、おなごはみんな忙しそうに動いとったし、どれが野村はんなのかよく分からんから、声かけへんかったと言つとったけど……。確かに分からんね。雰囲気がぜんぜん違うなあ」

「ただ、やっぱりこの格好だと転びやすくて……。何度危つい目に合つたことか」

利恵が苦笑を浮かべると、明里は声を上げて笑った。

「ああ、聞いたよ。野村はんがあまりに危なっかしいから、袴を用意したつて言つとった。着物じゃよう歩けんなんて、ほんと、不思議な人やね。……そうそう、旦那はん、なんも挨拶もせんといきなりいなくなつたつて悲しんどったよ？　なあ、せつかくご近所さんになつたんやし、今度一緒に茶を飲みながらゆつくり話そうな」

「ぜひ」と微笑むと、明里は手を伸ばし、いきなり利恵の両頬を引っ張った。

「なに作つたような笑顔浮かべてはるの？　そんな顔されたら、

見とる方もつらくなるんよ？　うちには無理せんといて。悩み事があるなら、いくらでも聞くよ」

「……分かりました。分かりましたから、離してください」

明里が手を離すと、利恵は頬を撫でながらため息をついた。

「悩み事というか……。結果は決まっているから、悩みようがないですけどね。……好きになった人には、奥さんと子供がいた。だから諦めるしかない……。ただそれだけのことです。これ以上は勘弁してください」

明里が口を開いて何かを言いかけたとき、沖田がやってきて「明里さんじゃないか。ねえ、野村つてここにいるんだよね」と利恵の隣に立った。

「いますよ、ここに」

利恵が自分を指差しながら答えると、沖田はしばらくじろじろと眺めたあと「ええ？　野村？　気づかなかった！」と驚愕の表情を浮かべた。その様子が明里のつぼにはまったらしく、腹を抱えて笑いながら涙を滲ませている。

そんな明里には構わず、沖田はそのまましばらく「へえー。変わるもんだねえ。ふうーん」と感心していたが、ふと真顔に戻ると「昨日、せっかく饅頭買ってやったのにさ。帰ってきたらいないんだもんな。為三郎も寂しがってたよ？」と口を尖らせた。

「……だって、静かに出ていきたかったから。騒ぎになったら、ほかの人たちが変に思っちゃうだろうし」

「俺だって、周りを気にせず騒ぎ立てるほど考えなしじゃないよ。いつの間にか笑い止んだ明里は、二人の様子を見ながら（沖田はんは一人身やし、違うよなあ。好きな人って、誰なんやろ）と考え込んでいた。

その日の晩、明里は小さくため息をつく、山南の胸にもたれかけた。

「なんか、寂しそうなんよ。あそこを出たのは野村はんにとって良いことと思うんやけど……」

「そうなのかい？ 今度、どの娘が野村くんなのか教えてくれよ。さつきも覗いてみたんだが、まったくわからなかった」

「ええよ。ほんなら、今度は昼間に声かけてくれますか？ 今頃は向こうも忙しくしと思うから」

少し躊躇したあと、明里は思い切って利恵から聞いた悩みについて山南に相談した。なんとか彼女の力になりたいのだが、自分は相談に乗れるほど新撰組の内部について知らない。だからここは山南に協力してもらうしかないだろう。

「野村くんがそう言ったのかい？」

「これは旦那はんの胸の内にしまっといってください。絶対に誰にも言わんといてな」

「ああ。分かっているよ。しかし、野村くんの身近で妻と子供がいる男となると……、まさか、近藤さんか？」

二人は顔を見合わせ、首を捻る。

「なんか違う……」

「ほかに思いつく者はいないな。野村くんが仲良くしていたのは、一人身の奴だけだしなあ。というより、妻帯者のほうが珍しいし……」

……

「その妻帯者の中に、想い人がおるんよね？ 諦めるしかない言うつたけど、そもそも相手が野村はんがおなごだと知らなければ意味ないしなあ……」

山南は俯くと、顎に拳を当てて考え込んだ。

「ううん。なんか引つかかるなあ。女だということを隠しているから、とは言ってなかったんだよね？ 秘密を知っている誰かかな。しかしそうなると、近藤さんしか……」

「ええ？ それはないんちゃうか？ もしそうだとしても、近藤さんやったら、うち、協力しとうないなあ。良い人なんやけど、おなごにはだらしもないもんなあ」

「そうだね」

ふたりはまた顔を見合わせ、同時にため息をついた。

その頃、利恵は広間に膳を運んだり片付けたりと慌しく過ごしていた。歩きにくいのは相変わらずだが、とりあえずすり足を心がけているおかげで、足元の危うさはずいぶん改善されている。いくら近藤の紹介とはいえ、もし客に料理をぶちまけたら即刻クビになるだろうと思ったので、昼間のうちに歩く練習をしていたのだった。

料理や飲み物を運び終え、芸伎が中で舞を始めると、四人は炊事場で待機しつつしばし休憩を取ることにした。

「なあ、昼間来とつた兄さん、利恵はんの良い人なん？」

「え？ ああ……違いますよ。仲の良いお友達」

「そうなん？ けっこうええ感じに見えたんやけど。……どうなん？ 誰かおらへんの？」

年頃の娘らしく、三人は瞳を輝かせて恋の話に興じようと身を乗り出している。

「うーん。今のところは……。菊ちゃんたちはどうなの？」

正直、今は恋の話なんてしたくない。そう思ったが、場を盛り下げるのもどうかと思ったので、興味津々といった表情を浮かべて尋ねた。

「うち？ うちはなあ……」

三人の中では年長の菊が口を開きかけたとき、「次のお客さんたちが来る頃や。はよ、支度してや」と店主が顔を覗かせた。

四人は急いで立ち上がると、仕出屋が届けてくれた料理を運び始めた。

その翌日、山崎が店を覗いたとき、利恵は三人の娘とともに出かけるところだった。どうやら休憩時間を利用して、町へ遊びに出かけることにしたらしい。

沖田は言われるまで気づかなかったらしいが、山崎は見てすぐに

利恵だと気づいた。確かに見た目はずいぶん変わったが、大きな身振り手振りを加えて表現豊かに話す様子や、今にも躓きそうなきこちない歩き方など、よく見ればすぐ分かる。

女四人で急に笑い声を上げたり寄り添ったりしながら楽しそうに歩いていく姿を見て、やはり屯所を出てよかったのだと思った。

新しい場所での交友を深めているようだから、今日は邪魔しないでおこう。

利恵が店で楽しそうに働く一方、屯所内では再びギスギスとした雰囲気が漂っていた。

山崎が店を訪れていた頃、山南の部屋にやってきた藤堂がぼそりとつぶやいた。

「いくらなんでも、やりすぎだよなあ。今までずっとがんばってきたんだからさ、もっと気持ち良く送り出してやりたかったな」

「しかし、隊士にはなんて説明してるんだ？　いくらなんでも迷子になったから追い出しましたじゃ、誰も納得できねえだろ？　ここを出たくなつた奴が、迷子になってさまよい始めるぜ」

原田が言つと、「もつともらしい理由を思いつくまで、近藤さんの用事でちよつと出かけてることにしてるらしい。良い案はないかと聞かれたんだが……。禁令が仇となつて、なかなか思いつかないんだよ」と山南が苦笑した。

利恵のためには今の状況が望ましいとはわかっているのだが、出ていくことになった原因のせいでどうしてもすつきりしない。

「お前、本当に野村だつて気づかなかったのか？　そんなに変わつてたのか？」

永倉が聞くと、沖田はにやりと笑った。

「うん、ぜんぜん分からなかった。いやあ、女装があんなに似合うとはねえ。間者にしてもいいかもね」

「いやいや、野村くんは本来女なんだから、それは失礼だよ。とはいえ、俺も店を覗いたときは、どれが野村くんなのかさっぱり分

からなかったんだけどね。会うのが楽しみだな」

沖田を諭しながらも、山南は嬉しそうに微笑んだ。

すると、永倉が小さく頭を横に振った。

「しかし、あまり頻繁には会いに行かねえほうがいいかもな。最近減ったとはいえ、討幕派の連中もあの辺をうろついでる。野村が新撰組と親しいと知られると、危険にさらすことにもなりかねないぞ。下手すりゃほんとに新撰組の間者だと勘違いされて、捕まるかもしれないねえ」

確かに……と、その場にいた全員が頷く。

少し間をおいて、「まあ、ほどほどにすることだね」と沖田が寂しげにつぶやいた。

待合茶屋での生活 3

永倉の言葉で慎重になり、沖田たちはあれ以来店に顔を出していない。山崎は島原に用事があったときは訪れるようにしていたのだが、利恵は忙しそうにしていたり、どこかに出かけて姿が見えなかったりと、なかなか声をかける機会を見つけれずにいた。一週間もたつとずいぶん店に馴染んだようで、着物姿での立振舞いもずいぶん様になってきたように見える。

屯所にいたときよりイキイキとした様子を見て、山崎は嬉しく思う反面、少し寂しくも感じた。自分たちと共に過ごした時間は、つらい思い出のほうが多いに違いない。利恵の態度を不可解に思い、理由を知りたいと願う反面、忘れたいと思っているのかもしれないのに、それを掘り起こそうとするのは自分勝手なのではないかという思いもある。

このまま声をかけずに、時々無事を確かめるだけでいいのではないか。

店先の雪を掃いている利恵に背を向けると、その日も黙って去ることにした。

十二月に入り、町は師走独特の慌しい雰囲気が始める。それをどこか俯瞰するように眺めながら、利恵はただ日々の忙しさに気持ちを紛らわせていた。

一日の仕事を終えて床に入ると、娘たちは眠りにつくまで客の噂話や仕事の愚痴などで盛り上がる。みんな気立ての良い子ばかりだし、女四人で布団を並べて寝ていると、まるで合宿か修学旅行のようにならかった。

少ないとはいえ駄賃がもらえるのも嬉しい。数ヶ月まったく金を持たずに過ごしてきただけに、初めて手にしたときはありがたくて涙が滲んだ。

しかし、なんとなくここは自分の居場所ではないような気がしてならなかった。まだ日が浅いからだろうか。

「明日も忙しいって言うとなあ。師走に入ってから、ぎょうさん来るなあ」

結が言うと、ほかの二人はため息をついた。

「今日も大変やったなあ。あちこち駆けずり回ったから、足が重いわ」

「うちも。今日は寢床使ってはるお客さんおるやろ？ 夜中に呼び出されたらかなわんなあ」

結と律の言葉に頷きながら、そういえば……と利恵は遊女を呼んだ二人の客を思い出した。

「ずいぶん酔いつぶれていたから、大丈夫じゃないかな。二日酔いで朝が大変かもしれないけど」

すると菊は「添い寝だけで済むんなら、おなごたちも嬉しいやろなあ」とクスクス笑った。

翌日、いつものように慌しく膳を運んでいたときのことだった。

酒の追加を頼まれた利恵が一人炊事場に戻り、徳利を持って部屋に向かっている途中、がしゃんと何かが落ちるような音が響いた。三人のうち誰かが落としてしまったのだろうかと慌てて向かう途中、「堪忍してください」と律の涙声が聞こえてくる。

床に徳利を置いてすそをまくりあげ、駆けるように向かった利恵の目に映ったのは、酔った男にはがいじめにされている律の姿だった。

店主も駆けつけて、なんとか律を逃そうと説得を試みているのだが、相手は相当酔っていて、まともに会話ができる状態ではない。

「お離してください。この子はただの使用人ですから、床の相手はいたしません」

店主と並んだ利恵の目の前で、男はへらへら笑いながら律の懐の

中へ手を入れた。

律は涙をこぼしながら、必死に身をよじり、逃れようとしている。ぷちん……と頭の中で何かが切れるような音がした。目の前の景色が歪む。

次の瞬間、利恵は男の顔を思い切りひっぱたいていた。男は足元をふらつかせ、無様に尻餅をつく。

「の、野村はん、なんてことを……」

店主は目をむき出し、呆然と自分の手のひらを眺める利恵を見た。律は襟を整えながら慌てて利恵の後ろに隠れ、ほかの二人もその後ろで固まっている。

「……なんだ、こら」

にやついていた男の顔が、険悪に歪んだ。

「てめえ、客の顔を張るたあ、いい度胸じゃねえか」

おぼつかない足取りでなんとか立ち上がると、利恵に詰め寄る。酒臭い息から逃れようと顔をそむけたのだが、それがさらに怒りに油を注ぐ結果になったらしい。利恵の襟を掴んで顔を引き寄せると、据わった目で睨みつけてきた。

「申し訳ございません！ この者はまだ店に来てから日が浅く……あとできつく言い聞かせますので、なにとぞご容赦を」

店主がふかぶかと頭を下げたが、男の耳には入っていないらしい。「てめえ、ここで手打ちにしてくれる」

よろめきながら少し後ろに下がると、腰にぶらさげている刀に手をかけた。

とんでもないことをしてしまった。

店員が客に暴力を振るうなんて、どんな状況でも許されることではない。ひっぱたく前に、もっと落ち着いて考えればよかった。

（どうしよう……）

酔っているので狙いは大きく外れるだろうが、こんな狭い場所で振り回されてはどちらにしても危険極まりない。

「ここは……。」

「申し訳ございません！」

叫ぶように謝罪すると、利恵は廊下にひれ伏した。ものすごく悔しいけれど、とにかく今は謝るしかない。

「ああ？　思い切り引っぱたいというて、謝って済むと思ってるのか？」

男が利恵の髻を掴み、顔をひっぱり上げたときだった。

「おい、その辺で止めとけよ。ただの女を斬るなんて、侍のやることじゃねえよ」

「先生！」

いきなり手を離されたので、勢いで利恵は顔を床に打ち付けてしまった。

（痛……）

額をさすりながら顔を上げると、身なりの良い男が微笑んでこちらを見下ろしている。

「こいつが俺を殴ったんですよ。客に手を上げる仲居なんて、どこにいますか」

「お前だつて遊女でもない女に絡んで泣かせてたじゃねえか。……」

……それに俺は、気の強い女は嫌いじゃねえしな」

そういいながら後から現れた男は、利恵の肘を掴んで立ち上がるのを助けてくれた。

「まあ、客商売としちゃあ、やつちやいけねえことをしたんだしな。ここはひとつ、こいつを立てる意味で、この女はクビってことでどうだ。手打ちにされるよりはいいだろ」

（クビ？）

まったく予想外の申し出に、利恵は愕然として何もいえなかった。そりゃ、手打ちにされるよりはいいけど……。

「へえ。おおきに」

店主は感謝の面持ちを浮かべて低頭する。

「命がありゃあ、なんとでもなる。気の強い女は好きだが、時と

場合によるからな。これに懲りて、ちったあ我慢を覚えるこつた」

男はそういつて笑うと、千鳥足の男の肩を支えながら手前の部屋の襖に手をかけた。

「……ありがとうございます」

なんとかその一言を搾り出すようにささやくと、振り返って「お前、名は？」と尋ねてきた。

「利恵です」

「そうか。……利恵、またどこかで会えるといいな」

そういつて大声で笑うと、部屋へと入っていった。

「うちのせいで……。堪忍な？」

律は顔を歪ませ、泣きじゃくっている。

「いいの、いいの。短気を起こしたわたしが悪いんだから」

私物をまとめた利恵は、笑顔を浮かべて律の肩を抱きしめた。しかし心の中では、律と同じように泣いている。

「短い間だったけど、楽しかったよ」

「うちも……」

菊と結も涙を浮かべ、手を握り締めて利恵を見つめている。

「いろいろ教えてくれてありがとう。またいつか一緒に働けるといいな」

「ほんまやね。落ち着き先が決まったら、声かけてな。また団子食べにいこ」

菊に手を握られたとき、利恵の瞳に涙が滲んだ。

「絶対にね」

そのとき、店主が「お前たち、そろそろ仕事に戻ってくれへんか。仕事はまだぎょうさんあるから」と声をかけてきた。

「またな。絶対、また会おうな」

そう言つて、三人は仕事へと戻っていく。

利恵は店主のもとへ行き、「ご迷惑をおかけしました。申し訳ありません」と頭を下げた。

「店で人が斬られるとしばらく客足が遠のくから、一時はどないしよかと思つたが……。今回は話が分かる人がいはって助かつた」店主は眉を寄せてため息をついた。

「こんなことを起こしてもうたから、他の店に紹介することはできへんのや」

「はい……」

「まあ、今夜だけでもここに泊まってもええんやけどな。部屋に下がっていれば、あの人たちとは会わへんし」

そう言いながらも、店主は早く立ち去ってほしそうな表情を浮かべている。

利恵は首を横に振った。

「ここまでご迷惑をおかけしておいて、これ以上お世話になるわけには……。知り合いを訪ねてみます。お世話になりました」

店を出てすぐに、助けてくれた男の名前を尋ねなかったことを思い出した。

（まあいいか。もう会うこともないだろうし……）

荷物を抱えなおすと、粉雪が舞う夜道へと足を踏み出す。

（たった二週間でクビかあ……）

利恵はぼんやりと明里の店へと向かった。

（今は忙しい時間帯だろうし。どうしよう、やっぱり迷惑かな）店を出ると決まつたとき、まっさきに頭に浮かんだのは明里だった。ほかに頼れる人はいない。

とりあえず今夜だけ世話になつて、朝になつたら住み込みで働ける場所を探そう。職を選ばなければ、なんとか見つかるはずだ。体売る決心はつかないが、最悪それしか道がないと決まつたら、潔く……。

足を止めてしゃがみこむと、雪玉を作った。鬱憤を晴らすように、傍らを流れている小川へと思い切り投げる。それを五回ほど繰り返し、指先がかじかんで感覚がなくなってきた。荷物を持ち上げ、

再びとぼとぼ歩き始める。

最近の自分はなんだかおかしい……と深いため息をついた。現代にいた頃とは、ずいぶん性格が変わったような気がする。前はこんなに感情的にならなかったし、後先考えずに手を出したこともない。仕事では上司に期待され、それなりに実績も上げていた。なのに、どうしてここではこんなにうまくいかないんだろう。

自己憐憫に浸り始めたとき、向かいから派手な着物を着た男が歩いてくるのが目に入った。店からこぼれる灯りにぼんやり照らされるその姿に、なんとなく見覚えがあるように思い目を凝らす。

（加納さん？）

しばらくすると、その後ろから見慣れた姿もひっそりと現れた。

（山崎さんまで……）

山崎は利恵に気づいていたようで、目が合うと小さく首を横に振った。声をかけるなということなのだろう。小さく頷いて目を逸らし、他人の振りをして通り過ぎる。状況が状況だったので、山崎を見て心は大きく揺れたものの、取り乱さずに済んだ。

（加納さん、また島原で散財してるのかな。……大丈夫かな、河合さん）

河合のことも気になったが、山崎を思うと胸に痛みが走り、なかなか気持ちを切り替えられないもどかしさに唇をかみ締める。

振り返りたい気持ちを抑え、ひたすら明里の元へと足を速めた。

（なんで野村さんがこんな時間に……）

加納の後を追いながら、山崎は首をひねった。店は今頃忙しいだろうから休憩というわけではないだろうし、使いに出たといった感じでもない。

気になったが、仕事を放り出して理由を聞きに戻るわけにもいかず、加納の背に意識を集中する。

屯所に戻ったら、加納の件を報告がてら利恵のこと話してみよ

ۛ

気づき

手が空いたら訪ねたことを明里に伝えてほしいと下働きの男性に声をかけ、利恵は玄関の隅に立って待つことにした。さすがに外よりは暖かいが、隙間風は冷たく、吐く息も白く見える。

かなり待つことになるかと思っていたのだが、予想よりはるかに早く明里が現れた。慌てたように駆け寄ると、「こんな時間にどないしたの？」と心配そうに顔を覗き込んだ。

「簡単に言くと、クビになりました。……できれば、今夜だけでも明里さんのお部屋で休ませてもらえたらなあと思っただんですけど」明里は一瞬唖然とした表情を浮かべたが、利恵の手を取ると、上がるように促した。

「あとで詳しく聞かせてな？ とりあえず、中に入りや。手が氷のように冷えとるやないの」

案内されたのは、飾り気がなく、きれいに整理整頓された部屋だった。明里らしいな、と思いながら中へ入る。

「廁に行く言うて少し抜けてきたんやけどな、すぐ戻らな。風呂の位置は覚えとるよな？ もし温まりたいようだったら、さっき声かけた喜八に言えばええよ。ほな、うちは戻るな」

そう言つて慌しく仕事場へと戻っていくのを見て、利恵は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

風呂に入りたいのは山々だったが、そこまで甘えるのは図々し過ぎるような気がした。置いてあった火鉢の傍らに座り、半分埋めてあった墨を火箸で掘り起こし、手をかざして暖を取る。

現代では学校の成績もそれなりに良かったし、仕事だつて二年目にしてはかなり責任のある企画を任された。それに、どちらかというと頼られるタイプだったと思う。友達はもちろん、後輩の相談もよく受けていた。こんなに他人に頼ってばかりいて、自分の非力さ

を嘆くなんてことはなかった。

ふと、このマイナス感情が余計に悪循環を生み出しているのだろうか……と考えた。

思えば幕末での生活も三カ月目を迎えた。現代に帰りたいと思うのは当然だとしても、今はここで生きている。ここは違う、自分はこういうことをしたかったわけではない。どんなに一生懸命取り組みでいるつもりでも、心の片隅でそんなことを考えていれば、自然と物事もうまくいかなくなるのではないか。

それに……と、利恵は屯所での生活を振り返る。

現代に帰れば二度とこの人たちと会うことはない、いつか必ず悲しい別れが待っている。だから深く関わらないようにしよう。そう考え、きちんと真正面から向き合っていなかった。あれほど親切にしてくれたのに。

いつも「剣術を身につけろ」だの「使えねえ奴だ」と怒鳴り散らしている鬼の副長も、あれは新撰組で生活していくうえで身に付けておくべきだと考えたうえでの親切だったのだろうと思う。

それなのにわたしはいつも、「やらされている」と考えていた。土方が怒ったのは、迷子になったことではないのだろう。そんなわたしのやる気のなさに気づいており、業を煮やしたのかもしれない。

山崎のことだって、今思えば、ずいぶん前から好きになっていたのだと思う。

気づかない振りをしていただけだ。

ただ親切に甘えるだけで、深入りしないようにと彼を知ろうとしなかった。だからあのとき一気に感情が押し寄せて、余計にショックを受けたのだと思う。きちんと向き合っていれば、もう少し自然に振舞うこともできただろうし、気持ちを整理できたに違いない。勝手に好きになって、結婚していると知ったら必要以上に落ち込んだ

で、何の非もない山崎に失礼な態度を取った。馬鹿だな……と思う。
自分を憐れみながら、ただ流されるように生活していた。そんな
んじゃ、なにもうまくいくはずない。

そう考えたら、妙にすつきりとした気分になった。

もとの時代に帰れるかどうか知らないのに、うじうじ考えていても仕方がない。

もしかすると、ここですつと過ごしていくのかもしれないのだ。
「わたしの場所じゃない」と否定し続けていては前に進めない。

まずは、生きていくための仕事探し。これを手始めに、ここでの
足場を自分で作り出すとしよう。

「お客はんがなかなか帰らへんかったの。堪忍なあ」

そついいながら襖を開けた明里は、そのまま入り口で足を止めた。
壁に背を預け、座ったまま利恵が眠っている。よくよく顔を見る
と、来たときの暗い表情は消え、どこか穏やかなものに変わってい
た。

（疲れてはったのかな。まあ、話を聞くんは明日でもええしな）
布団を敷いてから利恵をそつと起こし、横になるよう促した。

翌日、店での失敗話を聞いた明里は、「痛快やなあ。見たかった
わ」といつて笑った。

「笑い事じゃないですよ。クビになったんですから……。まあそ
んな感じで、今日は仕事を探さないと」

すると明里は眉をひそめ、考え込んだ。

「そうは言ってもなあ。ここも広いようで狭いからな。客を殴つ
たいう話が広まったらなあ……。うちの店に紹介したいんやけど、
野村はんがいた店と近いしなあ」

「ううん、いいの。この辺じゃ無理だろうなっていうのは分かっていたし。とりあえず、少し足を伸ばして探してみる。だめだったら……そのときはそのときでまた考えるから」

利恵の表情を見て、（なんかええことあったんかな）と明里は首を捻った。昨日店にやってきたときとは、ぜんぜん表情が違う。憑き物が落ちたような、そんな顔をしている。

「ならえんやけど……。奉公先が決まるまで、うちの部屋を使っておてな？」

「助かります。ありがとうございます」

そういつて、利恵は仕事を見つけるために町へと向かった。

その頃、屯所に戻った山崎は、加納の件を土方に報告していた。

「町の女からせしめた金で、また錦太夫のところへ通い始めたようです。今は懷も暖かいとは思うのですが、女の親が加納のことを怪しく思い始めたようで、この状況もいつまで続くか……」

「まあ、もうしばらく様子を見てもいいか。また何かおかしな動きをしたら、すぐ知らせてくれ」

「承知しました。……そういえばゆうべ、野村さんを見かけたのですが」

土方が興味なさそうに鼻を鳴らしたので、そのまま立ち去ろうとしたところ「で、元気にしていたのか？」と尋ねられた。

「どうでしょうか。……よく分からないのです。ちょうど店が忙しくなる頃に外をふらふら歩いておりまして。荷物を持っていたが、どうも店の用事で出たようには見えませんでした」

山崎の答えにしばし沈黙したが、「まあいい。どちらにしても、あいつはもう、うちとは関係ないんだしな」とそっけない口調で言った。

「それでも……皆さん、けっこう心配していらっしゃるようです
が」

「なら、そいつらに話せばいいだろう。俺は知らん」

土方の部屋を出ながら、山崎はそつと微笑んだ。

利恵の様子を見に行けと、自分の口からは言えないのだろうな。

山南に利恵の件を報告すると、微笑みながら頷いた。

「なら、俺が様子を見に行ってくるよ。まだ女らしい野村くんを見てないからね」

「そういや、俺も見えてないなあ。新八さんがあまり顔出さないほうがいいって言ったからさ。なんとなく行きづらくて。ということ、俺も行く」

出かける支度をしようとして、藤堂は自室に戻っていく。

二人きりになると、山南は考え込むような表情を浮かべた。

「隊士で女房、子供がいる奴は誰だったか……。山崎は把握しているかい？」

少し考えたあと、「局長と、吉村さん、わたしの従兄弟の林五郎……。あとは調べてみませんと。すぐには分かりかねます」と答える。

「君の従兄弟も結婚していたのか。知らなかったな」

「一人身が多いので、話題にするのは遠慮しているようです」

「なるほど……」

そのとき、急になにかを思いついたように顔を上げ、「君の従兄弟の姓も、山崎だったね」と尋ねた。

「ええ。それが何か？」

「いや。なんでもないよ」

山南はそそくさと立ち上がり、「じゃあ、俺は急いで島原に行くとするよ」と嬉しそうに微笑む。

訝しく思いながらも、山崎は「よろしくお願いします」と立ち上がり、部屋を出た。

菊たちと歩いたおかげで、京の町はずいぶん慣れた。巡察で歩いていたときより、断然覚えやすかったなと思う。何事も、楽しんで

やることが大事なのだ。それがなかなか難しいのだが……。

目についた店を覗いては、使用人を募集していないかと聞いてみるのだが、みんな首を横に振る。

当たり前か……。いきなり身寄りのない女が雇ってくれと言ったって、そう簡単に決まるものではないだろう。

昼飯時になると、さすがにおながが空いて歩けなくなり、目に付いた蕎麦屋で昼飯を取る。

待合茶屋で稼いだ金には限りがある。焦りは禁物だが、なるべく早く見つけないと……。

「え？ クビ？」

驚いた藤堂が店主の言葉を繰り返した。

「へえ。近藤はんには申し訳ないのですが、あの状況では……」
店主に礼を言い、二人は店を出た。

「この辺で知り合いというと、明里しかないな。とりあえず寄ってみようか」

「まったく、あいつはなにやってんだか」

藤堂は呆れたようにつぶやいた。

「今は奉公先を探しに出かけてはるよ。夕方には帰ると思うんやけど……」

「そうか。じゃあ俺はここで待つことにしよう。平助、先に帰って近藤さんにこの件を伝えてくれ」

「ああ、わかった」

藤堂が去っていくと、明里はにつこり笑って山南に寄り添った。

「ゆうべ来たときは顔色悪かったんやけど、しばらくしたらえらい元気になってな。今朝も張り切って出かけていったんよ。なんかええことあったんかな」

「どうだろう。クビになったばかりだし、空元気なんじゃないかな。……そういえば、野村くんの好きな人、わかったかもしれない」

「ええ？ 誰？」

「君は会ったことはないと思うよ」

「なんやの？ だから誰？」

山南は小さく首を振ると「いや、まだ確実じゃないから。勝手な噂話をしちゃいけないよね」と苦笑した。

「なら最初から口に出さんというて」

明里が少しすねた表情を見せると、「ごめんよ。つい……」と頭を掻いた。

「そうそう。沖田はんも知つとるんやね。野村はんがおなごやつてうちが知つとること」

「いや？ 言つてないよ」

「ええ？ だって、うちが野村はんと一緒にいるところ、沖田はん見たんよ？ あんときは野村はん元気なかつたし、好きな人を諦めるとか言いはつたから、そのことで頭いっぱい……沖田はんもなんも言わんかつたし、ぜんぜん気にせえへんかつた」

「まあ、大丈夫だよ。野村くんに不利益があると思えば、きっと誰にも言わないと思う。ああ見えて、けっこう思慮深いところもあるんだよ」

「ならええんやけど。せやけど、驚いたわあ」

胸を押さえる明里に、山南は優しく微笑んだ。

出戻り

「まあなんていうか……。野村くんも間が悪いというか、運が悪いというか……」

藤堂の報告を受けて、近藤は弱りきった表情を浮かべた。

「新しい仕事を探すと言ってももう店を出てるから、とりあえず山南さんが今探していますよ」

店を出てすぐ明里のもとへ行ったとは言えず、藤堂はうやむやに説明した。近藤は細かいことは気にしない性質だし、大丈夫だろう。

「仕事が見つからなかったらどうするんだろうな」

「そりゃ、路頭に迷うでしょうね」

藤堂の言葉に、近藤は渋面を作った。

「この寒い時期にか？ いや、それはいくらなんでも不憫だな。

……もう一度ここに来てもらうと言ってもなあ。歳がなんて言うか」
「多数決で決めればいいじゃないですか。野村が初めてここに来たときみたいに」

のんびりとした口調で藤堂が言うと、近藤は頷いた。

「そうだな。そうしよう。今、屯所に残っているのは誰かな」

「沖田さんと原田さんはさっき帰ってきたし、井上さんも非番で屯所にいたかな。永倉さんは巡回、一はどこにいるのか……とりあえず屯所にはいなかった」

「まあ、いる奴だけでいいから聞いてきてくれないか」

「それはいいんですけど、土方さんには近藤さんから話してくださいよ」

「ああ。わかった」

話を聞いた沖田は、「いやあ、すごいね、野村。殴っちゃったんだ？ 見たかったなあ。早く戻ってこないかな。また退屈せずに済む」と言って大笑いし始めた。

賛成ということなのだろうと、まだ笑っている沖田を放って今度は原田のもとへ行く。

酔っ払いをひっぱたいたことを聞くと「あいつもなかなかやるもんだな」と原田は感心し、「いいんじゃないか？　まあ、また男に戻るとなれば、本人はあまり気が進まねえかもしれないな。とりあえず、戻ってくるなら稽古にもっと気合入れてくれねえと」と賛成に一票を投じる。

原田の部屋で茶を飲んでいた井上も、笑顔で頷いた。

「俺も賛成だよ。野村くんの仕事は雑用ばかりだったが、いなくなっただけでいぶん不便になった。土方も、困ることが多かったよ。うだし」

「俺と山南さんも、反対する理由はないしな。一はどっちでもいいって言いそうだから、土方さんが一人反対したとしても、野村は帰ってこれるってことだな」

「だがなあ。それはそれで、土方さんのしごきが激しくなりそうだけだな」

原田の言葉に藤堂と井上は顔を見合わせ、「確かに……」と苦笑を浮かべた。

近藤のもとへ戻り、みんな異存がないと伝えると「じゃあ、お前も山南と一緒に野村くんを探して連れ帰ってくれ」と言った。藤堂は「今日はあっちに行ったりこっちに行ったり、なんだか疲れるな」とつぶやきつつ、部屋を出ていく。

一人きりになった近藤は、「さて……。土方に話すとするか」と自分を励ますように小さくつぶやいた。

明里が忙しくなる前に戻ろうと、利恵は少し早めに仕事探しを切り上げた。

（やっぱり、そうそうすぐには決まらないな……）

いくら気持ちを前向きに持ったとしても、一日中歩いてまったく反応がなければ、さすがに心身ともに疲れ果てる。久しぶりの晴天を見上げ、小さくため息をついた。

（まあ……。明日も頑張ろう）

一、二日なら明里の店の者も見逃してくれるだろうが、あまり居座っていては視線も厳しくなるだろう。本来、友人を泊めるような場所ではないのだから。

今度から、働きを認めてもらえるまではしばらく駄賃なしでもいいと言ってみようか。今はとりあえず、食事と寝泊りする場所さえ確保できればいい。

店に向かう途中、背後から「野村……？」と声をかけられた。

「あ、藤堂さん。お久しぶりです」

利恵は立ち止まると、藤堂が追いつくのを待つ。

「よくわたしだつて分かりましたね。沖田さんは最初、ぜんぜん気づかなかったのに」

「ほら、以前板橋でお前そっくりの女を見たって言っただろ？だからだよ」

「ああ……。そんなこともありましたね」

たった数ヶ月前のことなのに、ものすごく遠い昔のできごとのような気がする。

「お前、店を放り出されたんだって？ さっき聞いて驚いたよ」

「明里さんから聞いたんですか？」

「いや、ゆうべ山崎が見かけたって言っててさ。気になって山南さんと一緒に様子を見に行ったんだよ。そしたらお前、暴れたんだってなあ」

藤堂はふざけて利恵の肩をげんこつでコツンと殴った。

「暴れてなんかいいですよ。酔っ払いの頬を一発叩いただけです」

ぶつと噴出して、藤堂はもう一度肩を殴った。

「似たようなものじゃないか」

「それで……藤堂さんは今どこに向かつてるんですか？ 明里さんのお店？」

「ああ。お前を迎えに来たんだよ。山南さんは、店で待ってる」

藤堂の言葉に、利恵は足を止めた。

「迎えに？」

「行くところないんだろ？」

藤堂も足を止めると、腕を組んで小首を傾げた。

「ええ。まあ……。今、住み込みで働けるところを探しているんです」

「たいした仕事は探せないと思うぜ？ 身寄りがないうえに、身元を保証してくれる者もいないんだしさ。下手すると、お前……」

「それは考えましたし、それなりに覚悟はしているつもりです」

「だったら、戻ってくればいいじゃないか。体を売るよりは、ずいぶんましだと思うけどな」

利恵は黙り込み、再び明里の店へ向かって歩き始めた。

新撰組に戻ることは、まったく考えていなかった。というか、あそこもクビになったんだし。

「でも……。土方さんがなんて言うか」

「そっちは近藤さんが今説得してると思う」

すでに利恵を受け入れる方向で話は進んでいるらしい。

気兼ねしていると思ったのか、「多数決も取ったことだし、大丈夫だよ。みんな待ってるぜ。特に沖田が」と言って笑った。

「永倉さんがさ、俺たちがあまり顔を出すと新撰組の間者だって勘違いされて危ない目に合うかもしれないから、お前に会いに行くのは控えたほうがいいって言ったんだよ。それでみんな遠慮しててさ。店には顔を出さなかったけど、けっこう心配してたんだぜ？」

「そうだったんですか」

そんな気遣いをしてくれていたなんて意外だな……と理恵は驚いた。沖田が一度顔を出したきり誰も来なかったので、自分のことはまったく気にかけていないと思っていたのだ。

「わたしは……あそこにいるべき人物ではないと思うのですが」
女だし、剣術はできないし、どう前向きに捉えたとしても、役に立てる人間だとは思えない。

「でもさ」

藤堂は少し遠くを眺めて、考え込むような表情を見せた。

「山南さんが落ち込んだとき、お前がいてくれて助かったと思ってるんだ。俺たちだけじゃ、たぶん山南さんは今も寝込んでたような気がするし」

いったん言葉を止めて小さくため息をつく。

「最近、なんかみんなバラバラのような気がしてさ。前から考え方は違っていたけど、見るものは同じだったというか。お互いのことは分かり合ってたはずだったんだけど、上洛してからは何んだか……。でも、お前が来てから少しみんなの距離が縮んだような気がしてさ。それに、やっぱり雑用は野村じゃないと。みんな細かいことに気づかないし、雑だから。だから俺は、野村が戻ってきてくれるといいなと思ってる」

藤堂の言葉に胸が熱くなり、涙が浮かんだ。

自分をほんの少しでも必要としてくれる人がいる。

必要としてくれる人がいる場所が、自分の場所なのかもしれない。

「まあ、男装するのは嫌だろうけどさ。行くあてもなく仕事を探し続けるくらいなら、うちに戻ってきたほうがいいと思うけどな」

「そうですね。本当に……ありがとうございます」

そう言って、利恵は袖の端でそっと涙をぬぐった。

「まあ、うちんところにもあまり置いとけんしなあ。仕方ないのか

もしれんなあ。……つらくなったら、いつでも来てな？」

明里は利恵の手を握り締め、心配そうに眉をひそめている。

「うん。ゆうべは本当にありがとう」

明里に別れを告げ、山南たちと共に屯所へと向かう。

途中、来たときと同じように空き家で着替えると、藤堂が「やっぱりこっちのほうが見慣れているから、落ち着くなあ」と言った。

山南は「そうかな。俺は女らしい野村くんも綺麗でいいなと思ったけど。もう見れなくなってしまうというのは、やはり残念だな」と微笑む。

「わたしも少し残念ですが、こっちのほうが動くのが楽なんですよね」

利恵が苦笑を浮かべて自分の姿を見下ろしていると、「ああ、そうだ。今のうちに言っておかないと」と藤堂がいきなり声を上げた。

「お前、近藤さんの用事で別の場所に行ってたことになってるから。隊士たちに聞かれたら、隠密だからとかなんとか言っではぐらかせよ」

「分かりました」

屯所が近づいてくると、利恵は少し緊張した。沖田たちに会うのは楽しみだが、土方のことを考えると少し気が重い。

（やっぱり怒鳴られるかなあ）

「どの面下げて帰ってきやがった」くらいは言うだろうなと思いながら、もう二度と通ることはないと思っていた門をくぐる。

見慣れた玄関に向かいながら、（とりあえず、もう一度ここから始めよう）と利恵は思う。

どんな場所にいたとしても、自分らしさを失わず、真摯な気持ちで取り組んでいれば、必ず道は開けるはずだ。

そのとき、「よお。帰ったのか」と言いながら、中からこちらに

向かってくる人物が見えた。

「お久しぶりです、永倉さん」

利恵が挨拶すると、正面に立ち、「さっき巡察から帰ってきたら、お前が帰ってくるって聞いて驚いたぜ。半月くらいだったか？」と尋ねる。

「そうですね。そのくらいです」

「そうか……。あつという間に出戻りか。まあ、またこれからもよろしく」

そう言って、永倉はニヤリと笑った。

出戻り2

「あ、そういえば永倉さんが賛成かどうか聞いていなかった。どちらにしても賛成が多いから、反対しても結果は変わらないけどね」永倉は藤堂の言葉に答えず、ふいに真顔になると利息に尋ねた。

「ここに戻ってきたのは、お前の意思か？」

「……はい」

すると「なら、いいんだ。別に反対はしねえよ」と言って笑顔を浮かべる。

「とりあえず、ここで立ち話もなんだから……。体も冷えているだろうし、荷物を部屋に置いてくるといい。近藤さんも部屋にいるから、挨拶してきたらどうか」

山南がそつと利息の背中を押して、玄関の中へ入るよう促した。

一歩足を踏み入れたとき、「お帰り」と背後で永倉が言った。

「……ただいま」

答えながら振り返ると、永倉は腕を組んでニヤニヤしている。

「半月さばった分、明日からしごくぜ」

「覚悟してます」

利息は小さく頭を下げると、もといた自分の部屋へと向かう。長く暮らしていた場所だからだろうか。

屋敷内の匂いや雰囲気、なんとなく自宅に戻ってきたような安心感を覚えた。

「大変申し訳ありませんでした。せっかくご紹介いただいたのに、お顔に泥を塗るようなことをしてしまって……」

近藤の前に座ると、利息は両手について深く頭を下げる。

「いや、いいんだよ。大事にはならなかったんだし、過ぎたこと

だ」

近藤の隣では、無言のまま土方が利息を睨みつけている。

「今後はご迷惑をおかけしないよう精進いたします。またこちらで受け入れてくださること……深く感謝しております」

「いやいや。もういいから。顔を上げなさい」

戸惑ったような近藤の声は聞こえたが、依然土方は黙ったままだ。やっぱり今回も猛反対したんだろうな……と思いながら頭を下げたままでいると、「茶だ」と唸るような声がした。

「茶？」

顔を上げると、土方が顎を上げて「茶を持ってこいって言うてるんだ」と睨みつけた。近藤は驚いたような表情で土方を眺めている。

「は……はい。承知しました」

慌てて廊下に出ると、炊事場目指して早足で歩いていく。怒鳴らないどころか、文句ひとつ口にしなかったことに驚いていた。それがかえって怖い。粗相ひとつせず、無事にお茶を届けないと。簡単な用事なのに、利息は恐ろしく緊張していた。

「なにか言うかと思ったのだが、茶とはなあ」

呆然とした様子で近藤がつぶやくと、土方は鼻を鳴らした。

「仕方ねえだろ。今さら俺一人反対したところで、あいつはここにいることになってんだし」

「まあそうだが……。茶とはなあ」

「茶がそんなに珍しいか？」

土方はげんなりとした表情で近藤を見やった。

「いや、あのときはものすごく怒っていたからな。文句の一つでも怒鳴るのかと思っていたのだが」

「……あいつもそれなりの覚悟をして戻ってきたんだろうから、今さら言うことはねえよ。まあ、これまで以上にしごくしな。もう手加減はしねえ」

ニヤリと笑う土方を見て、近藤は（手加減したことなんてあった

かな)と思う。これからどれほどしごかれることになるのかと、利恵に同情を覚えた。

「まあ、まずは茶だ。自分で淹れねえと、薄すぎたりぬるすぎる茶が届いたりしてたからな。たまには普通の茶が飲みてえ。……野村は茶だけはうまく淹れられるからな」

「認めているのはそこだけなのか？」

鼻を鳴らして返事をする土方に、近藤は困ったような表情を浮かべた。

利恵が炊事場に着くと、料理当番なのか、山崎がこちらに背を向けて野菜籠の中身を確認していた。

少し躊躇したのだが、思い切って土間に降り、「お久しぶりです」と声をかける。

山崎は立ち上がって振り向くと、「戻られたんですね」と言った。そして少し眉をひそめ、「ゆうべはあの後、どこで過ごしたんですか？ 知り合いもいないでしょうに」と心配そうに尋ねる。

「あ……」

明里のところに行ったと言いかけて、利恵は慌てて言葉を止めた。これまでの様子を見る限り、山崎は忠誠心が高いほうだと思う。土方に言うなと口止めしても、何かの機会に聞かれたら正直に答えてしまつかもしない。

「あの、駄賃をなるべく使わないように貯めていたので、そのお金で宿を……」

利恵の態度を不審に思ったのか、山崎が探るような視線を投げかけた。

「そうですか。それなら良かった。あのあとどうされたのか心配だったのですが、わたしが屯所に帰ったのは今朝方だったので……」

「本当にご心配ばかりおかけして、申し訳ありません。……って、わたし、のんびりしてる暇はないんです。早くお茶を用意しないと。土方さんに持ってこいって言われたんですよ。すみません、あ

とでまたゆつくり」

利恵は慌てて湯を沸かす用意を始めた。

「……野村さん」

「はい？」

「わたしの思い過ごしなら良いのですが、何か怒らせてしまうようなことをしたのでしょうか？」

「……え？」

利恵がここで再び過ごすのなら、避けられていた原因をはっきりさせておきたいと山崎は思った。最近出かけることが多いとはいえ、屯所に戻るたびに気まずい思いをするのは嫌だ。

「怒ってなんかいませんよ。どうして……」

言いかけたとき、利恵は自分が取った態度のせいで山崎に嫌な思いをさせたのだと思い当たった。

「ああ、ごめんなさい。個人的なことなんです。ここを出て行く頃はいろいろと悩んでばかりいて、気持ちもぐちゃぐちゃで……」

八つ当たりするつもりではなかったんですけど、嫌な思いをさせてしまったようですね。本当にすみません」

必死に謝る利恵を見て、山崎はふつと口元をほころばせた。

「なんだか、以前と逆ですね」

「はい？」

「前はわたしが、怒っているのではないかと勘違いさせてしまいました」

「そういえば……。本当ですね」

同じ質問をしたことを思い出し、なんだか急におかしくなってきた、利恵はぷつと吹き出した。

「じゃあ、お互い様なのかな。でも、今度は気をつけますね」

山崎の顔を見上げながら、こうやって普通に話せるようになったことを嬉しく感じる。いったんこの場から距離を置いたことで、少しは気持ちが落ち着いたらしい。

そのとき湯が沸いた気配がしたので、慌てて茶葉を急須に用意した。

「のんびりしてる暇はなかったんだ……。早く持っていきたいと、どやされちゃう」

「引き止めてしまつて……」

「いえ、いいんです。何か気になることがあったら、いつでも言ってくださいね」

パタパタと湯のみを二つ持つて去っていく利恵に背を向け、山崎は微笑んだまま野菜籠のもとへ戻る。

久しぶりに利恵が自然な笑顔を向けてくれたので、心の底からホツとしていた。

嫌われたのではなくて、本当に良かった。

「戻ってきたからには、これまで以上に厳しい生活になるって覚悟はあるんだろうな」

湯のみを渡して再び正面に座ると、土方が口を開いた。

「はい。剣術に関しても、もつと真剣に取り組むつもりです」

「当たり前だ。道も完璧に覚えろよ」

「ああ、それは大丈夫です。菊ちゃん……店で一緒だった人たちと一緒に散歩とかしていたら、覚ええました」

「ふん。また迷子になったら百叩きだからな」

「……はい」

「じゃあとりあえず、素振りでもしろ。今まで休んでいたぶん、二百だ」

「にひゃ……、はい。では、さつそく……」

立ち上がると、近藤が「がんばれよ」と励ますような笑みを向けた。利恵も笑顔を浮かべて小さく頷くと、自室に戻る。

部屋は何も変わっていないかった。近藤の荷物が戻された様子もなく、自分が出たときのままのように見える。

竹刀に手をかけたとき、勢いよく障子が開いた。

「野村！ 久しぶり！」

沖田が満面の笑顔を浮かべている。

「お久しぶりです」

「なんだよ、帰ってきたんなら声かけてくれればいいのにさ」

「あー、ごめんなさい。なんだかバタバタしていて……。またお世話になります」

利恵が頭を下げると、沖田はニヤニヤしながら「何？ さっそく素振りさせられるの？」と竹刀に目を向けた。

「ええ。ずいぶんさぼってしまいましたしね」

「なーんだ。為三郎に声かけて一緒に遊ぼうと思ったのにさ」

「いや、だから、遊ぶために戻ってきたわけじゃないんですから

……」

「そっか。じゃあ、もう少し落ち着いたらでいいよ」

少しすねたような表情を浮かべる沖田を見て、利恵は苦笑した。

「そうですね。でも、時間が空いたら為三郎には会いに行きますよ」

「そのときは必ず声かけて」

「はい、はい」

利恵は頷きながら、自分には兄弟はいないが、弟がいたらこんな感じなのかなあ……と思いながら沖田を眺めた。

最後の一人

井上と原田も笑顔で歓迎してくれた。

「野村くんがいないと、なんだか細かいことがいろいろと滞ってしまってるね」

「まあな。帰ってくると、たいていこいつが出てきて足をすすぐ湯を用意してくれたり、茶を淹れてくれたりしてたしな。けっこう助かってたんだぜ。……まあ、そんな雑用より、もっとやらなくちゃいけないこともあるんだがな」

「剣術ですよ。承知してます」

斉藤は相変わらず無表情だった。利恵がいなくなったことにも実は気づいていなかったのではないかと思えるほど、顔を合わせても反応はない。それでも一応挨拶をしておこうと、斉藤のもとへ茶を運んだ。

「またお世話になります」

いつものように刀を抜いて刃の様子を眺めている斉藤に挨拶すると、「ああ」とだけ返事が返ってきた。

その後また沈黙が続く。

斉藤の世界をこれ以上邪魔しないようにと立ち上がった利恵は、打粉を叩いては拭っている様子を見て「そういえば、濱口さんにおたいた刀を部屋に置いたままでした。やっぱり定期的に手入れしたほうがいいんですね？」と尋ねた。

すると、斉藤がこちらをちらりと見上げてくる。刀の話には食いつくらしい。

「そうだな。一度錆びてしまうと何をしても絶対に取れないから、その刀は二度と使い物にならなくなる。……譲り受けたという刀を持ってこい。状態を見てやる」

利恵が部屋から刀を持ってくると、しばらく検分して「まあまあ

だな。いずれにしても、お前にはもつたいない」とつぶやいた。

「しかし、もう少し手入れをしてやらねば。輝きも切れ味も落ちてしまう」

利恵に話しかけているというよりは、独り言のように聞こえる。

「手入れの仕方、教えていただけますか？ ……あ、いや、やっぱり沖田さんが永倉さんに聞いてみます」

ジロリと睨まれたので、慌てて言い直す。

すると意外にも、「よく見ておけ。まず、柄を外す」と説明を始めた。

一度聞いたと同じことは説明しないタイプに見えたので、驚きながらも斉藤の言葉を聞き漏らさないよう耳をすまし、手元に目をこらす。

「……で、最後に目釘を打って終わりだ。わかったか？」

「はい」

そして再び沈黙が降りる。

「ありがとうございます。……では、失礼します」

立ち去ろうとしたところ、背後から「良い刀を持っていても、使いこなせなければ意味はない。手入れはもちろん、剣術の鍛錬にも励むことだ」と声をかけられた。

「はい。これまで以上にがんばります。……土方さんにはしごかれるみたいです。前に比べれば少しは……」

振り返ると、斉藤は再び自分の刀に集中し、話を聞いている様子はない。利恵は苦笑を浮かべ、静かに部屋を出た。

そしてまた、屯所での生活が始まった。

土方は宣言通り、以前にも増して厳しくなったような気がする。以前は永倉や平隊士に任せきりだった稽古も、自らつけてくれるようになった。打ち込むたびに怒鳴られるので、緊張感も否応なく高まる。どうがんばっても「まったく、なっちゃねえ」といつも罵られるが、奥沢や島田はこっそり「ずいぶん上達したと思うぞ。少

なくとも、竹刀は落とさなくなつたしな」と励ましてくれた。

十二月も後半を迎えた頃、近藤の部屋へ茶を運んでいくと、苦りきつた表情を浮かべて何やら書状を読んでいる。

「なにか困つたことでも？」

尋ねると、「ううん。うちで対処する問題ではないのに、どうして……」とため息をついた。

「山南さんか土方さんと呼んできましようか？」

「うん、そうだな。……二人とも呼んでくれ」

「承知しました」

それぞれの部屋を訪れて声をかけると、二人分の茶を用意して再び近藤の部屋へと向かう。

部屋の前に立つたとき、「なんでうちに来たんだ？」と土方の声が出た。

「失礼します。お茶をお持ちしました」と声をかけてから、障子を開けて中へと入る。

茶を置きながら顔を眺めると、土方も山南も、戸惑つたような表情を浮かべている。

「野口が話を聞いてやつたらしいが……」

「聞くまでもねえだろ。うちじゃなくても、ここに来る以前に相談する場はいくらでもあるはずだがな」

何の話をしているのか分からないが、どうやら新撰組の仕事ではない案件が持ち込まれて困っているらしい。

素朴で優しい霧囲気の野口の顔を思い浮かべ、彼が面倒に巻き込まれなければいいんだけど……と思いながら部屋を出た。

あとから聞いた話では、近江国にある七里村で起きた老人と百姓らのいざこざについて、なぜか京にある新撰組に相談が持ちかけられたらしい。

現代で考えれば、埼玉で起きた事件をまったく関係のない京都の

裁判所に訴えるようなものだろうか。三人が戸惑うのも無理ないなと思う。当然ながら三人は関係ない事案だからと、そのまま放っておくことに決めたらしく、その後展開があつた様子はない。なんとなく気になったのだが、自分が立ち入るような話ではないので、詳細を尋ねることは控えた。

しかし後日、壬生の新撰組と偽って、水戸藩士が七里村に押しかけた。その結果、百姓たちが「俺らが村を出るしかなかった」と再び新撰組に訴え出たのだった。

「なんでこんな面倒なことになるんだ」

近藤が頭を抱える横で、土方はむっとり黙り込み、山南も眉を寄せて俯いている。

「なぜ新撰組の名を騙ったんだ？ 野口は何か言っていたか？」

「さつき話を聞いたんだが、わざわざ遠方から訪ねてきたのにこのまま返すのは不憫だと、水戸藩の者に協力させると返答したようだな」

土方の言葉に頷きながら、山南が口を開いた。

「とにかくうちは関係ないんだから、管轄の代官に計らってもらうしかないでしょうね。中羽田村の小沢殿に連絡してみては？」

「そうだな。文を書くか……」

近藤は大きなため息をついて、「まったく。なんでこんなことに関わらなくてはならんだ」と言いながら筆と紙を取り出した。

「野口は……切腹を申し付けるか」

土方が低くつぶやくと、近藤と山南は驚いて目を剥いた。

「いや、話を聞いただけなんだし、その必要はないんじゃない……」

山南の言葉に、土方は鼻を鳴らして皮肉めいた笑いを浮かべた。

「禁令には、勝手に訴訟取り扱うべからずとあるだろう。水戸藩の奴に声をかけた時点で思い切り触れてるじゃねえか。しかもうちの名を騙って面倒を起こされたんだ。これを見逃して、同じような

ことが続いてみる。うちは万屋になっちまう」

言葉をさえぎられて不満げな山南を横目に、土方はさらに言葉を続けた。

「それに、どうやらあいつは、芹沢たちを殺ったのは長州ではないんじゃないかと疑っているらしい」

「そうなのか？」

「永倉も納得はしてねえみたいだ。二人で疑問を口にしていたところを、斉藤がたまたま聞いたんだけどな。永倉にはそれとなく何度が聞かれたことはあったが、長州の仕業だと念を押したらそれ以上は何も言わなかった。まああいつは大丈夫だろう。……やっかいなのは野口だ。気の良い奴だが、あいつはもともと芹沢についてたんだし、もし俺らを疑いはじめたら、やっかいなことになるかもしれないねえ。その前に芽を摘むいい機会だと思うがな」

「そこまでする必要はあるのか？」

山南が言つと、顎を上げて挑むような視線を送る。

「当たり前だろ。少なくとも、禁令がある。お前、禁令の意味は分かるだろ？ やっちゃんいけねえってことだ。それをやっちゃまったんだし、今後面倒なことも起こりかねないとなれば、ここで消えてもらったほうが新撰組のためだ」

「そうだな……。仕方あるまい。この件が落ち着いたら、野口に切腹を申し付けよう」

近藤が言つと、山南は頭を小さく横に振って俯いた。

永倉と野口がそんなことを考えていたなんて、俺はまったく知らなかった。どんどん置いてきぼりを食っているような気がする。ここに呼ばれて意見を聞かれても、土方のこり押しに負けて反映されることはない。

山南の心に、また小さな亀裂が広がった。

数日後、素振りをしている利恵のもとへ、永倉がふらりとやってきた。縁側に座ってぼんやりしているので、手を止めて傍らに座る。

「どうしたんですか？」

利恵の問いに、永倉は物憂げな表情を浮かべて話し始めた。

「野口さんが切腹？ どうしてですか？」

「この間、七里村の件で騒ぎがあつたろ？ それに関わつたからだ」

呆然とする利恵に、永倉が鎮痛な表情を浮かべて説明する。

「だって、野口さんは話を聞いたただだって……」

「いや、水戸藩の奴に声をかけたらしい。親切のつもりだったよ
うだが、そいつらがうちの名を騙つて、かえつて面倒なことになつ
たらしいんだ。それが禁令に触れてしまったんだな」

「そんな……。 たつたそれだけで？ なんとかならないんですか
？」

「勝手に訴訟取り扱うべからず。……俺には口出しできねえよ」

なんとか助ける術を見つけようと言いかけたのだが、思い直して
口を閉ざした。永倉のほうが野口と親しかったのだ。助けたいとい
う気持ちは、自分以上に強いと思う。それでも無理だと諦めている
のだから、これ以上言えば、ただ永倉の気持ちを傷つけるだけだ。

「……いつですか」

「明日だ。逃げ出さねえように、別室に置いて林が見張っている」

「話は……」

「もう、できねえな」

どうしてわたしは、話ができるかどうかなんて聞いたんだろう。
会えたとして、明日は切腹させられる人に対して、何を話すという
のだろう。

馬鹿なことを尋ねたと後悔していると、永倉は無言のまま立ち上
がった。腰に手を当て、唇をかみ締めて曇天を睨んでいる。

利恵はその背を見つめ、深いため息をついた。

……この人にも、かける言葉なんて見つからない。

年越し

十二月二十七日。

正月の準備に追われ、どこか浮ついたような雰囲気漂うこの日、前川邸にて野口健司の切腹が行われることになった。

数えでまだ二十一歳の野口は、幹部たちが見守る中、安藤の介錯でその短い生涯を終える。

利恵はそのとき、庭に出ていた。いつも通りに竹箒で雪をかき分けていく。

切腹が行われるだろうと思われる頃には、不自然なほど静寂が漂っていた。

時折、木の枝から雪が落ちる音が響く。

切腹の儀が終わったのは、屯所から安藤が出てきたことで分かった。正月の準備を手伝うのと言って、そのまま八木家へ向かう。幹部たちは、誰一人出てこない。中で何か話し合っているのだろうか。

八木家のほうから時折為三郎と思われる子供の声が響いてくるが、まだ屯所内はひっそりとしていた。

もう、この世に野口はいない。

そう思うのだが、実感は得られなかった。切腹自体が利恵にとって現実味のないものだからだろうか。今にも玄関から、はにかんだような笑みを浮かべて野口が現れるような気がする。

しばらくすると、二人の隊士が筵をかけた担架のようなものを運んできた。そしてもう一人は箱のようなものを携えている。その箱

に何が入っているかは、考えないようにした。

考えてはいけない。

しかし、箱が強力な吸引力を持っているかのごとく、視線が吸い寄せられる。

見たくないと思っっているのに、どうしても目を離すことができなかった。

そのとき、肩を抱かれて体の向きを変えられた。誰かと見上げると、表情を消した永倉が正面を睨んでいる。そのまま何も言わず、利恵と目も合わせず、遺体が見えない場所へと連れていかれた。

「わざわざ見るこたねえよ。お前は、あいつが元氣だった頃のことを覚えといてくれ。俺はもう、死に様しか思い出せねえ」

永倉が感情を交えずに淡々と話すのが、よけいに堪えた。

泣くまいと思っても、唇が震える。口を開けば涙がこぼれてしまいそうで、利恵は唇をかみ締めて頷いた。

脳裏には、生姜湯を作っているときに現れた、酒が入って楽しげだった二人の様子がよみがえっている。

「さて、俺も八木家を手伝うか。今年は世話になったしな」

永倉は気分を変えるように明るい口調でそう言つと、大きく伸びをした。

利恵は深呼吸して息を整え、気持ちを落ち着けてから永倉を見上げた。

「そろそろ餅つきが始まると思いますよ。さっき、為三郎が誘いに来ましたから」

「お前は行かねえのか？」

「ええ。あまり大勢で行っても……。それに、ここも大掃除しないと」

厠も屋敷も、清潔感が漂うとは決して言えない状態だ。少しは綺麗にしてから新年を迎えたい。

「そうか。じゃ、また後でな」

ちようど外に出てきた原田と肩を並べて、永倉は八木家へ向かう。

敵を斬るのに躊躇はないこの人たちも、やはり親しい者の死は堪える。しかも首を落とされる様子を見たのなら、つらいなんて言葉では表現しきれないほどの思いに達しない。それを耐え忍び、普段通りに振舞おうとしているなんて、相当の精神力が必要だと思う。遠ざかっていく二人の背を見送りながら、利恵はやるせない思いに胸をふさがれた。

大晦日になると、京都付近出身の隊士は実家で正月を過ごすと言っ出て出かけた。それでも半数以上は残っていたが、屯所内には閑散とした雰囲気漂っている。近藤も愛妾のもとで過ごすことにしたらしく、昼飯のあと出かけていった。

「土方さんは、屯所に残るんですか？」

茶を出しながら尋ねると、「一人のもとで過ごす」と、他の女に悪いしな」と答えた。

「……そうですか」

何股かけてるんだか……と少し呆れながら部屋を後にする。

次に、山南の部屋へ向かった。

何か悩み事があるのか、再び暗い表情で考え込んでいるところを時折見かけるようになった。藤堂も気づいているが、何が原因なのか分からないと言っている。

「山南さん、今よろしいですか？」

返事を待つて中に入ると、出かける準備をしていたところだった。「明里さんによろしくお伝えくださいね。……では、お二人で良いお年をお過ごしください」

挨拶すると、「野村くんも来ればいいのに」と笑顔を浮かべた。今日はいつも通りの山南で、表情も明るい。安心しながら利恵も

笑顔を返す。

「いえいえ。新年は水入らずでお迎えください。屯所も人が少なくなっていますし、わたしも静かに過ごせそうです」

「妻子持ちも帰れば良かったんだがね。新年くらい、家族と過ごさせてあげたかったな」

そう言いながら、山南は山崎の件をなかなか確認できずにいたことを思い出した。

「まあ、妻子持ちの者といっても、うちには片手であまるほどしかないが……。誰だったかな」

すると利恵は小首を傾げて「近藤さんと、山崎さんと、吉村さん？」と答えた。

「ああ、山崎というと、監察の山崎の従兄弟か。彼はなるべく隠したかったみたいだがね。結局、いつの間にかみんなの耳に入ってしまったようだ」

「そうなんですか。なんで隠そうと思うんでしょうねえ……」
何気なく答えた利恵の瞳が、ふと見開かれた。

「従兄弟？」

「ああ。山崎は二人いるんだよね。監察の山崎は一人身だよ」
呆然とする利恵の表情を見て、（やっぱり）と山南は微笑んだ。
「さて、じゃあ俺はそろそろ行くよ。……近々、明里に会いに行ってくれ。寂しがっているよ」

「……はい」

上の空の様子で返事をする利恵の肩をポンポンと叩き、「君も良いいお年を」と言っつて山南は出かけていった。

（ちょっと待って。どういうこと？）

部屋を出ていく山南を見送りながら、利恵は混乱する頭の中を整理しようとしていた。

山崎は独身？ あの隊士たちが話していたのは、山崎の従兄弟のことだったのか。

（……ということは、わたしはものすごい勘違いをしていた、と。そういうことですか）

山崎が結婚していると思ひ込み、落ち込んだあとの自分の行動を思い出すと、恥ずかしさのあまり頭を抱えてしゃがみこむ。

（いや、でも……。子供が二人いるっていうのは何だったんだろう。まさか隠し子？　いくらなんでもそれはないか。自宅に帰ったって言ってたし……）

そのとき、兄が実家を継いだと聞いたことも思い出す。顔を上げ、床に腰を下ろした。

（え、それってお兄さんの子供のこと？　紛らわしい言い方しないでよ）

恥ずかしくもあり、嬉しくもあり。それにこれはいわゆる逆ギレか……。紛らわしい言い方をした山崎が少し腹立たしくもある。

「あー、馬鹿みたい」

さまざまな思いが胸に膨れ上がり、苦しいほどだった。その苦しさを少しでも吐き出そうと、小さく独り言をつぶやいた。

夕飯に蕎麦と酒を用意して、奥座敷に集まった幹部たちの元へ運んでいく。

食事の後片付けをすれば、あとはゆっくり休むことができる。野口の切腹以来、普段の雑務や稽古に加えて、屯所内の普段は手が届かない部分の大掃除をしたり、八木家の正月準備を手伝ったりとかなり忙しく過ごしていた。

年越しくらい、静かに過ごしたい。

ふと、父と母の面影が頭をよぎった。このところいろいろあって思い出す機会は減っていたが、やはり親のことはつねに頭の片隅にある。二人がどんな思いで年を越すのかと考えると、胸が痛んだ。

仕事は新しく人を雇えば何とかなるだろうから、会社のことはそれほど気に病むことはなくなった。しかし、娘の代わりはいない。考えるうちに俯きかけた頭を上げ、くよくよ思い悩んだところで

戻れるわけではないのだから……と気持ちを奮い立たせた。

幹部もほとんどは外で過ごすことにしたらしく、試衛館出身以外の者の姿はなかった。結局、利恵が見慣れた面々だけが集まって、馬鹿話に興じている。斉藤は興味なさそうに、壁によりかかって一人杯を傾けていた。

「初詣のついでに、初日の出が見てえな」

永倉が言つと、「おう。なら、今夜は寝るなよ。寝た奴は殴る」と原田が拳を上げた。

「じゃあ、お酒は控えてくださいな」

膳を置きながら利恵が言つと、原田は「馬鹿だな。俺たちはそんなに弱くねえよ。飲んじゃいけねえのは土方さんだけだ」と笑った。

「なら、お前が寝たら俺が思い切り殴ってやるう」

土方は不敵な笑みを浮かべている。

「野村も一緒に行くだろ？」

残りの膳を運んでこようと利恵が炊事場へ向かうと、沖田があとを追いかけてきた。

「どうしようかな。疲れてるし、わたしは寝ちやうかも。行きませんって言っておけば、寝てても殴られないですよ」

「殴られる前に俺が起こしてやるからさ。せつかくだから、行くよ。年に一度なんだし」

「じゃあ、起きていられたら……」

炊事場で膳を持ち上げながら苦笑交じりに同意すると、沖田は笑顔を浮かべて「手伝うよ」と言つて手を伸ばした。

夕飯を食べたらゆっくり過ごそうと思っていたのに、原田たちは次から次へと酒を要求するし、その後片付けにも忙しく、パタパタと動くうちに除夜の鐘の音が響き始める。その後も何かと用事を言いつけられ、利恵は寝るタイミングを外してしまった。

そろそろ出かけようかと永倉が言う頃には、あんなに張り切っていた原田は床に伸びていた。

「……原田さん、起きませんね」

永倉が激しくゆすつているが、原田は大きないびきをかいている。

「殴つても起きそうにねえな。置いていくか」

土方が言くと、井上は「そうだね。なんで置いていったんだと後で騒ぎそうだが……」と微笑みながら寝顔を見下ろした。

「せっかくだから、みんなで行きたかったんだけどなあ。ここで迎える初めての正月なのにさ」

沖田は原田の頬をつねったが、片手を伸ばしてつねられた場所を搔いただけで、起きる様子はまったくくない。

その傍らで黙々と酒宴の後片付けを手伝っていた山崎に、沖田が声をかけた。

「山崎も行くだろ？」

山崎は小さく首を振り、「屯所を空けるわけにはいきませんから」と答える。

「ここで初日の出を見るつもりで起きてる奴が何人かいるから大丈夫だ。お前もたまには付き合え」

土方の言葉に少し考える様子を見せたので、利恵も誘ってみることにした。

「そうですよ。行きましょう。結局眠れなかったので、わたしも付き合うことになりましたし……」

すると山崎は小さく微笑み、頷いた。

「では、ご一緒にいたします」

正月

一行は祇園にある八坂神社へ向かった。

深夜の空気は口を開くと肺の奥まで凍ってしまいそうなほどの冷たさで、みんなほとんど話を交わさずに黙々と足を運んでいる。

土方と井上を先頭に、あとは気まぐれにダラダラと列を乱しながら歩いていった。利恵は最後尾で、前を歩く山崎の背をぼんやりと見ている。

（結婚してないと知ったところで、別にどうするわけでもないんだけど……）

待合茶屋で女として過ごしていたときなら、積極的になれたかもしれない。しかし今は新撰組に戻って男として生活しているから、好きだという気持ちは隠さなくてはいけないだろう。もし利恵を女だと知らない者に気持ちを知られたら、「男色だぞ、あいつ」と敬遠されてしまうに違いない。

だから、（傍にいただけでいい）と思った。

こうして一緒の時間を過ごしているだけで、ほんのりとした幸せを感じられる。

利恵の視線を感じたのか、ふいに山崎が振り向いた。足を止めて、追いつくのを待っている。

「疲れましたか？」

利恵が横に並ぶと、そう声をかけてきた。どうやら集団から遅れて歩いていることを気にしてくれたらしい。

「そうですね。なんだか慌しい年越しでしたし……。でも、大丈夫ですよ。目は冴えています」

山崎は小さく頷くと、正面を向いた。そのまま利恵の歩調に合わせて歩いている。

隣に立っていても、妻子がいると思っていたときほど過剰に意識

することはなかった。沈黙さえ心地よく感じる。

前方では沖田にからかわれた土方が何やら怒っていて、その様子を見て永倉と井上、藤堂が笑っていた。その後ろを、斉藤がひっそりと歩いている。

この人たちは、初詣で何を願うんだろう。やっぱり、武士として名を立てることなのかな。

（とにかく大きな怪我なく、無事に過ごせますように。幕末での仕事も稽古も一生懸命やりますが、できれば現代に戻れますように。父さん、母さんも元気に過ごせますように。あと、たぶんわたしの席はもう残っていないと思うので、もし現代に戻れたらなるべく早く仕事が見つかりますように。そしてできれば……現代の資料はすべて間違っていて、新撰組のみんなが元気に生きていきますように……）

賽銭箱に1銭を投げ入れ、思いつく限りさまざまなことを延々と願った。

（本当はお賽銭をもっと入れたかったですけど、屯所に戻ってからは収入がないし、以前稼いだ分もかなり少なくなっているの、今回はこれで勘弁してください）

そう締めくくって振り返ると、人ごみの向こうから一同が呆れたように利息を見ていた。

「ずいぶん長かったね。あまり欲張ると、何一つ叶わないよ」

沖田が声を張り上げる。

みんなのもとへ行くこうとしたのだが、賽銭箱へと押し寄せる人の波に飲まれてなかなか進めない。

（はぐれたりしたら、新年早々土方さんに怒鳴られる……）

焦り始めたとき、誰かに肘をつかれ、引き寄せられた。

「こちらへ」

山崎が、器用に隙間を見つけては、利息を伴いすり抜けていく。

誰かが利恵にぶつかってきて、一瞬肘から手が離れた。しかしすぐに、今度は手首を掴まれた。

直接肌に触れた山崎の手は冷え切っていたが、掴まれた場所がなんだか熱い。利恵はひっそり微笑みながら、山崎の背を見つめていた。

そんな小さな幸せな時間は、あっという間に終わった。一行に合流すると、「おいおい、早速迷いそうになってんじゃねえよ」と永倉が言い、その横で井上は困ったような笑顔を浮かべている。沖田と藤堂はからかうようにニヤニヤしていた。

離された手首には、まだ握られていたときの感触が残っている。もう少し握っていてほしかったな、と少し寂しくなった。

まるで手をつないだり、腕を組んだりするだけでドキドキしていた中学生の頃に戻ったような気がする。

「ったく……。餓鬼じゃねえんだから、はぐれそうになってんじやねえよ。しかも、なににやけてんだよ。気持ち悪い奴だな」

苦笑を浮かべて謝罪する利恵に、土方が苦々しげな口調で文句を言った。斉藤も同意するかのようにつめ息をつく。

「まあいいじゃないか。はぐれずに済んだんだし。それより、そろそろ日が昇る頃だよ。移動しよう」

沖田の明るい声に、一行はまただらだらと歩き始めた。

どんどん人が増えてこつた返す神社を出て、加茂川のほとりに向かった。上流を眺めると、うつすらと明るくなり始めている。

水の近くはよけいに体が冷える。井上にもらった温石を懐から出すと、握り締めて指先を温めた。

「寒いかい？」

隣に立っていた井上が声をかけてきた。

「ここに立ちっぱなしだと、芯から冷えてしまいそうですね」

温石を頬に押し付けながら、利恵は白い息を吐いた。

井上の横からひよいと顔を覗かせて、沖田がにっこり笑う。

「じゃあさ、みんなでおしくらまんじゅうでもする？」

「しねえよ」

すかさず土方が答えた。他の面々は聞こえない振りをしている。

「えー、野村と二人きりだとおしくらまんじゅうにならないよ」

「……わたしもやりませんよ。為三郎も一緒ならまだ分かりますが、大人だけでおしくらまんじゅうだなんて、人の目を集めてしまいうじゃないですか」

「いいじゃないか。温まるんだからさ」

全員に拒否されたので、沖田は少しふてくされている。

「ご来光だ」

永倉の言葉に、全員が同じ方向に顔を向けた。

オレンジがかった金色の光が水面の向こうに細く広がり、その中央がほんの少し盛り上がっている。

いつも同じく日は昇るのに、どうして初日の出はよけいに美しく感じるんだろう。

うつとりと見つめていると、光の盛り上がりがどんどん大きくなっていく。

井上の向こうから、また沖田が顔を覗かせた。

「今年もよろしくね」

そういえば、年越しはバタバタしていて挨拶していなかった……
と思い出し、利恵は軽く頭を下げた。

「明けましておめでとうございます。本年もよろしく願いします」

後ろを振り向くと、山崎も「おめでとうございます」と言って小さく微笑んだ。

「さて。ご来光も拝んだことだし、帰るか。眠くてたまらねえ」
土方が言つと、永倉は頷いた。

「だな。……原田の奴、まだ寝てやがるかな」

「まあ、あれでもいつもよりかなり遅い時間だったしね。まだ寝ているんじゃないかな」

三人が並んで歩き始めると、斉藤もスツと後を追った。

「一眠りしたら、為三郎たちと羽根突きでもしようよ」

沖田は利恵の隣に來ると、一緒に歩き始める。

「そうですね。疲れてなかったら……」

答えながら、利恵はあくびをかみ殺した。あとは帰るだけだと思つた。とたん猛烈な眠氣に襲われ、まぶたが重い。

「とにかく、早く帰りましょう。歩きながら眠ってしまいそうです」

眠氣を振り払うように、利恵は足を速めた。

屯所に着くとすぐ、湯を用意して足の冷えを和らげた。足の指先が、ところどころ赤くなっている。しもやけになつたらしく、温まつたとたん、むず痒さがつま先中に広がった。

（ラベンダーってしもやけにも効果あつたかな……）

そう思いながらポーチから小瓶を取り出すと、中身はほとんど残つていなかった。

（とりあえず……。これは大事に取っておこう）

痒みも氣になるが、眠氣も限界に來ている。ほとんど目を閉じた状態で小瓶をしまつと、倒れこむように布団の上に横たわった。

目覚めると、屯所内にはまだ静けさが漂っていた。夜更かしをした者たちはまだ眠っているらしい。

茶でも飲もうと炊事場へ行き、湯を沸かしていると、大あくびをしながら原田が現れた。

「なあ。お前は初詣に行ったのか？」

「行きましたよ。原田さん以外のみんなで」

「なんだよ。起こしてくれりや良かったのによ」

そう言いながら、水を飲もうと土間に下りてくる。

「起こそうとしたけど、まったく起きなかったんです。……お茶、飲みますか？　ちょうど淹れようと思っていたところなんですよ」

「ああ」

まだ酒が残っているのか、原田はぼんやりとした表情を浮かべている。

この静かでのんびりとした雰囲気、日本の本来の正月なのかもしれないな、と思った。

大晦日から休みなく番組を流すテレビもないし、初売りの福袋目当てで前の晩から百貨店の前に行列ができることもない。さまざまところでイベントも行われ、国民の半分は元日から働いているのではないかと思われるほどだった……と思い起こす。現に自分も、クリスマスから正月にかけては取材で出かけっぱなしだった。

日の位置を見ると、ちょうど昼飯時を迎えたようだと思い、調理台の上に置いておいた重箱を確認してみた。どうやら小腹を空かせた者がつまんだらしく、ところどころ隙間が空いている。

「皆さんまだ寝てるようですし、先に食事しちゃいましょうか」

「そうしようぜ。俺を置いてった奴らなんて、待つことたねえよ」
意外と根に持つタイプなのかと苦笑を浮かべながら、利恵は皿に料理を取り分けていく。

しばらくすると、為三郎が遊ぼうと声をかけてきた。遊び道具は全部自宅にあるから、沖田を連れて八木家に来てほしいと言う。

まだ眠いと言って上掛けを被る沖田を無理やり起こし、一緒に出かけた。

為三郎は縁側に駒や凧、羽子板などを広げて、どれで遊ぼうかと

悩んでいる。

「羽根つきにしよう!」

利恵の言葉に為三郎は笑顔で頷いて、羽子板を片方差し出した。

静かで平和な元日だった。

辻斬り

二日の朝飯は雑煮だった。大阪出身の隊士が用意したせいか、出汁がしっかり効いていてうまいな……と山崎は思った。

しかし江戸出身の幹部たちは味が薄いとこねている。そんな彼らのために、利恵は「そんなに言うなら、ご自身で好きなように味付けすればいいじゃないですか」と言っ、炊事場からしょうゆを持ってきた。

しばらくすると、今度はしょうゆを入れすぎたと永倉と沖田が騒いでおり、利恵は呆れながら二人の腕を持ってまた炊事場へ向かう。

そんな様子をさりげなく観察しながら、利恵はまるでこの人たちの母親のようだな、とふと思った。

いや、母親では失礼だな。……姉か。

周囲をよく観察しており、細かいことによく気づき、自然に対応している。隅に控えているようでいて、実は場を仕切っているような印象を受けることもあった。

ここに戻ってきたのは、利恵にとって良いことだとは言えないだろう。しかし幹部たちにとって、利恵はそこにいて当たり前のような存在になっているのではないかと思う。

そんなことを考えながら餅をかじっていたら、ふと沖田と目が合った。

沖田は無邪気な性格には違いないが、笑顔を浮かべていても、こちらの心の奥まで見通そうとしているかのよう、目だけが鋭い光を放っていることがある。今まさに、その表情を浮かべて山崎を見ている。

なにか言葉をかけられるのかと思ったのだが、沖田はそのまま

つと目を逸らす。その視線の先には、「あまり入れると体に悪いですよ」と言いながら、原田の腕にしようゆをそそいでいる利恵の姿があった。

その日、将軍警護のため、新撰組は大阪へ出発した。

大阪の商人に顔がきくという山崎も資金繰りのため同行することになり、利恵と山南ほか残った隊士で留守を預かることになった。

正月に引き続き、半数以上の隊士がいなくなった屯所内はひっそりとしている。幹部がいなければ大した仕事もないため、隊士と剣術の稽古をしたり、山南と一緒に明里に会いに行ったりと、比較的のんびり過ごした。

一行が大阪から帰ってきたのは、一月十五日だった。

みんな「冬の警護はつらいな、やつぱり」と言いながら、背を丸めて屯所に入っていく。

今回の警護も特に問題はなく、利恵としては無事に戻ってきてくれて嬉しかったのだが、近藤たちは「問題がないのが問題だ」とでも言いたげな張りのない顔つきをしている。

大きな事件もなく、手柄を立てる機会がなかなか得られないので、近藤たちはこのままでは新撰組という組織の存在意義が失われ、雲散霧消してしまうのではないかと少し焦っているようだ。落ち着きなく愚痴をこぼす近藤を見るたび、利恵は「そんなことはない。確か六月頃に大きな事件があるはずですよ」と教えたくなるのだが、その根拠を聞かれれば答えようがない。だからいつも「そうですね」と相槌を打ちながら苦笑を浮かべるのだった。

そんな感じで平穏な時が過ぎていたが、少し気になったのが加納だった。

何が気に食わないのかつねに機嫌が悪く、目つきもかなり悪い。

以前は仲良く……とはいかなくても、それなりに隊士たちと会話は交わっていたように思う。しかし今は何かというところすぐ喧嘩腰になるので、みんな関わり合いを避けている。

また金に困っているのだろうか。

一月も終盤に差し掛かった頃。

昼過ぎにいったん屯所に戻った山崎が部屋で腰を下ろし、火鉢に手をかざした瞬間、障子の向こうから利恵の声がした。

「土方さんが部屋に来るようにとのことです」

「すぐ向かいます」

障子を開けると、利恵は一瞬何か言いかけたが、思い直したように口を閉ざした。そのまま小さく頭を下げ、「お茶を用意します」と言って山崎に背を向ける。

何か気にかかっているような複雑な表情を浮かべていたので、少し気になった。しかし土方が待っているのなら、ここで立ち話などせずに、なるべく早く行ったほうがいいだろう。

利恵の背から視線を外し、山崎は土方の部屋へと向かった。

文机に向かう土方の傍らに座ったとたん、「最近、また辻斬りが増えているらしい。天誅というより金目当てのようで、比較的裕福な身なりをしている者が狙われている」と説明を始めた。

「一応夜間の巡察を強化するが、お前も町で怪しい奴を見た者がいないか探りを入れてくれ」

「承知しました」

土方は筆を置くと首を回して骨を鳴らし、正座していた膝を崩しながら山崎と向き合った。

「それで、加納はどうだ？ 最近また雰囲気が変わったように見えるが……」

「そうですね。每晚張り付く訳にもいきませんので、わたしが見ていないときに何をしているのかは分かりかねますが……。金を融

通していた女とは暮れに別れたようなので、それで荒れているのかもしれない。新年は島原に行っていたようですが、あの時期は花代も張りますからね。どこからそんな金を得たのか……」

そのとき、パタパタとこちらへ向かってくる利恵の足音が響いたので、二人とも口をつぐんだ。

重要な話をしていると思ったのだろう。利恵は無言で二人の前に湯のみを置くと、すぐに部屋を出ていった。

「いい加減、限界だな。そろそろあいつの処遇を考える頃かもしれない」

土方が再び話し始めたときだった。

ドスンと大きな音が響き、「痛い！ 誰、ここに雪を置いたのは！」と利恵の大声が続いた。

するともう少し遠い場所から「ごめんごめん。そこに飛んでいったのか。今、雪合戦してたんだよ。俺がよけた玉がそっちにいっただけだから、別にわざとじゃないよ」と沖田が答える声がする。同調するように、「ごめんね、利三郎」と数人の子供の声が重なった。「もう！ 気をつけてくださいよ。湯のみを持っていなかったから良かったものの……」

利恵の声が遠ざかっていく。

「つたく、やかましい奴らだ」

話の腰を折られて腹立たしげにつぶやく土方の前で、山崎は俯いてこぼれそうになる笑いを必死にかみ殺していた。

「さあて、お仕置きしないとね」

利恵が雪玉を作っていると、「だからさ、なんで俺は一人なんだよ」と沖田が顔をしかめながら抗議の声を上げている。

「だって、沖田さんが避けたせいで、わたしは転んじやつたんだから。ね？」

利恵の言葉に、三人の子供は勢い良く頷いた。

「よし！ 一斉に投げるよ！ ただし、向こうの部屋には当てな

いようにね」

四人が勢いよく雪玉を投げ始めると、沖田は門のほうへ走って逃げていく。

子供たちは笑い声を上げながら、雪玉を持って追いかけていった。（よし……と。これで雪玉が屋敷内に飛んでくることはないな）満足した利恵は雪で冷えた手を湯で温めようと、再び炊事場へ向かった。が、背後で「きゃっ」と叫ぶ声がしたので、何かと振り返る。

子供が一人尻餅をついており、その姿を加納が見下ろしている。残る二人はその横で固まっていた。

「どこに目え付けてんだ。気をつける」

加納が凄みのある声で唸ると、子供たちはびくりと身を震わせる。その様子を見て満足げに歪んだ笑みを浮かべ、そのまま歩き去ろうとした。

「子供相手に何凄んでるんだよ。最低だな」

加納に文句を言おうと利恵が口を開きかけたときだった。いつの間にか戻ってきた沖田の、いつになく平坦な声が響いた。子供を助け起こしながら加納に顔を向けた顔からは一切の表情が消えており、心底怒っていることが窺える。子供の手前我慢しているのだろうが、そうでなかったら刀を抜いていたかもしれないな、と理恵は思った。「ああ、すみません。沖田さんも一緒でしたか。まあでも、ここは遊び場じゃないですしね。邪魔にならないところでお願いします」いやらしいほど丁寧な口調でそう言うと、加納は玄関の中へ入っていった。

賢明にも、沖田は後を追わなかった。

子供たちに向き直ると再び笑顔を浮かべて、「嫌な奴だったね。気にしなくていいよ。あっちの畑で遊ぼうか」といって、子供たちを連れて門をくぐっていく。

途中、振り返って「野村はどうする？」と聞いてきたので、「う

ん。少し遊ぼうかな。しばらく手が空いてるし」と言つて後を追つた。

自分のせいで子供たちが嫌な思いをしたのかもしれないという後ろめたい気持ちと、加納が周囲に撒き散らした重苦しい空気を振り払いたかつた。

騒がしかつた外が急に静かになつたので、様子を見ようと土方は玄関に向かつた。すると、加納が大部屋に入つていくのが見えた。

「おい、加納。ちよつと来い」

暗い表情を浮かべて加納が土方のもとへやつてくる。

「お前、また島原に通つてるのか。そんなに懷は温かくねえはずだがな。どこでそんな金を仕入れた？」

「前に付き合つてた女が貢いでくれたんですよ。それがまだ残っているのです」

「……ふん。ほどほどにな。新見のようにならねえように氣をつけろ」

「分かつてますよ。……話はそれだけですか？」

一瞬、土方のこめかみの辺りに血管が浮かんだが、「ああ。それだけだ」と言つて踵を返し、再び玄関へ向かつた。

（あいつ……。かなりまずいところまで来てるな）

自分も若い頃はかなり羽目を外したこともあるから、加納の気持ちも分らないでもない。

しかし……と土方は眉間に深い皺を寄せた。

加納は、何か危険な匂いを感じる。

それから数日後、ほとんど前の景色が見えないほど激しく雪が降る夜に、珍しく地味な着物を着て加納が出かけていく。その姿を見かけた山崎は、すぐ身支度をして後を追つた。

加納は島原へ向かい、執心の錦太夫がいる店へ入っていく。

その向かいにある小さな茶屋に入ると、山崎は小窓から店の様子

をじつと見つめた。

雪のせいで視界がかなり遮られており、人が出てくるのは分かって、顔まではよく見えない。しかも地味な着物を着ているので、いつもの派手な色合いに比べると、加納かどうかすぐに見分けることはできないだろう。

だからといって人が出てくるたびにいちいち外へ出て確認していは、茶屋の者に怪しまれてしまう。

今夜の見張りはいつになく面倒なものになりそうだ……と思い、山崎は小さくため息をつく、冷え切った手を湯のみで温めながら、熱い茶をすすった。

辻斬り2

山崎が危惧したとおり、店から出てくる加納にすぐ気づくことはできなかった。

なんとなく見覚えのある歩き方だな……と目をこらし、確信を得てから勘定を払って外に出ようとしたところ、店の主人が「まだけっこうな勢いで降つとるし、このままここで休んだほうがよろしいのでは？」とにこやかに声をかけてきた。仕方なくいったん足を止める。

逸る気持ちを抑えて笑顔を浮かべると、「有難いんやけど、今夜は帰らんと……。ほな、また来るわ。遅くまでおおきにな」と挨拶し、急いで外へ出た。

しかしそのときすでに、加納の姿は降りしきる雪の向こうへと消えていた。

（嫌な予感がする……）

山崎は周囲へ油断なく目を配りながら、加納が向かったと思しき方向へと足を速める。

島原の店並みから少し離れると、道は一寸先さえ見えないほど真っ暗だ。辺りはしんと静まり返り、自分が雪を踏み締める音が異様に大きく聞こえる。一歩踏み出すたび、加納に気づかれるのではないかと緊張した。

左手の小道からくぐもった声が聞こえたように思い、垣根に寄り添うように身を隠しながら覗き込んだ。暗闇に目が慣れてくると、奥のほうに人が倒れているように見えた。もう一人、倒れた人影に身を乗り出すように何かを探っている。しばらくすると目当てのものが見つかったのか、そのまま反対方向へと走り去っていく。

そっと近づくと、商人風の男性が仰向けに倒れていた。まだ肌は

温かいが、息はない。

斬ったと思われる人物を追いかけてようと顔を上げたとき、足跡が転々と雪に残っているのに気づいた。

あれが加納だとしたら、このまますぐ屯所に戻るのだろうか。

このまま後を追うべきか逡巡する。

とりあえず、死体は逃げない。あれが加納かどうか確かめるほうが重要か。

山崎は、消えた人物の足跡を辿り始めた。

足跡は料理茶屋の辺りでいくつかの足跡と合流し、見分けがつかなくなっていた。その先に新しい足跡は見えなかったので、茶屋に入ったのだらうと見当をつける。

茶屋で多少酒でもひっかけながら、少しでも着物に血が付いていないかを確認しているのだろうか。

羽織の上に雪がうつすら積もっているのを軽く払い、向かいの建物の影に身を潜める。

手足は冷え切っているが、雪はまだ降り続いていて視界が悪い。

また加納を見失うようなことはしたくない。

半刻も過ぎて雪の勢いも弱まってきた頃、やっと加納が姿を現した。

どうやら今度は屯所に向かっていているようだ。

行き先が分かっているなら、急いで後を追うことはないだろう。

足音に気づかれて尾行に気づかれては元も子もない。少し時間を置いてから、山崎も屯所へと向かった。

到着すると、ほとんどの者が寝静まっていて、土方の部屋の灯りも消えていた。玄関には加納が落としたと思われる雪が解けている。滑り込むように中に入り、上がりかまちに腰をかけると、冷え切ったつま先を手で包んだ。

そのとき、背後からそつと近づいてくる気配を感じた。振り返ると、利恵が湯気を上げている手ぬぐいを持っている。

「帰っていらっしやるのが見えたので」

そう言つて、手ぬぐいを差し出してきた。湯で温めてくれたらしい。

「お湯も持つてきましようか？ お茶を淹れた湯の残りなので、あまり量は残ってないんですけど……」

「いえ、これでけっこうです。ありがとうございました」

「……さつき、加納さんも帰ってきたんですけど」

声を潜めて、利恵が耳元で囁いた。

「最近、また少しおかしくありませんか？ 河合さん、大丈夫でしょうか。それがずつと気になっていて……」

昼間言いかけていたのは、そのことだったのかと思いながら、山崎は小さく頷いた。

「河合さんは大丈夫だと思いますよ。……もう遅いですから、どうぞお休みください」

すると利恵は慌てたように「ごめんなさい。帰ってきたばかりだというのに、こんなところで話しかけてしまつて……。では、これで失礼しますね」と立ち上がり、部屋に向かおうとした。が、ふと振り返り、懷から何かを取り出すと、山崎のもとへ戻ってくる。

「これ、どうぞ。わたしはまだ布団にしのばせている分もあるし、返すのは明日でいいですよ」

そういつて、温石を山崎の手に置いた。

「お休みなさい」

体温より少し高い程度の温石は冷え切った手にはちょうど良く、握った手の平からじんわりと心地よいぬくもりが広がっていく。

加納の件で冷え切っていた心まで温もるような気がしたが、ここで和む前に、土方に報告しなくてはいけない。すでに冷たくなった手ぬぐいで足を軽く拭くと、温石を懷に入れ、そのまま土方の部屋

へ向かった。

灯は消えていたが、土方は起きていたようだ。声をかけると、「入れ」とすぐに返事があった。

「野村は？」

「まだ起きていますようですが……」

「まあいい。小声で頼む」

山崎の報告を受けて、土方の目が強い光を放った。

「仕方ないな。明日の朝、あいつの荷物を検めよう。そこで何か証拠の品が出てきたら、切腹だ」

「……今夜斬られた者の遺体はそのままですが、どなたかに知らせますか」

「そうだな。遺体は雪に覆われている頃だろうし、今から知らせちゃ、お前が怪しまれる。こっちで処理する前に、騒ぎになつてほしくはねえからな。斬られた奴には申し訳ないが、それも明日の朝だ。岡引か誰かに知らせてくれればいい」

「承知しました」

立ち上がった山崎に、土方は「島田が誰かと組んで荷物を改めろ」と声をかけた。

「近藤さんたちには俺から話しておく」

山崎が頷いて部屋を出ていくと、土方は「くそっ」と小さく毒づきながら、再び布団に横になった。

翌朝はよく晴れていて、雪の反射光で辺りはきらきらと輝いている。

そんなさわやかな朝には似つかわしくない、男の怒鳴り声が屯所内に響いた。

「おい、勝手に人の荷物見てんじゃねえよ」

加納の言葉には構わず、背後から島田が羽交い絞めにした。

「懷の中を」

山崎は頷いて、手を差し入れる。

その手が加納には似つかわしくない、高級な生地でできた財布を取り出した。

「これは？」

山崎の問いに、加納はそっぽを向いた。

「俺んだよ。なんだよ、俺が財布を持ってちやいけねえってのかよ」

「……ゆうべ、辻斬りがあったと聞いている。斬られた奴の家族に、この財布を確認してもらってもいいか」

島田の言葉を聞いたとたん、加納が頭を逸らして島田の鼻に頭突きした。

ひるんで腕が緩むと同時に後ろに突き飛ばし、前に座っていた山崎の肩のあたりを思い切り蹴り飛ばす。すぐに体勢を立て直した山崎が腕を掴もうとするのをすり抜け、裸足のまま外へ駆け出した。

「そいつを取り押さえる！」

島田の声に、ちょうど庭を横切ってきた隊士が手に持っていた桶を放り出して掴みかかろうとしたが、足を雪に取られて前のめりになったところで頬を殴られ、大の字に倒れる。

加納はそのまま垣根を飛び越えた。

ドスンと地面に降りる音が聞こえたと同時に、「ぐっ」とうめくような声が続く。

山崎と島田が垣根を乗り越えようと体を引き上げ、身乗り出すと、地面に倒れた加納の横に刀を抜いた土方が仁王立ちしているのが見えた。

「潔く切腹すれば見直したってのに……。最後まで無様だな」
加納を見下ろしながらそうつぶやくと、土方は刀を振って鞘に戻した。

炊事場で食事の支度を手伝っていた利恵は、そんなことが起きているとはまったく知らずにいた。

外が何やら忙しいと思い、窓から覗いてみると、土方が正門から入ってくるのが見える。

すれ違うように三人の隊士が慌てて外へ出ていくのを見て、一緒に飯の支度をしていた馬越に「何かあったのかな」と尋ねてみた。

「さあ？ 俺は何も聞いてないけど」

馬越は根菜の煮物の味を確かめるのに夢中で、外の様子にはあまり興味がないようだ。

土方はそのまま炊事場へやってくると、「茶をくれ」といって自室へと向かう。

利恵は馬越に苦笑を浮かべて見せると、そそくさと茶の用意を始めた。

変化

利恵が土方のもとへ茶を運んでいくと、刀の手入れをしている姿が目に入った。

「朝早くから手入れとは、珍しいですね」

「ああ。たつた今、斬ったからな」

「え？ 何を？」

戸惑う利恵を横目でじろりと睨む。

「加納を斬った」

湯のみを踏み机に置こうと膝をついた利恵は、そのまま固まった。

「加納さんを？ 斬った？ なぜ？」

「辻斬りをしてたからだ。……おい、茶を早くよこせ。外で体が冷えちまつたんだよ」

土方の言葉に慌てて湯のみを置くと、勢いでふちから少し茶がこぼれた。ぼんやり手ぬぐいで拭こうとしたところ、湯のみに手が当たる。土方は刀を鞘に戻して傍らに置くと、湯のみを持ち上げて舌打ちをした。

「おい、気をつけろ。……お前だって、あいつが問題を抱えているのは知っていたんだろ？ それに、けっこう嫌ってたじゃねえか。なんで動揺してんだ」

「嫌っていたといつても、斬られてほしいと思うほどではありませんよ。それに、辻斬りって……加納さんがですか？」

「ああ。金欲しさにな」

「お金……そのために人を殺したんですか？」

「うるせえな。今そう説明しただろ。同じことを何度も聞くな」
確かに危なっかしい雰囲気はあったけど、辻斬りをするほど追い詰められていたなんて……。利恵は呆然として、同じ場所をずっと拭き続ける。

「証拠の品を見つけたら切腹させようと思ったんだが、いきなり

逃げやがった。だから、俺が斬ったんだ。……拭くのはもういいから、下がれ。ったく、辻斬りをした奴を粛清しただけだってのに、いちいち驚いてんじゃねえよ。面倒な奴だな」

土方の部屋を出て炊事場に戻りながら、加納のことをぼんやり考えた。

町でもいろんな女を引っ掛けては遊んでいたというのに、どうしてそんなに錦太夫に拘っていたんだろう。

……彼女を本気で愛していたのだろうか。だから身請けするためのお金を得ようとしたのだろうか。辻斬りがあれば切腹は免れないと分かっているもお、彼女を自分だけのものにしたかったのかもしれない。

それでも、犯した罪はあまりに大きかった。自分の気持ちを満たしたいがために、まったく関係のない人の命を奪ったのだから。

加納粛清の報告を受けた幹部たちは、特に何の反応も見せなかった。あの山南でさえ、眉をひそめて小さく頷いただけだった。河合だけは、どこかホツとしたような表情を浮かべている。

普段の立ち居振る舞いから、遅かれ早かれ加納がこのような結果を迎えるだろうことを、誰もが予想していたのかもしれない。粛清で騒がしくなったのもほんとひと時のことで、屯所内はすぐに通常の生活に戻った。

二月二日、近藤たちが親しくしていたという武州蓮光寺村名主、富沢忠右衛門が上洛した。天然理心流三代目、近藤周助から剣術を学んでいたときの兄弟子に当たる人物だという。

前日、会津藩と新撰組を誹謗する高札が四条橋に立てられ、刺々しい雰囲気が漂っていたのだが、彼の来訪で一気に幹部たちの表情が和んだ。

彼と一番親しかったという近藤は会津藩主・松平容保に謁見するため不在だったが、土方、沖田、井上が酒宴を開くと言って出かけていった。山南も行ったかったようだが、先月末より風邪をこじらせており、ひどく咳き込んでいる。そのため同行は叶わず、寂しそうな表情を浮かべていた。

利恵は出かける一行を見送りながら、土方の表情がいつになく柔らかくなっていったなと思った。なんとなく、肩の力が抜けているように見える。もともと優しいとはいえない性格だとは思うが、だからといって今のように鬼と呼ばれるほどきつくはなかったのだろう。

それから数日の間に、細かい出来事がいくつか続いた。

四日は、前年度の政変の恩賞として松平容保から銀を賜った。その際、近藤は松平容保から湯治を勧められ、温泉場へ出かけた。

近藤が湯治している間には、五条大橋付近の遊女屋で二人の武州人が暴れているのを新撰組が捕縛。富沢が屯所を訪れてその二人を引き取り、京から追放した。

相変わらず大きな出来事はなく、このまままた平穩に時が過ぎていくかと思われたとき、幹部たちの顔色を一斉に変える知らせが入った。

「松平候が、軍事総裁職に異動だと？」

病状がなかなか回復せず、ずっと床に横になっていた山南が、咳き込みながらむっくり起き上がった。

「まずいな……。近藤さんに急いで知らせなければ」

近藤はまだ湯治から帰ってきていない。

過激な思想を持つ志士の多い長州を、幕府はなんとしてでも潰したいらしい。そのための異動だったが、新撰組を京都守護職配下に置き、目を掛けてくれているのは会津藩主である松平容保だけだ。

その彼が退いてしまうと、特に目覚しい活躍をしていない新撰組は存続が危ういものになる。

（新撰組がここで消えることはないんだけど……。この辺の細かい歴史は知らないなあ）

幹部の間に緊張が走るのを見て、利恵はモヤモヤとした気持ちを抱えていた。雑誌で特集するのは人物中心だったし、もともとそれほど歴史に詳しい方ではない。知っていたとしても大丈夫だと説明することはできないが、自分の無知自体がもどかしかった。

近藤が湯磁場から帰ってくると、幹部は奥座敷にこもって何やら議論を重ねている。山南も布団から起き上がって参加していた。ぜいぜいと息を切らしているが、さすがに寝ている場合ではないと思っただろう。見かねた利恵は、体が冷えないようにと上掛けを持つてくると肩に掛けてやり、少しでも喉が楽になるようにと葛湯を渡して部屋を出た。

「守護職の後任は、松平春嶽様と伺った」

近藤の言葉に、山南は力なく首を横に振った。

「あの方は優秀な人材であれば出自には拘らない方なのですが、俺たちとはまったく接点がないし、新撰組のような有象無象の集まりには興味ないでしょうね。しかもこれまで目立った働きをしていないとなれば……」

そこで言葉を切り、咳き込み始めた山南の背をさすりながら、藤堂が言葉を続ける。

「となれば、わざわざ新撰組を京都守護配下に置く必要はないわけだしね。かといって、俺たちにできることといえば、容保様の留任を訴え出る程度か……」

静まり返った奥座敷に、山南の咳だけが響く。

「そうだな。この件に関しちゃ、俺たちじゃどうしようもねえな」
大きなため息をつく、無念そうな口調で土方がつばやいた。

「近藤さん、幕府に嘆願書を出そう。あとは成り行きに任せるしかねえ」

近藤も深いため息をつき、頷いた。

「そうだな。すぐに用意しよう」

それぞれの自室に戻ろうと一同が立ち上がったとき、藤堂に支えられている山南に近藤が声をかけた。

「お前、大丈夫なのか？ 咳がまったく収まっておらんようだが……。まさか、労咳か？」

「医者は風邪をこじらせただけだって言ってたけど」
山南の代わりに藤堂が答える。

「いずれにしろ、今この状況で俺たちまで倒れるわけにはいかん。誰にもうつさねえよう、気をつけろよ。今てめえにできるのは、せいぜい養生して、早く治すことくらいだ」

土方のそっけない言葉に近藤は眉をしかめたが、当の山南はうつすらと微笑んだ。

「ああ、わかってるよ」

部屋の向こうから響いてくる山南の咳を聞きながら、利恵は気管支炎や肺炎なのではないかと思った。いったん咳き込むとなかなか止まらないし、冷たい風を吸い込んでしまったときもかなり激しくなる。現代だったら入院して適切な処置を受ければ完璧に治るレベルの症状だろうが、この時代はどうなんだろう。

食が細くなっているので体力もずいぶん落ちているし、顔色は土気色で頬もこけてきた。

歩くことさえままならない状態では、心の支えとなる明里に会わせるために連れ出すこともできない。

歴史はあまり覚えてないし、医学にも詳しくない。山南があればと苦しんでいるのに、自分は何もしてやれない。わたしはなんのためにここにいるんだろう……と、利恵は再び暗澹たる思いに囚われ

た。

近藤が書いた嘆願書は考慮してもらえたようで、新撰組は京都守護職の配下から、軍事総裁職配下へと組み入れられることになった。これではばくは解散の憂き目を見ずに済むとはいえ、今も不安定な土台の上に成り立っている組織であることには変わりない。

今後も小さな小競り合いばかり対処しては、人事異動のたびに新撰組の行く先を案ずることになる。もっと大きな手柄を立てないと……。

事態が落ち着いても、近藤たちの胸には焦燥感だけが膨れ上がっていった。

それから数日後、「お前もいつまでものんびり稽古してるわけにはいかねえよな。多少は使い物にならねえと、また放り出されるぜ」と言つて、永倉は利恵を稽古場へ連れていった。

「今日はもう十分しごかれましたけど」

「最近、土方さんばかりだろ？　どんだけ上達したか、俺も見てやるよ」

永倉は相変わらず飄々としていたが、内心ではやはり落ち着かないんだなと利恵は苦笑を浮かべた。

「分かりました。じゃあ、よろしくお願いします」

「さ、どんどん打ち込んで来いよ」

永倉に促されて構えると、「へえ。今度は永倉さんか。野村も贅沢だな」と言いながら藤堂が近づいてきた。

「見てなくていいですよ。藤堂さんはどうぞご自身の稽古に戻ってください」

注目されると緊張する。利恵はいったん腕を下ろし、小さなため息をついた。

「なんだよ、別に見てたっていいじゃないか。……まあいいや。あとで話があるんだ。稽古が終わったら少しいいか？」

藤堂がふいに真面目な表情を浮かべた。
山南のことだろうと思い、利恵は小さく頷いた。

見舞い

「ずいぶんさまになってきたじゃねえか。斬り合いの場じゃまだまだ役に立ちそうもねえが……。まあそれは経験を積んでだな」

「斬り合いの経験ですか？ 今の腕前じゃ経験を積むどころか、その場でさよならになっちゃいそうです」

利恵が表情を引きつらせると、永倉は豪快に笑った。

「確かに。まあでも、最初の頃に比べりゃ、ずいぶん腕は上がったと思うぜ。この調子でいきや、それなりの戦力になれるかもな」

「……そうですね、そのために稽古してるんですもんね。がんばります……」

そうだった。剣術の腕を上げるのはあくまで過程であって、その先にあるのは隊士として戦場に立つことだったんだ……。と利恵は改めて実感した。

自分が人を斬るなんてことはまったく考えられないが、ここに戻ってきたときに、それなりの覚悟はしていたはず。今さら嫌だよねるわけにはいかない。

「しかもお前、なんだか腕がたくましくなってきたな。もともと腕っ節は強いほうだったのか？」

永倉が手首をつかんで袖を捲り上げると、利恵は少しムツとした表情を浮かべた。

「別に。喧嘩なんてしたことありませんから、知りませんよ」

「したじゃねえか。待合茶屋で」

ニヤニヤ笑いながら顔を覗き込まれると、利恵の顔は真っ赤に染まった。

「あれは喧嘩じゃないですし！ しかも相手は酔っ払いでしたからね。強いも何ありません。……さて、わたしは藤堂さんとお話があるので、これで失礼しますね」

「わかった、わかった。行ってこい」

永倉は笑顔を浮かべたまま、肩をいからせて藤堂のもとへ向かう。利恵の背を眺めていた。が、その表情をふと曇らせる。

（山南さんのことか。……病気もあるんだろうが、あの人は最近、なにかつてえと弱気になるのが心配だな）

話があるという割には、藤堂はさきほどから深刻な顔をして黙りこくっている。

二人並んで山南の部屋に向かいながら、利恵は（あとひと月もたてば、寒さもやわらぐんだろうけど……）と、自分が吐く白い息を眺めていた。

ふいに藤堂が立ち止まり、ぼそりとつぶやく。

「山南さんのところに、明里さんを連れてってやりたいんだけどさ」

「そうですね。でも、この気温じゃ、連れ出すのは無理なんじゃ

……」

「こつちに連れてこようかと思って」

「屯所ですか？ それは……どうでしょう」

いくら人望があるといっても、恋人を屯所に連れ込めば隊士たちは良い気はしないだろう。

「お前みたいにさ、男装させるってのは？」

「ううん。明里さんは女らしいからなあ。すぐばれてしまうような気がします」

二人は縁側に腰掛け、沖田と子供たちが作ったと思われる雪だるまをぼんやりと眺めた。

「やつぱり、好きな人に会えれば少しは元気になりますよねえ」

「だよな。野郎ばかりに囲まれてたら、俺だったら滅入るな」

「……紅一点がここに」

「え？ あ、そういえばそうだな。うん。……でもお前じゃ力不足だろ」

「ですよねえ」

そのときふと、屯所に入ったりする髪結の姿が脳裏に浮かんだ。

「明里さんの顔を知ってるのって、一部の人だけですよね？」

「ああ。監察方だって知らないはずだ」

「じゃあ、髪結ってことで入れたらどうでしょう」

藤堂は深く頷くと、顔を上げてにつこりと笑った。

「いいね。それでいいこう」

明里の顔を知っている者には話を通しておいたほうがいいだろうという話が出ると、藤堂は利恵の肩に手を置いて、力強く頷いた。

「俺が言っただって、駄目っていうからさ。土方さんは小姓のお前に任せた」

「えー？ わたしだって無理ですよ。藤堂さんのほうが付き合いたいんですから、お願いします」

「いやいや、お前のほうが口が達者だからさ。まあそういうことで、あとはよろしく！」

藤堂はさっさと原田の部屋へ入っていく。

「口が達者って……。ずるいなあ……」

げんなりした表情を浮かべながら、利恵は土方の部屋へ向かった。

「駄目だ」

まだ話の途中だというのに、土方はにべもなく言い放つ。

「でも、気力だけでもなんとか回復してもらわないと。ここにこもりつきりじゃ、滅入る一方ですよ。隊士の皆さんにはばれないようにやりますから、お願いします」

土方は必死に食い下がる利恵をジロリとにらみ、舌打ちをした。

「駄目だって言ったら駄目だ。副長の俺が良いと言う訳にはいかねえ」

「じゃ、近藤さんが良いって言ったらいいんですか？」

「近藤さんは優しすぎる。お前が言ったら、すぐに良いって言うだろ。だけど駄目だ。総長の女を屯所に連れてくるんなら、局長と

副長が許すわけにはいかねんだよ。万が一にでもバレてみる。示しがつかねえ」

（やつぱりわたしでも駄目じゃん。原田さんも無理だろうし……。永倉さんに説得を頼もうかな）

土方は永倉の意見には耳を傾けることが多いことに気づいていたので、最後の望みを託そうかと考え始めたとき、「ったく。もしお前らが何か隠れてやってるのを見つけたら、飯抜きだからな」と土方が言った。

「分かってますよ。隠れてなんて……。ああ、なるほど」
ぶつぶつ文句をつぶやきかけた利恵は、土方が言わんとしていることに気づいた。

「何かなるほどだ」
眉間に皺を寄せる土方に、にんまりとした笑みを向ける。

「土方さんって根はいい人なんですね！」

親指を突き立てて見せると、土方は一瞬あつけに取られたような表情を浮かべた。利恵はそのまま軽い足取りで部屋を出ていく。

「……根はいい人？　なんだ、そりゃ。相変わらずおかしな奴だな」

閉じられた障子に向かって、土方はぼそりとつぶやいた。

翌日、藤堂に伴われて明里がやってきた。

いつもと違う髪結だし、しかも清楚な美人がやってきたので、門の警備に立っていた隊士はチラチラとこちらを窺っている。

すれ違う隊士が声をかけないように、藤堂と二人で明里を挟んで歩きながら、山南の部屋へ案内する。

明里は山南のことが心配で仕方がないらしく、いつもの明るさはなりをひそめ、終始無言のまま俯き加減で暗い表情を浮かべていた。部屋に近づくと、苦しげな乾いた咳が聞こえてきた。

明里は示された部屋へと駆け寄ると、二人への挨拶はそこそこに早速中へ入っていく。

「じゃあ、わたしはお茶の用意でも……」

炊事場へ向かおうとした利恵の肘を掴み、藤堂は不安げな表情を浮かべた。

「それにしても、土方さんは本当に大丈夫なのか？」

「土方さんの目の前を横切らない限り、大丈夫だってば。それに今は巡察で出かけてるし、しばらくは大丈夫ですよ。もしばれたとしても、一食抜かれるだけで済むみたいですし。……そんなに心配だったら、わたしに任せず自分で話せばよかったじゃないですか」
利恵が唇を少し尖らせるのを見て、藤堂は（ああ、これか。みんなが面白がっていたのは）と納得した。

「いや、俺だったらそんな話にはならなかったと思うよ。お前がそういうなら、大丈夫なんだろう」

そう言いながらくっくつと笑い始めた藤堂に、何がおかしいのかと利恵は眉を寄せた。

「山南さん、これで少しは元気出るといいよね」

茶を出すと二人の邪魔をしないようにとすぐ部屋を出た利恵に、様子を見に来た沖田が声をかけた。

「中に入っちゃダメですよ。限られた時間しか会えないんですから」

「分かってるよ。でもなんだか気になってさ。最近、山南さんとあまり話せないし……。子供たちもかなり心配してるんだよ」

珍しく、沖田も暗い表情を浮かべている。

「まあ、しばらくそっとしておきましょう。二人には半刻くらいしか時間はないんですから」

「うん。……じゃあさ、それまで囲碁でもしようよ。明里さんが帰るまで、お前も時間空いてるんだろ？」

「囲碁ですか？ やったことないんですけど……」

「簡単だよ。教えてあげるからさ」

沖田の部屋でルールを教えてもらい、早速対局したのだが、剣同

様に暮の腕前も相当のものらしく、まったく歯が立たない。

一度くらいは……と何度も挑戦するうちに、あつという間に時間が過ぎていく。

「そろそろ帰る時間じゃないか？」と藤堂が顔を覗かせたときは、
「もうそんな時間？」と驚いたほどだった。

「じゃあ、俺も山南さんの部屋に行こうかな。……それにしてもお前、本当に弱いな。碁盤と石を用意してあげるから、もう少し練習して強くなつてよ」

「あー、はい、はい」

返事もそこそこに、利恵は急いで山南の部屋へ向かった。

「入りますよ」と声をかけて中に入ると、二人は手を握り合って寄り添っていた。

二人を引き離すようで心が痛んだのだが、意を決して声をかける。
「ごめんなさい。明里さん、そろそろ……」

明里は小さく頷くと、「ほな、またな。早う元気になって、会いに来てな」と山南の胸にもう一度頬を寄せた。その頭に山南も頬を乗せ「ああ。必ず」と言つて小さく微笑む。が、すぐに咳き込み始めたので、明里は慌てて背後に回り、背をさすった。

「無理せんでええよ。……じゃあ、うちは行くね。見送りはええから、このまま横になって休んどつて」

最後にもう一度山南の手を握り、頬にぎゅっと押し当てると、明里は名残惜しそうに立ち上がった。

藤堂と二人で、町まで明里を見送りに出た。

別れ際、明里は深く頭を下げる。

「お二人とも、おおきに。ほんに、会えて良かった」

「いえ……。ほんのわずかな時間で申し訳なかったです」

「ううん。だって、本当は会えへんかったはずやもん。……旦那はんのこと、よろしゅう頼みます」

「はい。早く会いに行けるよう、わたしもがんばりますから」

利恵の言葉に、明里は唇をかみ締めながら頷いた。

「ほんまはうちが傍にいて介抱したいんやけど、もどかしいなあ。

……ほな、お二人とも、たまに店に顔出してな。旦那はんの様子教えてほしいし」

「恋文でも書いておいてくれれば、渡してやるよ」

藤堂の言葉に、明里は悲しげな笑みを浮かべた。

「そうやね。毎日書くかもしれんから、あまりたまらんうちに早く来てな。ほな、行くわ」

島原へ向かう明里の背を眺めながら、「つらいですよね」と利恵はつぶやいた。

「そうだな。いつも明るい明里さんのあんな顔見ると、こっちまで胸が苦しくなる」

「明里さんの元気を取り戻すために、山南さんにはがんばってもらわないと。きっと山南さんもそう思ってますよね」

「だな」

二人は揃ってため息をつく、踵を返して帰途に着いた。

山南、一時離脱

明里に会えたことで山南の気持ちは少し上向いたようだったが、咳は相変わらず激しい。

屯所を訪ねた医者、医者宅で療養したほうがいいのではないかと申し出たが、山南は「ここで過ごします」と固辞した。

ただでさえ隅に追いやられているような状況なのに、屯所を空けることでさらに自分の役割が減るのではないかと……といった不安を感じているのだらうと利恵は思った。

「ここでずっと咳をしても仕方ねえだろ。医者さんところ行けよ」
医者の申し出を断ったと聞いた土方が部屋を訪れた。その言葉に、山南はどこか諦めたような笑みを浮かべる。

「いや……。大したことはしていないかもしれないが、これでもやらなくてはいけないことはまだあるからね」

「だからって、いつまでもそれじゃ、治るもんも治らねえんじゃないのか？ 書類仕事なら他の隊士に任せりゃいい話だ。分らないきや聞きに行けばいいだけ……」

「俺の仕事は、誰にでもできるものばかりだと言いたいのかい？」
山南の顔がどんどん暗くなっていくので、利恵は慌てて口を挟んだ。

「回りくどい言い方しかできないようですが、土方さんも心配してるんですよ。わたしも、お医者様のもとで完全看護してもらったほうが早く治ると思います。苦しいときはすぐお薬出してもらえし、ここより環境も良いはずですよ。おまけに、明里さんもお見舞いに行けるし」

「回りくどいって、なんだ、てめえ」

土方が隣で怒鳴ったが、利恵は聞き流した。

土方はどうしても優しい言葉をかけられないようだし、山南は山南で土方の言うことは素直に聞き入れることができないようだ。ス

トレスが病状を悪化させないよう、これ以上険悪な雰囲気になつてほしくなかった。

「俺は巡察があるからもう行くが、野村には看病の他にやらせてえことがたくさんあるんだ。周りにも気を使わせてるつてのは分かつてんだろ？ とにかく一度ここを出たほうがいいと思うぜ。よく考えておけ」

そう言つて、土方は部屋を出ていった。

「土方さん、どうしても素直に心配だつて言えないみたいで……。言葉はきつくても、氣遣つているのだと思うんですけど」

「分かつているよ。俺も付き合い長いしね」

山南が弱々しく微笑んだ。

「それにしても、あんなこと言つて大丈夫かい？ あとでまた怒鳴られたりしないかな」

「まあ、平気です。慣れました。間違つたことを言つた訳じゃないし」

そう言つて利恵が笑つと、山南は葛湯をすすり、小さくため息をついた。

「やはり、医者のお世話になつたほうがいいのか」

「そう思います。山崎さんに多少医学の心得があるといつても、どちらかというと補助的な意味での知識のようすし、何より監察の仕事が忙しいみたいですから。それに、診療所なら明里さんも会いに行きやすくなりますよ。いずれにしても、ここにはあまり気も休まらないでしょうし、ここは療養だけに集中したほうが……」

山崎の名が出たとき、山南がちりとからかうような視線を投げてきたので、利恵は訝しげに首を傾げた。

「なんですか？」

「きみは好きな人はいないのかな？」

「……明里さんから何か聞いたんですか？」

そつえば、明里は山南に隠し事ができなかったような気がする。

「ああ、実はそうなんだよ」

そう言って山南は笑い声をあげたが、すぐ咳き込み始めた。利恵がすぐ背中をさすり始めると、「すまないね」と言って息を整える。「その件については、もう気持ちは落ち着きました。……今はいませんよ」

「そうなのかい？　まあ、野村くんがそう言うのなら俺は何も言わないけど。いずれにしてもこんな場所だし、いつ誰が死ぬか分からない。周りがどう言おうと、想う人がいるならその気持ちは大切にしたほうがいいよ」

「……咳が止まらなくなりますから、無理してお話しないほうがいいですよ」

再び背中をさすってやりながら、利恵は俯いた。

言われずとも、この先待つ死についてはだいたいのところ知っている。親しくなればなるほど、未来のことを考えるのが怖い。

ふいに切腹をした野口のことが思い出された。

胸に鋭い痛みが走り、息が止まる。

今こうして触れている山南も、いずれ野口のように……。

目をギュツと瞑って痛みに耐えた。

呼吸を整えようと深呼吸する。

死については、考えたくない。

死に捕らわれてしまうと、また負のループに巻き込まれる。

今できること、今やるべきことだけを考えなくちゃ。

山南は自分の背に手を当てたまま動きを止めた利恵に向き直ると、「……とりあえず俺は、診療所の世話になることにしよう」と小さく微笑んだ。

「帰ってきたとき、俺の居場所が残っているといいんだけどね」

「なくなるはずないじゃないですか。今回の病も、皆さんどれだけ心配していることか」

「……そうだね」

山南は自嘲するような笑みを浮かべたあと、再び咳き込んだ。

山南の部屋を出て炊事場へ向かいながら、利恵は先ほど言われた言葉を思い返していた。

（山南さんが言いたいことは分かるけど、伝えてどうなるっていうんだろう。独りよがりな思いで、また山崎さんに嫌な思いをさせてしまうかもしれないのに）

同じ屋根の下で暮らしているというのに、気持ちを伝えてしまったら……。あの山崎のことだ。ものすごく気を使わせてしまっただろう。せつかく自然に振舞えるようになったというのに、再びぎこちない関係になるのも嫌だった。

（無理。絶対に言っちゃいけない気がする）

そう思ったとき、巡察に出るため玄関に向かう土方の姿が見えた。上司に失礼な態度を取ったのだから、一応謝罪はしておくべきだろう。

意を決して、利恵は声を掛けた。

「先ほどは失礼しました。でも、あまり言い争っていると、山南さんの咳がひどくなるかと思って」

土方は利恵に向き直り、両腕を組んで睨み下ろした。

「まったく。偉そうな口利きやがって。何様のつもりだ、てめえは」

「すみません。……そういえば先ほど、診療所の世話になるとおっしゃってました」

利恵の言葉に、土方は鼻を鳴らした。

「手がかかるったらねえな。……まあいい。これであいつも少しは療養に集中してくれるだろう」

珍しく心配しているような口ぶりだったので、利恵は（やっぱり嫌ってるわけではないんだ）と安心した。

「居場所がなくなるのではないかと、ここを離れるのが不安だっ

たようです。……もう少し山南さんの意見にも耳を傾けてください。否定されてばかりでは、誰でも自信を失う一方だと思えますよ」

土方の顔に一瞬浮かんだのは、痛みだろうか。それとも後悔だろうか。

どちらにしても、すぐに険悪な表情に変わった。

「てめえが口出しするようなことじゃねえ。立場をわきまえろ、馬鹿野郎」

そう怒鳴ると、利恵の返事を待たずにさっさと背を向け、足音荒く玄関を出ていく。

その様子から、自分が言わなくても、山南の気持ちは十分分かってるんだろうなと思った。

それでも、今よりほんの少しでいい。山南の意見に耳を傾けてくれれば、状況はかなり上向くのかな……と、何を言っても状況を変えることのできないもどかしさに唇をかみ締めた。

翌日、山南は診療所へ向かった。

駕籠に乗り込んだ山南がなるべく冷えないようにと、利恵は上掛けを数枚かける。

付き添いはいらないというので、沖田、藤堂と共に門で見送った。自分たちが行かなくても、おそらく明里が診療所で待っているだろう。

「早く戻って来るといいね」

沖田が寂しそうにつぶやくと、藤堂は頷いた。

「野村がいくら介抱したとしても、あのままじゃ痩せる一方だから。ここを離れるのは嫌がっていたけど……診療所に行くのが山南さんにとって一番良いことなんだよな」

「そう思います」

そう答えながら、利恵は去り際の山南の沈んだ表情を思い起こした。

きつと明里が大きな支えになってくれるはず。ここで過ごすより、

確実に回復は早いはずだ。なのにどうして、こんなに不安になるんだろう。他の二人も同じように感じているらしい。駕籠を見送る三人の間には、どんよりとした空気が漂っていた。

以来、いつ帰ってきてても良いように、利恵は山南の部屋を毎日丁寧に掃除をしている。

沖田たちは暇さえあれば山南を見舞に行っているし、可能な場合は利恵も同行した。なかなか会う機会はないが、明里も頻繁に顔を出しているようだ。

久しぶりに会ったお悠は相変わらず優しく、女好きの原田や永倉は相変わらず鼻の下を伸ばしている。普段あまり女性に興味を示さない沖田も、お悠には珍しくはに candering ような表情を見せることもあった。藤堂も憧れているようで会話をするときには頬を染めている。普段と変わらないのは井上と斉藤だった。井上は良いとしても、斉藤のあまりに冷たい態度を見て利恵は眉を寄せた。しかしお悠はまったく動じることなく、笑顔を絶やさない。

（すごいなあ。あの強さ、尊敬しちゃう）

自分が男だったら、確実に惚れていただろう。

暖かい日は山南の病状は少し落ち着きを見せた。

雪はいつの間にか降らなくなっているし、道々梅の花もちらほら見かける。

もうすぐ、桜の季節がやってくる。

そうすれば、山南の咳もずいぶん落ち着くだろう。

早く春になってほしいと願う反面、時が過ぎるのが怖くもあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3155v/>

浅葱色の狼

2011年11月26日19時47分発行